千葉県文化財センター調査報告第309集

村上遺跡群埋蔵文化財調査報告書

――市原市村上遺跡・村上山王前遺跡・廿五里十三割遺跡――

平成9年3月

日本道路公団
千葉県土木部
財団法人　千葉県文化財センター

村上遺跡群埋蔵文化財調査報告書

——市原市村上遺跡・村上山王前遺跡・廿五里十三割遺跡——

序　文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告第309集として、日本道路公団の東関東自動車道館山線の建設に伴って実施した市原市村上遺跡群の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、弥生時代の自然流路から弓が出土したほか、奈良・平安時代の多数の掘立柱建物跡が検出されるなど、この地域の古代から近世の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。この報告書が、学術資料として、また文化財の保護、普及のための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力を頂きました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成９年３月31日

財団法人千葉県文化財センター
理事長　中村　好成

凡　例

1　本書は、日本道路公団による東関東自動車道館山線建設に伴って調査した遺跡の一つである村上遺跡群の発掘調査報告書である。

2　本書は、下記の遺跡を収録したものである。

村上遺跡　　千葉県市原市村上字蔵ノ下1584ほか（遺跡コード　219－048）

廿五里十三割遺跡　千葉県市原市廿五里字十三割115-3ほか（遺跡コード　219－051）

村上山王前遺跡　　千葉県市原市廿五里字八幡台1409-1ほか（遺跡コード　219－052）

3　発掘調査から報告書作成に至る業務は、日本道路公団及び千葉県土木部の委託を受け、財団法人千葉県文化財センターが実施した。

4　発掘調査及び整理作業の担当者、実施期間は、第１章に記載した。

5　本書の執筆は、南部調査事務所市原調査室長　小久貫隆史、主任技師　渡邊高弘が行った。分担は以下のとおりである。

小久貫隆史　第１章、第２章（第２節　４・５を除く）、第３章

渡邊高弘　　第２章第２節　４・５

6　発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁生涯学習部文化課、日本道路公団、千葉県土木部、市原市教育委員会、財団法人市原市文化財センターの御指導、御協力を得た。

7　木製品の樹種同定については、東北大学大学院生物学教室鈴木三男助教授の御指導を得た。

8　本書で使用した地形図は、下記のとおりである。

第１図　国土地理院発行　1/25,000地形図「姉崎」（NI－54－19－16－3）

国土地理院発行　1/25,000地形図「五井」（NI－54－19－15－4）

第３・４図　市原市役所発行　1/2,500市原市基本図（平成元年測量）　D－４・D－５・E－４・E－５・F－４・F－５

9　周辺地形航空写真は、京葉測量株式会社による昭和42年、平成２年撮影のものを使用した。

10　本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。

11　遺構番号は、調査現場で遺構の種別ごとに付したものをそのまま使用した。種別は竪穴住居跡(SI)、掘立柱建物跡（SB)、土坑（SK)、溝（SD)、その他（SX）である。

12　村上遺跡の遺構実測図には縮尺1/200の全体図、縮尺1/80、1/100等の個別図がある。1/200の全体図は遺構の存在する範囲を、多少の重複部分をとって、村上地区21葉、馬場台地区６葉に分割したものである。それぞれの図の位置関係を第14図及び第37図に示した。

13　土器実測図の断面の黒塗りは須恵器で、それ以外は白ぬきである。

本文目次

第１章　はじめに …… 1
第１節　調査に至る経緯 …… 1
第２節　村上遺跡群の概要 …… 1
1　村上遺跡群の位置と環境 …… 1
（１）村上遺跡群をとりまく地理的環境…… 1
（２）原始・古代の歴史的環境…… 4
（３）中・近世の開発と養老川…… 4
2　層序区分 …… 9
（１）村上遺跡…… 9
（２）村上山王前遺跡・廿五里十三割遺跡…… 9
第３節　調査の概要 …… 11
1　発掘調査の方法と経過 …… 11
（１）村上遺跡…… 11
（２）村上山王前遺跡・廿五里十三割遺跡…… 14
2　整理作業の方法と経過 …… 14

第２章　村上遺跡の遺構と遺物 …… 17
第１節　遺構 …… 17
1　住居跡 …… 17
2　掘立柱建物跡、柵列 …… 20
3　土坑 …… 32
4　溝 …… 36
5　方形周溝状遺構 …… 41
6　そのほかの遺構 …… 42
（１）耕作痕…… 42
（２）縄文時代遺物包含層…… 42
第２節　遺物 …… 43
1　縄文時代の土器 …… 43
2　弥生時代の土器 …… 44
3　古墳時代の土器 …… 45
4　奈良・平安時代の土器 …… 48
5　中・近世の陶磁器 …… 61
6　そのほかの遺物 …… 68
（１）石器…… 68

（2）木製品…… 69
（3）土製品・石製品…… 69
（4）瓦…… 70
（5）金属製品…… 71
（6）銭貨…… 72

第3章　まとめ …… 73
第1節　遺構の時期 …… 73
第2節　遺跡の変遷 …… 75
第3節　結語－古代における村上遺跡の性格－ …… 79

報告書抄録 …… 巻末

挿図目次

第１図　村上遺跡群の位置と周辺の遺跡（1：25,000）…… 2
第２図　村上遺跡群周辺地形分類図（1：25,000）…… 3
第３図　村上遺跡周辺の地形と調査範囲（1：5,000）…… 6
第４図　村上山王前遺跡・廿五里十三割遺跡周辺の地形と調査範囲（1：5,000）…… 7
第５図　村上遺跡基本層序 …… 8
第６図　村上山王前遺跡確認トレンチの配置と基本層序 …… 9
第７図　廿五里十三割遺跡確認トレンチの配置と基本層序 …… 10
第８図　村上遺跡グリッド設定図 …… 12
第９図　村上地区年度別本調査範囲（1：1,500）…… 13
第10図　村上山王前遺跡・廿五里十三割遺跡グリッド設定図 …… 15
第11図　Ｂグループの掘立柱建物跡（1：600）… 77
第12図　Ａグループの掘立柱建物跡（1：400）… 78
第13図　村上地区遺構配置図 …… 85
第14図　村上地区遺構全体図区割図 …… 87
第15図　村上地区遺構全体図（１）…… 88
第16図　村上地区遺構全体図（２）…… 89
第17図　村上地区遺構全体図（３）…… 90
第18図　村上地区遺構全体図（４）…… 91
第19図　村上地区遺構全体図（５）…… 92
第20図　村上地区遺構全体図（６）…… 93
第21図　村上地区遺構全体図（７）…… 94
第22図　村上地区遺構全体図（８）…… 95
第23図　村上地区遺構全体図（９）…… 96
第24図　村上地区遺構全体図（10）…… 97
第25図　村上地区遺構全体図（11）…… 98
第26図　村上地区遺構全体図（12）…… 99
第27図　村上地区遺構全体図（13）……100
第28図　村上地区遺構全体図（14）……101
第29図　村上地区遺構全体図（15）……102
第30図　村上地区遺構全体図（16）……103
第31図　村上地区遺構全体図（17）……104
第32図　村上地区遺構全体図（18）……105
第33図　村上地区遺構全体図（19）……106
第34図　村上地区遺構全体図（20）……107
第35図　村上地区遺構全体図（21）……108
第36図　馬場台地区遺構配置図 ……109
第37図　馬場台地区遺構全体図区割図 ……111
第38図　馬場台地区遺構全体図（１）……112
第39図　馬場台地区遺構全体図（２）……113
第40図　馬場台地区遺構全体図（３）……114
第41図　馬場台地区遺構全体図（４）……115
第42図　馬場台地区遺構全体図（５）……116
第43図　馬場台地区遺構全体図（６）……117
第44図　住居跡（１）……118
第45図　住居跡（２）……119
第46図　掘立柱建物跡（１）……120
第47図　掘立柱建物跡（２）……121
第48図　掘立柱建物跡（３）……122
第49図　掘立柱建物跡（４）……123
第50図　掘立柱建物跡（５）……124
第51図　掘立柱建物跡（６）……125
第52図　掘立柱建物跡（７）……126
第53図　掘立柱建物跡（８）……127
第54図　掘立柱建物跡（９）……128
第55図　掘立柱建物跡（10）……129
第56図　掘立柱建物跡（11）……130
第57図　掘立柱建物跡（12）……131
第58図　掘立柱建物跡（13）……132
第59図　掘立柱建物跡（14）……133
第60図　掘立柱建物跡（15）……134

第61図　掘立柱建物跡（16）……135
第62図　掘立柱建物跡（17）……136
第63図　掘立柱建物跡（18）、柵列……137
第64図　土坑（１）……138
第65図　土坑（２）……139
第66図　土坑（３）……140
第67図　土坑（４）……141
第68図　土坑（５）……142
第69図　SD53木製品出土状況……143
第70図　SD54木製品出土状況……144
第71図　方形周溝状遺構（SX１）……145
第72図　耕作痕（１）……146
第73図　耕作痕（２）……147
第74図　縄文時代遺物包含層……148
第75図　縄文時代の土器（１）……149
第76図　縄文時代の土器（２）……150
第77図　縄文時代の土器（３）……151
第78図　縄文時代の土器（４）……152
第79図　弥生時代の土器（１）……153
第80図　弥生時代の土器（２）……154
第81図　弥生時代の土器（３）……155
第82図　弥生時代の土器（４）……156
第83図　古墳時代の土器（１）……157
第84図　古墳時代の土器（２）……158
第85図　古墳時代の土器（３）……159
第86図　古墳時代の土器（４）……160
第87図　古墳時代の土器（５）……161
第88図　古墳時代の土器（６）……162
第89図　古墳時代の土器（７）……163
第90図　古墳時代の土器（８）……164
第91図　古墳時代の土器（９）……165
第92図　古墳時代の土器（10）……166
第93図　奈良・平安時代の土器（１）……167
第94図　奈良・平安時代の土器（２）……168
第95図　奈良・平安時代の土器（３）……169
第96図　奈良・平安時代の土器（４）……170
第97図　奈良・平安時代の土器（５）……171
第98図　奈良・平安時代の土器（６）……172
第99図　奈良・平安時代の土器（７）……173
第100図　奈良・平安時代の土器（８）……174
第101図　奈良・平安時代の土器（９）……175
第102図　奈良・平安時代の土器（10）……176
第103図　奈良・平安時代の土器（11）……177
第104図　奈良・平安時代の土器（12）……178
第105図　奈良・平安時代の土器（13）……179
第106図　奈良・平安時代の土器（14）……180
第107図　奈良・平安時代の土器（15）……181
第108図　奈良・平安時代の土器（16）……182
第109図　中・近世の陶磁器（１）……183
第110図　中・近世の陶磁器（２）……184
第111図　中・近世の陶磁器（３）……185
第112図　中・近世の陶磁器（４）……186
第113図　中・近世の陶磁器（５）……187
第114図　中・近世の陶磁器（６）……188
第115図　中・近世の陶磁器（７）……189
第116図　中・近世の陶磁器（８）……190
第117図　中・近世の陶磁器（９）……191
第118図　中・近世の陶磁器（10）……192
第119図　中・近世の陶磁器（11）……193
第120図　中・近世の陶磁器（12）……194
第121図　中・近世の陶磁器（13）……195
第122図　石器（１）……196
第123図　石器（２）……197
第124図　石器（３）……198
第125図　石器（４）……199
第126図　石器（５）……200
第127図　木製品（１）……201
第128図　木製品（２）……202
第129図　土製品・石製品……203
第130図　瓦（１）……204
第131図　瓦（２）……205
第132図　瓦（３）……206
第133図　金属製品……207
第134図　銭貨……208

図版目次

図版１　遺跡周辺航空写真（昭和42年撮影）
図版２　遺跡周辺航空写真（平成２年撮影）
図版３　SI１、SI２、SI３・４
図版４　SI５、SI７・８、SX１
図版５　SB１
図版６　SB11、SB13、SB14
図版７　SB16、SB17、SB18
図版８　SB20、SB22、SB29
図版９　SB31、SB34、SB59
図版10　SB60、SB63、SB64
図版11　SB66、SB53遺物出土状況、SB54遺物出土状況
図版12　SB４柱穴土層断面、SB61A柱穴土層断面、SB63柱穴土層断面
図版13　掘立柱建物跡検出状況
図版14　掘立柱建物跡検出状況、柵列検出状況（SA１～SA３）
図版15　SK３、SK５、SK70、SK113、SK126、SK127、SX18、SX20
図版16　SD２、SD３、SD４
図版17　SD20、SD29、SD52
図版18　SD53
図版19　SD53
図版20　SD53、SD74、SD113
図版21　調査状況（村上地区）、調査状況（馬場台地区）
図版22　耕作痕検出状況
図版23　縄文時代遺物包含層
図版24　縄文時代の土器
図版25　弥生時代の土器
図版26　古墳時代の土器（１）
図版27　古墳時代の土器（２）
図版28　古墳時代の土器（３）
図版29　古墳時代の土器（４）
図版30　奈良・平安時代の土器（１）
図版31　奈良・平安時代の土器（２）
図版32　奈良・平安時代の土器（３）
図版33　中・近世の陶磁器（１）
図版34　中・近世の陶磁器（２）
図版35　中・近世の陶磁器（３）
図版36　中・近世の陶磁器（４）
図版37　中・近世の陶磁器（５）
図版38　中・近世の陶磁器（６）
図版39　中・近世の陶磁器（７）
図版40　中・近世の陶磁器（８）
図版41　石器（１）
図版42　石器（２）、土製品・石製品
図版43　木製品（１）
図版44　木製品（２）
図版45　瓦（１）
図版46　瓦（２）
図版47　瓦（３）
図版48　廿五里十三割遺跡、村上山王前遺跡

第１章　はじめに

第１節　調査に至る経緯

日本道路公団では千葉市から館山市に至る高速自動車国道である東関東自動車道館山線を計画した。この道路は既存の幹線道路と一体となって、首都圏の京葉地区と房総半島中枢部とを連絡し、その結びつきを強化することにより、千葉県の発展・振興に寄与することを目的としたものであった。この路線のうち千葉市から市原市、袖ヶ浦市を経て木更津市に至る約33.3kmの区間が事業化された。

これに伴い用地内に所在する遺跡の取扱いについて、千葉県教育委員会と日本道路公団及び千葉県土木部は協議を重ねたが、この地域は遺跡の密集地域であり、また大幅なルートの変更も困難なことから、発掘調査による記録保存の措置を講ずることで協議が整い、財団法人千葉県文化財センターが発掘調査を実施することとなった。このうち村上遺跡群については県道五井茂原線（現国道297号バイパス）の拡幅及び県道五井町田線の改修とも関連することから、東関東自動車道館山線とは別の事業として発掘調査を行うこととなった。

第２節　村上遺跡群の概要

１　村上遺跡群の位置と環境

（１）村上遺跡群をとりまく地理的環境

村上遺跡群は東関東自動車道館山線建設予定地内に所在する遺跡のうち、養老川右岸の村上地区に存在する村上遺跡・村上山王前遺跡と養老川左岸の廿五里地区に存在する廿五里十三割遺跡の３遺跡を総称したものである。

千葉県の中央部に位置する市原市の地形は、南部の丘陵、北部の大半を占める洪積台地、そしてそれらを複雑な蛇行を繰り返しながら開析して流れる養老川による沖積低地の三つに大きく分けられる[1]。南部の丘陵は房総丘陵の中の上総丘陵と呼ばれ、小規模な谷が深く入り込み、複雑な地形を呈している。丘陵の北側には下総から上総にまたがる広大な両総台地が広がっている。台地を侵食する谷は、両総台地北部のものに比べてやや小さい。この台地は養老川の東側は市原台地、西側は袖ケ浦台地と呼ばれる。これらの丘陵や台地を開析して流れる養老川は、房総半島の分水嶺である清澄山系に源を発し、市原市域をほぼ東西に分けながら北流し、市域北部で東京湾に注いでいる。流路延長75km、流域面積245.9km²を測る。この両岸には河岸段丘が数段認められる。沖積低地は上流部では狭いが、中流から下流域では広くなり、河川の堆積作用により形成された低平な氾濫平野、洪水時に運ばれた砂やシルトが堆積した微高地である自然堤防、過去の河川流路の跡である旧河道等が分布している。また、河口付近では河川の堆積作用によって三角州をなしている[2]。

今回の調査で村上遺跡群と呼んだ３遺跡は養老川の下流域にあって、それぞれ大きな広がりを有するものと思われるが、調査の対象となった範囲では、地形分類上村上遺跡は段丘・自然堤防・旧河道、村上山王前遺跡・廿五里十三割遺跡は自然堤防に立地する[3]。

第１図　村上遺跡群の位置と周辺の遺跡（1：25,000）

第２図　村上遺跡群周辺地形分類図（1：25,000）

（2）原始・古代の歴史的環境

縄文時代・弥生時代・古墳時代

村上遺跡群周辺の低地から微高地上にかけては縄文時代・弥生時代・古墳時代の遺跡はほとんど存在しない。わずかに村上遺跡の北約0.8kmに御座目浅間神社古墳が存在するのみである。しかし、東側の市原台地上では、約380万m²にも及ぶ区画整理の実施に伴って、多くの遺跡が調査されている。その結果、縄文時代から弥生時代そして古墳時代に至る大集落のほか、縄文時代では西広貝塚や祇園原貝塚、古墳時代では出現期古墳として著名な神門古墳群や「王賜」銘鉄剣の稲荷台１号墳など全国的に見ても重要な遺跡が数多く明らかとなった。

奈良・平安時代

律令制下では、市原市北部は上総国市原郡に属していた。『和名類聚抄』によると、市原郡には海部・市原・江田・湿津・山田・菊麻の６郷が置かれていたとされている。市原郡の範囲については明らかではないが、村田川と養老川にはさまれた地域とされている。また、国府は市原郡に所在したとされている。

村上遺跡群周辺では、まず上総国府の所在地が問題となろう。上総国府の所在地については古くからさまざまな説が出されているが、いまだ定説とされるものはない。推定地は大きく分けて台地上の市原・能満・郡本地区と惣社地区、低地上の村上地区とに分けられる。このうち、低地上の村上地区推定地[4]は、今回調査した村上遺跡の東側に隣接した地区である。これらの推定地は主として現存する地名や地理的条件等の歴史地理学的方法から推定されたもので、考古学的な論拠に乏しく、決め手を欠くものであった。そこで、市原市は上総国府の解明をめざして推定地の確認調査を行うこととなった。村上地区においても平成元年度と平成２年度に行われ、そのほか市原・郡本地区でも行われている。しかし、面積が少ないせいもあって、国府の所在地に関する手がかりを得ることはできなかった[5]。国府の所在地については今後の調査・研究に待つところが大きい。なお、市原郡衙は郡本地区に比定されている。

村上遺跡群の東側の市原台地と呼ばれる洪積台地上には多くの遺跡が存在し、大規模な開発の進行とともに継続的な調査が行われている。村上遺跡群の東約1.5kmの台地上には上総国分僧寺が存在し、浅い谷を隔ててその北東には尼寺が存在する。いずれも継続的な発掘調査によって、県内でも最も寺院の構造が解明されている遺跡といえる。

そのほか近年では官道と考えられる古代の道路遺構が検出されている。村上遺跡群周辺では五所四反田遺跡、市原条里制遺跡、稲荷台遺跡、山田橋表道遺跡で検出されている[6]。いずれも側溝を有するもので、幅5.5m～６mの規模のものであり、海岸砂堤列上を通る古東海道と市原台地上に立地する国府・国分寺・国分尼寺等を結ぶ官道の一部と考えられている。

養老川の南側では、南東約２kmに西野遺跡が存在する。県道の改良に伴って調査されたもので、井戸・溝・掘立柱建物跡等が検出され[7]、周辺に「小折」という地名が遺存することから、西野遺跡周辺が海上郡衙推定地とされている。最近西野遺跡の確認調査も行われているが、郡衙に直接結びつく遺構・遺物は検出されていない[8]。その南西には今富廃寺が存在する。上総国分寺系の軒瓦が出土し、海上郡の郡寺と考えられているが、その実態は明らかではない。

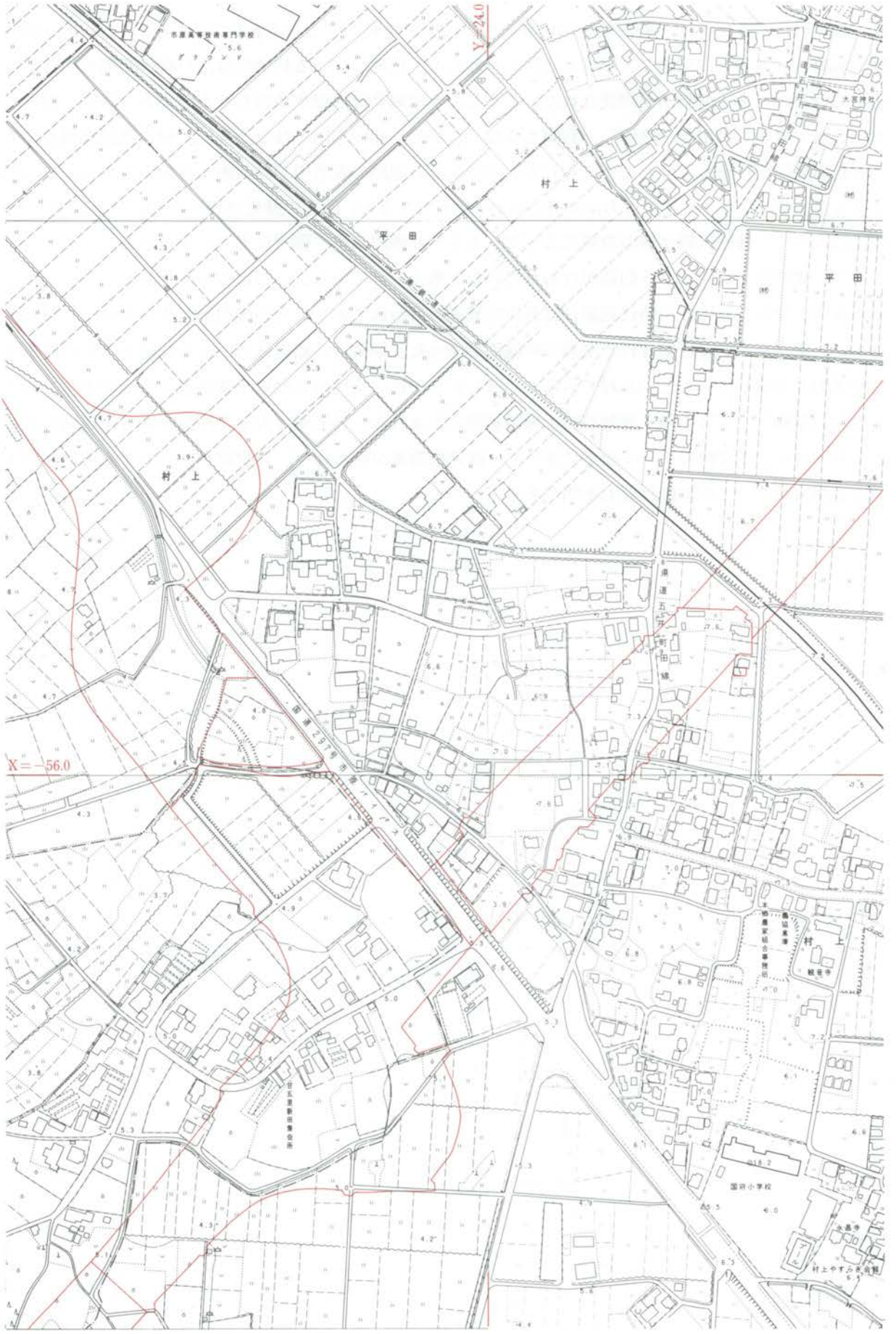
（3）中・近世の開発と養老川

養老川は蛇行が激しく、流路の変遷の激しい川である。流域いたるところにかつての流路の跡が認められる。こうした流路の変遷にはさまざまな自然的要因が考えられているが、流域が度重なる洪水に見舞わ

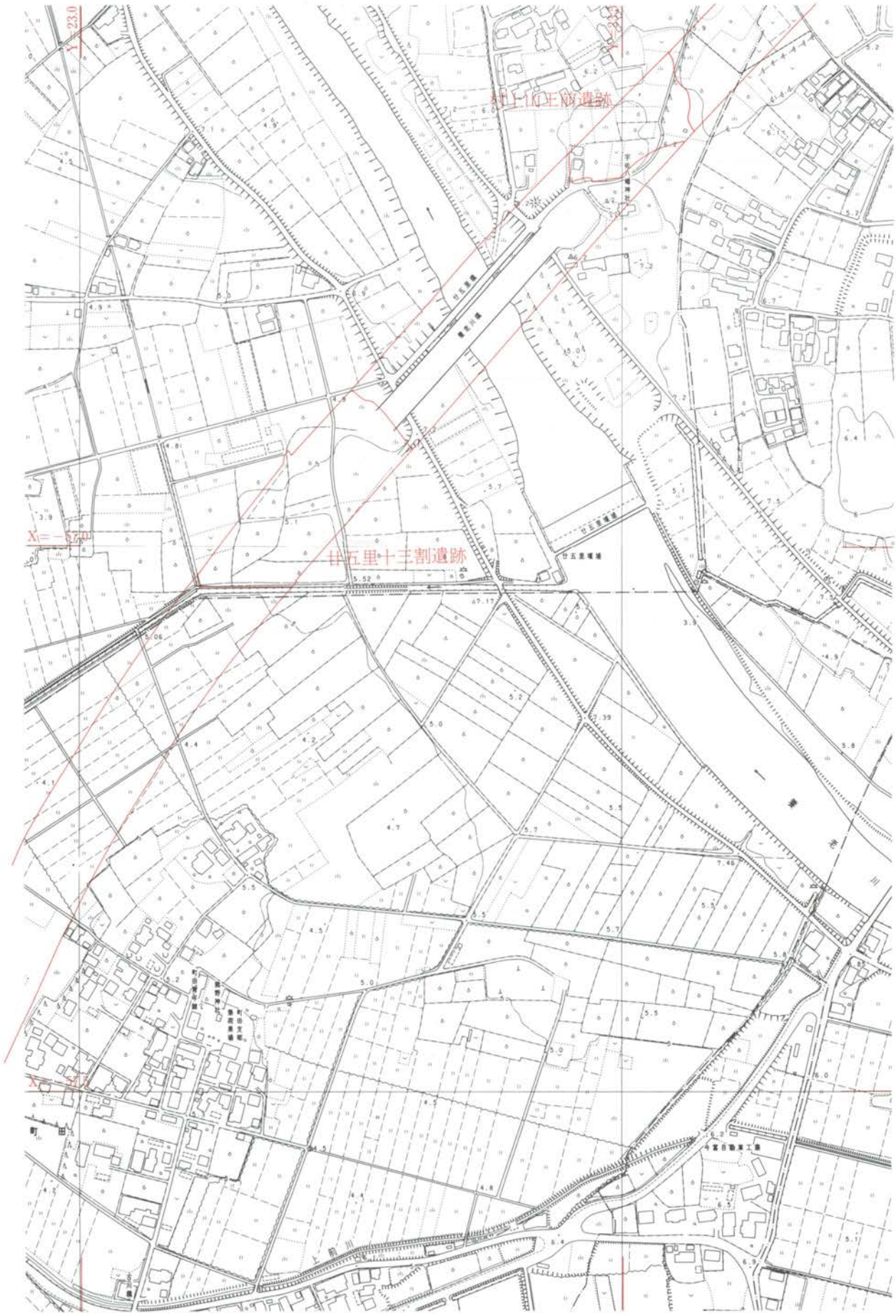
れ、多くの「川欠」が生じ、村と村との境界の争いにまで発展したことは事実である[9]。一方、人工的に流路を短絡させること（川廻しと呼ばれる）も行われた。川廻しによる耕地化は江戸時代初期を中心に流域各地で行われ、多くの新田が開発された。こうした水田開発は房総半島特有なものであったが、得られた水田の多くは少しの出水で冠水し、日照も少なく、決して良い水田ではなかった。村上遺跡群周辺でも多くの新田開発が行われたものと考えられる。同時に低い流路の養老川では耕地への揚水も古くからの問題であった。このためさまざまな方法が考えられ、行われてきた。開発の歴史は利水の努力の歴史でもある。明治に入って、藤原式揚水機の登場によって、ようやく潅漑用水の確保に大きな前進をみた。

また、養老川では古くから船運が行われていたと考えられている。いつごろから行われていたかは不明であるが、少なくとも江戸時代初期には薪炭の輸送が行われており、その後明治時代に至るまで村田川とともに、東京湾の船運に結ばれる交通の幹線路であった。船による輸送は河口から48kmもさかのぼる大多喜町老川まで達していたといわれている。こうしたことは、古代における水運を考える上で重要である。

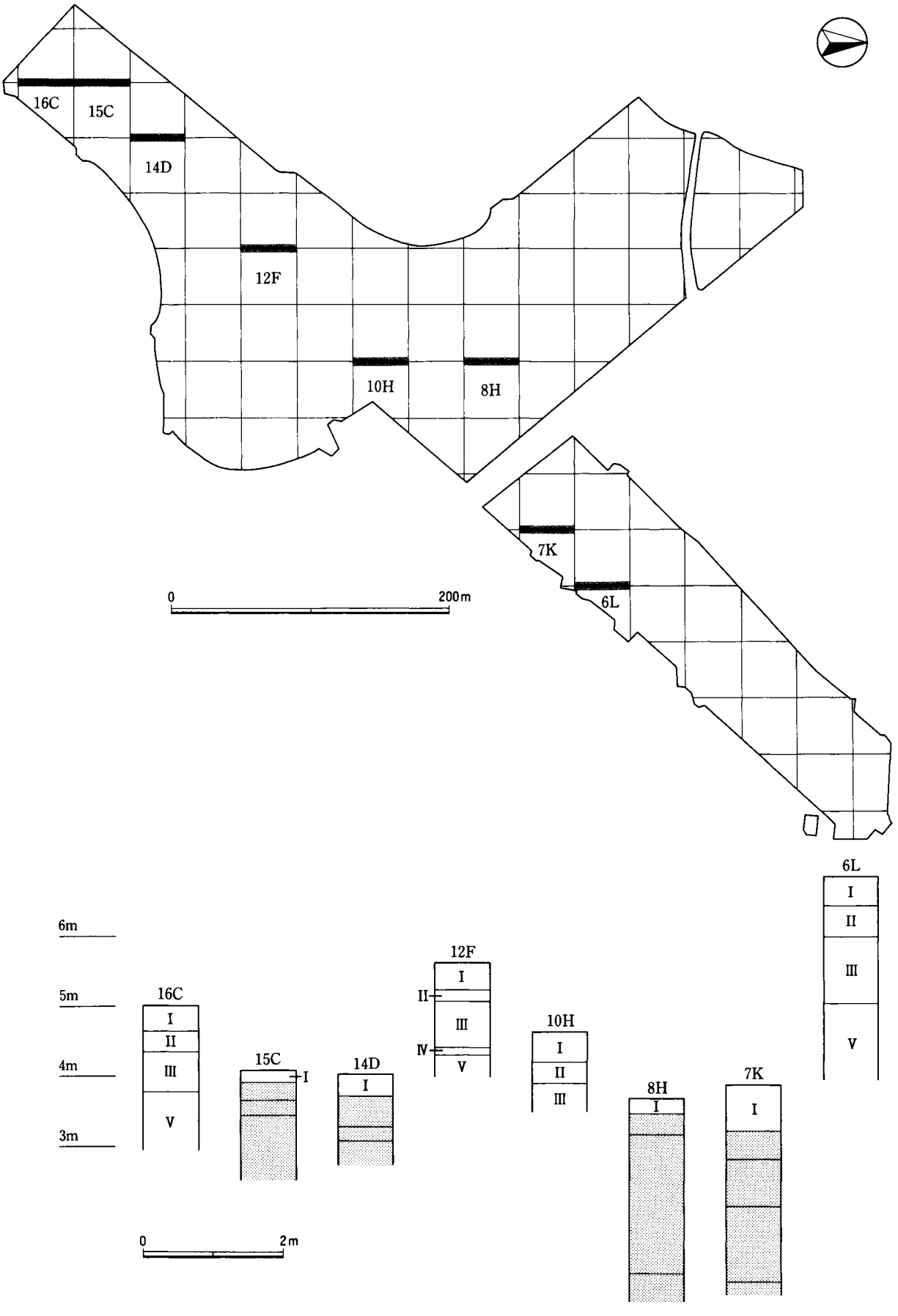
中世の遺跡としては、村上遺跡が村上城の範囲に含まれる。村上城は大永年間村上義芳が居城したと伝えられており、小学校のプール改築に伴って一部発掘調査が行われ[10]、16世紀を中心とする遺物も出土しているが、城としての詳細はなお不明である。



第３図　村上遺跡周辺の地形と調査範囲（1：5,000）



第４図　村上山王前遺跡・廿五里十三割遺跡周辺の地形と調査範囲（1：5,000）



第5図　村上遺跡基本層序

2　層序区分

（1）　村上遺跡

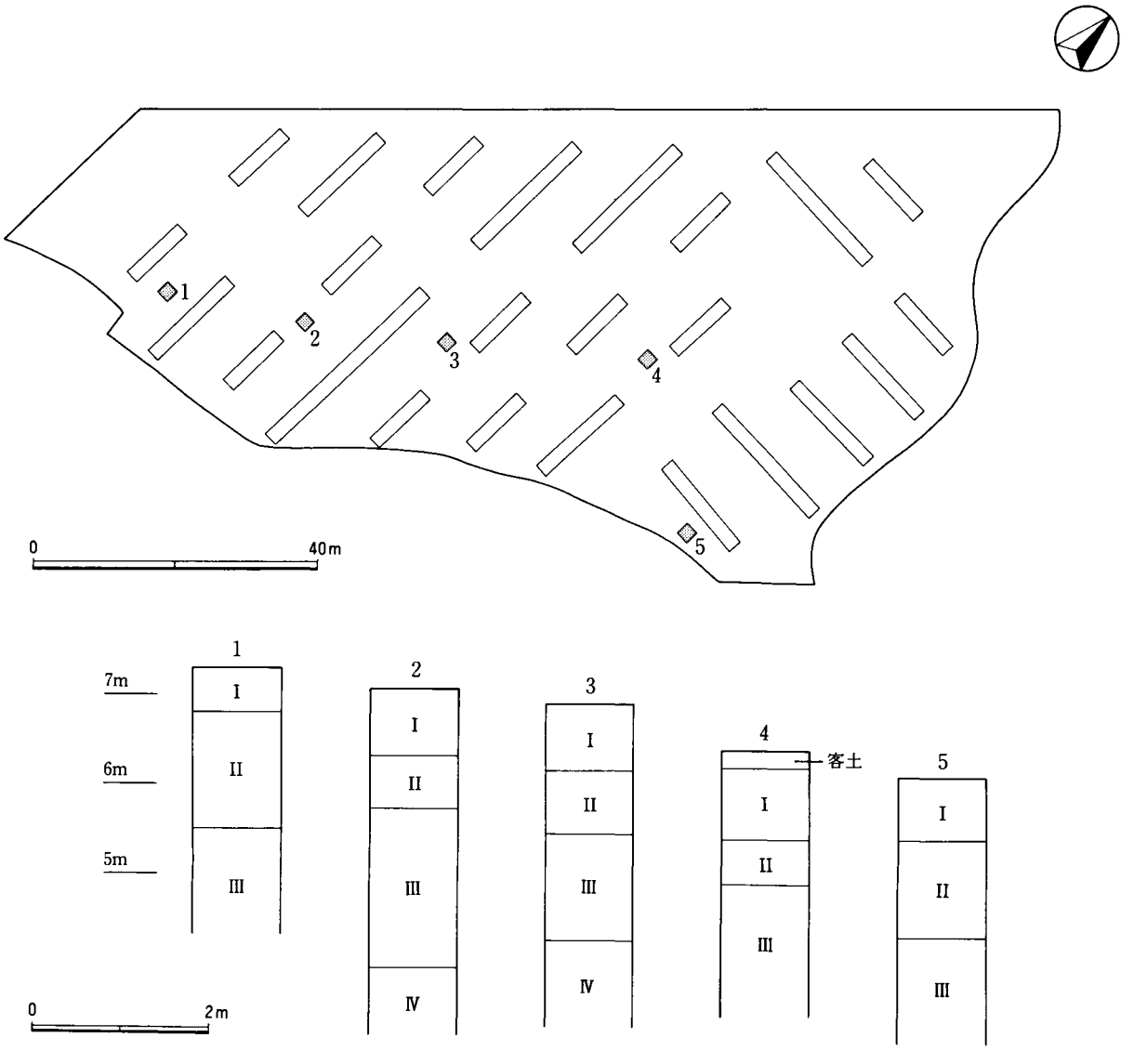
調査範囲は国道297号のバイパスをはさんで、北側が高く、標高約７ｍを測る。南側は養老川に向かって傾斜し、標高約４ｍ～５ｍを測る。調査範囲の大半は宅地及び農地として利用されていたため全体的に攪乱が著しい。

基本層序はⅠ層　暗褐色砂層、Ⅱ層　黄褐色砂層、Ⅲ層　黄褐色砂層、Ⅳ層　灰褐色砂層、Ⅴ層　黄褐色砂層である。トレンチ内では部分的に旧河道が確認され、旧河道内の堆積土は青灰色砂層である。

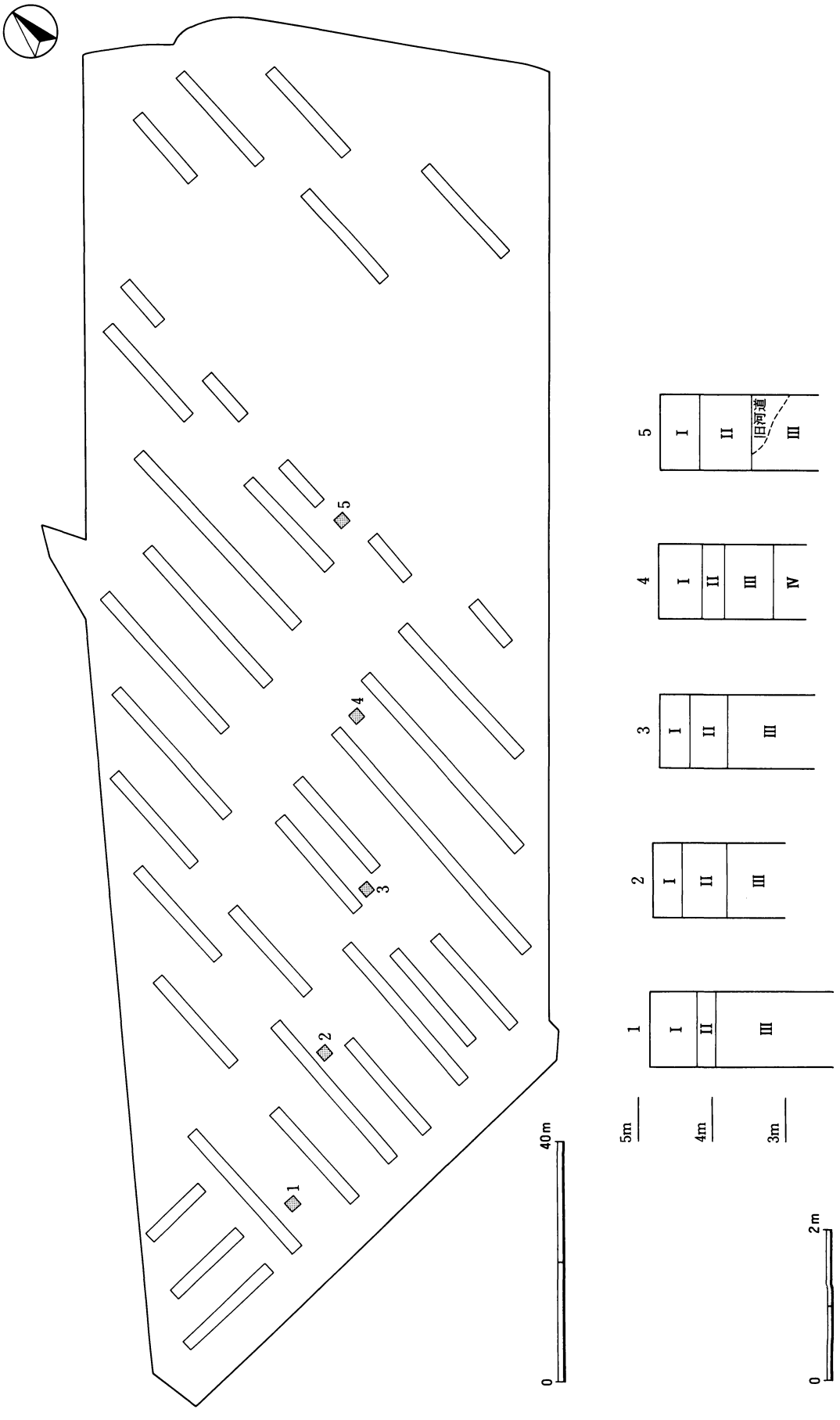
（2）　村上山王前遺跡・廿五里十三割遺跡

村上山王前遺跡の調査範囲は西側（養老川側）がやや高く、標高約７ｍを測り、東に向かってやや低くなり標高は約６ｍを測る。廿五里十三割遺跡の調査範囲はほぼ平坦で、標高約５ｍを測る。

両遺跡の層序は共通しており、基本層序はⅠ層　暗褐色砂層、Ⅱ層　黄褐色砂層、Ⅲ層　灰褐色砂層、Ⅳ層　赤褐色砂層となる。なお、廿五里十三割遺跡では一部のトレンチで旧河道が確認された。旧河道内の堆積土は青灰色砂層である。



第６図　村上山王前遺跡確認トレンチの配置と基本層序



第７図　廿五里十三割遺跡確認トレンチの配置と基本層序

第３節　調査の概要

１　発掘調査の方法と経過

東関東自動車道館山線建設に関わる発掘調査では、路線の調査ということで遺跡の数も多く、また遺跡の面積も大きいため、それぞれの遺跡毎に公共座標に基づく40m単位の方眼を大グリッドとして実施している。

（１）村上遺跡

村上遺跡の調査範囲を覆う大グリッドは、南北方向に北から１、２、３…17、東西方向を西からＡ、Ｂ、Ｃ…Ｐとし、さらに大グリッド内を４ｍ単位の小グリッドに分け00～99の番号を付した。このため各グリッドはＥ３－00、Ｇ12－55等のように呼称した。

確認調査は遺構・遺物の分布状況・密度等を把握するため、対象面積の10％を幅２ｍのトレンチを設定して行った。確認調査の結果、廿五里新田地区では北側1/3と南側1/3で旧河道が確認され、中央部は自然堤防と考えられる砂堆となるが、いずれも遺構は検出されなかった。村上地区では南端で旧河道が確認されたが、大半は段丘部分であるため、多くの遺構が確認された。また、馬場台地区でも段丘部分であるため、遺構が確認された。なお、基盤層や旧河道の堆積状況を確認するため、クラムシェルによる下層の確認調査を対象面積の約１％を対象として、２ｍ×２ｍのグリッドを設定して行った。

本調査は確認調査の結果に基づき、段丘面上で検出された遺構を対象として行った。遺構検出面までは重機により表土の除去を行った。遺構や遺物の集中部分では土層観察用のベルトを残しながら、遺物の出土位置や遺構の把握につとめた。遺構内の遺物は必要に応じて出土位置を記録して取り上げた。なお、縄文時代の包含層の出土遺物は全点ドットマップを作成した。また、グリッド出土遺物については、基本的に小グリッド一括で取り上げた。遺構番号は遺構の種類毎に検出順に付した。なお、掘立柱建物跡のSB35～49は欠番となっている。

村上遺跡の発掘調査は工事の工程や用地買収の関係で、平成２年度から平成６年度にわたって実施した。年度毎の経過は以下のとおりである。

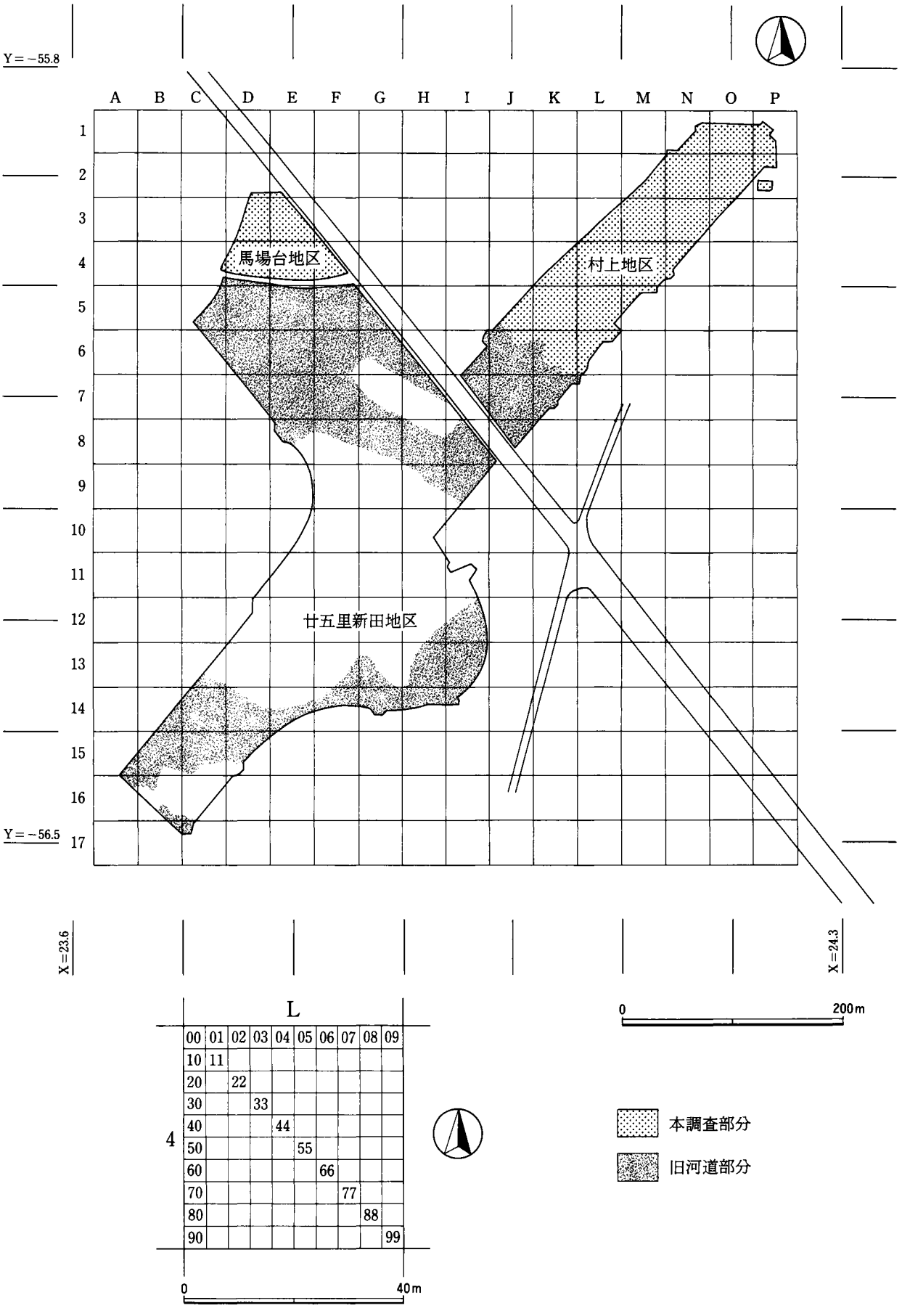
平成２年度の調査

当初の計画では55,300㎡を対象として調査を実施する予定であったが、調査用地の確保が予想以上に進行したため、最終的には平成２年４月２日から翌年３月28日までの期間に、91,200㎡の調査を行った。

調査は、まず対象地に対して10％の確認調査を実施し、その後本調査を実施した。91,200㎡のうち廿五里新田地区83,500㎡では遺構が検出されず、村上地区（後口地区・白幡神社地区・白幡前地区の総称）、馬場台地区あわせて7,700㎡が本調査の対象となった。その結果、奈良・平安時代を中心として多くの掘立柱建物跡や溝状遺構が検出された。

平成３年度の調査

当初の計画では22,600㎡を対象として調査を実施する予定であったが、村上地区の用地買収や家屋の移転が大幅に遅れたため、村上地区5,200㎡、馬場台地区6,400㎡の計11,600㎡を対象に平成３年４月１日から翌年３月27日までの期間に調査を実施した。調査はまず対象地に対して10％の確認調査を実施し、その後9,600㎡の本調査を実施した。その結果、弥生時代の自然流路や奈良・平安時代の掘立柱建物跡が検出された。



第８図　村上遺跡グリッド設定図

第９図　村上地区年度別本調査範囲（1：1,500）

平成４年度の調査

当初の計画では11,000㎡を対象として調査を実施する予定であったが、家屋の移転の遅れなどで条件整備が整わなかったため、まず４月１日から５月31日までに期間に用地の確保できた2,300㎡を対象にして10％の確認調査を実施し、そのうち2,050㎡の本調査を実施した（第１次調査）。その結果、古墳時代前期の竪穴住居跡などが検出された。

その後用地が確保できないため調査を一時中断、条件整備が終了した12月１日に再開したが、全体の用地を確保することができなかったため、2,000㎡のみを対象にして平成５年１月29日まで調査を実施した（第２次調査）。10％の確認調査を行った結果、2,000㎡すべてが本調査の対象となり、掘立柱建物跡や溝状遺構などが検出された。最終的に用地の確保できなかった残り6,700㎡については平成５年度に持ち越すこととなった。

平成５年度の調査

当初の計画では、前年度用地が確保できず今年度に持ち越した6,700㎡を対象として調査を実施する予定であったが、家屋の移転などの条件整備が整わず、まず６月１日から2,400㎡を対象にして10％の確認調査を実施し、その後対象地全域2,400㎡の本調査を実施した。残りの4,300㎡については11月16日から10％の確認調査を実施し、全域が本調査の対象となったが、4,300㎡のうち410㎡については調査が実施できず、3,890㎡について、平成６年２月28日まで調査を行った。残り410㎡については平成６年度に持ち越した。調査の結果、中世城郭の堀跡と考えられる遺構をはじめ、多くの溝状遺構が検出された。

平成６年度の調査

４月１日から５月31日の期間で、前年度から持ち越した410㎡の本調査を実施した。調査の結果、前年度と同様に中世城郭の堀跡と考えられる遺構を初め多くの溝状遺構が検出された。

各年度の担当者は下記の通りである。(直接担当者のみ)

平成２年度

研究員　村木正記、主任技師　笹生衛、主任技師　糸川道行

平成３年度

主任技師　笹生衛

平成４年度

主任技師　笹生衛

平成５年度

技師　高梨俊夫（第１次)、技師　神野信（第２次)

平成６年度

主任技師　高柳圭一

（２）村上山王前遺跡・廿五里十三割遺跡

村上山王前遺跡では村上遺跡と同様に大グリッドを南北方向に北から０、１、２、３、東西方向を西からA、B、C、D、Eとし、さらに大グリッド内を４m単位の小グリッドに分け00～99の番号を付した。このため各グリッドは3C－00のように呼称した。

確認調査は6,500m²について遺構・遺物の分布状況・密度等を把握するため対象面積の10％に幅２mのトレンチを設定して、平成２年10月15日から11月16日までの期間に行った。なお、基盤層の状況を確認するため、一部クラムシェルによる深掘りも行った。確認調査の結果、遺構は検出されず、遺物も土師器・中世陶器の細片がわずかに出土したのみであったため、本調査には移行せず調査を終了した。

廿五里十三割遺跡でのグリッド設定は他の遺跡と異なり変則的で、大グリッドを南北方向に南からA、B、C、D、E、東西方向を西から１、２、３、４、５、６とし、さらに大グリッド内を４m単位の小グリッドに分け00～99の番号を付した。このため各グリッドは3B－00のように呼称した。確認調査は15,200m²について遺構・遺物の分布状況・密度等を把握するため対象面積の10％に幅２mのトレンチを設定して、平成２年９月１日から10月12日までの期間に行った。なお、基盤層の状況を確認するため、一部クラムシェルによる深掘りも行った。確認調査の結果、遺構は検出されず、遺物も土師器・中世陶器の細片がわずかに出土したのみであったため、本調査には移行せず調査を終了した。

担当者は下記のとおりである。(直接担当者のみ)

平成２年度

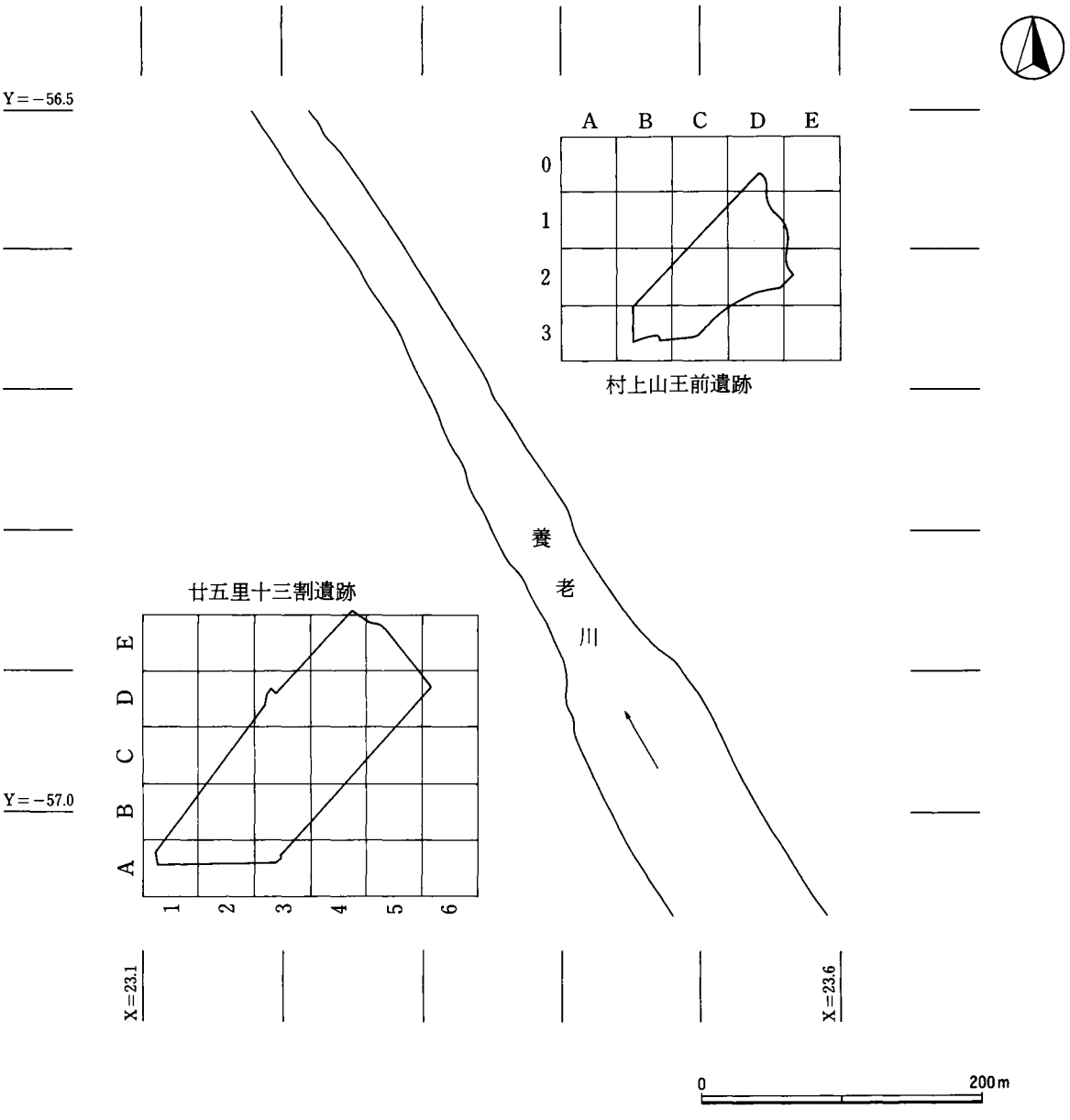
研究員　村木正記

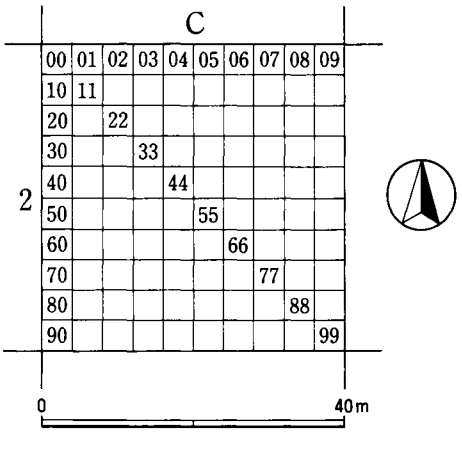
２　整理作業の方法と経過

村上遺跡の整理作業は、平成５年度から平成８年度にわたって実施した。年度毎の経過と担当者は下記のとおりである。

平成５年度　技師　神野信

６月から始まった発掘調査の中断した時期を中心に遺物の水洗・注記及び図面・写真などの記録類の整理の一部を行った。





第10図　村上山王前遺跡・廿五里十三割遺跡グリッド設定図

平成６年度　調査係長　柴田龍司　主任技師　高柳圭一

一時期発掘調査と併行しながら、通年にわたって図面の基礎的な整理から遺物の分類、接合、そして復元までを行った。

平成７年度　調査係長　小久貫隆史　主任技師　渡邊高弘

遺物の実測からトレース、さらに遺構のトレースを行い、挿図を作成した。合わせて遺物の写真撮影を行い、写真図版も作成した。また、一部原稿執筆も行った。

平成８年度　調査室長　小久貫隆史　主任技師　渡邊高弘

原稿執筆を行った後、全体の編集を行い報告書の印刷刊行まで行った。

なお、廿五里十三割遺跡及び村上山王前遺跡の整理は、水洗・注記から原稿執筆までの作業を平成８年度に行い、村上遺跡の報告書と合本とした。

注１　木村泰治　1979「市原市の地形と地質」『市原市史　別巻』

２　杉原重夫ほか　1976「国分寺台周辺の自然地理」『南向原－上総国分寺台遺跡調査報告II－』

３　国土地理院　1971『1：25,000土地条件図　姉崎』

なお、下記文献では段丘に相当する部分はすべて自然堤防とされている。

徳橋秀一・遠藤秀典　1984『姉崎地域の地質．地域地質研究報告（５万分の１図幅)』 地質調査所

４　須田勉　1976「上総国府の諸問題（１）－特にその所在地をめぐって－」『古代』61

５　高橋康男　1994『市原市上総国府推定地確認調査報告書（１)』 市原市教育委員会・財団法人市原市文化財センター

６　佐々木虔一　1994「日本古代の交通路とその特色」『市原市文化財研究会紀要第１輯』

７　今泉潔ほか　1989『市原市西野遺跡・白山遺跡・村上遺跡発掘調査報告書』 財団法人千葉県文化財センター

８　高梨俊夫　1996『市原市西野遺跡第１次発掘調査報告書』 千葉県教育委員会

９　藤原文夫　1979「養老川」『市原市史　別巻』

10　山口直樹・田所真　1986『村上城跡』　財団法人市原市文化財センター

第２章　村上遺跡の遺構と遺物

第１節　遺構

検出された遺構の時期は、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代そして中・近世とに大別される。このうち、弥生時代では馬場台地区の中央で流路・溝(第39図)、村上地区で土坑が検出された。住居跡の検出はなく、遺物量も少ない。古墳時代は住居跡９軒と土坑が検出された。住居跡は村上地区でのみ検出された。９軒の住居跡は調査区北側の６軒（第16・18図）と中央西側の３軒（第25図）の２つのグループに大きく分けられる。いずれも遺存状況が悪く、出土遺物も少ない。土坑は散在した分布を示すが、比較的多くの遺物が出土している。遺構の中で主体となるのは、多くの掘立柱建物跡が検出された奈良・平安時代である。これらの掘立柱建物跡は村上地区のみで検出されたもので、大きく調査区北側（第15・16・18図）と南端（第34・35図）に密集する傾向を示す。調査区内からは村上地区を中心として、多くの溝が検出された。これらの溝の多くは方向性や規格性を持っていないが、村上地区南端でやや規模の大きな２条の「鉤の手」状に屈曲する溝（第33・34図）が検出されており、特徴的なあり方を示す。溝の一部には奈良・平安時代に属するものもあるが、中・近世の遺物の検出状況からして、溝の多くは中・近世に属するものと思われる。

ここでは今回の調査で検出された遺構のうち、すべての住居跡と掘立柱建物跡そして主な土坑と溝、そしてそれら以外の若干の遺構について取り上げる。まずはじめにこれらの遺構の実測図の表現方法について記述しておく。遺構実測図は、住居跡と掘立柱建物跡については1/80の縮尺で個別図を掲載した。また、主な土坑については、1/40（あるいは1/60・1/80）の縮尺で個別図を掲載した。その他特殊な遺構で個別図を掲載したものもあるが、縮尺は任意である。遺構の中で最も多く検出された溝については個別図を掲載することはせず、遺構全体図の中に含めることとした。この全体図は村上地区を、多少の重複をとって、21葉の図面（縮尺1/200）に分割したものである。それぞれの図の位置関係は、第14図に示した。ただし遺構の一部については、図の構成上本来の位置から移動させて表現したものもある。また、馬場台地区についても、流路及び溝が主体を占めるため、SD53・54の木製品の出土状況図以外の個別図は作成せず、村上地区と同様の方法で、６葉の図面に分割した。それぞれの図の位置関係は、第37図に示した。それぞれの遺構全体図は検出された遺構すべてについて掲載した。断面図は任意の位置を選び、作成した。なお、遺構全体図に掲載した遺構のうち掘立柱建物跡については、煩雑を避けるため、下端の表現を省略している。

１　住居跡（第44・45図、図版３・４）

SI 1

村上地区の北半、O２－46・47グリッド等に位置する。SB16・17・20・21及びSK22と重複し、SB16より古い。南側約10mにSI２～５が位置する。

平面形は隅丸の方形を呈し、規模は東西5.9m、南北5.7mを測る。主軸方向は不明である。西壁の方向はN－32°－Wを示す。検出面からの掘込みの深さは10cm～20cmを測る。掘立柱建物跡と重複しているためピ

ットは多く検出されたが、図示した10本が住居に伴うものと思われる。これらのピットのうち対角線上に配される４本が主柱穴と考えられる。深さは40cm～60cmを測る。南側コーナー部分のピットは50cm×70cmの規模で、隅丸長方形を呈し、深さ25cmを測る。貯蔵穴と考えられる。このピット内の下部には粘質土が堆積し、その上層からは炭化物が検出された。床面は軟弱である。覆土は２層に分けられる。上部は黒褐色土、下部は黄褐色土である。カマド・炉跡等は検出されなかった。

遺物の量は比較的多いが散漫な出土状況を示し、また破片が多い。図示できたのは１点のみである。

SI 2

村上地区の北半、O２－87・88グリッド等に位置する。SI１の南約10mに位置する。西側でSI３・５と重複し、SI３・５より新しい。

平面形は隅丸の長方形を呈し、規模は東西３m、南北3.8mを測る。主軸方向は不明である。東壁の方向はN－15°－Eを示す。検出面からの掘込みの深さは10cmを測る。ピットは４本検出されたが、位置・規模等に差があり、また覆土の状況からも確実に住居の柱穴と考えられるものは、北側コーナー部に位置する１本のみである。深さは40cmを測る。床面は軟弱である。覆土は黒褐色土を主体とするものである。カマド・炉跡等は検出されなかった。全体に遺存状況が極めて悪い。

遺物の量は少なく、出土状況も散漫で、破片も多く、図示できるものはない。

SI 3

SI２の西側、O２－86・87グリッド等に位置する。SI２・４・５と重複し、SI２・４より古く、SI５より新しい。

平面形は不整な長方形を呈し、規模は東西6.2m、南北3.6mを測る。主軸方向は不明である。西壁の方向はN－５°－Wを示す。検出面からの掘込みの深さはわずかに５cmほどである。ピットは10本検出されたが、位置・規模等に差があり、また覆土の状況からも確実に住居の柱穴と考えられるものはない。深さは40cm前後のものが主体である。床面は極めて軟弱である。覆土は黒褐色土の単一層である。カマド・炉跡等は検出されなかった。全体に遺存状況が極めて悪い。

遺物の量は少なく、出土状況も散漫で、破片も多く、図示できるものはない。

SI 4

SI３の西側、O２－85・86グリッド等に位置する。SI３と重複し、SI３より新しい。

平面形は隅丸の長方形を呈し、規模は東西4.8m、南北４mを測る。主軸方向は不明である。西壁の方向はN－３°－Eを示す。検出面からの掘込みの深さはわずかに５cmほどである。ピットは３本検出された。深さはいずれも50cm前後と比較的深いが、柱穴とするには疑問が残る。床面は極めて軟弱である。覆土は暗黄褐色土の単一層である。カマド・炉跡等は検出されなかった。全体に遺存状況が悪い。

遺物の量は少なく、出土状況も散漫で、破片も多く、土器で図示できるものはない。土玉が１点出土している。

SI 5

SI３の北側、O２－76・77グリッド等に位置する。SI２・３と重複し、SI２・３より古い。焼土ブロックが多量に入った柱穴が１本とその周囲に６本の柱穴が検出されたのみで、壁・床面等は全く遺存しておらず、詳細は不明である。検出された６本のピットは規模・形態に差があるが、深さは30cm～40cmと比較的しっかりしたものである。

遺物はピット内から土器がわずかに出土しているが、いずれも破片で図示できるものはない。

SI 6

SI 1の西側約5m、O 2 －34・44グリッドに位置する。SD26及びSB18・24と重複しており、これらの遺構より古い。

平面形は隅丸の不整な方形を呈し、規模は東西2.9m、南北3.1mを測る。主軸方向は不明である。東壁の方向はN－20°－Wを示す。検出面からの掘込みの深さは10cmを測る。ピットは検出されていない。床面は極めて軟弱である。覆土は暗褐色土を主体とするものである。カマド・炉跡等は検出されなかった。

遺物は全く出土していない。

SI 7

村上地区のほぼ中央、L 3 －48・49グリッド等に位置する。東側でSD79、西側でSI 8と重複し、SD79よりは古く、SI 8より新しい。また、北側も溝状遺構により破壊されている。

平面形は遺存している壁からして、一辺が4.5mほどの隅丸方形を呈するものと思われる。検出面からの掘込みの深さは5cmと極めて浅い。ピットは4本検出され、25cm～40cmの深さを測るが、住居に伴うのは、北端の一本のみである。床面は極めて軟弱である。覆土は暗褐色土を主体とするものである。カマド・炉跡等は検出されなかった。

遺物の量は少ないが、ピットの周辺からややまとまって出土している。壺1点、甕2点を図示することができた。そのほか紡錘車と考えられる土製品が1点出土している。

SI 8

SI 7の西側で重複し、L 3 －47・48グリッド等に位置する。SI 7より古い。

平面形は遺存している壁からして、一辺が5mほどの隅丸方形を呈するものと思われる。主軸方向はN－16°－W。検出面からの掘込みの深さは5cmと極めて浅い。ピットは7本検出され、このうち対角線上に配される4本は、深さ30cm前後で共通しており、主柱穴と考えられる。床面は極めて軟弱である。覆土は黒褐色土を主体とするものである。炉跡は住居北側の主柱穴の間で検出された。径50cmほどの不整な円形を呈し、深さは5cmを測る。上部に焼土が薄く堆積していたのみで、底面はほとんど焼けていない。

遺物の量は少ないが、住居北側の主柱穴周辺からややまとまって出土している。壺・甕各1点ずつを図示することができた。

SI 9

SI 8の西側、L 3 －37・47グリッド等に位置する。西側でSD78と重複し、北側は調査区域外に延びている。住居跡と考えて調査したものであるが、深さ20cm～30cmほどの溝状の掘込みが検出されたのみで、詳細は不明である。

遺物はわずかに土器が出土したのみで、図示できるものはない。

2　掘立柱建物跡、柵列（第46～63図、図版５～14）

SB１

村上地区の南端、Ｋ６－37・38グリッド等に位置する。北側でSD８・SD19、東側でSB７、南側でSB９、西側でSD４と重複する。主軸方向はＮ－75°－Ｅ。桁行6.8m、梁行4.8mの４間×３間の建物である。攪乱が著しく、身舎部分は遺存状態が悪い。柱間間隔は桁行、梁行共1.6mでほぼ等間隔である。柱穴は不整な円形のものが主体を占めるが、一部布掘状を呈する。大きさは径50cm～１mを測る。柱穴の深さは45cm～70cmと差がある。身舎部分で規模の小さい柱穴が検出された。南北方向で柱筋が通っており、束柱と考えられる。径30cm、深さ15cmを測る。柱痕跡は束柱を含めて５穴、さらに身舎部分の南側の柱穴１穴でも確認され、計６穴で確認された。柱には径20cm前後の円形柱材を用いていたことがわかる。また、身舎の周囲には幅約１m～1.2m、深さ約60cm～80cmで、断面逆台形の溝が巡っている。この溝の覆土は柱穴の覆土と類似し、さらに覆土中位から柱穴状の落込みが多数確認された。これらのことから、この溝はSB１に伴う庇の布掘状の掘方である可能性が高い。

遺物は柱穴内からはわずかであるが、庇の掘方と考えられる溝状部分から多量の土器が出土している。なかでもコーナー（特に南東）部分からの出土が多い。土師器12点、須恵器４点計16点を図示することができた。

SB２

SB１の南側約11m、Ｋ６－97・98グリッド等に位置する。西側でSB６と重複し、SB６より古い。主軸方向はＮ－３°－Ｗ。桁行6.6m、梁行4.4mの４間×３間の建物である。全体に攪乱が著しく、身舎部分の大半は失われている。柱間間隔は1.2m～２mと一定しない。柱穴は不整な円形ないし楕円形を呈し、大きさは径（長軸）80cm～１mとやや差がある。また、西列の一部の柱穴は溝状となる。柱穴の深さは20cm～50cmと差がある。柱痕跡は２穴で確認され、柱には径20cmほどの円形柱材を用いていたことがわかる。

遺物は土器がわずかに出土しているのみで、図示できるものはない。

SB３

SB１の東約１mのＫ６－29・39グリッド等に位置する。西側でSB７、北側でSD19と重複し、SD19よりは古いが、SB７との新旧関係は不明である。主軸方向はＮ－15°－Ｗ。東西4.35m、南北4.35mの３間×３間の建物である。柱間間隔は1.4mでほぼ等間隔である。柱穴は不整な円形ないし楕円形を呈し、大きさは径（長軸）60cm～１mと差がある。柱穴の深さも20cm～40cmと差がある。身舎部分は攪乱を受けているが束柱が３穴検出された。径30cm～40cm、深さ20cm～25cmを測る。柱痕跡は３穴で確認され、柱には径20cmほどの円形柱材を用いていたことがわかる。

遺物は少なく、わずかに須恵器甕の破片が図示できたに過ぎない。

SB４

SB１の南約5.5mのＫ６－67・77グリッド等に位置する。SD16と重複する。主軸方向はＮ－８°－Ｗ。桁行5.9m、梁行4.36mの３間×２間で、東側に１間×３間の庇を有する建物である。攪乱が著しく、隅穴２穴と庇の南端の柱穴は検出できなかった。柱間間隔は約２mで、ほぼ等間隔である。柱穴は不整な円形のものが主体を占め、大きさは径60cm～１mと差がある。柱穴の深さも20cm～50cmと差がある。柱痕跡は３穴で確認され、柱には径15cm～20cmの円形柱材を用いていたことがわかる。

遺物は土器がわずかに出土しているのみで、図示できるものはない。

SB 5

SB 1 の南西約 2 m の K 6 －45・46グリッド等に位置する。他の遺構との重複はないが、攪乱が著しい。主軸方向はN－85°－E。遺存状態が極めて悪いが、東西4.6m、南北3.86mの 2 間× 2 間の建物と考えられる。柱間間隔は1.6m～2.2mと一定しない。柱穴は不整な円形を呈し、大きさは径60cm～90cmと差がある。柱穴の深さも30cm～40cmとやや差がある。柱痕跡は 1 穴のみで確認され、柱には径20cmほどの円形柱材を用いていたことがわかる。

遺物は出土していない。

SB 6

SB 2 の西側で重複し、K 6 －87・97グリッドに位置する。SB 2 より新しい。主軸方向は不明。検出された柱穴は 4 穴のみであり、建物全体の規模は一切不明である。柱間間隔は1.6m～ 2 mと一定しない。柱穴は円形を呈し、大きさは径60cm前後、深さも40cmでほぼ共通している。柱痕跡は 3 穴で確認され、柱には径15cmほどの円形柱材を用いていたことがわかる。

遺物は土器がわずかに出土しているのみで、図示できるものはない。

SB 7

SB 3 の西側で重複し、K 6 －38・39グリッド等に位置する。さらに西側では SB 1 と重複する。主軸方向はN－ 7 °－W。重複及び攪乱により遺存状態が悪いが、東西4.04m、南北4.44mの 2 間× 2 間の建物と考えられる。柱間間隔は約 2 mでほぼ等間隔である。柱穴は円形ないし楕円形を呈し、径(長軸)50cm～80cmと差がある。柱穴の深さは30cm～50cmとやや差がある。柱痕跡は 1 穴で確認され(断面観察のみ)、柱には径25cmほどの円形柱材を用いていたことがわかる。

遺物は少なく、わずかに 2 点の須恵器破片が図示できたに過ぎない。

SB 8

SB 1 の北西約 7 m の K 6 －14・15グリッドに位置する。SD 4 ・ 6 ・12と重複する。主軸方向は不明。検出された柱穴は 3 穴のみであり、建物全体の規模は一切不明である。柵列の可能性も考えられる。柱間間隔は約 2 mでほぼ等間隔である。柱穴は円形を呈し、径30cmほどの規模である。柱穴の深さは30cm～40cmを測る。柱痕跡は中央の 1 穴で確認された。径10cmほどの円形柱材を用いていたことがわかる。

遺物は出土していない。

SB 9

SB 1 の南側で重複し、K 6 －48・58グリッド等に位置する。西側では SD 4 と重複する。主軸方向は不明。SB 1 と SD 4 の間に柱穴群が検出されたのみで、建物全体の規模は一切不明である。柵列の可能性も考えられる。柱穴は円形のものが主体を占めるが、規模には差があり、規格性は認められない。柱穴の深さも10cm～70cmとかなり差がある。柱痕跡は 1 穴で確認された。柱には径15cmほどの円形柱材を用いていたことがわかる。

遺物は少なく、わずかに須恵器甕の破片が図示できたに過ぎない。

SB10

SB 3 の東約 5 m、L 6 －20グリッドに位置する。主軸方向は不明。溝に囲まれた部分で柱穴が 2 穴検出されたのみであり、建物全体の規模は一切不明である。柵列の可能性も考えられる。柱間間隔は約1.8m。柱穴は長軸 1 mほどの楕円形を呈する。柱穴の深さは20cm～30cmと浅い。柱痕跡は南側の柱穴で確認された。

柱には径15cmほどの円形柱材を用いていたことがわかる。

遺物は出土していない。

SB11

村上地区の北端、O２－59・69グリッド等に位置する。SB19・22と重複し、SB19よりは新しい。主軸方向はほぼ南北。桁行6.44m、梁行4.72mの３間×２間の建物である。柱間間隔は２m～2.2mとほぼ等間隔である。柱穴は円形ないし楕円形を呈し、径（長軸）70cm～80cmの規模である。柱穴の深さは30cm～60cmとかなり差がある。柱痕跡は３穴で確認された。柱には径20cmほどの円形柱材を用いていたことがわかる。

遺物は比較的多く、７点の土器を図示することができた。

SB12

SB11の北約２m、O２－39・49グリッド等に位置する。SB15・16・23、SD23と重複し、SB15・16・23、SD23より新しい。主軸方向はほぼ南北。桁行4.9m、梁行４mの３間×２間の建物である。柱間間隔は梁行は２mで一定しているが、桁行は1.2m～1.8mと一定しない。柱穴は不整な円形ないしは楕円形を呈し、大きさは径(長軸)80cm～１mとやや差がある。柱穴の深さも40cm～70cmとかなり差がある。柱痕跡は４穴(１穴は断面観察のみ）で確認された。柱には径20cmほどの円形柱材を用いていたことがわかる。

遺物は比較的多く、７点の土器を図示することができた。

SB13

SB12の北西約21m、O１－93、O２－03グリッド等に位置する。SD26と重複する。主軸方向はN－67°－E。桁行5.44m、梁行4.06mの３間×２間の建物である。柱間間隔は1.6m～2.2mとかなり差がある。柱穴は楕円形のものが主体を占め、長軸60cm～80cmの規模である。柱穴の深さは40cm～60cmと差がある。柱痕跡は明確には確認できなかった。

遺物は土器がわずかに出土しているのみで、図示できるものはない。

SB14

SB13の西約12m、N１－99、O１－90グリッド等に位置する。他の遺構とは重複しないが、削平・攪乱が著しい。主軸方向はN－３°－E。桁行4.9m、梁行3.4mの３間×２間で、南側に１間×３間の庇を有する建物である。柱間間隔は約1.4m～1.6mとほぼ等間隔である。柱穴は不整な円形を呈し、身舎部分では径50cm～60cm、庇部分では径30cm～40cmの規模である。柱穴の深さは身舎部分では30cm前後、庇部分では15cm～20cmを測る。柱痕跡は明確には確認できなかった。

遺物は土器がわずかに出土しているのみで、図示できるものはない。

SB15

SB11の北約５m、O２－39、P２－30グリッド等に位置する。SB12・23、SD29と重複し、SB12・23より古い。主軸方向はほぼ南北。桁行4.72m、梁行4.3mの３間×２間の建物である。柱間間隔は1.4m～2.2mとかなり差があり、規格性に乏しい。柱穴は円形ないし楕円形を呈し、径50cm～60cm、長軸70cm～90cmの規模である。柱穴の深さは40cm～80cmとかなり差がある。柱痕跡は３穴で確認できた。柱には径15cm～20cmほどの円形柱材を用いていたことがわかる。

遺物はやや多く、３点の土器を図示することができた。

SB16

SB15の西約１m、O２－37・38グリッド等に位置する。SI１、SB12・21、SD23と重複し、SB12より古

く、SI 1 、SB21より新しい。主軸方向はN－5°－W。桁行6.8m、梁行4mの3間×2間の建物である。柱間間隔は2m～2.4mとやや差がある。柱穴は円形ないし楕円形を呈し、径60cm～70cm、長軸1mの規模である。柱穴の深さは30cm～60cmとかなり差がある。柱痕跡は4穴で確認できた。柱には径20cmほどの円形柱材を用いていたことがわかる。

遺物は少なく、わずかに須恵器甕の破片が図示できたに過ぎない。

SB17

SB16の西約1m、O2－36・37グリッド等に位置する。SI 1 、SB21、SD23と重複し、SB21より新しい。主軸方向はN－85°－E。桁行5.14m、梁行4.2mの3間×2間の建物である。柱間間隔は桁行は1.8m、梁行は2mでほぼ等間隔である。柱穴は円形のものが主体を占め、径60cm～70cmである。柱穴の深さは35cm～60cmと差がある。柱痕跡は7穴で確認できた。柱には径20cmほどの円形柱材を用いていたことがわかる。

遺物は土器がわずかに出土しているのみで、図示できるものはない。

SB18A・B

SB17の南西約4m、O2－44・54グリッド等に位置する。SI 6 、SD26・29と重複し、SI 6 より新しいが、その他の遺構との新旧関係は不明である。ほぼ同位置に存在し、SB18BがAより新しい。

SB18A

主軸方向はN－9°－W。桁行5.16m、梁行4.08mの3間×2間の建物である。柱間間隔は桁行では1.6m～1.8m、梁行では1.8m～2.2mと一定しない。柱穴は円形ないし楕円形を呈し、径40cm、長軸60cmの規模である。柱穴の深さは40cm～60cmと差がある。柱痕跡は2穴で確認できた。柱には径20cmほどの円形柱材を用いていたことがわかる。

SB18B

主軸方向はN－9°－W。桁行5.04m、梁行4.08mの規模で、柱穴の遺存は悪いが、3間×2間の建物と考えられる。柱間間隔は1.6m～2mと一定しない。柱穴は円形ないし楕円形を呈し、径40cm、長軸60cm～80cmの規模である。柱穴の深さは80cmを測る。柱痕跡は1穴で確認できた。柱には径20cmほどの円形柱材を用いていたことがわかる。

遺物はSB18Bから土器がわずかに出土しているのみで、図示できるものはない。

SB19

SB12の南約2m、O2－59・69グリッド等に位置する。SB11と重複し、SB11より古い。主軸方向はN－3°－E。東西3.34m、南北4.6mの2間×2間の建物である。柱間間隔は南北では2m～2.4mと差があるが、東西では1.6mで一定している。柱穴はやや不整な円形のものが主体を占め、径40cm～70cmの規模である。柱穴の深さは35cm～60cmと差がある。柱痕跡は1穴で確認され、柱には径20cmほどの円形柱材を用いていたことがわかる。

遺物は少なく、わずかに土師器坏の小破片が図示できたに過ぎない。

SB20A・B

SB17の南約3m、O2－47・57グリッド等に位置する。SB21、SI 1 と重複し、SB21より新しい。ほぼ同位置に存在し、SB20BがAより新しい。

SB20A

主軸方向はN－7°－W。桁行5m、梁行3.6mの3間×2間の建物である。柱間間隔は1.4m～1.8mと一

定しない。柱穴は円形ないし楕円形を呈し、径（長軸）70～90cmの規模である。柱穴の深さは30cm～60cmと差がある。柱痕跡は５穴で確認できた。柱には径20cmほどの円形柱材を用いていたことがわかる。

SB20B

主軸方向はN－４°－W。東西3.36m、南北3.12mの２間×２間の建物である。柱間間隔は1.5m～２mと差がある。柱穴は不整な円形を呈し、径40cm～60cmの規模である。柱穴の深さは50cm～80cmと差がある。柱痕跡は４穴で確認され、柱には径15cm～20cmほどの円形柱材を用いていたことがわかる。

遺物は土器がわずかに出土しているのみで、図示できるものはない。

SB21

SB15の西約３m、O２－37・47グリッド等に位置する。SB16・17・20、SI１と重複し、SB16・17・20より古い。主軸方向はN－７°－E。桁行6.04m、梁行3.64mの３間×２間の建物である。柱間間隔は約２mでほぼ等間隔である。柱穴は円形ないし楕円形を呈し、径（長軸）60cm～90cmとかなり差がある。柱痕跡は明確には確認できなかった。

遺物は少なく、わずかに須恵器坏が図示できたに過ぎない。

SB22

SB11の南約１m、O２－69・79グリッド等に位置する。SB11と重複する。主軸方向はN－８°－E。東西３m、南北３mの２間×２間の建物である。柱間間隔は1.4m～1.7mと差がある。柱穴のうち隅穴は隅丸の方形を呈し、長軸80cm～１m、短軸70cm～80cmと大型である。深さは50cm～60cmを測る。側柱穴はやや不整な円形ないし楕円形を呈し、径（長軸）35cm～50cm、深さ20cm～40cmを測る。また、身舎中央部からも柱穴が１本検出された。形状・規模は側柱穴と差がないが、深さはやや深く約60cmを測る。柱痕跡は明確には確認できなかった。

遺物は土器がわずかに出土しているのみで、図示できるものはない。

SB23

SB16の東約１m、O２－39・49グリッド等に位置する。SB12・15と重複し、SB12より古く、SB15より新しい。主軸方向はN－５°－W。東西2.88m、南北3.3mの２間×２間の建物である。柱間間隔は1.3m～1.6mと差がある。柱穴は不整な楕円形を呈し、長軸１m～1.3mの規模である。柱穴の深さは60cm～80cmと差がある。柱痕跡は２穴で確認され、柱には径20cmほどの円形柱材を用いていたことがわかる。

遺物は比較的多く、２点の土器を図示することができた。

SB24

SB18A・Bの北約２m、O２－24・34グリッド等に位置する。SI６・SD26と重複し、SI６より新しいが、SD26との新旧関係は不明である。主軸方向はN－８°－W。検出された柱穴は12穴であるが、そのうち８穴が本建物に伴うものと考えられる。したがって桁行の西列と東列では柱筋が揃わないものの、東西3.84m、南北4.6mの３間×２間の建物と考えられる。柱間間隔は1.6m～２mとかなり差がある。柱穴はやや不整な円形を呈し、径40cm～70cm、深さ20cm～60cmを測る。柱痕跡は明確には確認できなかった。

遺物は土器がわずかに出土しているのみで、図示できるものはない。

SB25

SB24の東約２m、O２－25・35グリッド等に位置する。SB26・27、SD23と重複する。主軸方向はN－20°－W。東西2.4m、南北2.36mの１間×１間の建物である。柱穴は不整な楕円形を呈し、長軸75cm前後、柱穴

の深さも70cm～80cmでほぼ共通している。柱痕跡は明確には確認できなかった。

遺物は土器がわずかに出土しているのみで、図示できるものはない。

SB26

SB24の東約３m、O２－35･36グリッド等に位置する。SB25･27、SD23と重複する。主軸方向はN－９°－W。東西2.46m、南北2.7mの１間×１間の建物である。柱穴は不整な円形を呈し、径50cm～60cmを測る。柱穴の深さは50cm～70cmと差がある。柱痕跡は明確には確認できなかった。

遺物は土器がわずかに出土しているのみで、図示できるものはない。

SB27

SB17の西約１m、O２－34・35グリッド等に位置する。SB25・26と重複する。主軸方向はN－20°－W。東西2.56m、南北2.44mの１間×１間の建物である。柱穴は楕円形を呈し、長軸50cm～70cmを測る。柱穴の深さは50cmで共通している。柱痕跡は明確には確認できなかった。

遺物は土器がわずかに出土しているのみで、図示できるものはない。

SB28

SB14の南東約３m、O２－10、N２－19グリッドに位置する。桁行4.12m、梁行2.2mの２間×１間の建物と考えられる。桁行の北列の方向を主軸とすると主軸方向はN－85°－Eで、南列が内側に傾いている。柱間間隔は２m～2.4mと差がある。柱穴は不整な円形であるが、規模には差がある。径15cm～30cm、柱穴の深さは30cm～40cmを測る。柱痕跡は明確には確認できなかった。

遺物は出土していない。

SB29

SB15の北東約16m、P２－04･05グリッド等に位置する。SB62、SD36と重複する。主軸方向はN－２°－E。東西4.52m、南北4.64mの２間×２間の建物と考えられるが、東西方向の北列は側柱穴が２穴配置される。柱間間隔は2.2mでほぼ等間隔で、３間となる北列では1.2m～1.4mとなる。柱穴は隅丸の長方形を基本とする。大きさは長軸80cm前後を測る。柱穴の深さは50cm～60cmを測る。柱痕跡は４穴で確認され、柱材には径20cm～25cmの円形柱材を用いていたことがわかる。

遺物は土器がわずかに出土しているのみで、図示できるものはない。

SB30

SB18A・Bの南約７m、O２－74・84グリッドに位置する。SD26と重複する。主軸方向はN－16°－W。東西3.32m、南北4.08mの２間×２間の建物である。柱間間隔は東西は1.6m、南北は２mを基準としている。柱穴は円形ないし楕円形を呈し、径（長軸）30cm～50cmを測る。柱穴の深さは20cm～50cmと差がある。柱痕跡は明確には確認できなかった。

遺物は出土していない。

SB31

SB29の北約７m、P１－83･84グリッドに位置する。主軸方向はN－20°－W。東西1.94m、南北1.86mの１間×１間の建物である。柱穴は不整な円形を呈し、径30cm～35cm、深さ20cm～25cmを測る。また、身舎中央部からも柱穴が１本検出された。形状・規模とも側柱穴と差がない。柱痕跡は明確には確認できなかった。

遺物は出土していない。

SB32

SB15の北約２m、O２－18･19グリッド等に位置する。SB64･70、SD29と重複する。主軸方向はN－83°－E。東西4.88m、南北3.46mの２間×２間の建物である。柱間間隔は東西では2.4m、南北では1.8mを基準とする。柱穴はやや不整な円形を呈し、径50cm～80cmと差がある。柱穴の深さも40cm～60cmとやや差がある。柱痕跡は５穴で確認され、柱には径25cmほどの円形柱材を用いていたことがわかる。

遺物は土器がわずかに出土しているのみで、図示できるものはない。

SB33

SB32の西約1.5m、O２－27・28グリッド等に位置する。SB70、SD23・29と重複し、SD23より新しい。主軸方向はN－84°－E。検出された柱穴は５穴のみであるが、東西3.5m、南北2.94mの２間×２間の建物になると考えられる。柱間間隔は東西では1.8mを基準にするが、南北では不明である。柱穴はやや不整な円形を呈し、径40cm～50cm、深さ30cmとほぼ共通している。柱痕跡は明確には確認できなかった。

遺物は土器がわずかに出土しているのみで、図示できるものはない。

SB34

SB29の南約３m、P２－24･25グリッド等に位置する。SB61Aと重複する。主軸方向はN－２°－E。東西3.3m、南北3.26mの１間×１間の建物である。柱間間隔はほぼ等間隔である。柱穴は不整な円形を呈し、大きさは径80cm～１mの規模である。柱穴は深い部分の脇が一段浅く掘られているものが多く、柱の抜き取りも考えられる。柱穴の深さは60cm～80cmの深さを測る。柱痕跡は１穴で確認され、柱には径25cmほどの円形柱材を用いていたことがわかる。

遺物は土器がわずかに出土しているのみで、破片３点が図示できたに過ぎない。

SB50

道路部分とは別に追加調査となった部分の西端、P２－62・72グリッド等に位置する。主軸方向は不明。検出された柱穴は３穴のみで、さらに西側が調査区外に延びていると考えられるため、全体の規模を把握することはできなかった。柱穴は円形を呈し、径50cm～60cmほどの規模である。柱穴の深さは30cm～40cmと差がある。柱痕跡は明確には確認できなかった。

遺物は少なく、図示できるものはない。

SB51

追加調査区の東側、P２－74･84グリッド等に位置する。東側の一部が調査区外に延びているが、ほぼ全容を把握することができた。SB53・54・55・56・58と重複し、SB53より新しく、SB54より古い。主軸方向はN－89°－W。桁行5.8m、梁行3.94mの３間×２間で、南側に１間×３間の庇を有する建物である。柱間間隔は1.6m～２mと一定しない。柱穴は隅丸方形を呈し、長軸65cm～90cmを測る。柱穴の深さは40cm～50cmを測る。柱痕跡は明確には確認できなかった。

遺物は比較的多いが、破片３点が図示できたに過ぎない。

SB52

SB51の西約1.8m、P２－63･73グリッドに位置する。主軸方向は不明。検出された柱穴は３穴のみであり、建物全体の規模は一切不明である。柵列の可能性も考えられる。柱間間隔は1.4m～1.8mと一定しない。柱穴は不整な円形ないし楕円形を呈し、径（長軸）30cm～40cmを測る。柱穴の深さは20cm～40cmと差がある。柱痕跡は明確には確認できなかった。

遺物は土器がわずかに出土しているのみで、図示できるものはない。

SB53

SB51の南端で重複し、SB51より古い。主軸方向は不明。検出された柱穴は4穴のみで、さらに南側が調査区外に延びていると考えられるため、全体の規模を把握することはできなかった。柱穴は隅丸長方形を呈し、長軸60cm～80cm、短軸40cm～50cmを測る。柱穴の深さは60cm前後とほぼ共通している。柱痕跡は明確には確認できなかった。

遺物は少ないが、土師器坏1点を図示することができた。

SB54

SB51の北側で重複する。SB51より新しく、南側で重複するSB55より新しいが、SB58との新旧関係は不明である。主軸方向は不明。検出された柱穴は3穴のみで、さらに北側及び東側が調査区外に延びていると考えられるため、全体の規模を把握することはできなかった。柱穴は円形ないし隅丸方形を呈し、径(長軸) 40cmを測る。柱穴の深さは30cm～40cmを測る。柱痕跡は2穴で確認され、柱には径20cmほどの円形柱材を用いていたことがわかる。

遺物は少ないが、土師器坏と須恵器坏各1点を図示することができた。

SB55

SB51の中央部で重複する。SB51より新しい。さらに北側で重複するSB54より古く、SB56より新しい。主軸方向はほぼ東西。東側がさらに調査区外に延びている可能性も考えられるが、桁行5.52m、梁行3.26mの3間×2間の建物としておく。柱間間隔は1.6m～2.2mと一定しない。柱穴は円形ないし楕円形を呈し、径40cm、長軸60cmの規模である。柱穴の深さは30cm～40cmを測る。柱痕跡は2穴で確認され、柱には径20cmほどの円形柱材を用いていたことがわかる。

遺物は少ないが、須恵器坏3点を図示することができた。

SB56

SB54の南側で重複する。東側が調査区外に延びており、北側が一部削平を受けているため全体の規模を把握することはできなかった。SB54との新旧関係は不明であるが、SB58より古い。主軸方向は不明。検出された柱穴は4穴のみであり、建物全体の規模は一切不明である。柱間間隔は1.6m～1.8mとほぼ等間隔である。柱穴は円形ないし楕円形で、径35cm～40cm、長軸60cm～75cmの規模である。柱穴の深さは30cm～50cmとやや差がある。柱痕跡は1穴でのみ確認され、柱には径15cmほどの円形柱材を用いていたことがわかる。

遺物は少ないが、須恵器坏1点を図示することができた。

SB57

SB54の中央部で重複する。大半が調査区外に延びていると考えられる。SB54との新旧関係は不明である。主軸方向は不明。検出された柱穴は3穴のみであり、建物全体の規模は一切不明である。また全体にわたって大きく削平を受けている。柱間間隔は1.6m～1.8mとほぼ等間隔である。柱穴は円形を呈するが、規模は径40cm～80cmとかなり差がある。柱穴の深さは、削平を受けているが40cm前後と考えられる。柱痕跡は明確には確認できなかった。

遺物は少なく、破片1点が図示できたに過ぎない。

SB58

SB51の北西部で重複する。SB51との新旧関係は不明であるが、東側で重複するSB56より新しい。主軸方向は不明。検出された柱穴は5穴のみであり、削平を受けている部分が多いため、建物全体の規模は一切不明である。柱間間隔は1.5m～2.2mと一定しない。柱穴は円形を呈するが、規模は35cm～60cmと差がある。柱穴の深さは40cm前後である。柱痕跡は明確には確認できなかった。

遺物は少なく、図示できるものはない。

SB59

SB32の東約1m、P2－20・21グリッド等に位置する。南側でSD29と重複し、SD29より古い。主軸方向はN－82°－E。桁行8.08m、梁行4.68mの4間×3間の総柱建物である。柱間間隔は、桁行では2m～2.2m、梁行では1.6m～2mと差がある。柱穴は不整な円形を呈し、1m～1.4mを測る。柱穴の深さは60cm～70cmを測る。大半の柱穴で掘直しが確認でき、同一場所における建て替えが考えられる。束柱は7穴が確認できた。東西方向では柱筋が揃うが、南北方向では不規則である。円形を呈し、径40cm～70cm、深さ20cm～25cmを測る。柱痕跡は5穴で確認され、柱には径20cmほどの円形柱材を用いていたことがわかる。

遺物は多く、破片も含めて14点の土器を図示することができた。

SB60A

SB59の東約1m、P2－23・24グリッド等に位置する。SB60B、SA2と重複する。主軸方向はN－88°－E。桁行4.8m、梁行3.54mの3間×2間で、東側に1間×2間の庇を有する建物である。柱間間隔は桁行では1.4m～1.8mと差があるが、梁行では1.8mで、ほぼ等間隔である。柱穴は不整な円形ないし楕円形を呈し、径(長軸)60cm～1mと差がある。柱穴の深さは、身舎部分は60cm前後だが、庇部分はやや浅く40cm前後である。柱痕跡は3穴で確認され、柱には径20cmほどの円形柱材を用いていたことがわかる。

遺物は比較的多く、6点の土器を図示することができた。

SB60B

SB60Aとほぼ同位置で重複するが新旧関係は不明である。また、SB63、SA2とも重複する。主軸方向はN－89°－E。重複により遺存状態が悪いが、桁行4.7m、梁行4.16mで3間×2間の建物と考えられる。柱間間隔は桁行では1.5m～1.7mを測るが、梁行では一切不明である。柱穴は不整な円形ないし楕円形を呈し、径（長軸）0.5m～0.7mとやや差がある。柱穴の深さは30cm～65cmと差がある。柱痕跡は2穴で確認され、柱には径15cm～20cmほどの円形柱材を用いていたことがわかる。

遺物は少なく、破片1点が図示できたに過ぎない。その他実測不可能な細片であるが、緑釉陶器の破片が1点出土している。

SB61A

SB60Aの東約3.5m、P2－25・26グリッド等に位置する。SB61B及びSB34と重複する。主軸方向はN－4°－E。桁行6.52m、梁行3.36mの3間×2間の建物である。柱間間隔は桁行では2m～2.3m、梁行では1.6m～1.8mとやや差がある。柱穴はやや不整な円形を呈し、大きさは径50cm～80cmと差がある。柱穴の深さも20cm～40cmと差がある。柱痕跡は4穴で確認され、柱には径20cmほどの円形柱材を用いていたことがわかる。

遺物は少なく、2点の土器が図示できたに過ぎない。

SB61B

SB61Aとほぼ同位置で重複するが新旧関係は不明である。主軸方向はN－3°－W。桁行6.52m、梁行3.4mの3間×2間の建物である。柱間間隔は桁行では2m～2.3m、梁行では1.6m～1.8mとやや差がある。柱穴は不整な円形を呈し、大きさは径60cm～80cmと差がある。柱穴の深さも30cm～50cmと差がある。柱痕跡は1穴でのみ確認され、柱には径20cmほどの円形柱材を用いていたことがわかる。

遺物は少なく、2点の土器が図示できたに過ぎない。

SB62

SB34の北約2m、P2－04・14グリッド等に位置する。SB29と重複する。主軸方向はN－83°－W。検出された柱穴は規則性に欠けるが、桁行3.9m、梁行2.64mの3間×2間の建物と考えられる。柱間間隔は桁行では1.2m～1.4mを測るが、梁行は不明である。柱穴は不整な円形のものが主体を占め、大きさは径30cm～60cmと差がある。柱穴の深さも20cm～40cmと差がある。柱痕跡は明確には確認できなかった。

遺物は少なく、破片1点が図示できたに過ぎない。

SB63

SB62の西約1m、P2－12・13グリッド等に位置する。SK63Aと重複し、SK63Aより古い。主軸方向はほぼ東西。桁行5m、梁行3.36mの3間×2間の建物である。柱間間隔は1.5m～1.8mを測り、やや差がある。柱穴は円形ないし楕円形で、径（長軸）50cm～70cmを測る。柱穴の深さは40～50cmを測る。柱痕跡は6穴で確認され、柱には径20cm～25cmほどの円形柱材を用いていたことがわかる。

遺物は少なく、破片2点が図示できたに過ぎない。

SB64

SB59の西約1.5m、O2－28・29グリッド等に位置する。SB32及びSD29と重複し、SD29より古いが、SB32との新旧関係は不明である。主軸方向はほぼ南北。東西3.8m、南北3.8mの2間×2間の建物である。柱間間隔は1.8m～2mで、ほぼ等間隔である。柱穴は円形ないし楕円形で、径（長軸）60cm～90cmと差がある。柱穴の深さは30cm～40cmで浅い。柱痕跡は3穴で確認され、柱には径20cm～25cmほどの円形柱材を用いていたことがわかる。

遺物は少なく、破片1点が図示できたに過ぎない。

SB65

SB59の南約4m、P2－41・42グリッド等に位置する。南東側は調査区外に延びているが、ほぼ全体の規模をとらえることができる。SK21と重複する。主軸方向はほぼ南北。桁行4.6m、梁行3.2mの3間×2間の建物である。柱間間隔は1.4m～1.6mで、やや差がある。柱穴は不整な円形のものが主体を占め、大きさは径40cm～70cmと差がある。柱穴の深さは40cm前後を測る。柱痕跡は4穴で確認され、柱には径20cm～25cmほどの円形柱材を用いていたことがわかる。

遺物は少なく、破片1点が図示できたに過ぎない。

SB66

SB14の北約6.5m、O1－61・71グリッド等に位置する。SD77と重複する。主軸方向はN－80°－E。桁行5.28m、梁行3.7mの3間×2間の建物である。柱間間隔は1.5m～2mと一定しない。柱穴は不整な円形のものが主体を占めるが、径は40cm～60cmと差がある。柱穴の深さは35cm～40cmを測る。柱痕跡は5穴で

確認され、柱には径20cmほどの円形柱材を用いていたことがわかる。

遺物は少なく、図示できるものはない。

SB67

他の掘立柱建物跡と離れて、村上地区の中央やや西側、L３－91•92グリッド等に位置する。西側はさらに調査区外に延びていると考えられる。主軸方向は不明。検出された柱穴は６穴のみであり、全体の規模、そして建物かどうかも一切不明である。柱穴はやや不整な円形を呈し、径20cm～30cmと小さく、深さも10cm～20cmと浅い。柱痕跡は明確には確認できなかった。

遺物は極めて少なく、図示できるものもない。

SB68

SB13の南東約４m、O２－14•15グリッド等に位置する。SD29と重複する。主軸方向はN－16°－W。東西3.9m、南北4.06mの２間×２間の建物である。柱間間隔は1.6m～2.2mと一定しない。柱穴は円形を呈し、径40cm～50cmを測る。柱穴の深さは25cm～40cmとやや差がある。柱痕跡は明確には確認できなかった。

遺物は少なく、図示できるものもない。

SB69

SB13とSB68の間、O２－04グリッドに位置する。主軸方向は不明。検出された柱穴は３穴のみであり、建物全体の規模は一切不明である。柵列の可能性も考えられる。柱間間隔は1.6mで等間隔である。柱穴はやや不整な円形で、径40cm、深さ20cmを測る。柱痕跡は明確には確認できなかった。

遺物は出土していない。

SB70

SB68の東約７m、O２－17・18グリッドに位置する。SB32・33と重複する。主軸方向はほぼ東西。東西2.88m、南北2.34mの１間×１間の建物である。柱穴は円形を呈し、径60cm～80cmを測る。柱穴の深さは40cm～50cmを測る。柱痕跡はすべての柱穴で確認でき、柱には25cmほどの円形柱材を用いていたことがわかる。

遺物は少なく、図示できるものもない。

SB71

SB67の東約22m、L４－17•18グリッド等に位置する。SD96と重複する。主軸方向はN－11°－W。重複及び攪乱のため遺存状態が悪いが、桁行4.48m、梁行3.2mの３間×２間の建物と考えられる。柱間間隔は1.4m～1.8mと一定しない。柱穴は不整な円形を呈するが、大きさは径40cm～80cmと差がある。柱穴は全体に浅く、20cm～25cmを測る。柱痕跡は２穴で確認され、柱には径20cmほどの円形柱材を用いていたことがわかる。

遺物は少なく、図示できるものもない。

SB72

SB71の東約24m、M４－35•36グリッド等に位置する。SD97と重複する。主軸方向はN－74°－W。桁行7.5m、梁行3.86mの４間×２間の建物である。柱間間隔は1.8mでほぼ等間隔である。柱穴は楕円形を呈し、長軸40cm～70cmを測り、差がある。柱穴の深さは20cm～25cmでほぼ共通している。柱痕跡は明確には確認できなかった。

遺物は少なく、図示できるものもない。

SB73

SB72の東約30m、N４－24・34グリッド等に位置する。東側は調査区外に延びているが、ほぼ全体の規模をとらえることができる。主軸方向はN－55°－E。東西3.72m、南北3.52mの２間×２間の建物である。柱間間隔は1.8mを基準としているようである。柱穴は円形ないし楕円形で、径（長軸）30cm～60cmを測る。柱穴の深さは15cm～40cmと差がある。柱痕跡は明確に確認できなかった。

遺物は出土していない。

SB74

SB73の西側、N４－23・24グリッド等に位置する。他の遺構とは重複しないが、攪乱により南側の隅穴は検出されなかった。主軸方向はN－51°－E。東西2.6m、南北2.28mの１間×１間の建物である。柱穴は円形を呈し、径30cm～40cm、深さ30cm～40cmを測る。柱痕跡は明確には確認できなかった。

遺物は出土していない。

SB75

SB73の北東約32m、O３－40・50グリッド等に位置する。主軸方向はN－16°－W。他の遺構との重複はないが、東側の側柱３穴は検出されなかった。桁行5.2m、梁行3.92mの３間×２間の建物である。柱間間隔は1.6m～２mと差がある。柱穴は円形のものが主体を占め、大きさは径40cm～90cmと差があり、隅穴がやや大きくなる。柱穴の深さは40cm～50cmを測る。北側の側柱は柱穴として疑問が残るものである。柱痕跡は６穴で確認され、柱には径20cm～25cmほどの円形柱材を用いていたことがわかる。

遺物は出土していない。

SB76

SB10の東約５m、L６－22・23グリッド等に位置する。SD10・132と重複しており、SD10よりは古いが、SD132との新旧関係は不明である。主軸方向は不明。検出されたのは規模の大きな柱穴５穴のみで、周辺に攪乱も多いため、建物全体の規模も不明である。柱間間隔は1.5m～２mとかなり差がある。柱穴は不整な円形を呈し、径１m前後と規模は大きいが、深さは南側の１穴のみが30cmを測るのみで、そのほかは10cm前後で極めて浅い。柱痕跡は確認されなかったが、柱穴底面に小ピットが検出されており、建替えの可能性も考えられる。

遺物は出土していない。

SA１

SB63の北約１m、P２－02・03グリッド等に位置する。SK63Aと重複する。長軸方向はN－89°－W。西から東へ６穴の柱穴が並ぶ。西端の柱穴は布掘状を呈し、極めて浅い。長さは両端の柱穴の中央間で７mを測る。柱間間隔はSK63Aと重複する柱穴２穴を除けば約2.4mで一定している。柱穴は西端のものを除いて円形を呈し、径30cm～50cm、深さ15cm～40cmを測る。

遺物は極めて少なく、図示できるものもない。

SA２

SA１の南約1.5m、P２－12・22グリッドに位置する。SB60と重複する。長軸方向はN－６°－W。北から南へ５穴の柱穴が並ぶ。長さは両端の柱穴の中央間で、6.8mを測る。柱間間隔は1.5m～２mと差がある。柱穴は円形ないし楕円形を呈し、径（長軸）30cm～50cm、深さ20cm～40cmを測る。

遺物は極めて少なく、図示できるものもない。

SA 3

SA 2の西約1.5m、P 2 －10•11グリッド等に位置する。長軸方向はN－89°－E。西から東へ6穴の柱穴が並ぶ。長さは両端の柱穴の中央間で6mを測る。柱間間隔は一定せず、1m～1.8mと差がある。柱穴は円形を呈し、径40cm前後、深さ10cm～40cmを測る。

遺物は出土していない。

SA 4

SA 2の西約1.5m、P 2 －02•12グリッドに位置する。長軸方向はN－5°－W。北から南へ4穴の柱穴が並ぶが、南から2番目の柱穴は規模が他の柱穴と異なり、本跡に伴うものか疑問である。長さは両端の柱穴の中央間で2.2mを測る。柱間間隔は一定せず、1.4m～2mを測る。柱穴は楕円形を呈し、長軸40cm～70cm、深さ10cm～50cmを測る。

遺物は出土していない。

SA 5

SB14の北約1m、N 1 －89・O 1 －80グリッド等に位置する。長軸方向はN－85°－W。西から東へ4穴の柱穴が並ぶ。長さは両端の柱穴の中央間で5.4mを測る。柱間間隔は約1.8mで一定している。柱穴は円形ないし不整な楕円形を呈し、径（長軸）40cm～60cm、深さ10cm～30cmを測る。

遺物は出土していない。

3　土坑（第64～68図、図版15）

土坑は遺構番号を与えたものだけでも140基を数え、そのほか溝や掘立柱建物跡等と激しく重複する中で、個別に遺構番号を与えることができなかったものを加えると、その数200基近くになるものと思われる。ここではこれらの土坑のうち共伴する遺物が出土したもの等、時期がある程度推定できるもののみを個別に図示することにし、それ以外は遺構全体図での掲載にとどめた。

SK 3

村上地区本調査区の南側、K 5 －64グリッドに位置する。方形周溝遺構SX 1の北東8mに位置する。平面形は不整な長楕円形を呈する。規模は長軸1.9m、短軸0.55m、深さ12cmを測る。底面はほぼ平坦であるが、南端部分では一段浅くなる。覆土は黒褐色土を主体とし、わずかに粘土の粒子を含むものである。

遺物は土坑中央部で底面から約4cmほど浮いて甕1個体分がややまとまって出土している。

SK 5

SK 3の南約15m、K 6 －05グリッドに位置する。平面形は不整な円形を呈する。規模は径0.94m、深さ0.8mを測る。底面はやや高低差がある。覆土は4層に分けられる。上部から中位は黒褐色土を主体とし、下位は暗黄褐色と黒褐色の砂質土となる。

遺物は土坑中央部で、この砂質土の上面から（底面から約12cmほど浮いて）甕1個体が置かれたような状況で出土している。

SK23

村上地区本調査区の北側、O 2 －49•P 2 －40グリッド等に位置する。平面形は不整な楕円形が2基連結した形態を呈する。規模は北側のものが長軸3.2m、短軸2.5m、深さ40cm、南側のものが長軸2m、短軸1.4m、深さ0.8mを測る。底面はやや高低差がある。覆土は3層に分けられる。暗褐色土を主体とするもので、

上部には焼土ブロック・炭化粒を多く含む。

遺物は覆土上層から中位にかけてで極めて多く出土している。土師器・須恵器合わせて19点を図示することができた。そのほか管状土錘と平瓦が出土している。

SK24

SK23の北側で重複する。平面形は不整な楕円形で、規模は長軸6.2m、短軸4.6m、深さ30cmを測る。底面はほぼ平坦である。覆土は4層に分けられる。上層は暗褐色土、下層は黒褐色土を主体とし、SK23と同様に上部には焼土ブロック・炭化粒を多く含む。

遺物は覆土中位から多く出土している。土師器・須恵器合わせて8点を図示することができた。

SK31

SK23の南西約37m、O3－24•34グリッドで検出された。SK32と重複する。東側が調査区域外に延びているため完掘できなかったが、平面形は不整な楕円形で、規模は長軸3m、短軸1.3mを測るものと思われる。深さは20cmを測る。底面はほぼ平坦である。覆土は3層に分けられる。上層は黒褐色土で、下層は黄褐色粘土ブロックを含む黒色土となる。

遺物は最上層から多く出土しており、6点の土器を図示することができた。そのほか管状土錘が1点出土している。

SK32

SK31の北西で重複し、東側でさらにSK33と重複する。SK33より古い。土坑及びピット等との重複が激しいが、平面形は不整な楕円形で、規模は長軸4m、短軸1.5mを測るものと思われる。深さは30cmを測る。底面はほぼ平坦である。覆土は5層に分けられ、黒褐色土を主体とするものである。

遺物は最上層から多く出土しており、土師器・須恵器合わせて15点を図示することができた。

SK33

SK32の北西で重複する。SK32より新しい。SK32と同様に土坑及びピットとの重複が激しいが、平面形は不整な楕円形で、規模は長軸3.85m、短軸3mを測るものと思われる。深さは35cmを測る。底面はほぼ平坦である。覆土は4層に分けられる。上層は焼土粒•炭化物粒を含む暗褐色土で、下層は黄褐色土となる。

遺物は最上層から多く出土しており、6点の土器を図示することができた。

SK36

SK23の南西約11m、O2－77グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。規模は径1.1m、深さ1.4mを測る。底面はほぼ平坦である。覆土は7層に分けられる。上部は黒褐色土、中部から下位は黒褐色土と暗黄褐色土が互層を成す。

遺物は覆土中位（底面から約65cm）の暗黄褐色土層から壺・甕が、覆土上部（底面から約95cm）の黒褐色土から高坏がまとまった状態で出土している。

SK59

SK36の北東25m、SD29の底面で検出された。SD29より古い。平面形は不整な長方形を呈する。規模は長軸0.7m、短軸0.58m、深さ0.9mを測る。底面はほぼ平坦である。覆土は4層に分けられ、黒色土を主体とするものである。

遺物の量は少ないが、墨書を有する坏等が出土している。

SK62 A～E

SK24の北約7m、O2－09・P2－00グリッド等に位置する。北側でSD95、南側でSB32・59・64と重複し、SD95より新しく、SB32・59・64より古い。不整な平面形の土坑及びピットが重複する遺構で、調査段階ではA～Eの5基の土坑としてとらえ調査を行った。5基の土坑は重複関係にあり、土層断面の観察からB・D構築後Eが、さらにその後Aが構築されている。また、B構築後Cも構築されている。全体として、南側から北側へ短期間のうちに連続して構築されたものと思われる。土坑群全体では長軸8m、短軸4mほどの規模になるものと思われる。深さはBが20cm前後、C～Eは40cm前後を測る。Aは10cm～40cmとかなり差があり、北側が深くなる。底面はAは凹凸に富むが、B～Eはほぼ平坦である。Aの覆土は6層に分けられる。黒褐色土と暗黄褐色土が互層を成すもので、最上層には焼土ブロックが多く含まれる。Bの覆土は4層に分けられる。暗褐色土を主体とするものである。Cの覆土は4層に分けられる。黒色土を主体とするものである。Dの覆土は3層に分けられ、黒色土を主体とするもので、最上層には焼土粒・炭化粒が含まれる。Eの覆土はDとほぼ共通する。

遺物の量は極めて多く、特にAからは多量の土器が出土している。その大半は焼土ブロックが多く含まれた最上層から出土したものである。A～E合わせて32点の土器を図示できたが、SK62としたものの大半は、A出土のものである。その他鉄斧が1点出土している。

SK63 A

SK62の東約11m、P2－03・13グリッドに位置する。SA1・SB63と重複する。SA1との新旧関係は不明であるが、SB63より新しい。平面形は不整な楕円形を呈する。規模は長軸2.85m、短軸2.15mを測る。深さは30cmほどで、底面はほぼ平坦であるが、北側がやや深くなる。覆土は4層に分けられる。上部は黒褐色土を主体とし、焼土ブロック・炭化粒を含むもので、下部は暗灰褐色土を主体とする。

遺物は覆土中位から下層にかけてで比較的多く出土している。7点の土器を図示することができた。その他実測不可能な細片であるが、緑釉陶器の破片が3点出土している。

SK63 B

SK63Aの南約3m、P2－23グリッドに位置する。SB60A・Bと重複する。平面形は不整な楕円形を呈する。規模は長軸2m、短軸1.5mを測る。底面はほぼ平坦で、深さ20cmを測るが、北側が一段深くなり、35cmを測る。覆土は4層に分けられる。上部は黒褐色土で焼土ブロック・炭化粒を多く含む。下部は黄褐色の粘土ブロックを主体とする。

遺物は土師器の破片がわずかに出土しているのみで、図示できるものはない。

SK65

SK62の西約14m、O1－95グリッドに位置する。平面形は不整な楕円形を呈する。規模は長軸1.3m、短軸0.96m、深さ0.38mを測る。底面はほぼ平坦であるが、中央が深くなる。覆土は2層に分けられる。上層は炭化物・焼土をわずかに含む黒褐色土で、下層は暗黄褐色土となる。

遺物は土坑東側の床面直上から坏2個体が出土している。

SK69

SK65の北約6m、O1－75・85グリッドに位置する。平面形は不整な円形を呈する。規模は径1.15m、深さ0.93mを測る。底面はほぼ平坦である。覆土は5層に分けられる。黒褐色土を主体とするものであるが、中位に暗黄褐色土の堆積がみられる。また上部には粘土ブロックを多く含む。

遺物は少ないが、覆土上層から出土した須恵器坏１点を図示することができた。

SK70

SK３の北東約41m、Ｌ５－02グリッドに位置する。平面形は不整な円形を呈する。規模は径1.2m、深さ1.27mを測る。断面形は、中位から下部は「Ｖ」字形に近いが、上部はほぼ垂直に立ち上がる形態となる。底面はほぼ平坦である。覆土は７層に分けられる。黒褐色土と暗黄褐色土が互層を成す。

遺物は土坑中央部の覆土下層から壺と甕が、覆土中位から鉢がややまとまった状態で出土している。

SK74

SK70の北北東約33m、Ｌ４－15・25グリッドに位置する。平面形は不整な楕円形を呈する。規模は長軸1.16m、短軸0.9m、深さ0.6mを測る。底面はほぼ平坦であるが、南側がやや深くなる。覆土は３層に分けられる。上部は暗黄褐色土、中位は黒色土で、下部は黒色土と黄褐色土が互層を成す。

遺物は土坑中央部のほぼ底面直上から壺２個体が出土している。

SK100

村上地区本調査区のほぼ中央西側、Ｍ３－60・70グリッド等に位置する。平面形は不整な円形を呈する。規模は、径３m、深さ1.3mを測る。底面はほぼ平坦である。覆土は５層に分けられる。上部は黒褐色土を主体とし、中位には灰層が認められ、下部は黒褐色土と黄褐色～灰褐色の粘土ブロック層が互層を成す。

遺物は少ないが、甕・坩各１点を図示することができた。

SK113

SK100の南約18m、Ｍ４－21グリッドに位置する。平面形は不整な隅丸方形を呈する。規模は長軸1.18m、短軸1.15m、深さ0.66mを測る。底面はほぼ平坦であるが、２ヵ所ピット状にわずかに窪む。覆土は７層に分けられる。上部は暗茶褐色土、中位は暗黄褐色土、下部は黒色土が主体となる。

遺物は中位から下部にかけて壺、甕２個体、小型甕、高坏、器台２個体、坩がまとまった状態で出土している。

SK126

村上地区本調査区のほぼ中央東側、Ｎ４－13・23グリッド等に位置する。SK100の東約48mに位置する。SD101・102と重複する。平面形は不整な楕円形を呈する。規模は長軸3.6m、短軸3.3m、深さ1.4mを測り、中央部がピット状にさらに30cmほど深くなる。覆土は５層に分けられる。上部は黒色土を主体とするが、下部は茶褐色土となり、最下層は黄褐色土となる。最上層以外は粘土ブロックを多く含む。

遺物は中位から壺の胴部が出土したほか、多くの土器が出土し、21点の土器を図示することができた。

SK127

SK126の南側に近接して、Ｎ４－12・13グリッドに位置する。SD101と重複する。平面形は不整な円形を呈する。規模は径2.1m、深さ90cmを測り、SK126と同様に中央部がピット状に深くなる。覆土は６層に分けられる。上部から中位は黒色土、下部は茶褐色土が主体となり、最下層は黄褐色の粘土層となる。

遺物は覆土上部の黒色土を中心にして多量の土器が出土している。また、覆土中位からは口縁部を欠いた壺が出土している。

SK129

SK62の西約50m、Ｎ２－04・05グリッド等に位置する。平面形は不整な長方形を呈し、土坑というより竪穴状遺構という形態である。規模は長軸７m～９m、短軸6.6m～7.6mを測り、深さは20cmと浅い。底面

はほぼ平坦である。覆土は2層に分けられ、いずれも黒色土を主体としたものである。

遺物は土坑の東半部分から多く出土し、特にSK132の北側部分からは集中的に出土している。いずれも底面より10cm前後浮いて出土したものが大半である。土師器・須恵器合わせて11点を図示することができた。そのほか平瓦・丸瓦あわせて6点図示することができた。

SK131

SK65の西約40m、SK129の中央東側の底面で検出された。SK129より古い。平面形は不整な楕円形を呈する。規模は長軸0.9m、短軸0.85m、深さ36cmを測る。底面はほぼ平坦である。覆土は4層に分けられる。黒色土を主体とするものである。

遺物は極めて少なく、須恵器甕の破片が図示できたのみである。

SK132

SK65の西約40m、SK129の底面で検出された。SK129より古い。平面形は不整な楕円形を呈する。規模は長軸1.45m、短軸1.27m、深さ0.8mを測る。底面はやや凹凸に富み、中央部が深くなる。西側の壁面はオーバーハング状を成す。覆土は7層に分けられる。上部は黒色土、中位から下部は暗褐色土が主体となる。

遺物は最下層からほぼ完形の小型壺が出土している。

SX18

SK24の東約6m、P2－41・42グリッドで、SB65内に位置する。平面形は不整な楕円形で、規模は長軸50cm、短軸43cm、深さ17cmを測る。底面はほぼ平坦である。覆土は粘土ブロックを多く含む暗黄褐色土の単一層である。

遺物は坏2点が置かれたような状態で出土している。覆土の状況と合わせると、土坑を掘った後、直ちに埋め戻して坏2点を置き、さらに埋め戻した状況が復元できる。

SX19

SX18の北西約60cmと近接して位置する。平面形は円形を呈し、規模は径33cm、深さ10cmを測る。底面はほぼ平坦である。覆土は粘土粒を多く含む暗褐色土の単一層である。

遺物は径3cmほどの小礫が30個ほど出土しているのみである。

SX20

SX18の北東約2m、P2－32グリッドに位置する。SK64と重複し、SK64より古い。平面形及び規模は遺存している部分からして、長軸80cm、短軸45cmほどの長楕円形を呈するものと思われる。深さは10cmほどである。底面はほぼ平坦である。覆土は2層に分けられる。粘土粒を多く含む黒褐色土を主体とするものである。

遺物は径3～6cmほどの小礫が40個と土器片が若干出土しているのみである。

4　溝　(第69・70図、図版16～21)

溝も土坑と同様に遺構番号を与えたものだけでも150条を数えるが、溝と溝、あるいはほかの遺構との重複が激しいため、どこまでが1条の溝であるかを把握することが極めて難しく、溝の数を確定することはできない。また、確実に共伴する遺物もほとんどなく、時期の特定も困難である。したがって、ここではある程度まとまった遺物が出土した溝及びある程度の方向性・規模を有する溝のみを取り上げて説明を加

えることにし、それ以外は遺構全体図での掲載にとどめた。

SD 1

村上地区の南半で検出された。SD 2・3など多くの溝と重複する。SD 3より古いが、その他の溝との新旧関係は不明である。北東から南西に方向をとる溝である。浅い溝状の掘込みの中に、やや深い数条の溝が掘り込まれているものである。南端はSD10と重複し、北端は調査区外へ延びている。遺存する長さは約66m。溝全体の上幅は15m～18mを測る。やや深い溝の掘込みは上幅50cm～2m、深さは遺存の良い部分で20cmを測る。浅い溝状の部分は皿状、やや深い溝の部分は箱形の断面を呈する。覆土は7層に分けられる。上部は暗灰褐色土、中位～下部は黒褐色土となる。覆土の観察から、大きく分けて東から西へ3回の掘直しが認められる。

遺物は非常に多く出土しているが、実測できたものは少ない。弥生時代後期、古墳時代前期、奈良・平安時代、中・近世の各期にわたった遺物が出土している。

SD 2

村上地区の南半で検出された。SX 1、SD 3・10・76と重複する。SX 1より新しく、SD 3・76より古いが、SD10との新旧関係は不明である。やや蛇行しながら南東から北西に方向をとる溝で、南端は他の溝との重複で不明で、北端は調査区外へ延びている。遺存する長さは約62m。上幅は0.9m～1.9m、底面幅は35cm～50cm、深さは遺存の良い部分で60cmを測る。皿状の断面を呈する。覆土は5層に分けられる。上部は黒褐色土、中位以下は粘土ブロックを多く含む暗黄褐色土となる。

遺物は比較的多い。古墳時代前期のものが主体である。

SD 3

村上地区の南半で検出された。SD 1・2・4・20などと重複し、これらの溝より新しい。ほぼ直線的に南西から北東に方向をとる溝で、西端は調査区外へ延び、東端はSD20と重複している。遺存する長さは約102m。上幅は1m～1.2m、底面幅は40cm～60cm、深さは遺存の良い部分で約50cmを測る。皿状の断面を呈する。覆土は7層に分けられる。上部から中位は黒褐色土、下部は黄褐色の砂質土となる。

遺物は少ない。中・近世のものが主体である。

SD 4

村上地区の南半で検出された。SB 1・8・9、SD 3・5・6・7・8・16などと重複する。SD 3・5・16より古い。また、SD 6・7と覆土の状況が似ており、同時期の可能性がある。その他の遺構との新旧関係は不明である。SD 2にほぼ平行し、直線的に南東から北西に方向をとる溝で、北端は調査区外へ延びている。遺存する長さは約80m。上幅は50cm～90cm、底面幅は40cm～50cm、深さは遺存の良い部分で約45cmを測る。箱形の断面を呈する。覆土は3層に分けられる。上部から中位は黒褐色土で下部は暗黄褐色土となる。

遺物は極めて少なく、図示できるものはない。

SD10

村上地区の南端で検出された。SD 1をはじめ多くの溝と重複するが、新旧関係は不明である。溝の南側は北へ直線的に伸びるが、途中から東へ「鉤の手」状に屈曲する。SD125と同じような方向をとる。両端部とも調査区外へ延びている。溝の中央部が大きく攪乱されているため、遺存状態は悪い。遺存する長さは約67m。上幅は4.5m～6m、底面幅は攪乱が多くて不明であるが、4m前後と考えられる。深さは遺存の

良い部分で約1.5mを測る。有段の箱形の断面を呈する。覆土は15層に分けられる。全体的に硬くしまった層である。上部は暗灰褐色土を主体とし、中位から下部は暗灰色の粘土層になる。最上層には硬化面が認められ、道として使われていたものと考えられる。また、中位には宝永のテフラの堆積が認められる。

遺物は比較的多い。奈良・平安時代と中・近世のものがあるが、中・近世のものが主体である。

SD20

村上地区の南半で検出された。SD３と重複し、SD３より古い。西側1/4は東西に方向をとるが、残り3/4は北西から南東に方向をとる溝で、西側は調査区外へ延びており、東側は攪乱により不明である。遺存する長さは約47m。上幅は2.2m～3.5m、底面幅は0.5m～1.2m、深さは遺存の良い部分で約60cmを測る。箱形の断面を呈する。覆土は６層に分けられる。上部は黒色土で、中位から下部は暗茶褐色土が主体となる。

遺物は比較的多く、まとまった出土状況を示す。古墳時代前期と奈良・平安時代のものがあるが、奈良・平安時代のものが主体である。

SD23

村上地区の北半で検出された。多くの掘立柱建物跡や土坑と重複し、これらの遺構より古い。SI１を取り囲むように位置し、南側が開口する馬蹄形を呈する溝である。周溝全体の規模は長軸で約12mを測る。上幅は50cm～80cm、底面幅は35cm～50cm、深さは遺存の良い部分で約50cmを測る。箱形の断面を呈する。覆土は４層に分けられる。上部は黒色土が主体で、下部は暗褐色土となる。

遺物は少ないが、古墳時代前期のもののみである。

SD25Ａ・Ｂ

村上地区の北半で検出された。緩やかに弧を描きながら東西に方向をとる２本のほぼ平行した溝である。重複関係にあり、ＢよりＡのほうが古い。その他SD26・27・32・102・108と重複する。Ａ・Ｂとも東端は調査区外へ延びる。Ａの西端はSD102と重複し、Ｂの西端は攪乱により不明である。遺存する長さはＡが約42m、Ｂが約45mである。

25Ａは上幅は3.5m～4.6m、底面幅は2.5m～３m、深さは遺存の良い部分で約0.9mを測る。箱形の断面を呈する。覆土は４層に分けられ、暗灰褐色土を主体とするものである。断面観察の結果、掘直しが認められた。遺物は比較的多い。

25Ｂは上幅は３m～3.8m、底面幅は1.6m～2.8m、深さは遺存の良い部分で約0.7mを測る。箱形の断面を呈する。覆土は６層に分けられ、暗灰褐色土を主体とするものである。断面観察の結果、掘直しが認められ、掘り直しの直後宝永テフラの堆積が認められる。遺物は少ない。

SD26

村上地区の北半で検出された。SI６やSD25Ａ・Ｂ、SD28・29、SB13・18・24・30など多くの遺構と重複し、SI６より新しいが、その他の遺構との新旧関係は不明である。直線的に南北に方向をとる溝で、南北両端とも他の溝と重複している。遺存する長さは約65m。上幅は0.7m～１m、底面幅は20cm～40cm、深さは遺存の良い部分で約70cmを測る。箱形の断面を呈する。覆土は５層に分けられる。暗褐色土を主体とするもので、中位には宝永テフラの堆積が認められる。

遺物は極めて少ない。

SD27

村上地区の北半で検出された。SD25Ａ・29と重複する。部分的に合流しながらほぼ平行して南北に方向

をとる2条の溝であるが、中央部では緩やかな弧状を呈する。北端は攪乱により不明で、南端はSD25Aと重複する。遺存する長さは約56m。2条の溝ともほぼ同規模で、上幅は0.6m～1.1m、底面幅は30cm～40cm、深さは遺存の良い部分で約35cmを測る。箱形の断面を呈する。覆土は3層に分けられる。暗褐色土を主体とするものである。

遺物は比較的多いが図示できたものは少ない。

SD28

村上地区の北端で検出された。SD31と重複し、SD31のほうが新しい。ほぼ東西に方向をとる溝である。両端とも調査区外へ延びている。遺存する長さは約74m。上幅は2.1m～2.9m、下幅は1.2m～1.5m、深さは遺存の良い部分で約60cmを測る。箱形の断面を呈する。覆土は4層に分けられる。上部は暗褐色土が主体で、中位から下部は暗黄褐色土となる。

遺物は比較的多いが図示できたものは少ない。

SD29

村上地区の北半で検出された。SD23・26・27、SK21、SB15・32・33・59・64・68などと重複し、SB59・64より新しいが、その他の遺構との新旧関係は不明である。東側は東西に方向をとるが、SD26との合流部分から直角に南へ方向をとる溝である。南端はSD27と重複し、東端は調査区外へ延びている。遺存する長さは約37m。上幅は0.7m～1.7mと差があり、東西方向の部分が広い。底面幅は20cm～40cm、深さは遺存の良い部分で約80cmを測る。有段の箱形の断面を呈する。覆土は5層に分けられる。暗褐色土を主体とするもので、中位には宝永テフラの堆積が認められる。

遺物は極めて少ない。

SD30

村上地区の北端で検出された。SD135と重複し、SD135より古い。SD28に平行してほぼ東西に方向をとる溝である。両端とも調査区外へ延びている。遺存する長さは約61m。上幅は1.5m～2.3m、底面幅は0.9m～1.3m、深さは遺存の良い部分で約60cmを測る。箱形の断面を呈する。覆土は3層に分けられる。上部は黒褐色土、下部は灰茶褐色土となる。

遺物は少ない。

SD53

馬場台地区で検出された。SD50・55と重複する。馬場台地区の中央を走る大きな攪乱の北側では南北に方向をとるが、攪乱部分で弧状に方向を変え、以後は東西に方向をとる溝である。両端とも調査区外に延びている。遺存する長さは約94m。上幅は4m～9m、底面幅は50cm～1.5m、深さは遺存の良い部分で約1.4mを測る。皿状の断面を呈する。覆土は10層に分けられる。暗褐色土～黒褐色土を主体とするが、全体に酸化鉄粒を多く含む。東西に方向をとる部分の西端で、溝底から2本の杭が検出された。断面観察の結果、この杭には明確な掘方を伴っておらず、溝底に直接打ち込まれたものと考えられる。

遺物は非常に多く、覆土中位から下部にかけて多くの土器が出土している。そのほか溝底に打ち込まれた杭の周りから土器とともに多くの木製品が出土している。土器は弥生時代後期と古墳時代前期のもののみである。

SD54

馬場台地区で、SD53の東側で検出された。多くの溝と重複する。SD50・51より古いが、その他の溝との

新旧関係は不明である。大きく蛇行しながら南北に方向をとる溝である。北端は調査区外へ延び、南端はSD53と重複する。遺存する長さは約50m。上幅は4m～7m、底面幅は3m～5.5m、深さは遺存の良い部分で約1mを測る。皿状の断面を呈する。覆土は10層に分けられる。黒褐色土～暗褐色土を主体とするものである。SD53の覆土とほぼ共通する。

遺物は比較的多く、土器以外に木製品も出土しているが、図示できたのは木製品1点のみである。

SD74

村上地区の南半で検出された。SD96と重複する。SD20とほぼ平行し、北西から南東へ方向をとる溝である。西側は調査区外へ延びており、東側は攪乱により不明である。遺存する長さは約44m。上幅は1.3m～2m、底面幅は40cm～60cm、深さは遺存の良い部分で約70cmを測る。箱形の断面を呈する。覆土は3層に分けられる。上部は黒褐色土で、下部は暗黄褐色土となる。

遺物は極めて少ない。

SD86・SD87

村上地区の南半で検出された。SD96と重複する。いずれも東西に方向をとる溝で、約1.8mの間隔で平行する。いずれも西端は攪乱により不明である。遺存する長さはSD86が約26m、SD87が約23mである。

SD86は上幅60cm～80cm、底面幅15cm～20cm、深さは遺存の良い部分で約60cmを測る。浅い箱形の断面を呈する。覆土は2層に分けられる。上層は黒褐色土で下層は暗黄褐色土である。遺物は極めて少ない。

SD87は上幅50cm～80cm、底面幅30cm～50cm、深さは遺存の良い部分で約50cmを測る。皿状の断面を呈する。覆土は4層に分けられる。暗褐色土を主体とするものである。遺物は極めて少ない。

SD96

村上地区の南半で検出された。SB71、SD20・74・86・87と重複する。SD86より新しいが、その他の溝との新旧関係は不明である。北側では東西に方向をとるが、SD87と重複する地点から南北に方向をとる溝である。南端は重複により不明である。遺存する長さは約49m。上幅は80cm～1m、底面幅は20cm～30cm、深さは遺存の良い部分で約70cmを測る。「V」字状の断面を呈する。覆土は暗褐色土の単一層である。

遺物は極めて少ない。

SD101

村上地区の北半で検出された。SK126・127、SD106と重複する。強い弧状を描く溝で、東側は調査区外に延びているため不明であるが、本来は径20mほどの円形周溝状を呈するものと思われる。上幅は1.7m～3.2m、底面幅は1.3m～2.6m、深さは遺存の良い部分で約20cmを測る。浅い箱形の断面を呈する。覆土は暗褐色土を主体とするものである。

遺物は極めて少ないが、古墳時代前期の土器が主体である。

SD102

村上地区の中央で検出された。SD25A・B、SD104・112・113・114・115など多くの溝と重複する。南北に方向をとる溝であるが、全体として弧状を呈する。南北両端とも攪乱により不明である。遺存する長さは61m。上幅は2m～4.5m、下幅は1m～3.5m、深さは遺存の良い部分で約30cmを測る。浅い皿状の断面を呈する。覆土は暗褐色土を主体とする。

遺物は少ないが、古墳時代前期、奈良・平安時代、中・近世の各期にわたった遺物が出土している。

SD113

村上地区の北半で検出された。SD102・112と重複する。東西に方向をとる溝であるが、西側では緩やかな弧状を呈する。西端は重複により不明で、東端は調査区外に延びている。遺存する長さは約17m。上幅は70cm～1.1m、底面幅は30cm～45cm、深さは遺存の良い部分で約35cmを測る。箱形の断面を呈する。覆土は暗褐色土を主体とする。

遺物の量は少ないが、東端でほぼ完形の壺が出土している。

SD115

村上地区の北半で検出された。SD102・105と重複する。東西に方向をとる溝である。西端は攪乱により不明で、東端は調査区外に延びている。遺存する長さは約22m。上幅は1.3m～2.2m、下幅は50cm～1m、深さは遺存の良い部分で約70cmを測る。箱形の断面を呈する。覆土は暗褐色土を主体とする。

遺物は極めて少ない。

SD124

村上地区の南半で検出された。東西に方向をとる溝である。西端は攪乱により不明で、東端は調査区外に延びている。遺存する長さは約12m。上幅は2.5m～3m、底面幅は1m～1.5m、深さは遺存の良い部分で約1mを測る。箱形の断面を呈する。覆土は12層に分けられる。暗褐色土を主体とするものである。覆土中に硬化面が4枚認められ、繰り返し道として使われたものと考えられる。

遺物は極めて少ない。

SD125

村上地区の南半で検出された。多くの溝と重複するが、新旧関係は不明である。溝の2/3には南北に方向をとるが、残り1/3は東へ「鉤の手」状に屈曲する。SD10と同じような方向をとる。両端とも調査区外へ延びている。遺存する長さは約20m。上幅は3m～4.5m、下幅は1.5m、深さは遺存の良い部分で1.1mを測る。椀状の断面を呈する。覆土は8層に分けられる。上部は暗灰褐色土を主体とし、下部は灰褐色土を主体とするものである。

遺物の量は多いが図示できたものは少ない。

SD129・139

村上地区の中央で検出されたほぼ平行しながら南北に方向をとる2条の溝である。北側はほぼ直線的であるが、南側は緩やかな弧状を呈する。南北両端とも攪乱により不明である。遺存する長さはSD129が約103m、SD139が約74mである。

SD129は上幅1m～1.2m、底面幅40cm～90cm、深さは遺存の良い部分で約30cmを測る。浅い皿状の断面を呈する。覆土は暗灰褐色土を主体とする。遺物は極めて少ない。

SD139は上幅80cm～1m、底面幅30cm～50cm、深さは遺存の良い部分で35cmを測る。箱形の断面を呈する。覆土は暗灰褐色土を主体とする。遺物は極めて少ない。

5　方形周溝状遺構　（第71図、図版4）

SX 1

SB 1の北約10m、K 5 －78・79グリッド等に位置する。東側でSD 2と重複し、SD 2より古い。周溝外周及び方台部の平面形は台形を呈し、南西隅には開口部を有する。規模は、周溝外周で計測して北辺11.2

m、東辺14.6m、南辺14.4m、西辺10mを測る。周溝の幅は0.9m～1.7mとかなり差がある。周溝は全体に浅く、深さは20cm～40cmを測り、西辺側が深くなる。周溝断面は逆台形を呈し、底面は平坦であった。周溝内の覆土は黒褐色土を主体としたものである。また、周溝西辺の覆土下層からは炭化材及び焼土のブロックが数箇所で検出された。埋葬施設は検出されなかった。

遺物は周溝各辺の覆土上層から中位にかけてで、合わせて100点ほどが出土しているが、破片が多く、図示できたのは土師器4点、須恵器2点の計6点である。

6　そのほかの遺構（第72～74図、図版22・23）

（1）耕作痕

村上地区の中央やや北よりの西側で、大きく分けて4か所の耕作痕が確認された。第68・69図にその状態を示したが、いずれも列をなす帯状のものである。規模・形状には差があるが、半月形を基本とし、幅（直線部分）が15cm～20cm、奥行10cm～15cm、深さ5cm前後を測るものが一般的である。

こうした耕作痕は、近年における水田遺構の調査に伴って検出されつつあるもので、群馬県熊野堂遺跡[1]や静岡県瀬名遺跡[2]をはじめ多くの遺跡で検出されている。また、田面に打ち込む際の入刃角度の違いから、鋤と鍬のいずれかの痕跡かが区別できるとされている[3]。この方法によれば、村上遺跡の耕作痕は鋤跡ということになる。

（2）縄文時代遺物包含層

馬場台地区の中央で検出されたSD53・54という大型の溝内から縄文土器のまとまった出土がみられたため周辺を精査したところ、弥生時代後期以降の基盤層である黄褐色砂質土下に泥炭層とも呼ぶべき黒色粘土層が確認された。この層からは縄文土器が出土することが明らかとなったため、これを遺物包含層として調査を行った。重機により黄褐色砂質土を除去し、黒色粘土層の範囲を確認した後調査を行った。その結果、2ヵ所の集中地点が検出された。この集中地点は中央に大きな攪乱（水田跡）が走っているため、本来は一つのまとまりであった可能性が考えられる。出土した土器は600点ほどで、器面は磨滅している。その他土器に混じって焼け礫や少量の炭化物も検出された。

注1　女屋和志雄ほか　1990『熊野堂遺跡（2）』 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

2　宮村典雄・小林孝誌ほか　1992『瀬名遺跡Ⅰ（遺構編Ⅰ）』 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

3　静岡県埋蔵文化財調査研究所　1993『研究紀要Ⅳ　水田跡調査の方法と研究』

第２節　遺物

１　縄文時代の土器（第75～78図、図版24）

出土量は15箱ほどで、古墳時代以降の溝から出土したわずかな土器を除けば、その大半は馬場台地区のほぼ中央のＤ４－47グリッドを中心とした包含層から出土したものである。時期的には、23(後期前半)・57（中期）を除けば、全て後期の堀之内２式期以降におさまるものであり、この時期的な傾向は、図示しなかった破片についてもあてはまる。以下、拓影図・実測図・写真等では判別しがたい部分を中心に記述する。

１の拓影図下半の沈線以下の部位には縄文は認められない。２の拓影図左下半には横位の沈線が施されている。３は鉢形土器の胴部から頸部にかけての破片であり、貼付文下には対弧文が施されている。器面は磨滅が著しく、地文の有無は不明である。４は典型的な三角文であるが、縄文は施されていない。５は器面の磨滅が著しく、地文の有無は不明である。６の口縁端部内側には、凹線風の効果が僅かに認められる。口縁左半は緩やかな波状部に繋がるようである。７は内外面共に磨滅が著しく、地文の縄文の有無は不明である。胎土中に灰白色鉱物粒（径１㎜）を多く含み、異質な印象が強い。９は内外面とも円形刺突が押捺されており、円孔ではない。器表面の中央下端には、８字状貼付文の剝落の痕跡が認められる。10の施文具は半截竹管である。地文の縄文の有無は器面の磨滅により判然としないが、拓影図上下に明瞭な横位の区画が認められることから、粗雑な施文ではあるものの精製土器として捉えられるものかもしれない。12の器表面の意匠のようなものは鉄分が付着によるものであり、本来は無文である。14は内削状の口唇部に沈線を施し、口縁端部の内外面にかけて、粘土紐を貼り付けている。口縁右半は緩やかな波状部に繋がるようである。15は磨滅が著しいが、地文は節の大きい無節の縄文が施されているようである。16は地文は認められない。17の地文は縄文である。19の口縁部の調整はケズリ調整の後に、軽易なナデ調整がなされているのみであり、粗雑なつくりである。23は、底径の大きさ、縄文の節の大きさ、器壁の厚さ、橙褐色系の色調、さらには縄文施文域が底部付近まで及んでいる点を考慮すると、堀之内１式後半期の可能性が高いものの、当該期の明瞭な有文精製土器が出土していないことから即断はできない。24・25は同一個体である。26・27は同一個体であり、口縁内面には凹線風の効果が認められる。28の口縁文様帯の調整はケズリ調整の後に、軽易なナデ調整がなされているのみであり、粗雑なつくりである。沈線以下の部位には無節の粗雑な縄文が施されている。30・38は同一個体であり、胴部括れ部の沈線下には、丸先棒状工具の端部を用いた、爪形状の連続刺突が施される。31は器表面の磨滅が著しいものの、17と同一個体の可能性が高い。32・34は同一個体である。33は41と同一個体である。35は26・27と同一個体の可能性が高い。36の口縁肥厚部内面には、幅の広い押捺が縦位に連続的に押捺され、肥厚部下には横位の凹線風の沈線が施されている。40は地文は無文である。44の破片上端の円形刺突は竹管状工具によるものである。胴部は縄文地に単沈線による斜方向の施文が認められる。本個体は頸部括れ部で破損しているが、破損部位の割れ口は、磨滅の進行により断言はできないものの、二次的な調整（平滑化）を窺わせる部位があり、疑似口縁を作出し、再利用していたことが予想される。本遺跡出土の破片中に、本個体と明確に同一個体となる頸部以上の破片を認めることができないことからも、再利用の可能性は高いものと思われる。45・46は口縁内面に凹線風の沈線が施される。49の縄文は節の大きい無節の縄文である。50・53は同一個体である。57は胴部の平行する懸垂文が、口縁部下の隆帯にそのままぶつかる部位と、隆帯直下で逆Ｕ字状に連結する部位がある。58は縄文が認められる。59は埦形の小型土器もしくはミニチュア土器であり、破片

下端は胴部下端部であり、底面のみが欠失している。破片上端には、横位の沈線が認められ、割れ口は二次的な調整（平滑化）がなされ、疑似口縁であった可能性もある。61の個体上半の無文部と条線施文部の境は、粘土紐が貼り付けられているのではなく、無文部を調整時に削ぎ取ることによって作出されている。62は口縁端部と口唇面の境界部位にも連続刺突が施されている。65は内外面ともに、不定方向の軽易なナデ調整がなされているのみで、口唇部の面取り後の調整もほとんどなされておらず、面取りの際にはみ出た粘土がそのまま残っている。草創期後半撚糸文期に伴う可能性も否定しきれないが、破片下部での急激な器厚の変化から、後期中葉の所産である可能性が高い。

以上、本遺跡出土土器の時期的な主体は、加曽利Ｂ２式期から曽谷式期にかけてである。

２　弥生時代の土器（第79～82図、図版25）

出土量は10箱ほどで、その大半は馬場台地区のSD53という流路から出土したものである。また、グリッドから出土したものは、村上地区のほぼ中央に広がる沼状の窪地（SD98とSD129にはさまれた幅約15m、長さ約50mほどの範囲）から出土したものである。

１～９はSD１から出土したものである。１～７は壺の底部破片で、６には木葉痕が認められる。１～３は淡褐色を呈し、砂粒を多く含む胎土で共通する。８は高坏の脚部で、坏部との接合部に突帯を巡らすものである。突帯には刻みが施される。９は皿状をなす小型土器である。内面には粘土が貼り合わされている。

10～28はSD53から出土したものである。11は壺で、Ｓ字結節文が羽状縄文を区画するものである。施文部以外は赤彩される。11も壺で、頸部が沈線で区画され無文帯となり、上下に縄文が施文されるものである。12・13は無頸壺である。いずれも縄文が施されるもので、内面はヘラミガキされる。施文部以外は赤彩される。13には２個１組の穿孔が認められる。14は小型壺の底部破片で、内外面共ヘラミガキされ、赤彩される。15は高坏と考えられる。坏部と脚部は接合しないが、同一個体と考えられる。坏部と脚部の接合部には突帯が貼り付けられる。脚部下端は複合口縁状を呈し、坏部と脚部の接合部とともに棒状工具による押捺が加えられる。突帯と脚部下端を除く外面と坏部内面はヘラミガキされる。外面と坏部内面は赤彩される。16は壺で胴部外面の一部は赤彩される。17～19も壺である。20は甕で外面上半にはススが付着し、内面下半には炭化物が付着する。21～28は甕である。21～26は頸部に数段の輪積み痕を残し、口唇部に押捺が加えられるものである。21・26は胴部外面にススが付着する。22は外面全体にススが付着する。23は大型のものである。27は大型のもので、頸部に残る一段の輪積み痕の下端には棒状工具による押捺が加えられる。28は口唇部にわずかな押捺が加えられるもので、外面下半にはススが、頸部内面には炭化物が付着する。また、底部外面には穿孔を試みた痕跡が認められる。

29～31はSD101から出土したものである。29は壺で、沈線により区画された縄文による山形文が施される。施文部以外は赤彩される。30・31は壺の底部破片である。

32はSK５から出土した甕で、頸部に輪積み痕をわずかに残すものである。口唇部には押捺が加えられる。内面は丁寧にヘラナデされる。

33はSK63から出土した壺である。

34～52はグリッド出土のもので、41以外はいずれも村上地区のほぼ中央に広がる沼状の窪地から出土したものである。34は複合口縁の壺で、口縁部には縄文が施され、下端には押捺が加えられる。施文部以外

の外面は赤彩される。35・36は壺で、いずれも沈線による区画の中に羽状縄文が施されるものである。37は壺で、頸部には縄文が施され、胴部上半には沈線による区画の中に沈線による山形文が施されるが、器面の磨滅が著しく、詳細な観察は不可能である。38は口縁部を欠く壺である。器面の遺存状態が悪く、詳細な観察は不可能である。39は壺で、沈線による区画の中に羽状縄文が施される。40は壺の底部で焼成後の穿孔が認められる。41～45は壺の底部破片である。44の内面には輪積み痕が残る。46はほぼ完形の甕である。口縁部は複合口縁となり、口唇部には押捺が加えられる。47は頸部に輪積み痕を残す甕で、口唇部には押捺が加えられる。外面にはススが付着する。48は口縁部が複合口縁となる甕で、下端に棒状工具による押捺が加えられる。胴部には沈線による区画の中に羽状縄文が施される。外面は磨滅が著しい。49は頸部下半に輪積み痕を一段残す甕で、下端には棒状工具による押捺が加えられる。また、口唇部には押捺が加えられる。50は鉢で、内面には輪積み痕を残し、底部には木葉痕が認められる。51も鉢であるが、沈線で区画された口縁部には、羽状縄文が施される。沈線以下はヘラミガキされ、赤彩される。器面の遺存状態が全体に悪く、赤彩も痕跡的である。52は無頸壺である。口唇部には縄文、口縁部～体部には羽状縄文が施される。口縁部には円形の刺突、口縁部下端には棒状工具による押捺が加えられ、焼成前の穿孔も認められる。

3　古墳時代の土器（第83～92図、図版26～29）

1はSI 1から出土したほぼ完形の鉢である。内外面共ヘラナデされる。

2～4はSI 7から出土したものである。2は複合口縁の壺で、胴部外面はヘラナデされ、口縁部内面はハケ調整される。器面の遺存状態は極めて悪い。3は甕の口縁部～胴部上半である。口縁部はヨコナデされる。4も甕で、胴部内面には輪積み痕を残し、内面はハケ調整される。器面の遺存状態は極めて悪い。口縁部はヨコナデされる。

5・6はSI 8から出土したものである。5は壺と考えられるが、器面の遺存状態が極めて悪いため、文様等の観察は不可能である。外面には部分的に赤彩の痕跡が認められる。6は甕であるが、器面の遺存状態が極めて悪く、詳細な観察は不可能である。

7はSK3から出土した甕で、胴部下半は内外面共ヘラナデされる。

8～10はSK36から出土したものである。8は壺で、口縁部外面はハケ調整後ヨコナデされ、胴部内面には輪積み痕が残る。9は高坏である。外面坏部上半はハケ調整される。外面と坏部内面はヘラミガキされる。透孔は3孔である。10は甕で口唇部に押捺が加えられるものである。

11・12はSK38から出土した手づくね土器である。いずれも外面は指頭によるナデが加えられ、内面はヘラナデされる。

13はSK39から出土した甕である。

14はSK61から出土した複合口縁の壺である。口縁部はヨコナデされる。

15はSK62から出土した甕で、口唇部には押捺が加えられ、口縁部は内外面共ハケ調整される。

16はSK64から出土した高坏の脚部である。外面はヘラケズリされ、内面にはシボリ痕が認められる。

17～20はSK70から出土したものである。17は壺で内面には輪積み痕が残る。器面の遺存状態は極めて悪い。18は甕で、わずかに複合口縁状をなす。胴部外面はハケ調整後丁寧なナデが加えられ、内面には輪積み痕が残る。口縁部内面はハケ調整され、ヨコナデが加えられる。19は坩である。20は鉢であるが、器面

の遺存状態が極めて悪いため、詳細な観察は不可能である。

21・22はSK74から出土した坩で、22の内面には輪積み痕が残る。

23・24はSK79から出土した台付甕の脚台部で、23の内面はヘラナデされる。

25・26はSK100から出土したものである。25は甕、26は坩である。26の内面はヘラナデされる。

27はSK103から出土した高坏の脚部で、外面はヘラケズリされ、内面はヘラナデされる。

28～35はSK113から出土したものである。28は埦状の坏部を有する高坏で、坏部外面下半はハケ調整される。透孔は3孔である。29は器台で、器受部内面はヘラミガキされる。透孔は3孔である。30も器台で、内外面共ハケ調整される。透孔は2孔である。31は小型の甕である。32は坩で、内外面共ヘラミガキされ、赤彩される。33は壺で、胴部外面はハケ調整後ヘラミガキされ、口縁部は内外面共ハケ調整後ヨコナデされる。34・35は甕の胴部下半から底部で、34の外面はハケ調整される。

36はSK117から出土した甕の口縁部である。

37～57はSK126から出土したものである。37は甕の口縁部で、口唇部にはヘラ状工具による刻みが施される。38は坩で、底部外面はヘラケズリされ、胴部内面はヘラナデされる39・41は甕の底部で、39の外面はヘラケズリされる。40はミニチュア土器である。42はほぼ完形の複合口縁の壺で、胴部外面にはヘラケズリの後ナデが加えられ、口縁部はヨコナデされる。器面（特に外面）は遺存状態が悪い。43はほぼ完形の坩である。口縁部はヨコナデされ、外面胴部下半はヘラケズリの後ナデが加えられる。また、胴部には内外面共輪積み痕が残る。44は完形の坩で、外面はハケ調整後ナデが加えられ、口縁部はヨコナデされる。45は完形の器台である。脚部内面には部分的にハケ調整が残る。外面と器受部内面はヘラミガキされ、赤彩される。透孔は3孔である。46・47は甕である。いずれも外面はヘラケズリの後ナデが加えられ、内面には輪積み痕が残り、ヘラナデされる。また、外面にはススが付着する。48は高坏の坏部である。内面は粗くヘラミガキされ、口縁部はヨコナデされる。49～57は高坏の脚部である。55以外の外面はいずれもヘラケズリの後ナデが加えられ、また54・56以外には内面にシボリ痕が認められる。55は脚部外面はヘラミガキされ、裾部はヨコナデされる。内面上半はハケ調整され、下半はヘラナデされる。外面と内面裾部の一部は赤彩される。

58～82はSK127から出土したものである。58は複合口縁の壺である。口縁部下端には刻みが施される。器面の遺存状態が極めて悪く、詳細な観察は不可能である。59・60は壺の底部で、外面はハケ調整後ナデが加えられる。61～69は甕である。61は外面と口縁部内面がハケ調整される。また、口縁部はヨコナデされる。胴部内面には輪積み痕が残る。62は外面はハケ調整され、内面には輪積み痕が残る。63は外面はハケ調整され、底部には木葉痕が認められる。64は内外面共ハケ調整され、内面上半には輪積み痕が残る。65は胴部外面はヘラケズリの後ナデが加えられ、口縁部はヨコナデされる。66は口縁部はヨコナデが観察できるが、その他は器面の剝落が著しいため、観察は不可能である。67の口縁部はヨコナデされる。胴部外面はヘラケズリの後ナデが加えられる。68は口縁部破片で内外面共ヨコナデされる。69は内面に輪積み痕が残る。70・71は壺の底部破片である。71は割れ口が磨滅しており、破損後坏状に形を整えて再利用した可能性も考えられる。また、焼成後の穿孔も認められる。72～79は坩である。72は口縁部のみのもので、内面はヘラミガキされる。内外面とも赤彩される。73は口縁部外面はハケ調整後ナデが加えられ、体部外面はヘラケズリされる。また、口縁部内面はヨコナデされる。74は完形で、体部外面はヘラケズリされ、内面はハケ調整後ヘラナデされる。口縁部はヨコナデされる。75～77はいずれも口縁部はヨコナデされる。

78・79は壺の底部破片である。79の体部外面はヘラケズリされ、底部には木葉痕が認められる。80～82は高坏の脚部である。80の外面は赤彩される。

83はSK132から出土した壺である。胴部外面はヘラミガキされる。

84はSK133から出土した高坏の脚部である。外面はヘラケズリの後ナデが加えられ、赤彩される。

85～103はSD１から出土したものである。85・86は複合口縁の壺である。口縁部はヨコナデされる。87は壺で、口縁部はヨコナデされる。88は甕で胴部外面はハケ調整され、口縁部はヨコナデされる。89はＳ字状口縁台付甕である。口縁部から体部にかけてが鋭く屈曲するものである。体部外面はタテ方向にハケ調整され、屈曲部内面はヨコ方向にハケ調整される。口縁部はヨコナデされる。90は甕で、胴部外面はハケ調整後ナデが加えられ、口縁部はハケ調整後ヨコナデされる。91も甕で、口縁部はヨコナデされる。92は小型の甕で、胴部外面はハケ調整後ナデが加えられ、口縁部はハケ調整後ヨコナデされる。93は脚状を呈する土器で器台と考えられる。94～96は高坏で、95の内面にはシボリ痕が認められる。97～103は底部破片である。98は坩で、外面は赤彩される。

104～112はSD２から出土したものである。104は甕で、口縁部はヨコナデされる。105は有段口縁の壺で、口縁部下端には押捺が加えられる。器面の磨滅が著しい。106はＳ字状口縁台付甕の破片である。体部外面はタテ方向にハケ調整される。口縁部はヨコナデされる。胎土には雲母を多く含む。107・108は器台の器受部である。108は内外面共ヘラミガキされる。109は高坏である。坏部外面はハケ調整後ナデが加えられる。外面と坏部内面は赤彩される。110は高坏の脚部と考えられる。外面はハケ調整後ナデが加えられ、赤彩される。透孔は３孔と思われる。111・112は壺の底部で、111には焼成前の穿孔が、112には木葉痕が認められる。

113～122はSD20から出土したものである。113は甕の口縁部で、内外面共ヨコナデされる。114・115は坩の底部である。いずれも外面（114は内面も）下半がヘラケズリされる。116は鉢で、内外面共ハケ調整後ナデが加えられる。117は器台と考えられる。外面はヘラナデされる。118は器台の器受部で、口縁部はヨコナデされる。内外面共赤彩される。119～122は壺の底部である。

123はSD21から出土した手づくね土器である。

124～128はSD23から出土したものである。124は複合口縁の壺である。内面と口縁部外面はヨコナデされる。125は甕の底部、126は高坏の脚部である。127・128は甕で、127の口縁部には押捺が加えられる。

129・130はSD25Ａから出土したものである。129はハケ調整される甕の胴部破片で、外面には断面Ｖ字状の溝が３条認められる。砥石として再利用したものと考えられる。130は器台の脚部である。２個１組の透孔が３ヵ所に認められるが、貫通しているのはそれぞれ１個の計３個である。

131はSD27から出土した高坏の脚部である。外面には丁寧なナデが加えられる。透孔は３孔の可能性が高い。

132はSD32から出土した壺の底部である。内外面共ヘラナデされる。

133・134はSD36から出土したものである。133は壺で、内面には輪積み痕が残る。134は高坏の脚部で、外面はヘラミガキされ、裾部はヨコナデされる。透孔は３孔である。

135～141はSD53から出土したものである。135は甕で、胴部外面はヘラケズリの後ヘラナデされ、口縁部はヨコナデされる。136も甕で、口縁部はハケ調整後ヨコナデされる。器面(特に外面)は剝落が著しい。137も甕である。内面の口縁部～胴部上半はハケ調整されるが、その後ナデが加えられているため、ハケは

痕跡的である。口唇部には押捺が加えられる。全体的に器面の遺存状態が悪い。138～141は壺の底部である。138は器面の剝落が著しい。

142はSD78から出土した坩である。体部外面はハケ調整後ナデが加えられ、口縁部内面はハケ調整後ヘラミガキされる。体部内面には輪積み痕を残し、部分的にハケ調整される。

143はSD82から出土したもので、高坏の脚部である。透孔は3孔である。

144～147はSD101から出土したものである。144はほぼ完形の鉢で、外面はハケ調整後ナデが加えられ、内面は丁寧にヘラナデされる。145は高坏の脚部で、外面はヘラケズリされ、内面にはシボリ痕が残る。146は高坏の脚裾部である。147は大型で、粗雑な作りの土器である。高坏であろうか。外面は赤彩される。

148・149はSD102から出土したものである。148は甕で口縁部はヨコナデされる。149は複合口縁の壺で、内外面共丁寧なナデが加えられる。

150・151はSD113から出土したものである。150は甕で、内外面共ハケ調整後ナデが加えられる。151はほぼ完形の壺で、胴部上半のS字結節文の区画の中に羽状縄文が施されるものである。文様帯以下はヘラミガキされる。また胴部中位には焼成後の穿孔が認められる。

152～155はSD134から出土したものである。152は二重口縁の壺である。口縁部はヨコナデされる。153は坩で、外面は部分的にハケ調整され、口縁部はヨコナデされる。154・155は壺の底部である。

156～168はグリッド出土のものである。156は壺と考えられる。頸部には断面三角形の突帯が貼り付けられて、ヨコナデが加えられている。157・158は壺の底部で、157の外面はヘラミガキされ、158には木葉痕が認められる。159は甕で、口縁部はヨコナデされ、胴部内面はヘラナデされる。160は台付甕の脚台部である。胴部内面はヘラナデされる。161は完形の鉢で、外面には輪積み痕を残す。162も鉢で、口縁部と底部の外面には指頭によるオサエが認められる。口縁部内面はヨコナデされる。163は坩で、体部外面はハケ調整され、内面はヘラナデされる。口縁部はヨコナデされる。164・165は手づくね土器である。166は高坏の坏部で、脚部との接合部に色調の異なる粘土が貼り付けられている。167は高坏の脚部で、内面はハケ調整され、外面は赤彩される。168は器台の脚部で、外面はヘラミガキされる。透孔は3孔である。

4　奈良・平安時代の土器（第93～108図、図版30～32）

1～16はSB1から出土したものである。1～6は土師器坏である。1～4はやや偏平な丸底の坏で、底部の接地面は平底に近いものである。口縁部はヨコナデ、外面にはヘラケズリ、内面はナデ及びミガキが施される。口径14.6cm、器高4.2cmを測る。色調は橙褐色、胎土中には赤色粒子・白色針状物質を含む。2は磨滅が著しく、調整は不明である。口径16.0cmを測り、色調は褐色を呈し、胎土中には赤色粒子を含む。3・4は1・2より偏平で器高が低く、内面に横方向のヘラミガキが施される。3の口縁部は直立気味である。口径13.6cm、器高3.8cmを測り、暗褐色を呈する。4は口径14.7cmを測る。5は平坦な底部と体部から口縁部が斜め方向に直線的に開くもので、体部下半から底部にかけてヘラケズリ、内面には細かいミガキが施される。口径14.1cm、器高3.6cmを測る。色調は橙褐色、胎土中には赤色粒子・白色針状物質を含む。6は体部と底部の境に稜を有する坏で体部外面には横方向のヘラケズリが施される。口径13.9cm、底径11.1cm、器高3.5cmを測り、色調は暗褐色を呈し、胎土中には赤色粒子を含む。7は土師器高台付坏である。体部外面は横方向のヘラケズリ、見込は中心から3本を一単位とする放射状、その周囲には螺旋状、体部内面には放射状の暗文が施される。高台から高台内はヨコナデが施される。口径20cm、底径13.5cm、器高4.1

cmを測る。色調は赤褐色、胎土中には赤色粒子・白色粒子・白色針状物質を含む。畿内暗文土師器を模倣したものである。8は須恵器蓋で、器高が高く、端部の屈曲の弱いものである。口径16.4cmを測り、白灰色を呈し、胎土中には白色粒子・黒色微粒子をわずかに含む。9・10は須恵器高台付坏である。9は底部が高台より下に突出するもので、底径11.3cm、白灰色を呈し、胎土中には白色粒子を含む。10は底径9.2cm、色調は灰色を呈する。11は須恵器坏で、口縁部から体部はヨコナデ、底部は回転ヘラケズリが施される。外面には火襷痕が見られる。口径12.5cm、底径7.6cm、器高3.6cmを測る。12～16は土師器甕である。12・13は小形の甕で、12は体部外面は縦方向のヘラケズリが施され、内面はヘラナデが施される。褐色を呈する。13は体部上半は縦方向のヘラケズリ、下半は横方向のヘラケズリが施される。底径8.9cmを測り、褐色を呈し、胎土中には白色針状物質を含む。14は最大径を口縁部に有する甕である。体部外面には縦方向のヘラケズリが施される。口径22.5cm、暗茶褐色を呈し、胎土中には褐色粒子を含む。15は口縁端部が横方向につまみ出される甕で、口径21.8cm、茶褐色を呈し、赤色粒子・白色粒子を含む。16は底部付近の破片で、体部下端に斜め方向のヘラケズリが施される。底径6.1cmを測り、色調は暗茶褐色、胎土中には白色粒子を含む。11が8世紀8世紀後葉に比定されるほかは、8世紀前葉の所産である。

17はSB3から出土した須恵器甕の胴部破片で、白灰色を呈し、外面にはタタキ目、内面には同心円状の当て具痕が見られる。白灰色を呈し、胎土中には黒色粒子をわずかに含む。8世紀代の所産である。

18・19はSB7から出土したものである。18は須恵器高台付坏の破片で、体部下端が屈曲し稜線を有する。灰色を呈し、胎土中には白色粒子をわずかに含む。8世紀前葉の所産である。19は須恵器甕の胴部破片で、外面にはタタキ目、内面には同心円状の当て具痕が観察される。白灰色を呈し、胎土中には黒色粒子をわずかに含む。

20はSB9から出土した外面にタタキ目が施される須恵器甕の胴部破片である。灰色を呈する。8世紀代の所産である。

21～27はSB11から出土したものである。21・22は土師器坏である。21は厚手で器高が低く、体部外面から底部にはヘラケズリが施される。口径12.8cm、底径9.2cm、器高2.9cmを測り、橙褐色を呈し、胎土中には赤色粒子を含む。22は口縁部から体部はヨコナデ、体部下端から底部は回転ヘラケズリが施される。口径12.7cm、底径7.1cm、器高4.1cmを測り、色調は暗赤褐色、胎土中には赤色粒子を含む。23・24は須恵器坏で、23は底部は回転ヘラケズリが施され、底径10.2cmを測り、色調は白灰色、胎土中には赤色粒子・白色粒子・白色針状物質を含む。24は灰色を呈し、白色粒子を含む。25は土師器台付甕の脚部から胴部下端である。外面は縦方向のヘラケズリ、胴部内面はヘラナデが施される。底径8.2cmを測り、色調は暗茶褐色、胎土中には砂粒・白色針状物質を含む。26・27は須恵器甕の胴部破片である。いずれも外面にはタタキ目が施される。21・23～25は8世紀後葉、22は9世紀前葉の所産である。

28～34はSB12から出土したものである。28は土師器坏で、体部下端から底部は回転ヘラケズリが施される。底径7.2cmを測り、褐色を呈する。胎土中には赤色粒子・白色針状物質を含む。29・30は須恵器坏で、30は体部と底部の境に稜を有する丸底を呈するものである。底部外面は回転ヘラケズリが施され、火襷痕が見られる。底径6.9cmを測り、白色粒子を多量に含む。29は体部下端から底部に手持ちヘラケズリが施されるもので、灰色を呈し、胎土中には白色粒子を多量に含む。31は須恵器蓋の破片で、短頸壺の蓋と思われる。褐色を呈し、胎土は砂を含まない緻密なものである。天井部には降灰釉が掛かっている。32は須恵器長頸瓶の底部周辺である。底径9.0cmを測り、暗灰色を呈し、白色粒子を含む。東海産とみられる。33は

須恵器甕の胴部破片で、灰色を呈する。34は須恵器甑の胴部下端から底部にかけての破片で、5孔式と見られる。黒褐色を呈し、胎土中には白色粒子・赤色粒子を含む。32は8世紀後葉、28・29・34は9世紀中葉の所産である。

35～37はSB15から出土したものである。35は須恵器蓋で、天井部の上半は回転ヘラケズリが施され、口縁部との境にはヨコナデによって明瞭な稜が作出される。口径16.0cmを測り、色調は灰色、胎土中には白色粒子・黒色粒子を含む。36は土師器甕の胴部下端から底部である。底径9.2cmを測り、茶褐色を呈し、胎土中には赤色粒子・白色針状物質・砂を含む。37は須恵器甕の口縁部で、灰色を呈し、胎土は極めて緻密なものである。8世紀中葉の所産である。

38はSB16から出土した須恵器甕の胴部破片で外面にはタタキ目が施される。灰色を呈し、胎土中には黒色粒子を含む。8世紀代の所産である。

39はSB19から出土した緑釉陶器皿の口縁部破片である。釉調は淡緑色、素地は褐色を呈する軟陶である。京都産と考えられ、9世紀代の所産である。

40はSB21から出土した須恵器高台付坏で、外面に火襷痕が見られる。底径8.3cm、灰色を呈し、胎土中には黒色粒子・白色粒子を含む。8世紀後葉の所産である。

41・42はSB23から出土したものである。41は土師器坏で、体部外面はヘラケズリ、内面はヨコナデが施される。橙褐色を呈し、胎土中には赤色粒子・白色針状物質を含む。42は底部を欠く須恵器坏の破片である。灰色を呈し、白色粒子を含む。いずれも8世紀後葉の所産である。

43～45はSB34から出土したものである。43は緑釉陶器皿の口縁部破片で、釉調は黄緑色、素地は褐色を呈する。京都産と思われる。44は須恵器蓋の天井部から口縁部の破片で、上半は回転ヘラケズリが施される。灰色を呈し、胎土中には黒色粒子・白色粒子・白色針状物質を含む。45は須恵器甕の胴部破片で、暗灰色を呈し、胎土中には白色粒子をわずかに含む。44は8世紀後葉、43は9世紀前葉の所産である。

46～48はSB51から出土したものである。46は土師器坏の口縁部から体部破片で、体部下端から底部には手持ちヘラケズリを施す。褐色を呈し、胎土中には雲母粒子を含む。47は緑釉陶器皿で、底部は削り出しによるベタ高台で、釉調は淡緑色、素地は褐色を呈する軟陶で、京都産と考えられるものである。底径6.4cmを測る。48は須恵器甕胴部破片で、白灰色を呈し、胎土中には白色粒子をわずかに含む。いずれも9世紀前葉から中葉の所産である。

49はSB53から出土した土師器坏で、口縁部から体部はヨコナデ、体部下端から底部には回転ヘラケズリが施される。口径13.8cm、底径8.0cm、器高4.3cmを測る。色調は暗褐色、胎土中には白色粒子を多量に含む。9世紀前葉の所産である。

50・51はSB54から出土したものである。50は比較的大振りの土師器坏で、口縁部から体部はヨコナデ、体部下端から底部には回転ヘラケズリが施される。口径15.6cm、底径7.9cm、器高4.8cmを測り、褐色を呈し、白色針状物質を含む。9世紀中葉の所産である。51は須恵器高台付坏で、高台内には回転糸切り痕が残されている。外面には火襷痕が認められる。底径8.4cm、灰色を呈し、胎土中には白色粒子を含む。8世紀後葉の所産である。

52～54はSB55から出土した須恵器坏で、いずれも火襷痕が顕著に認められる。52は口径13.5cmを測り、青灰色を呈する。53は口径12.3cm、灰色を呈し、胎土中には白色粒子・白色針状物質を含む。54は口径12.6cm、灰色を呈し、白色粒子・黒色粒子を含む。8世紀後葉から9世紀初頭の所産である。

55はSB56から出土した須恵器坏で、底部には回転糸切り痕が見られる。口径12.7cm、底径8.7cm、器高3.6cmを測る。灰色を呈し、胎土中には白色粒子をわずかに含む。8世紀末葉の所産である。

56はSB57から出土した須恵器甕の胴部上位の破片で、外面にはタタキ目、内面には同心円状の当て具痕が見られる。8世紀代の所産である。

57～70はSB59から出土したものである。57～59は土師器坏で、57は口縁部から体部上半の破片である。外面には手持ちヘラケズリ、内面にはナデが施される。口径15.5cmを測り、暗茶褐色を呈し、胎土中には赤色粒子をわずかに含む。58は口縁部から体部はヨコナデ、底部は回転ヘラケズリが施される。口径11.9cm、底径8.0cm、器高3.1cmを測り、橙褐色を呈し、胎土中には白色粒子を含む。59は体部下端から底部に手持ちヘラケズリが施される。口径13.1cm、底径7.3cm、器高3.9cmを測る。暗茶褐色を呈し、胎土中には赤色粒子を含む。60～62は須恵器坏で、体部下端から底部に手持ちヘラケズリが施される。60は底径7.3cm、器高3.2cm、暗灰色を呈し、胎土中には白色粒子を含む。61は口径12.9cm、底径7.3cm、器高3.6cmを測り、黒色を呈し、胎土中には赤色粒子を含む。62は灰色を呈し、白色粒子・白色針状物質を含む。63・64は須恵器甕の胴部破片で、外面には横方向のタタキ目が施される。65～67は須恵器蓋で、65は器高が高く、口縁端部は内側に折り返されている。天井部上半には回転ヘラケズリが施される。口径17.9cmを測り、色調は青灰色、胎土中には白色粒子・白色針状物質をわずかに含む。66は口径16.8cmを測り、受け部が水平で、端部が垂直に折り返されているものである。灰色を呈し、胎土中には黒色粒子・白色針状物質を含む。67は端部周辺の破片で、青灰色を呈し、胎土中には白色粒子・白色針状物質を含む。68は須恵器甕の口縁部で、中位に凸帯を有する。口径23.8cmを測る。69・70は土師器甕の胴部下端～底部である。69は外面に手持ちヘラケズリが施される。底径6.8cm、胎土中には橙褐色、胎土中には赤色粒子を含む。70は底径6.8cm、橙褐色を呈し、胎土中には赤色粒子を含む。57は8世紀前葉、58・62・65・66・67・68は8世紀中葉から後葉、60・61は9世紀前葉の所産である。

71～76はSB60Aから出土したものである。71は須恵器甕の胴部下端～底部で、胴部外面にはヘラケズリ、内面にはナデが施される。底径14.1cm、橙褐色を呈し、胎土中には白色粒子・白色針状物質を含む。72～76は土師器坏である。いずれも体部はヨコナデされ、74は体部下端から底部に手持ちヘラケズリが施される。口径13.1cm、底径7.4cm、器高4cm測り、褐色を呈し、胎土中には雲母粒をわずかに含む。72は口径13.4cm、褐色を呈し、白色針状物質を含む。73は口径13.7cm、茶褐色を呈し、胎土中には白色粒子を含む。75は口径13.1cm、橙褐色を呈し、胎土中には白色粒子・赤色粒子・白色針状物質を含む。76は体部下端～底部に回転ヘラケズリが施される。底径6.7cmを測り、褐色を呈し、赤色粒子・白色針状物質を含む。9世紀前葉の所産である。

79はSB60Bから出土した須恵器甕の口縁部で、黒色を呈し、胎土中に白色粒子を含むものである。9世紀代の所産である。

77・78はSB61Aから出土したものである。77は土師器高台付皿で、やや磨滅しているが内外面ヨコナデによって調えられており、焼き歪みが顕著である。口径13.7cm、底径6.6cm、器高3.1cmを測り、褐色を呈し、胎土中には赤色粒子・白色針状物質を含む。9世紀中葉の所産である。78は須恵器甕胴部破片で、外面にはタタキ目、内面には当て具痕が見られる。灰色を呈し、胎土中には雲母粒子を多量に含む。

80・81はSB61Bから出土したものである。80は須恵器坏で、体部下端から底部には回転ヘラケズリが施される。底径5cm、器高1.8cmを測る。褐色を呈し、白色粒子・赤色粒子を含む。9世紀前葉の所産である。

81は須恵器甕の胴部破片で、灰色を呈する。

82はSB61Bから出土した須恵器坏の体部下端から底部である。底部には回転ヘラケズリが施される。底径8.4cmを測り、灰色を呈し、白色粒子・赤色粒子・白色針状物質を含む。8世紀後葉の所産である。

83・84はSB63から出土した外面にタタキ目が見られる須恵器甕の胴部破片である。83は灰色で、胎土中に白色粒子を含む。84は白灰色を呈する。

85はSB64から出土した須恵器甕胴部破片で、灰色を呈し、白色粒子を含む。

86はSB65から出土した須恵器甕胴部破片で、白灰色を呈する。

87～89はSK20から出土したものである。87は須恵器長頸壺の口縁部である。口径8.8cmを測り、胎土中には白灰色を呈する。長石粒・白色針状物質を含む。88は土師器坏の体部下端から底部である。外面はヘラケズリ、内面はナデ及びミガキが施される。底径7.8cm、明黄褐色を呈し、胎土中に赤色粒子を含む。89は土師器台付甕で、口縁部はヨコナデによってやや外傾する。外面は縦方向のヘラケズリ、内面は上半はナデ及びミガキ、下半はヘラナデが施される。口径15.2cm、茶褐色を呈し、砂粒を含む。8世紀後葉の所産である。

90～102はSK21から出土したものである。90～94は土師器坏である。90・91・94は底部に回転ヘラケズリを施すもので、92は体部下端から底部に手持ちヘラケズリを施すものである。90は底径6.4cm、明黄褐色を呈し、胎土中には長石粒・赤色粒子を含む。91は底径8cm、明黄褐色を呈し、長石粒を含む。92は底部に手持ちヘラケズリを施す。底径5.4cmを測り、明黄褐色を呈し、長石粒を含む。93は口径14.2cmを測り、暗茶褐色を呈する。94は底径6.8cm、茶褐色を呈し、長石粒を含むものである。95は須恵器坏で、底部は回転ヘラケズリが施される。口径11.5cm、青灰色を呈し、胎土中には白色粒子を含む。96は須恵器高台付椀の底部周辺である。高台内は回転ヘラケズリが施される。底径9.2cm、白灰色を呈し、胎土中には白色粒子を含む。97～99は須恵器甕の口縁部破片である。97・98は明灰白色を呈し、白色砂粒を含む。8世紀代の所産である。97は口径14cm、98は口径26.8cmを測る。99は口径19.8cmを測り、黒褐色を呈し、9世紀代の所産である。100・101は土師器甕である。100は口縁部から胴部上半で、口縁端部はつまみ上げられ、沈線状を呈する。胴部外面は縦方向のヘラケズリが施される。口径18.6cm、暗茶褐色を呈し、胎土中には赤色粒子を含む。101は胴部下端から底部で、外面は主に横方向のヘラケズリが施される。底径7.4cmを測り、色調は明茶褐色を呈する。102は須恵器甕の胴部破片で、外面にはタタキ目が施される。色調は灰色、胎土中には白色粒子を多量に含む。97・98は8世紀前葉から中葉、95・96は8世紀後葉、90～92・94・99～102は9世紀前葉から後葉の所産である。

103～121はSK23から出土したものである。103～105、107は土師器坏である。103は体部外面は横方向のヘラケズリ、内面はナデが施される。口径15.4cm、底径9cm、器高4.1cmを測り、色調は明褐色を呈し、赤色粒子を多量に含む。104・105は体部ヨコナデ、体部外面下端から底部は手持ちヘラケズリが施される。104は内面にミガキが加えられ、黒色処理が施されるものである。口径14.6cm、底径6.6cm、器高4.1cmを測り、黄橙褐色を呈する。105は黄橙褐色を呈し、胎土中には赤色粒子を含む。107の底部は回転糸切り未調整である。底径6.8cmを測り、褐色を呈し、胎土中には赤色粒子を含む。106は緑釉陶器皿の口縁部付近の破片である。釉調は淡緑色で、素地は褐色を呈する軟陶で、京都産と考えられる。108は口縁端部を欠く須恵器蓋で、頂部には擬宝珠形のつまみが付される。灰色を呈し、胎土中には白色粒子を含む。109～113、117～120は須恵器坏で、いずれも口縁部から体部はヨコナデ、底部には回転ヘラケズリが施され、色調は

灰色を呈し、胎土中に白色粒子・白色針状物質を含むものである。109は内外面に火襷痕が顕著に認められ、口径13.2cm、底径8.4cm、器高4.2cmを測る。110は口径13.2cm、底径9.2cm、器高3.4cmを測る。111は口径12.2cm、底径8.6cm、器高3.9cmを測る。112は口径13.8cm、底径9cm、器高4cmを測る。113は口径12cm、底径8.2cm、器高3.8cmを測る。117は底径7.8cm、118は底径7.2cm、119は底径8.1cm、120は底径9.4cmを測る。116・121は須恵器高盤で、116は口縁部付近の資料で、端部は内折する。口径19.2cmを測る。灰色を呈する。121は体部から脚部にかけての部分で、脚部は3方に透かしを有するものである。色調は黒色を呈し、胎土中には赤色粒子を含む。114・115は土師器甕である。114は口径17.6cmを測り、胴部外面には縦方向のヘラケズリを施す。色調は暗橙褐色を呈し、胎土中には白色粒子を多量に含む。103・108～121は8世紀後葉、104～107は9世紀中葉から後葉の所産である。

122～129はSK24から出土したものである。122～125、128は須恵器坏である。いずれも灰色を呈し、底部には回転ヘラケズリが施される。122は底径7.2cm、123は口径12.8cm、底径9.2cm、器高3.6cmを測る。124は底径8.4cm、125は口径13cm、底径9.2cm、器高3.5cmを測る。128は口径13cmを測る。126は緑釉陶器皿の底部周辺で、高台は削り出しによるベタ高台である。釉調は淡緑色、素地は白灰色を呈する。京都産と考えられる。127は須恵器蓋で、端部は弱く折り返されるものである。口径16.4cmを測る。129は須恵器甕の胴部破片である。外面にはタタキ目が施される。灰色を呈し、胎土中には白色粒子を含む。8世紀後葉から9世紀前葉の所産である。

130～138はSK26から出土したものである。130・131は土師器坏である。体部外面から底部はヘラケズリが施される。130は内面はナデが施され、口径14.4cm、底径8.4cm、器高3.8cmを測る。明褐色を呈し、胎土中には赤色粒子を含む。131は内面体部と底部の境にヨコナデが施され、沈線状をなしている。口径11.2cm、底径8.2cm、器高3.3cmを測り、褐色を呈し、白色針状物質を含む。132は須恵器平瓶の口縁部である。口縁端部は外方に屈曲されている。内外面には淡緑色の降灰釉が掛かる。口径7.6cmを測り、色調は灰色、胎土中には白色粒子・黒色粒子を含む。133・134は須恵器坏で、底部は回転ヘラケズリが施される。いずれも灰色を呈し、胎土中には白色粒子・白色針状物質を含む。133は底部が突出し、口径10cm、底径9cm、器高3.3cmを測る。134は底径9.6cmを測る。135～137は須恵器蓋である。135は擬宝珠形のつまみが付され、天井部上位は回転ヘラケズリが施される。灰色を呈し、胎土中には白色粒子・黒色粒子を含む。136・137は口縁部付近の破片で、口縁端部はやや内側に折り返されている。136は口径15.8cm、濃灰色を呈し、胎土中には白色粒子を含む。137は口径13.8cmを測り、灰色を呈し、胎土中には白色針状物質を含む。138は須恵器甕の胴部破片で、外面には濃緑色の降灰釉がかかる。色調は暗灰色を呈し、胎土中には白色粒子を含む。8世紀後葉の所産である。

139はSK27から出土した土師器坏で、体部下端から底部には手持ちヘラケズリが施され、底部外面にはゲタ状の圧痕が残されている。底径7.8cmを測り、色調は橙褐色、胎土中には白色粒子・赤色粒子・白色針状物質を含む。9世紀中葉の所産である。

140～142はSK30から出土したものである。140・141は須恵器坏で、140は体部下端から底部には回転ヘラケズリが施される。内外面に火襷痕が見られる。口径13.3cm、底径8.8cm、器高4cmを測る。色調は灰色、胎土中には白色粒子をわずかに含む。141は底部破片で、外面には回転ヘラケズリが施される。色調は灰色、胎土中には白色粒子・白色針状物質を含む。142は土師器甕の口縁部から胴部上半である。外面は縦方向のヘラケズリ、内面にはヘラナデが施される。口径21.4cm、器高8.5cmを測り、暗茶褐色を呈する。胎土中に

は白色粒子・赤色粒子・小石を含む。８世紀後葉の所産である。

143～148はSK31から出土したものである。143～145は土師器坏で、143・144は外面に手持ちヘラケズリ、内面にはナデが施される。143は明黄橙褐色を呈し、胎土中には赤色粒子を含む。口径12.2cm、底径8.2cm、器高3.3cmを測る。144は口径14.5cmを測る。145は平底で、体部外面から底部はヘラケズリが施される。内面はヘラナデ及びミガキが加えられる。口径12.8cm、器高5.6cm、底径6.8cmを測る。明褐色を呈し、砂粒を含む。146は須恵器鉢の体部下半から底部である。底部には回転ヘラケズリが施される。底径12.2cmを測り、灰色を呈し、胎土中には白色粒子・白色針状物質を含む。147は土師器甕の口縁部から胴部上半で、胴部外面には縦方向のヘラケズリ、内面は横方向のナデが施される。口径22.4cmを測り、色調は明褐色、胎土中には砂粒・赤色粒子を含む。148は須恵器甑である。胴部外面は下端部に横方向のヘラケズリ、上方はタタキ目が施される。内面にはナデが施される。底部の孔は５か所で、面取り成形によるものである。底径14.1cmを測り、明灰褐色を呈し、胎土中には赤色粒子を多量に含む。148が９世紀代であるほかは８世紀後葉から末葉の所産である。

149～163はSK32から出土したものである。149～156は土師器坏である。149・151・154は体部外面から底部にヘラケズリ、内面はナデが施されるもので、149は内面にミガキが加えられている。口径13.8cm、底径8.3cm、器高3.9cmを測り、褐色を呈し、胎土中には赤色粒子を含む。151は口径12cm、底径8.1cm、器高４cmを測り、赤褐色を呈し、胎土中には白色針状物質を含む。154は底径8.6cmを測り、褐色を呈し、胎土中には雲母粒子をわずかに含むものである。150・152・153・156は体部にヨコナデが施されるもので、153・156は体部下端から底部にヘラケズリが施される。153は底径7.2cmを測り、色調は黒色を呈し、胎土中には砂粒を多く含む。156は口径16.2cmを測り、暗褐色を呈し、胎土中には赤色粒子を含む。150は磨滅が著しく調整は不明瞭であるが、同様に体部下端から底部に手持ちヘラケズリが施されるものと考えれる。口径13.9cm、底径7.6cm、器高3.9cmを測り、褐色を呈し、胎土中には白色粒子・白色針状物質を含む。155は底部に回転ヘラケズリが施される。底径6.6cmを測り、赤褐色を呈し、胎土中には白色針状物質を含む。157は土師器台付甕の底部の破片で、外面はヘラケズリ及びナデ、胴部内面はヘラナデ、脚部内面はナデによって調えられている。底径7.1cmを測り、暗茶褐色を呈し、胎土中には赤色粒子・白色粒子・白色針状物質を含む。158～161は須恵器坏である。158は体部下端に稜を有し、体部下端から底部には回転ヘラケズリが施される。口径13.0cm、底径7.4cm、器高3.2cmを測り、灰色を呈し、胎土中には白色粒子・白色針状物質を含む。160は底部を欠くが、体部下端に回転ヘラケズリが施される。口径12cmを測り、灰色を呈し、胎土中には白色粒子を含む。161は底部回転ヘラケズリ調整である。底径9.2cm、器高2.5cmを測り、灰色を呈し、胎土中には雲母粒子を多量に含む。160は体部下端から底部に手持ちヘラケズリが施される。底径9.1cmを測り、灰色を呈し、白色粒子・雲母粒子を多量に含む。162は須恵器長頸壺の胴部下端から底部である。高台は貼り付け後、周縁はナデられている。底径11.6cm、灰色を呈し、黒色微粒子を多量に含む。163は須恵器甕の胴部破片で、外面はタタキ目、内面にはヘラナデが施されている。青灰色を呈し、胎土中には白色粒子を含む。149・151・154・157～162が８世紀後葉、150・152・153・155・156は９世紀前葉から中葉の所産である。

164～169はSK33から出土したものである。164は土師器坏である。内外面とも剝落が著しいが、横方向のヘラケズリが施される。橙褐色を呈し、胎土中には赤色粒子・白色粒子・白色針状物質を含む。165は須恵器高台付坏で、高台内はヨコナデが施されている。口径13.3cm、底径8.9cm、器高4.4cmを測り、灰色を

呈し、胎土中に白色粒子・白色針状物質を含む。166・167は土師器甕である。166は頸部が大きくくびれる甕で、口縁端部が外方につまみ出される。胴部外面は縦方向のヘラケズリ、内面はヘラナデが施される。口径20.8cm、器高15.1cmを測り、茶褐色を呈し、胎土中には赤色粒子・白色針状物質を含む。167・168は口縁部から胴部上端の破片で、167は口径24cm、橙褐色を呈し、胎土中には白色粒子・赤色粒子を含む。168の口縁端部はつまみ上げられ、ヨコナデによって沈線状をなしている。口径21.9cm、器高5.1cmを測り、橙褐色を呈し、胎土中には白色粒子・赤色粒子を含む。169は小形の甕で、口縁端部は外方につまみ出され、胴部外面は縦方向のヘラケズリ、内面は横方向のヘラナデが施されている。口径15cm、橙褐色を呈し、胎土中には白色粒子・小石を含む。8世紀後葉から末葉の所産である。

170・171はSK37から出土したものである。170は須恵器坏の口縁部から体部にかけての破片である。口径12cmを測る。171は須恵器高台付坏の底部で、底径8.4cmを測り、濃灰色を呈し、胎土中には白色粒子・白色針状物質を含む。8世紀後葉の所産である。

172・173はSK38から出土した土師器坏で、173は偏平な半球形を呈するものと思われ、体部外面には横方向のヘラケズリが施される。口径14.8cmを測り、橙褐色を呈し、胎土中には白色粒子・赤色粒子を含む。172は平底で、体部との境に明瞭な稜を有するものである。体部外面には横方向のヘラケズリが施される。口径14cm、底径6.7cm、器高4.6cmを測り、明褐色を呈し、胎土中には赤色粒子・白色針状物質を含む。173は8世紀前葉、172は8世紀後葉の所産である。

174・175はSK59から出土したものである。174は土師器坏で、体部がヨコナデ、体部下端から底部は回転ヘラケズリが施される。底部外面には「当」の墨書が記されている。底径6.2cmを測り、褐色を呈し、胎土中には白色粒子・白色針状物質を含む。9世紀中葉の所産である。175は須恵器甕の胴部破片で、灰色を呈し、胎土中には白色粒子を含む。

176はSK61から出土した須恵器高台付坏の底部である。内外面ともヨコナデが施されている。底径6.8cmを測り、灰色を呈し、胎土中には黒色粒子を含む。8世紀末葉から9世紀初頭の所産である。

177～203はSK62から出土したものである。177・178は須恵器坏で、177は体部が直線的に開く偏平なもので、底部回転ヘラケズリが施され、内面には火襷痕が見られる。口径13cm、底径9.6cm、器高2.9cmを測る。色調は灰色を呈し、胎土中には白色粒子・白色針状物質を含む。178は体部と底部の境が丸みを有し、底部は回転ヘラケズリが施される。口径11.9cm、底径7.4cm、器高3.7cmを測る。白灰色を呈し、胎土中には白色粒子を含む。179は須恵器高台付埦の底部破片である。底径は10.8cm、灰色を呈し、胎土中には白色粒子・白色針状物質を含む。180は須恵器高台付盤である。口縁部と体部との境には内外面とも稜を有し、口縁端部はやや外反する。体部下半から底部は回転ヘラケズリが施される。高台は貼り付け後、周縁にヨコナデが加えられるが、体部との境に稜を有する。口径18.4cmを測り、灰色を呈し、胎土中には黒色粒子・雲母粒を含む。181～190は土師器坏で、181～190は体部外面がヘラケズリ及びナデ、内面にナデが施されるもので、181は口縁直下から底部まで外面はヘラケズリ、内面はナデが施される。口径15.5cm、底径7.3cm、器高5.6cmを測る。褐色を呈し、赤色粒子を含む。186は体部と底部の境に稜を有し、外面は横方向のヘラケズリが施される。口径15.5cm、底径10.3cm、器高5.4cmを測る。橙褐色を呈し、白色粒子を含む。189は口縁部が弱く外反するもので、外面は横から斜め方向のヘラケズリが施される。口径14cm、底径7.6cm、器高5cmを測り、橙褐色を呈し、白色粒子・赤色粒子を含む。182・183は体部外面はヘラケズリ、内面はナデが施される。182は体部と底部の境に巻き上げの際の接合の痕跡と思われる段を有する。口径13.7cm、

底径7.3cm、器高4.0cmを測り、暗褐色を呈し、胎土中には赤色粒子を含む。183は口径13.1cm、底径7.5cm、器高4.1cmを測り、暗褐色を呈し、胎土中には白色粒子を含む。184・188・190は小形の坏で、いずれも器面の剝落が著しいが、外面へラケズリが施される。184は口径11.2cm、底径6.6cm、器高3.1cmを測り、橙褐色を呈し、赤色粒子を含む。188は口径11.8cm、底径6.8cm、器高3.1cmを橙褐色を呈し、胎土中には赤色粒子を含む。190は口径12cm、底径8.2cm、器高3.1cmを測り、赤褐色を呈し、胎土中には白色針状物質を含む。191は赤彩盤状坏で、体部下端から底部には手持ちへラケズリが施される。底径8.6cmを測り、胎土中には赤色粒子を含む。185・187は口縁部から体部がヨコナデされる坏で、185は体部下端から底部にへラケズリが加えられ、口径12.1cm、底径6.6cm、器高3.9cmを測り、橙褐色を呈し、胎土中には白色粒子を含む。187は底部に手持ちへラケズリ、体部内面にナデが加えられる。底径6.9cm、褐色を呈し、胎土中には白色針状物質を含む。192・193は須恵器蓋で、192は擬宝珠形のつまみの部分である。灰色を呈し胎土中には白色針状物質を含む。193は口縁端部がやや外方に開くもので、上半は回転へラケズリが施されている。口径18.4cmを測り、灰褐色を呈し、胎土中には白色粒子・白色針状物質を含む。194は須恵器甕の口縁部である。口縁帯と凸帯を有するものである。口径23cmを測り、灰色を呈し、胎土中には白色粒子を含む。195～198は土師器甕である。195は口縁部と体部との境がくの字にくびれるもので、胴部外面は縦方向のへラケズリ、内面は横方向のへラナデが施される。口径22.1cmを測り、茶褐色を呈し、胎土中には赤色粒子を含む。196は最大径を胴部に有する甕で、口縁端部に沈線を有し、方形の口縁帯状を呈するものである。口径16cmを測り、茶褐色を呈し、胎土中には白色粒子を含む。198は小形の甕で、直立気味に外傾する口縁部と胴部との境には稜を有するものである。胴部外面上部は横ないしは斜め方向のへラケズリ、内面は横方向のへラナデが施される。口径11.7cmを測り、茶褐色を呈し、胎土中には白色粒子・白色針状物質を含む。197は底部破片で、外面は縦方向のへラケズリ、内面はへラナデが施される。底径6.5cmを測り、暗茶褐色を呈し、胎土中には赤色粒子・白色粒子を含む。199～203は須恵器甕の胴部破片である。200は外面に格子状のタタキ目、199は内面にへラナデ、200・201・203は内面に同心円状の当て具痕が見られる。色調は199が暗灰色を呈する以外は灰色で、胎土中にはいずれも白色粒子を含み、201は白色針状物質も含むものである。185・187が9世紀中葉であるほかは8世紀中葉から後葉で、8世紀後葉が主体である。

204・205はSK62Bから出土した土師器の口縁部周辺の破片である。204は胴部外面に横方向のへラケズリ、及び指頭痕、内面にはへラナデが施される。口径23.0cm、暗褐色を呈し、胎土中には小石を含んでいる。205は口径10.9cm、暗褐色を呈し、胎土中には白色粒子・赤色粒子を含む。8世紀中葉の所産である。

206はSK62Cから出土した土師器坏である。磨滅が顕著で、調整が不明瞭である。外面にはへラケズリ、内面にはヨコナデが施され、内面の体部と底部境には稜を有する。口径15.4cm、底径9.5cm、器高5.5cmを測る。色調は橙褐色を呈し、胎土中には白色針状物質をわずかに含む。8世紀末葉の所産である。

207・208はSK62Eから出土したものである。207は土師器坏で、平坦な底部にやや丸みをもった体部で、外面はへラケズリ、内面は横方向のミガキが施される。口径12.6cm、底径6.9cm、器高4.1cmを測り、赤褐色を呈し、胎土内には白色針状物質を含む。208は土師器甕の底部で、外面はへラケズリ、内面はへラナデが施される。底径8.8cmを測り、橙褐色を呈し、胎土中には赤色粒子を含む。8世紀末葉の所産である。

209～215はSK63Aから出土したものである。209・210は土師器坏である。209は体部下端から底部は手持ちへラケズリが施される。口径13cm、底径6.8cm、器高4cmを測り、暗茶褐色を呈し、砂粒・赤色粒子を含む。210は底部回転へラケズリが施され、見込に「×」の焼成後の線刻がなされている。褐色を呈し、胎土

中には黒色粒子を含む。211は須恵器盤である。底部には回転ヘラケズリが施される。口径19.8cmを測る。212・213は須恵器甕もしくは甑の口縁部破片で、胴部外面にはタタキ目が施される。212は褐色で、胎土中には白色粒子を含む。213は黒褐色を呈し、砂粒を含んでいる。214は須恵器甕の胴部破片で、内面には縦方向のヘラナデが施される。灰色を呈し、胎土中には黒色粒子を含む。215は須恵器甕もしくは甑の胴部口縁部下の破片で、暗褐色を呈し、胎土中には白色粒子を含む。211が8世紀中葉、210が8世紀後葉であるほかは、9世紀中葉の所産である。

216～222はSK64から出土したものである。216・217・218は土師器坏で、216・218は体部下端から底部に手持ちヘラケズリ、217は回転ヘラケズリが施される。216は口径13.1cmを測る。217は底径6.6cmを測り、橙褐色を呈し、胎土中には白色粒子・白色針状物質を含む。218は橙褐色を呈し、胎土中には赤色粒子・白色針状物質を含む。219は土師器高台付埦の底部である。橙褐色を呈し、胎土中には赤色粒子・白色針状物質を含む。220は須恵器坏で、体部下端から底部にかけて回転ヘラケズリが施される。底径6.4cm、明褐色を呈し、胎土中には白色針状物質を含む。221・222は須恵器甕の胴部破片で、いずれも外面にタタキ目が施され、221は茶褐色を呈し、胎土中には白色粒子を含む。222の内面には同心円状の当て具痕が観察される。灰色を呈し、胎土中には黒色粒子を含む。9世紀前葉から中葉の所産である。

223・224はSK65から出土した土師器坏で、口縁部ヨコナデ後、外面はヘラケズリを施す。223は体部内面から底部はヨコナデで、口径12.2cm、底径7.2cm、器高4.2cmを測る。色調は橙褐色を呈し、胎土中には赤色粒子を含む。224は内面にナデを施す。口径12.2cm、底径8.8cm、器高3.9cmを測る。橙褐色を呈する。胎土中には白色粒子を含む。

225はSK69から出土した須恵器高台付埦である。底部回転糸切り後、外周回転ヘラケズリを施し、高台を貼り付けるものである。高台の付け根には弱い凸帯を有する。口径15.8cm、底径9.6cm、器高6.4cmを測り、灰色を呈し、黒色粒子・白色粒子・白色針状物質を胎土中に含む。8世紀後葉の所産である。

226はSK72から出土した須恵器坏で、底部には回転ヘラケズリが施される。灰色を呈し、胎土中には白色粒子・白色針状物質を含む。8世紀後葉の所産である。

227はSK98から出土した須恵器甕の胴部破片で、外面にはタタキ目が施され、灰色を呈し、胎土中には白色粒子を含む。

228～238はSK129から出土したものである。228・229は土師器坏である。228は体部外面に横方向、底部に一方向のヘラケズリが施される。口径13.6cm、底径8.4cm、器高3.5cmを測り、橙褐色を呈し、胎土中には白色針状物質を含む。229は口縁部から体部はヨコナデ、体部下端から底部に手持ちヘラケズリが施される。口径13cm、底径5.6cm、器高4.2cmを測り、暗茶褐色を呈し、白色粒子を含む。230は土師器高台付坏である。内外面ともヨコナデによって仕上げられ、高台端部は欠損しているが、足高高台状になると思われる。口径14.7cmを測る。茶褐色を呈し、白色粒子・白色針状物質を含む。231は須恵器坏である。底部は回転糸切り未調整である。底径6.6cmを測り、色調は灰褐色、胎土中には白色針状物質を含む。232は須恵器瓶の底部周辺である。胴部外面は回転ヘラケズリが施される。底径8.6cmを測り、暗灰色を呈し、白色粒子をわずかに含む。233～236は須恵器甕の胴部破片で、235・236は内面に同心円状の当て具痕が見られ、同一個体の可能性がある。いずれも灰色を呈し、白色粒子を含む。237・238は土師器甕で、類例の少ない大形のものである。237は胴部下半を欠き、復元実測した。237は胴部外面は縦及び斜め方向のヘラケズリ、底部外面は一方向のヘラケズリ、内面には横方向のナデが施される。口径31.8cm、底径10.1cmを測り、橙

褐色を呈し、胎土中には赤色粒子を多量に含む。238は磨滅が著しく、胴部外面には調整の痕跡をほとんど留めていないが、底部外面には植物の茎と思われる圧痕が残されている。内面は口縁部と胴部との境に横方向のナデによって稜が作出されている。口径30cm、底径10.8cm、器高36.3cmを測り、橙褐色を呈し、胎土中には赤色粒子・白色針状物質を含む。228・232・233～238は8世紀中葉から後葉、231は9世紀前葉、229・230は9世紀後葉に比定される。

239はSK131から出土した須恵器甕の胴部破片である。内面に同心円状の当て具痕が見られる。灰色を呈し、胎土中には白色粒子を含む。

240～250はSD1から出土したものである。240は土師器皿である。体部外面はヘラケズリ、口縁部から内面はヨコナデ後、ミガキが加えられる。口径18.1cm、底径7.9cm、器高3.3cmを測り、褐色を呈し、胎土中には赤色粒子を含む。241は偏平な半球形の坏で、体部下半から底部に手持ちヘラケズリを施す。口径13.4cmを測り、褐色を呈し、胎土中には白色針状物質を含む。242～245は須恵器高台付坏である。242は体部と底部の境に明確な稜を有し、高台は直線的で外側にあまりふんばらないものである。底径11.5cmを測り、灰色を呈する。243～245は体部と底部の境の稜が弱いか不明瞭なもので、244・245は高台が外側にふんばっているものである。243は底部外面に回転ヘラケズリが見られ、底径10.9cm、白灰色を呈し、胎土中には白色粒子を含む。244は口径14.9cm、底径11.4cm、器高4cmを測り、青灰色を呈し、胎土中には黒色粒子を含む。245は底径10cm、褐色で、赤色粒子を含む。246は須恵器蓋で、口縁部より下に突出しない痕跡的なかえりを持つものである。口径15.9cm、灰褐色を呈し、胎土中には雲母粒を含んでいる。247～250は須恵器甕の胴部破片で、247・250は内面に同心円状の当て具痕が認められる。いずれも灰色を呈し、247・250は黒色粒子、248・249は胎土中に白色粒子を含む。8世紀前葉の所産である。

251はSD2から出土した須恵器甕の口縁部から胴部上端である。口縁部は端部に口縁帯を有し、中位に沈線、胴部外面はタタキ目が施される。口径22.3cmを測り、灰色を呈し、胎土中には白色粒子を含む。8世紀後半の所産である。

252・253はSD8から出土した須恵器甕の口縁部破片で、いずれも口縁帯を有し、252は端部の下に凸帯を有する。252は口径18.6cmを測り、両方とも灰色を呈し、黒色粒子を含む。252は8世紀中葉、253は8世紀後葉の所産である。

254～256はSD10から出土したものである。254は須恵器高台付坏の底部である。全面にヨコナデが施される。青灰色を呈し、胎土中には白色粒子を多量に含む。255・256は須恵器甕の胴部破片である。255は橙褐色を呈し、胎土中には石英粒・小石を含む。256は灰色を呈し、外面には降灰釉が掛かっている。

257・258はSD13から出土したものである。257は須恵器高台付坏で、体部と底部の境に明瞭な稜を有する。底部は高台より下に突出するものと思われる。底径10.5cmを測り、灰色を呈し、黒色粒子をわずかに含む。8世紀前葉に比定される。258は口縁帯を有する須恵器甕の口縁部破片である。口径25.4cm、暗青灰色を呈し、胎土中には白色粒子を含む。8世紀後葉の所産である。

259はSD14から出土した須恵器坏で、底部回転糸切り未調整である。底径6.4cmを測り、白灰色を呈し、胎土中には白色針状物質を多量に含む。9世紀後葉の所産である。

260～276はSD20から出土したものである。260～271は土師器坏である。口縁部から体部にかけてヨコナデが施され、体部下端から底部に回転ヘラケズリが施されるもの（260・261・262・263）、底部のみに回転ヘラケズリが施されるもの（264）、体部下端から底部に手持ちヘラケズリが施されるもの（266）、底部の

みに手持ちヘラケズリが施されるもの（267・268)、底部調整が不明なもの（264・269)、体部外面に横方向のヘラケズリ、内面にナデが施されるもの（270・271）がある。260は口径12.3cm、底径7.3cm、器高3.9cmを測り、褐色を呈し、胎土中には白色粒子を含む。261は口径13.2cm、底径6.2cm、器高3.6cmを測り、橙褐色を呈する。胎土中には赤色粒子・白色針状物質を含む。262は口径13.5cm、底径5.4cm、器高3.8cmを測り、橙褐色を呈し、胎土中には白色粒子を含む。263は口径12.9cm、底径７cm、器高3.6cmを測り、橙褐色を呈し、胎土中には赤色粒子を含むものである。264は口径12.3cm、底径6.5cm、器高４cmを測り、橙褐色を呈し、胎土中には白色粒子・白色針状物質・赤色粒子を含む。266は口径12.7cm、底径6.1cm、器高4.1cmを測り、暗茶褐色を呈し、胎土中には赤色粒子を含む。267は口径13.4cm、底径7.9cm、器高4.8cmを測り、褐色を呈し、胎土中には白色粒子を含む。268は口径11.9cm、底径7.7cm、器高3.5cmを測り、暗褐色を呈し、胎土中には白色粒子を含む。264は口径13.5cm、底径７cm、器高3.4cmを測る。色調は橙褐色、胎土は赤色粒子を含む。269は口径13cmを測り、橙褐色を呈し、赤色粒子・白色粒子を含む。270は口径12.6cm、271は口径13.6cm、橙褐色を呈し、胎土中には白色粒子・赤色粒子・白色針状物質を含む。272～274は須恵器坏で、273・274は底部回転ヘラケズリ、272は体部下端から底部に手持ちヘラケズリが施される。273は底径８cm、灰色を呈し、胎土中には白色粒子・白色針状物質・雲母粒を含む。274は底径7.8cm、灰色を呈し、胎土中には白色粒子・白色針状物質を含む。272は底径6.6cm、灰色を呈し、雲母粒を含む。275は須恵器高台付坏で、底部が厚く、高台より下に大きく突出するもので、底径11.6cmを測り、灰色を呈し、胎土中には白色粒子をわずかに含む。276は須恵器長頸壺で、頸部下位の内面には絞り目が見られ、接合個所には段が認められる。灰色を呈し、胎土中には黒色粒子を含む。外面には淡緑色の灰釉がかかっている。270・271・275は８世紀前葉、273・274は８世紀後葉、276は８世紀代、260・265・268は９世紀前葉、264・266・272は９世紀中葉、261・262・263・272は９世紀後葉に比定される。

277～284はSD25Aから出土したものである。277は土師器坏の底部で、底部回転糸切り未調整である。底径６cmを測り、褐色を呈する。278は須恵器短頸壺の口縁部周辺である。外面には暗緑色の釉が掛かっている。279～284は須恵器甕で、279・280は口縁部破片で、横方向に回転カキ目を施した後、２重の沈線で区画した中に斜め方向の刺突文を施すものである。灰色を呈し、胎土中には白色粒子を含む。281～284は胴部破片で、283・284は内面に同心円状の当て具痕が見られる。282が暗灰色である以外は白灰色を呈し、281が黒色粒子を含む以外は白色粒子を胎土中に含んでいる。277が９世紀後葉に比定されるほかは８世紀後葉の所産である。

285はSD25Bから出土した須恵器甕の胴部破片で、外面にはタタキ目、内面には同心円状の当て具痕が見られる。灰色を呈し、黒色粒子を含む。

286はSD26から出土した須恵器瓶の底部周辺の破片である。底径7.9cmを測り、灰色を呈し、胎土中には黒色粒子を含む。８世紀後葉の所産である。

287～289はSD27から出土したものである。287は須恵器瓶の底部周辺の破片である。底径８cm、灰色を呈し、胎土中には黒色粒子を含む。９世紀前葉に比定される。288・289は須恵器甕の胴部破片で、外面には格子状のタタキ目、内面には同心円状の当て具痕が見られる。288は青灰色、289は灰色を呈し、いずれも胎土中には白色粒子を含む。

290～298はSD28から出土したものである。290は土師器坏の体部下端から底部で、外面には手持ちヘラケズリが施される。底径7.3cmを測り、橙褐色を呈し、胎土中には赤色粒子を含む。８世紀後葉の所産であ

る。291～298は須恵器甕の胴部破片で、291～295は内面に同心円状の当て具痕が見られる。296は底部付近である。296が暗灰色を呈し、胎土中に黒色粒子を含む以外は白灰色を呈し、胎土中に白色粒子を含むものである。

299～303はSD30から出土したものである。299は土師器坏の体部下端から底部破片で、底部外面は回転糸切り未調整である。底径6.1cmを測り、褐色を呈し、赤色粒子を胎土中に含む。9世紀後葉の所産である。300・301は須恵器甕である。301は口縁部の破片で、回転カキ目を施した後、2重沈線及び刺突文を施すものである。灰色を呈し、胎土中に白色粒子を含んでいる。300・302・303は胴部破片で、302・303は内面に当て具痕が見られる。色調はいずれも灰色を呈し、300は黒色粒子、302・303は白色粒子を含む。

304～308はSD31から出土したものである。304は須恵器高台付坏の底部周辺の破片である。白灰色を呈し、胎土中に黒色粒子を含む。305は須恵器鉢で、口縁端部が肥厚するものである。白灰色を呈し、胎土中にわずかに雲母粒を含むものである。306は口縁帯を有する須恵器甕の口縁部破片である。灰色を呈し、胎土中には白色粒子を含むものである。307・308は須恵器甕の胴部破片で、いずれも内面に同心円状の当て具痕が見られる。色調は灰色を呈し、胎土中には黒色粒子を含んでいる。8世紀後葉の所産である。

309はSD37から出土した土師器甕の胴部下端から底部である。外面にはヘラケズリ、内面にはヘラナデが施される。色調は褐色、胎土中には白色粒子を含んでいる。

310はSD57から出土した灰釉陶器皿で、高台は貼り付けによるもので、角張ったものである。素地は灰色を呈する。内面は灰釉が全面に刷毛塗りされ、トチン跡がみられる。猿投窯の黒笹14号窯式に相当するもので、9世紀前葉から中葉に比定される。

311はSD74から出土した須恵器甕の胴部破片で、外面にはタタキ目が施され、黒灰色を呈し、胎土中には黒色粒子を含んでいる。

312～316はSD102から出土したものである。312は土師器坏で、体部下端から底部に手持ちヘラケズリが施される。茶褐色を呈し、胎土中には赤色粒子・白色針状物質を含んでいる。9世紀後葉に比定される。313は須恵器高台付埦で、体部は直線的に開き、箱型を呈するものである。底部は全面回転ヘラケズリが施される。底径10.4cmを測り、灰色を呈し、胎土中には黒色粒子を含む。8世紀中葉に比定される。314は須恵器蓋で、擬宝珠形のつまみが付されるもので、灰色を呈し、胎土中には黒色粒子を含んでいる。315は須恵器甕の口縁部破片で、櫛描波状文が施されている。316は須恵器甕の胴部破片で、内面には縦方向のヘラナデが施されている。灰色を呈し、胎土中には黒色粒子を含んでいる。

317はSD105Aから出土した須恵器甕の胴部破片で、外面にはタタキ目が施され、内面にはヘラナデが施される。色調は灰色、胎土中には白色粒子・黒色粒子を含む。

318はSD115から出土した須恵器甕の胴部破片で、外面にはタタキ目が施される。白灰色を呈し、胎土中には黒色粒子を含むものである。

319・320はSD125から出土したものである。319は体部と底部の境に稜を有し、底部が平坦な土師器坏で、体部外面から底部には手持ちヘラケズリ、内面にはミガキが施される。口径12.4cm、底径7.9cm、器高3.9cmを測り、褐色を呈し、胎土中には赤色粒子・白色粒子を含む。320は須恵器高台付坏の底部周辺で、底部は回転ヘラケズリが施され、底径9.2cm、灰色を呈し、胎土中には白色針状物質・白色粒子・黒色粒子を含む。8世紀後葉の所産である。

321はSD127から出土した須恵器高台付埦で、底部回転ヘラケズリが施される。灰色を呈し、胎土中には

白色粒子を含む。8世紀後葉の所産である。

322はSD134から出土した須恵器長頸瓶の口縁部破片で、口縁帯を有するものである。口径11.6cm、灰色を呈し、胎土中には黒色粒子を含む。8世紀中葉の所産である。

323はSD135から出土した土師器甕の底部周辺の破片で、外面には手持ちヘラケズリが施される。底径6.2cmを測り、褐色を呈し、胎土中には白色粒子・白色針状物質を含む。

324はSD138から出土した須恵器甕で、短い口縁部は口縁帯を有し、口縁下には凸帯を有する。胴部はヨコナデが施されている。口径12.8cmを測り、灰色を呈する。8世紀前葉から中葉の所産である。

325～330はSX1から出土したものである。325・326は土師器坏で、体部から底部には手持ちヘラケズリ、内面にはミガキが施される。325は口径12.9cm、底径8.2cm、器高3.6cmを測る。色調は褐色で、胎土中には赤色粒子を含む。326は口径13.9cm、底径9cm、器高3.1cmを測り、茶褐色を呈し、胎土中には赤色粒子・白色粒子・白色針状物質を含む。327は土師器鉢で、体部上半は縦方向、下半は横方向のヘラケズリが施される。口径18.2cmを測り、褐色を呈する。328は須恵器高台付埦の体部から底部破片である。色調は灰色である。329は土師器甕の胴部下端から底部である。底径9.3cmを測り、褐色を呈する。330は須恵器長頸瓶の頸部で、灰色を呈する。8世紀中葉に比定される。

331・332はSX18から出土した土師器坏で、332は底部が平底で、体部外面から底部には手持ちヘラケズリが施される。口径12.4cm、底径7.1cm、器高4.8cmを測る。橙褐色を呈し、胎土中には赤色粒子・白色針状物質を含む。331は外面は磨滅が著しく、調整は不明である。内面はヨコナデが施される。口径10.5cm、底径6.0cm、器高4.2cmを測り、色調は橙褐色を呈し、胎土中には赤色粒子を含む。8世紀後葉の所産である。

333～345はグリッド出土のものである。333・334は土師器坏で、333は半球形を呈し、体部外面はヘラケズリ、内面にはナデ及びミガキが施される。口径13.3cm、橙褐色を呈し、胎土中には白色粒子・赤色粒子を含む。8世紀前葉の所産である。334は口縁部から体部にかけてヨコナデが施される。335～340は須恵器坏で、337・340は底部は回転ヘラケズリ、336・338は底部外面回転糸切り後、外周に回転ヘラケズリが施される。339は体部下端から底部に手持ちヘラケズリが施される。335・336には火襷痕が見られる。335～338は灰色を呈し、胎土中には白色粒子・白色針状物質・黒色粒子を含む。335は口径12.2cm、336は底径8.3cm、337は底径8.7cm、338は底径8cmを測る。340は口径13.5cm、底径8.2cm、器高4.1cmを測り、褐色を呈し、胎土中には白色針状物質を含む。339が9世紀中葉に比定されるほかは8世紀後葉の所産である。341は須恵器鉢で、内面から体部外面はヨコナデが施され、底部回転糸切り未調整である。底径12.2cmを測り、橙褐色を呈し、胎土中には白色粒子・赤色粒子を含む。8世紀後葉の所産である。342は須恵器長頸瓶で、底径9.4cmを測り、白灰色を呈する。9世紀前葉の所産である。343は土師器甕で、口縁部はやや外方につまみ出され、外面には縦方向のヘラケズリ、内面にはヘラナデが施される。口径23.8cm、暗褐色を呈し、胎土中には長石粒・赤色粒子を含む。8世紀中葉の所産である。344・345は須恵器甕の胴部破片である。いずれも灰色を呈し、344は黒色粒子、345は白色粒子を胎土中に含む。

5　中・近世の陶磁器（第109～121図、図版33～40）

1はSK86から出土した焙烙の破片で、外面は炭素吸着によって黒色、内面は褐色を呈する。口縁部から体部内面はヨコナデ、体部外面には型と思われる圧痕が見られる。

2～13はSD1から出土したものである。2～5は焙烙で、いずれも器表面には炭素吸着が施され、黒褐色を呈する。2・3は内耳が付される部分の破片である。4・5は深身で、体部から口縁部が直線的なものである。6は瀬戸美濃系陶器灯明皿である。6は油皿で、体部下端から底部には回転ヘラケズリ調整される。口縁部から内面には灰釉が施される。内面にはトチン跡が3か所見られる。19世紀代の所産であろう。7は陶器灯明皿で、台脚を有する桟付の受皿の破片で、素地は褐色で透明釉が施され、桟端部は拭い取られる。前面に細かい貫入を有する。19世紀代の京都・信楽系とみられる。8は瀬戸美濃系陶器徳利である。肩に沈線を有し、外面には灰釉が施される。9は土鍋の底部で、外面は回転ヘラケズリが施され、高台は削り出しによるものである。内面には灰釉が施される。外面には焦げ跡が見られる。10～12は肥前系磁器である。10・11は染付端反碗で、11は見込に「寿」銘が記されている。12は染付中皿である。いずれも18～19世紀に比定される。13は瀬戸美濃系磁器染付蓮華で、下半部は露胎である。19世紀代に比定される。

14はSD2から出土した陶器鉢で、無釉で外面は暗赤褐色を呈する。外面の文様は型押しによるものである。

15～18はSD3から出土したものである。15は陶器甕で、全面に柿釉が施される。笠間・益子系と見られ、19世紀代に比定される。16は堺産の無釉焼き締め陶器の擂鉢である。暗赤褐色を呈する。19世紀代の所産である。17は肥前系磁器の染付蓋物で、端部から口縁部内面は露胎である。18は瀬戸美濃系磁器染付手塩皿で、内外面とも型によって成形されている。高台の平面形は正方形で、畳付は露胎である。

19～87はSD10から出土したものである。19は土鍋で、口縁端部をつまみ出しており、沈線状をなしている。口径29.6cmを測り、外面には焦げ跡が見られる。20～23はかわらけで、20～22は明褐色を呈し、口径は20が5.5cm、21が5.3cm、22が8.9cmを測る。底部はいずれも回転糸切り痕を残している。23は体部と底部の境に接合痕が見られる。口径10.9cm、底径6.4cm、器高3cmを測り、褐色を呈し、胎土中には長石粒を含む。底部は回転糸切り痕を残している。24は瓦質の火鉢で、外面口縁下には沈線を有する。25は瓦質の植木鉢である。26・27は瓦質の蓋で、26はつまみを欠損する。26は内外面に炭素吸着が施され、黒色を呈する。外面は研磨されている。28～41は焙烙で、いずれも内側に内耳が付き、体部から底部には型と思われる圧痕が見られる。28～32は口径33cm～34.8cmで、34.5cm前後が多い。底部は平底であるが、体部が外側に開くものである。33～35は形態は前者と同じであるが、口径が36cm前後を測るものである。37～40は体部が立ち上がりが垂直に近いもので、口径32cm前後のもの（37～39）と37cmのもの（40）に分かれる。41は常滑こね鉢で、体部外面はヘラナデが施される。15世紀代の所産であろう。42は常滑甕の胴部破片である。43は陶器甕の胴部下端から底部にかけての破片で、斜め方向のタタキ目が施される。表面は濃灰色を呈する。44～51・54・55・59～62は瀬戸美濃系陶器である。44は端反碗で、体部は丸みを帯び、口縁部は外反する。高台は削り出しによるものである。体部外面下端以外は灰釉が施される。古瀬戸後期様式第IV期前後（15世紀後半）に相当すると思われる。45は挟み皿で、底部は回転糸切りが残され、無釉である。16世紀後半に位置付けられる。46～49は灯明皿である。46～48は油皿で、46・47は内面から体部外面上端は灰釉が施される。見込にトチン跡が見られる。19世紀中葉の所産である。48は全面に錆釉が施され、体部下端から底部は拭い取られる。見込には環状の溶着痕が見られる。口縁部には油煙痕が付着している。18世紀後半の所産である。49は桟付の受皿で、桟部の立ち上がりは低く、切り込みは深い。全面に錆釉が施されるが、体部下端から底部は拭い取られている。50は陶器香炉で、偏平な三足が付される。内面から

体部外面にかけて灰釉が施される。瀬戸本業焼編年の香炉II類に相当するもので、第5期（18世紀第1四半期）に比定される。内面から体部外面に透明釉が施されている。51は練鉢である。高台は削り出しによるもので、底部周辺を除いて灰釉が施される。本業焼編年の9・10期（19世紀前半）に位置づけられよう。54は徳利の底部周辺で、高台は削り出しによるものである。外面は全面に灰釉が施釉されるが、胴部下端から底部は拭い取られる。18世紀前半に位置づけられる。55は片口II類の口縁部で、灰釉が施される。本業焼編年第8・9期（18世紀第4四半期～19世紀第1四半期）に相当する。59～62は擂鉢で、61・62は回転糸切り痕が残されている。58・59は鉄釉、60は柿釉、それ以外は錆釉が全面に施される。62は体部下端から底部は拭い取られる。57・58は本業焼編年第5期頃（18世紀前葉）、59は第8期（18世紀第4四半期）に相当する。63～68は堺産陶器擂鉢で、64～66は赤褐色ないしは暗赤褐色を呈し、硬く焼き締まっている。63・68は橙色、67はにぶい赤褐色を呈し、やや焼きが甘い。64・65は18世紀中頃、63・66・68は18世紀後半、67は19世紀の所産と思われる。52・53は京都・信楽系陶器の小杉茶碗である。高台は削り出しによるもので、素地は褐色を呈し、きめ細かいものである。56は行平土鍋の把手である。69は全面に鉄釉が施され、内面は拭い取られる擂鉢で、擂目の間隔はひじょうに細かいものである。素地は褐色を呈し、軟質である。笠間・益子系と思われる。70・71は赤褐色ないしは暗赤褐色を呈する無釉の陶器鉢である。胴部外面の文様は型押しによるものである。72は土師質の焜炉の入れ子状に設ける漏斗形の内部施設の破片である。内面は熱を受けており、やや白色化している。下部には孔が穿たれており、上部には外部施設への接合のためと考えれれるヘラ状工具による縦及び横方向の削痕が見られる。19世紀前半の所産である。73～83は肥前系磁器である。73・74は染付碗で、73はいわゆる「くらわんか手」といわれるものである。18世紀に位置づけられる。74は端反形の染付碗で、19世紀前半のものである。76～78は染付湯飲み碗で、76は筒型の染付碗で見込みにはコンニャク印判による五弁花文が押されている。18世紀後半の所産である。75は染付蓋で、広東碗と対になるものである。19世紀前半の所産である。77・78は丸型の染付碗で、79は染付そば猪口で、18世紀末から19世紀前半の所産である。81は染付小皿で、見込にはコンニャク印判による五弁花文が押されている。18世紀代の所産である。82は染付大皿である。80は白磁仏飯器である。83は染付筒型水注の肩付近である。84～87は瀬戸美濃系磁器である。84・86は染付端反碗、87は染付碗、85は染付小坏である。19世紀代の所産である。

88・89はSD25Aから出土したものである。88は瀬戸美濃系陶器丸皿で、高台は削り出し輪高台で、全面に濃灰色の志野釉が施される。本業焼編年の3・4期（17世紀後半）に相当する。89は瀬戸美濃系陶器擂鉢の体部下端付近の破片で、全面に錆釉が施され、外面下端部は拭い取られている。

90～111はSD25Bから出土したものである。90・91はかわらけで、90は口径5.5cm、91は口径6.9cmを測る。いずれも底部に回転糸切り痕が残されている。92～94は素焼きの焙烙で、92・93の体部は丸みを帯びており、やや94は直線的である。いずれも体部外面に型と思われる圧痕が見られ、外面は茶褐色、内面は褐色を呈する。95～100は瀬戸美濃系陶器である。95は灯明皿の油皿で、全面に錆釉が施され、体部から底部は拭い取られる。底部には環状の溶着痕が見られる。18世紀後半のの所産である。96は小碗で、体部下端から底部にかけて回転ヘラケズリが施される。素地は褐色で、内面から体部上半に透明釉が施される。97は香炉もしくは筒型碗と思われ、内面から体部外面に灰釉が施される。98・99は徳利で、98は頸部から肩付近の破片である。内外面とも灰釉が施される。99は体部下端から底部周辺の破片である。高台は削り出しによるもので、外面に灰釉が施されるが下端から底部は拭い取られる。100は平面形が正方形の蓋で、

孔が1か所穿たれており、頂部にはつまみが付されるが、欠損する。外面には錆釉が付されている。101は瓦質の火鉢である。102～109は肥前系磁器である。102は染付広東碗、103・104は染付端反碗である。105は染付蓋で、104の碗と対になるものである。以上は19世紀前半の所産である。106は筒型の湯飲み碗で、18世紀後半の所産である。107は丸型の染付湯飲み碗である。108は染付小皿で、18世紀後半に位置付けられる。109は染付水滴で、型押し成形で、上面には孔、底部内外面には布目が見られる。18世紀後半から19世紀前半のものである。110・111は瀬戸美濃系磁器染付広東碗で、19世紀代の所産である。

112・113はSD26から出土したものである。112は瀬戸美濃系陶器反り皿で、直線的な体部から口縁部は外反し、体部と底部の境に明瞭な稜を有する。高台は削り出しによるものである。17世紀後半に位置付けられる。113は肥前系磁器染付稜花皿で、見込にはコンニャク印判による五弁花文、高台内には「渦福」の銘が見られる。

114～116はSD28から出土したものである。115は瀬戸美濃系陶器輪禿皿である。高台は貼付けによるもので、貼付け後に体部下端から底部にかけて回転ヘラケズリが施される。内面から体部上半にかけて灰釉が施される。見込には重ね焼きの際の環状の溶着痕が残る。本業焼編年第3・4期（17世紀後半）に相当するものである。114は瀬戸美濃系陶器擂鉢の口縁部破片で、全面に錆釉が施される。本業焼編年第6・7期（18世紀第3・4四半期）に相当すると考えれる。116は堺産の陶器擂鉢の体部下端から底部周辺の破片である。

117～125はSD29から出土したものである。117～119は瀬戸美濃系陶器である。117は丸皿で、削り出し高台のものである。全面に濃灰色の長石釉が施され、高台内は拭い取られる。内面にはトチン跡が見られる。18世紀前半の所産であろう。118は小坏の底部で、高台は貼付けによるものである。内面には透明釉が施される。18世紀後半から19世紀前半の所産であろう。119は茶入で、底部は回転糸切り痕が残される。素地は赤褐色を呈し、外面には錆釉が施される。120・121は堺産陶器擂鉢で、18世紀後半の所産である。122～124は肥前系磁器である。122は染付碗で、「くらわんか手」のもので、18世紀に位置付けられる。123は染付蓋物の破片で、口縁端部付近の無釉である。124は蛇の目凹型高台の染付小皿で、18世紀後半から19世紀前半の所産である。125は瀬戸美濃系磁器染付端反碗で、19世紀代のものである。

126はSD30から出土した常滑甕の胴部下端から底部の破片である。

127～131はSD31から出土したものである。127は唐津肥前系陶器大鉢の口縁部破片である。内面の文様は象嵌によるものである。18世紀代後半の所産である。128・129は瀬戸美濃系陶器である。128は丸皿で、高台は削り出しによるもので、全面に志野釉が施されるが、高台内は拭い取られている。内面にはトチン跡が残り、全面に細かい貫入が見られる。本業焼編年第5期（18世紀第1四半期）に相当するものである。131は擂鉢の体部下端から底部の破片である。底部は回転糸切り痕が残され、全面に錆釉が施される。内面とも虫喰いが著しい。129は陶器端反形の湯飲み碗で、素地は白灰色を呈する。高台付近以外は灰釉が施されており、細かい貫入が見られる。京都・信楽系と見られる。130は瀬戸美濃系白磁小碗で、畳付以外は全面に施釉される。

132～134はSD56から出土したものである。132は古瀬戸瓶子II類の底部で、外面は回転ヘラケズリが施される。体部外面上部は灰釉が施される。底径11.3cmを測り、古瀬戸後期様式（15世紀代）に属するものと考えられる。133は瀬戸美濃系陶器擂鉢の体部下端から底部破片である。底部外面には回転糸切り痕が残されている。134は瀬戸美濃系陶器瓶掛の胴部破片で、外面は黄瀬戸釉、内面は鉄釉が施される。18世紀後

半から19世紀前半の所産である。

135～137はSD57から出土したものである。135は古瀬戸緑釉小皿で、体部内面から外面上部にかけて灰釉が施される。底部外面には回転糸切り痕が残されている。137は古瀬戸天目茶碗で、口縁部の外反は弱いものである。体部下端以外には鉄釉が施される。古瀬戸中期様式III期から後期様式Ⅰ期に相当すると考えられ、14世紀後葉から15世紀前葉に比定される。136は在地系の秉燭である。内面中央には切り込みを有する突起がある。底部には回転糸切り痕が残されている。素地は軟質で明橙色を呈し、全面に透明釉が施される。

138・139はSD70から出土したものである。138は筒形を呈する入れ子状の焜炉の内部施設である。土師質で明褐色を呈する。遺存部の中位で外側に屈曲し、その上には孔が穿たれている。内面は火を受けており、部分的に灰色を帯びている。139は陶器擂鉢で、高台は貼付けによるもので、周辺は回転ヘラケズリが施されている。体部外面には柿釉が施されている。19世紀代の笠間・益子系と見られる。

140はSD82から出土したかわらけで、底部には回転糸切り痕が残されている。口径6.2cm、底径4.2cm、器高1.3cmを測り、橙色を呈する。

141はSD86から出土した堺産の無釉の陶器擂鉢で、赤銅色を呈する。19世紀代の所産である。

142はSD87から出土した常滑甕の肩付近の破片である。

143～148はSD88から出土したものである。145～147は瀬戸美濃系陶器である。145・147は鉄絵鉢である。高台は貼付けによるもので、全面に志野釉が施される。内面には円錐ピン跡が残されている。17世紀代の所産である。146は片口の体部下端から底部で、全面に鉄釉を施した後、高台周辺は拭い取っている。高台は貼付けによるものである。19世紀前半のものである。144は唐津肥前系陶器皿の体部下端から底部である。素地は灰褐色を呈し、高台周辺を除いて青緑釉が施されるが、見込の釉は蛇の目状に剝ぎ取られている。17世紀後半の所産である。148は堺産陶器擂鉢の体部上部の破片である。143は瀬戸美濃系磁器染付小碗である。19世紀代の所産である。

149～156はSD96から出土したものである。149は常滑こね鉢の体部破片である。外面はヘラナデが施され、使い込まれており、内面は磨滅している。褐色を呈し、胎土中には石英粒を多量に含む。150・151は焙烙である。150は体部下半が遺存しており、深身で、丸みを持っている。口径は150が39.8cm、151が38.4cmを測る。152～154は瀬戸美濃系磁器である。152は染付端反碗、153は染付仏飯器、154は丸型の湯飲み碗である。153の畳付は露胎である。いずれも19世紀代の所産である。155は堺産陶器擂鉢の体部破片である。156は瀬戸美濃系陶器擂鉢の体部下半から底部である。底部外面は回転糸切り痕が残されている。全面に鉄釉が施されるが、体部下端は拭い取られている。使い込まれており、底部内面は磨滅している。

157～159はSD97から出土したものである。157は常滑甕の口縁部破片で、暗灰色を呈する。14世紀代の所産である。158は湯飲み碗で、外面には鉄絵が描かれている。高台周辺以外は透明釉が施されている。京都・信楽系と見られ、18世紀代に位置付けられる。159は瀬戸美濃系陶器碗の破片である。体部外面の文様は型押しによるものである。内外面とも鉄釉が施されている。

160・161はSD102から出土したものである。160は常滑甕の口縁部破片である。暗灰色を呈する。13世紀後半の所産と考えられる。161は常滑甕の胴部下端から底部である。体部外面は縦方向のヘラナデが施される。暗灰色を呈する。

162・163はSD111から出土したものである。162は在地系の桟付の灯明皿で、脚を持つものと推測される。

橙色を呈し、内外面に透明釉が施されている。163は焙烙の内耳付近の破片である。

164～166はSD124から出土したものである。164・165は瀬戸美濃産陶器である。164は灯明皿の油皿で、全面に錆釉が施されるが底部周辺は拭い取られる。18世紀後半の所産である。165は油注で、把手は欠いている。外面は全面、内面は流し掛けによって、部分的に錆釉が施される。166は唐津肥前系陶器大鉢の体部下半から底部である。内面は灰釉が施され、重ね焼きの際の砂目が付着する。18世紀代の所産である。

167～188はSD125から出土したものである。167は土鍋もしくは焙烙の内耳付近の破片である。内耳は紐状で細く、土師質で全体的に褐色を呈する。169は箱型で土師質の火鉢の口縁部破片で、端部は内側につまみ出している。168～172は焙烙で、外面は黒褐色、内面は褐色を呈する。170・171は口径34.0cm、172は口径35.6cmを測る。173は瓦質の蓋で、炭素吸着により黒色を呈し、外面は研磨されている。174は常滑こね鉢の口縁部破片で、口縁端部が上下に突出し、体部外面はナデが施される。15世紀後半の所産である。175・179・182は京都・信楽系陶器である。175は碗で、高台は張り付けによるものであり、端部は方形に面取り成形がなされている。高台周辺を除いて透明釉が施され、細かな貫入が見られる。18世紀代中葉の所産と考えられる。179は脚台を有する灯明皿で、桟部の切り込みは半円形を呈し、浅く広い。桟部から外面は底部を除いて灰色の長石釉が施され、細かい貫入が見られる。底部には環状の溶着痕が認められる。19世紀代の所産である。182は水注で、把手は欠損する。体部内面上端から外面にかけて灰色の長石釉が施される。18世紀末から19世紀の所産である。176～178・180・183は瀬戸美濃系陶器である。176は丸碗で、高台は貼付けによるものである。高台周辺を除いて灰釉が施される。18世紀代の所産と考えられる。177は高台周辺を除いて灰色の長石釉が施される湯飲み碗である。18世紀後半から19世紀前半の所産である。178・179は桟付の受皿を伴う灯明皿で、178は桟部の立ち上がりは低い。全面に錆釉が施されるが、体部下端から底部は拭い取られている。体部外面下端には環状の溶着痕が見られる。180は片口の底部周辺で、高台は貼付けによるものである。底部周辺以外は飴釉が施されている。183は大皿の口縁部破片で、内外面とも灰釉が施される。本業焼編年第9期（19世紀代1四半期）に相当するものである。181は陶器行平鍋の体部下端から底部で、体部外面は回転ヘラケズリが施され、体部下端には低い脚が付される。内面には透明釉が施される。19世紀中頃の所産である。184は堺産擂鉢の口縁部付近の破片で、18世紀中頃のものである。185～188は肥前系磁器である。185は白磁紅皿で、型押し成形によるもので、外面にはたこ唐草文が見られる。体部外面の下半は露胎である。18世紀末から19世紀代の所産である。186は染付段重蓋である。18世紀後半から19世紀前半に位置づけれる。187は染付仏飯器で、脚部外面は露胎である。188は型成形による八角の染付鉢で、19世紀代の所産である。

189～193はSD129から出土したものである。191・192は瀬戸美濃系陶器である。191は灯明皿の油皿で、外面は回転ヘラケズリによって丁寧に成形されている。内面から口縁部まで灰釉が施されている。19世紀代の所産である。192は徳利で、肩に稜を有する。内外面とも灰釉によって施釉される。189・190は肥前系磁器である。189は染付瓶である。190は染付火入れである。いずれも19世紀代の所産である。193は堺産陶器擂鉢で、赤銅色を呈し、胎土中には石英粒子を多量に含む。18世紀後半の所産である。

194～199はSD134から出土したものである。194・195は土師質の焙烙で、平底の底部から体部が外方に直線的に開くものである。194は口径34cmを測る。いずれも外面は黒褐色、内面は褐色を呈する。197～199は瀬戸美濃系陶器である。197は丸碗で、高台周辺以外は飴釉が施される。198は蓋で、笠部は直線的に開くものである。上面から下面上端には長石釉によって施釉されている。199は徳利で、肩に数条の細かい沈

線を有する。胴部下端はヘラケズリが施されている。外面は全面、内面には部分的に灰釉が施されている。196は堺産の陶器擂鉢で明褐色を呈するものである。18世紀中頃の所産である。

200～202はSD135から出土したものである。200・201は肥前系磁器である。200は染付碗で、くらわんか碗と呼ばれるものである。18世紀の所産である。高台内には「渦福」銘が見られる。201は見込の釉を蛇の目状に剝ぎとっている碗である。202は半胴もしくは片口と思われる瀬戸美濃系陶器の底部である。高台は貼り付けによるもので、全面に飴釉が施されるが底部周辺は拭い取られる。

203はSD138から出土した陶器鉢の口縁部破片である。口縁帯は折り返しによるもので、外面の文様は回転施文具によるものである。橙色を呈し、胎土中には雲母粒子・長石粒子を多量に含んでいる。

204はSD139から出土した在地系の桟付の受皿をともなう灯明皿で、脚を有するものと推測される。素地は橙色を呈し、内外面には透明釉が施される。

205・206はSD140から出土したものである。205は肥前系磁器染付手塩皿で、高台内には「福」の字銘が記される。18世紀代のものである。206は瀬戸美濃系磁器染付小坏である。19世紀代の所産である。

207～212はSD141から出土したものである。207は瀬戸美濃系陶器擂鉢の破片で、内外面に錆釉が施される。208は唐津肥前系陶器の大鉢の口縁部である。内面の文様は象嵌によるもので、鉄釉を施した後、白土を施し、透明釉を掛けている。18世紀後葉の所産である。209・210は肥前系磁器染付碗で、くらわんか碗と呼ばれるものである。18世紀代の所産である。211型押し成形による瀬戸美濃系青磁鉢で、19世紀代の所産である。212は在地系の器台付灯明皿である。桟付の受皿を伴い、脚部内面はヘラケズリが施されている。橙色を呈し、高台内面以外は透明釉が施される。

213はSD142から出土した瀬戸美濃系陶器煙硝擂で、高台は貼付けによるものである。体部外面および内面には錆釉が施される。本業焼編年第5期（18世紀第1四半期）に相当する。

214～270はグリッドから出土したものである。214～220は焙烙である。いずれも外面は黒褐色、内面は体部が丸みを持つもので、214は口径38.8cm、215・216は口径34.5cm前後、217は口径33.1を測る。218は内耳が擦れており、使用した痕跡が認めれる。221・222はかわらけである。橙褐色を呈し、221は口径8.8cm、底径5cm、器高1.9cmを測る。222は口径8.2cm、4.4cm、器高1.5cmを測り、底部には回転糸切り痕が残されている。223～225は焜炉である。223は瓦質で、口縁部は内側に向かって肥厚する。225は内部施設で、中位で屈曲するものである。上部には孔、下部には長方形の窓を有する。孔周辺の内面は比熱しており、白色を帯びている。下部の内外面はタール状の黒色の斑点が付着している。226は陶器鉢の口縁部破片である。口縁帯は折り返しによるもので、外面の文様は回転施文具によるものである。橙色を呈し、胎土中には雲母粒子・長石粒子を多量に含んでいる。227～233は堺産陶器擂鉢である。229は18世紀中頃のもので、それ以外は18世紀後半から19世紀にかけてのものである。232は底部内外面に焼台の痕跡が見られる。234～250は瀬戸美濃系陶器である。234～237は灯明皿である。234・235は油皿で、236・237は桟付の受皿である。237の切り込みは広く深いものである。全面に錆釉が施されるが、体部下半から底部は拭い取られている。234・235は見込に、236・237は体部に1環状の溶着痕が見られる。19世紀代の所産である。238は丸碗である。素地は灰色で、外面に鉄絵が下絵付けされ、全面に透明釉が施される。19世紀前半の所産である。239・240は腰錆茶碗で、内面から体部上半には灰釉、下半には錆釉が施されている。239は18世紀代中頃、240は19世紀前半の所産と考えられる。241は花瓶の肩付近の破片で、内外面に灰釉が施される。17世紀代であろうか。242～246は徳利で、242は口縁部が折り返され、わずかに口縁帯が作出される。内面にはシボリ目が

見られる。外面から頸部内面は灰釉が施される。243～245は外面は鉄釉が全面施釉され、底部外面は拭い取られている。243・246の内面は部分的に掛かっている。246は胴部をヘラ状の工具によって凹ませている。245は削り出し高台で、内外面に灰釉が施されるが底部周辺は拭い取られている。247は火入れで、外面には沈線で区画した中に印花文が押されている。口縁部から体部外面には緑色の織部釉が施されている。19世紀前半の所産である。248は平面形が正方形の蓋で、笠部は型抜き成形されており、内面は指頭痕が残されている。外面には錆釉が施されている。249は黄瀬戸鉢で、口縁端部が上方に屈曲し、つまみ上げれれるものである。体部内面には櫛描きの波状文が施される。内外面に灰釉が施される。本業焼編年第4期（17世紀第4四半期）に相当するものである。250は擂鉢で、底部外面には回転糸切り痕が残されている。内外面に錆釉が施される。底部内面は磨滅及び虫喰いが著しい。251は唐津肥前系陶器の小皿である。高台は削り出しによるもので、内面から体部外面上半は長石釉が施される。見込には環状の溶着痕が見られ、直接重ね焼きされている。17世紀後半のものである。252は脚台付の桟付の受皿を伴う灯明皿で、素地は褐色を呈し、脚台部内面上半から脚部外面にかけて透明釉が施され、細かい貫入が入っている。底部外面は露胎である。京都・信楽系と見られ、19世紀代の所産である。253は土瓶の体部下端から底部で、体部下端は回転ヘラケズリが施され、体部外面上半には透明釉が施される。254～270は肥前系磁器である。254は「くらわんか手」の染付碗で、比較的厚手のものである。18世紀前半から中頃の所産である。255は染付広東碗である。19世紀代のものである。256～258は筒形の染付湯飲み碗である。256は大形のもので、見込にコンニャク印判による五弁花文が押されている。18世紀後半の所産である。260～262は丸型の染付湯飲み碗である。260は260・261よりはやや古く、素描（すがき）と呼ばれる線描きの技法で絵付けされている。18世紀末から19世紀前半の所産である。263は染付小皿で、19世紀前葉のものである。264・265は染付段重の蓋で、18世紀後半から19世紀前半のものである。266は染付瓶で、19世紀代の所産である。267・268は染付仏飯器で、脚底部は露胎である。18世紀末から19世紀の所産である。269は染付香炉で、竜文と飛雲が描かれている。18～19世紀のものである。270は染付鉢で、八角に型成形したものである。体部内面から体部外面の梅及び雲は墨弾きと呼ばれる技法によって絵付けされている。見込には竹が描かれている。19世紀代の所産である。

6　そのほかの遺物

ここでは遺構の内・外を問わず、土器以外の遺物についてまとめて記述する。

（1）石器（第122～126図、図版41・42）

検出された遺構の時期を反映してか、石器の出土量はさほど多くはない。また、その大半が溝から出土したもので、明確な時期を与えることはできないが、包含層に伴う縄文時代後期のものと掘立柱建物跡に伴う古代のものに大別できる。

1は黒曜石製の石鏃である。先端部をわずかに欠損するが、全面に細かい調整加工が施される。2は黒曜石製の石核である。3はチャート製の石核である。4は黒曜石製の楔形石器である。5は黒曜石製の二次加工のある剝片である。6は緑泥片岩製の石剣である。両端部を欠損する。7は緑泥片岩製の石剣の破片である。8・9は軽石である。10～13は磨石である。10・11は偏平な楕円形礫、12・13はやや厚みのある楕円形礫を素材としたものである。10は礫面のほぼ全面が研磨され、11は器体の中央部が研磨される。12は礫面の全面が研磨されるものであるが、側縁部に敲打痕が見られる。13は表面の中央部のみが研磨さ

れるものである。石材は、10は凝灰岩、11・12は石英岩、13は石英ハン岩である。14～28は敲石である。いずれも偏平な円礫あるいは楕円形礫を素材としたものであるが、大きさ・厚みは多様である。14は礫面のほぼ全面が研磨され、器体の側縁部と中央部に敲打痕が見られるものである。15は側縁部、16は器体の長軸の両端部に敲打痕が見られるものである。17・18は側縁部に敲打痕が見られ、裏面の中央部が研磨されるものである。19は器体の側縁部と表面の中央部に敲打痕が見られるものである。20は器体の側縁部と裏面に敲打痕が見られ、また、側縁部の一部が研磨されるものである。21は器体の側縁部に敲打痕が見られ、裏面の中央部が研磨されるものである。22～28は側縁部の一部に敲打痕が見られるものである。石材は14・17・27が石英ハン岩、15・16・18・19・20・21・24・25・26・28が砂岩、22がチャート、23が安山岩、27が石英ハン岩である。29～31は石皿である。29は破片であるが、30は器体の4/5、31は器体の1/4が残存している。いずれも大型の偏平な円礫を素材として全面を研磨したもので、表面は器体中央部にかけて緩やかに窪んでいる。石材はいずれも石英岩である。32～55は砥石である。石材は32・34が砂岩、33・35が石英岩で、36～55はいずれも泥岩である。

（2）木製品（第127・128図、図版43・44）

低地という遺跡の立地状況を反映してか、溝状遺構を中心として、多くの木製品が出土している。その大半はSD53･54という弥生時代後期の流路から出土したものである。しかし、木製品のうち加工の加えられたものは極めて少なく、その多くは流木を主体とした自然木である。ここではSD53･54出土のもののうち明らかに加工の加えられているものを取り上げて、記述する。

1はSD53から出土した丸木弓[1]である。長さ87.6cm、弓幹中央の径2cm×1.7cmを現状で測り、全体の約2/3が遺存するものと思われる。一端は欠損する。細かい加工痕が弓幹中央部にわずかに認められる。弭は全周にわたってケズリを加えた楕円形に近い断面で、1cmほど突出させるものである。

2もSD53から出土した丸木弓である。長さ54.2cm、弓幹中央部の径1.6cmを測り、全体の約1/2が遺存するものと思われる。一端は欠損する。弭は両側面をケズリを入れ、長方形に近い断面で、1cmほど突出させるものである。弭近くには細かい加工痕が認められる。欠損している端部近くには、細帯にして巻き付けた樹皮の痕跡が2ヵ所認められる。3・4はSD53から出土したもので、わずかに加工痕が認められるものである。丸木弓の可能性も考えられる。5はSD54から出土したもので、枝を落とした以外に加工はほとんど認められないが、その形状からして、丸木弓の可能性も考えられる。6はSD53から出土したもので、破損品であるが、下端部を杭状に削り出し、一方の側面に抉りを入れるものである。抉りは3段まで確認できる。7はSD53から出土したもので、装着部は欠損しているが、農具あるいは工具の柄と考えられる。柄の端部は刃部側に彎曲する。

（3）土製品・石製品（第129図、図版42）

1～7は土玉である。6は小型のもの、7は偏平なものである。8は土製の紡錘車、9も紡錘車の可能性が高い。10～31は管状土錘である。いずれも長軸断面形が楕円形で胴が膨らみ、上下両端が細くなるものである。長さはややバラエティに富む。大半は土坑や溝の覆土上層から出土したものである。32は土製の円盤で径3mmほどの円孔が貫通している。33は円形型造り成形の泥面子である。紋様の詳細は不明であるが、動物をモチーフにしたものと考えられる。34は土製の碁石である。35～38は泥面子である。39は相

撲の取り組みを表現した泥人形で、頭部と足部を欠損する。40も泥人形である。頭部と体部を欠損しているため詳細は不明であるが、動物を表現したものと思われる。41も泥人形と考えられるが、端部を欠損しており、本来の形状は明らかではない。42は土製勾玉である。43・44は土製支脚である。いずれも両端部を欠損しており、遺存状態は悪い。45は滑石製品である。上端から穿孔されるが、貫通していない。46は石製の丸玉である。47は石製の碁石である。48はガラス小玉である。淡青色を呈し、重さ0.05gを量る。49～52は硯である。いずれも溝の覆土中から出土したものである。すべて長方硯と呼ばれるものである。16世紀以降現代まで使用されているタイプのものである[2)]。石材は49・52は粘板岩、50は砂岩、51は流紋岩と考えられる。長さは49・50しか知ることはできないが、幅はすべて2寸以上で、硯の中では大型の部類に属する。

（4）瓦（第130図～第132図、図版45～47）

調査区全体からは、整理箱3箱ほどの古代の瓦が出土している。いずれも土坑や溝の覆土上層及び遺構外から出土したものである。ここでは遺存状態の良好なもの26点を選んで掲載した。内訳は平瓦18点、丸瓦8点である。平瓦については叩き具の種類から5つに分類できる。丸瓦は無段式と有段式の2つの形態がある。

平瓦（1～18）

第1類（1）

凸面に正格子叩きが残るものである。点数は1点である。凹面はタテ方向のケズリが認められ、模骨枠板痕や粘土合わせ目は認められない。

第2類（2）

凸面に斜格子叩きが残るものである。点数は1点である。凹面には布目が残り、模骨枠板痕や粘土板合わせ目は見られない。側面の凸面側と凹面側に面取りが施される。凸面の側縁は幅約2cmにわたって斜格子叩きがタテ方向にナデ消されている。また、同じく凸面の側縁付近には、叩きが加えられる前と考えられる布目痕が確認できる。凹面側の布端が凸面側の一部に巻き返された可能性がある。凸型台1枚作りの可能性が高い。

第3類（3～12）

凸面に縄叩きが残るもののうち、凹面に布目が残るものである。点数は10点である。いずれも小片であり判然としないが、側面に平行の縄叩きが多い。ただし、9と10は縄目がハの字状に交差する傾向があり、7は側面に対して縄目がやや斜めである。縄目の本数については、3cmの中で数えると、9本前後のものと、6本前後のもの、4本のものが認められる。

① 縄目の本数が3cmの中に9本前後認められるもの（3～5）

3は端部が残る資料で、凹面の端部際に布端と見られる窪みが認められる。この窪みが折り曲げられて、一部端面に続いている。布端を折り返してまつっている可能性がある。4は凹面の側縁に沿って窪みが認められる。窪み部分にも布目が続いているので、凸型台の痕跡に関わるものか、布端を折り返してまつっている可能性がある。5は広端部の隅部の資料であるが、凹面に瓦より一回り小さい布の端部が認められる。3～5はいずれも凹面に模骨枠板痕や粘土板合わせ目が見られない。少なくとも4と5は凸型台1枚作りである。

② 縄目の本数が3cmの中に6本前後認められるもの（6・8～11）

6は凸面の叩きの後に布が部分的にあてられている。10は凹面の側縁付近に布端が認められる。これらも、小破片ながらいずれも模骨枠板痕や粘土板合わせ目が見られない。少なくとも10は凸型台一枚作りである。

③ 縄目の本数が3cmの中に4本前後認められるもの（7・12）

7と12は磨滅著しいものの、凹面に布目が残っている。小片であり判然としないが、7は側面に対して縄目がやや斜めであるが、7と12も凹面に模骨枠板痕や粘土板の合わせ目が見られず、円弧からしても、凸型台一枚作りの可能性が高い。

第4類（13・14）

凸面に縄叩きが残るもののうち、凹面にケズリが施され、布目が残らないものである。点数は2点である。縄叩きは3cmの中に8本前後の条数が認められる。なお、この2点は胎土が砂っぽく、第3類の瓦の胎土とは異なっている。

13は磨滅しており判然としないが、14については凹面にヨコ方向のケズリが認められる。なお、凹面の側縁に沿って窪みが認められ、その窪み部分にのみ布目が確認できる。4と同様に凸型台の痕跡か、布端の処理に関わるものであろう。また、模骨枠板痕や粘土板合わせ目は見られず、少なくとも14は凸型台一枚作りの可能性が高い。

第5類（15・16）

凸面に縄叩きが残るが、一部ナデ消されているものである。器厚が厚く特徴的である。また、胎土は砂っぽく第4類に近い。

15は厚さ約3.5cmを測り、凸面タテ方向のナデが施されている。部分的に縄叩きの痕跡が認められる。16も同様で、厚さ3.1cmを測る。

17と18も凸面に縄叩きが部分的に残っているが大半がナデ消されている。

丸瓦（19～26）

いずれも凸面は回転を利用したヨコ方向の調整がなされ、凹面には布目が残され、粘土板成形によるものである。19は粘土板の重ね目が、21の凹面には糸切り痕が認められる。

19は広端隅部である。凹面の側縁に沿ってナデ調整が加えられている。21は側部の資料であるが、凹面に布筒の綴じ合わせ目が見られる。22は狭端部の資料である。布の絞り具合が26と近似しており、有段式の玉縁部分の可能性がある。23と24は側面が残る小破片であるが、凹面に布が絞られている状況が認められる。25は狭端部隅部であろうか、小片で詳細不明である。26は有段式の玉縁部分である。玉縁部分は折り曲げ式で成形されたものと考えられる。なお、側面は無調整で内面からヘラ切りされて、裁断された状況を窺うことができる。また、玉縁部分の凸面には端部に平行して、沈線状の一条のナデが認められる。

このほかに近世と考えられる丸瓦・平瓦もわずかではあるが出土している。

（5）金属製品（第133図）

低地という遺跡の立地状況を反映してか、出土した金属製品は極めて少ない。図示することができたのはわずかに7点のみである。

1はSK22から出土した青銅製の帯金具（鉈尾）である。帯に装着する鋲が表金具に鋳出されており、脚

鋲式といわれるものである[3]。裏金具には表金具と同位置に小孔が3孔穿たれている。全体に遺存状態が極めて悪い。2はSD10から出土した金銅製と考えられる金具であるが、用途は不明である。3はSK25から出土した鎌で折返しを有する基部の破片である。4はSK39から出土した鉄斧で、完存するが、銹化(特に袋部)が著しい。5も鉄斧でSK62から出土したものである。完存するが、4と同様に銹化(特に袋部)が著しい。6はSD8から出土した煙管の火皿部分である。7はSD125から出土した煙管の吸口で、浅い沈線が長軸方向に施されるものである。また、竹製のラウが遺存している。

(6)銭貨(第134図)

調査区全体からは、40点以上の古銭が出土しているが、確実に遺構に伴うものはなく、大半は溝や土坑の覆土上層及び遺構外から出土したものである。腐食・破損が著しいものも多く、比較的遺存状態の良好な26点を掲載した。1～22は寛永通宝である。このうち1～7はいわゆる古寛永といわれるもの、8～22は新寛永といわれるものである。23～26は文久永宝である。

注1　渡辺一雄　1985「弓・矢」『弥生文化の研究』5

2　水野和雄　1985「日本石硯考－出土品を中心として－」『考古学雑誌』70－4

3　田中広明　1990「律令時代の身分表象(Ⅰ)－帯飾具の生産と変遷－」『土曜考古』15

第3章　まとめ

第1節　遺構の時期

竪穴住居跡

竪穴住居跡は9軒検出された。このうちSI 9は住居として疑問が残るものである。残り8軒の住居跡も遺存状態が悪く、炉跡や柱穴等の住居の構造を十分明らかにすることはできなかった。また、時期についても、いずれの住居跡からも遺物の出土が極めて少ないため特定することは難しい。しかし、住居間での重複もあり、すべての住居跡が単一の時期でないことは明らかである。重複関係にあるSI 7・8ではSI 7のほうが新しく、出土した土器からもSI 7のほうがやや新しい様相を示している。いずれも古墳時代前期と考えられる。そのほかSI 1も土器の出土は少ないが、古墳時代前期と考えられる。その他の住居跡も住居跡の形態等から、いずれも古墳時代前期に属するものと思われる。

掘立柱建物跡

今回の調査では65棟の掘立柱建物跡が検出された。そのうち、共伴する遺物が出土し、明確に時期を特定できるのはSB 1のみである。その他の掘立柱建物跡は遺物が少なく明確な時期を特定できないが、掘立柱建物跡の規模や柱穴の状況、そして掘立柱建物跡の分布状況等からして、その大半は奈良・平安時代に属するものと思われる。これらの掘立柱建物跡はその分布から3つのグループに分けることができる。

A　村上地区最南端の旧河道に面して分布する掘立柱建物跡（10棟）

これらの建物のうちで明確に時期が特定できるのはSB 1のみで、8世紀前半と考えられる。その他の掘立柱建物跡からはほとんど遺物が出土しておらず、建物そのものの遺存状態も極めて悪いため時期を明確にすることはできない。しかし、同一場所での建替えと考えられるSB 2とSB 6、そしてSB 3とSB 7との重複及び建物の主軸方向の違いなどから、少なくとも2時期以上の変遷が考えられる。その場合でも出土土器から8世紀代の中に収まるものと考えられる。

B　村上地区最北端で密集して分布する掘立柱建物跡（47棟）

これらの建物からの土器の出土は少なく、ある程度時期が推定できるのはSB11・23・53・54・55・59・60Aの7棟ほどである。しかし、掘立柱建物跡相互の重複もあり、すべての掘立柱建物跡が単一の時期でないことは明らかである。一般的に掘立柱建物跡は竪穴住居跡に比べて出土遺物が少なく、さらに柱穴内から出土する遺物も掘立柱建物跡そのものの時期を示す可能性は低いため、掘立柱建物跡の時期を決定することは難しい。したがって、ここでは掘立柱建物跡間の重複、掘立柱建物跡の主軸方向の違い、掘立柱建物跡の分布を基本にし、出土遺物を参考にして時期区分を試みた。その結果、大きく3時期に分けることができた。なお、掘立柱建物跡の重複関係と出土遺物の年代が齟齬を来す場合は、重複関係を優先した。

I　西偏する方位をとる建物（24棟）

これらの建物相互にも重複関係があり、建物の分布を考え合わせても少なくともさらに2時期に分

けることができる。SB21・23出土土器から8世紀の第IV四半期と考えられる。

II　東偏する方位をとる建物（11棟）

これらの建物相互にも重複関係があり、少なくともさらに2時期に分けることができる。SB53・61A出土土器から9世紀初頭と考えられる。

III　ほぼ北に方位をとる建物（12棟）

これらの建物相互にも重複関係があり、少なくともさらに2時期に分けることができる。SB51・61B出土土器から9世紀前半と考えられる。

C　A・Bの掘立柱建物跡と離れて単独あるいは少数で群をなす掘立柱建物跡（8棟）

SB71・73・74・75の4棟で、これらの建物は遺物がほとんどないため時期は不明であるが、柱穴の状況等からして、奈良・平安時代に属するものと考えられる。そのほかに柱穴の形態や規模が他の掘立柱建物跡と異なる掘立柱建物跡（SB28・67・72・76）がある。これらの建物は遺物が全くなく時期は不明であるが、柱穴の状況等からして中世以降の可能性が高い。

土坑

土坑は140基以上検出された。これらの土坑の多くは遺物がほとんどなく、明確に時期を特定できない。時期が推定できるのは以下の土坑である。

①弥生時代後期

SK 5

②古墳時代前期

SK36・38・39・70・74・113・126・127・132の9基で、検出された住居跡と同時期と考えられる。

③奈良・平安時代

SK20・21・23・24・26・27・30・31・32・33・37・38・59・61・62・63A・64・69・72・129及びSX18の21基で、その大半はBグループの掘立柱建物跡の分布域と重なる。また、時期も8世紀後葉～9世紀前半が主体である。Bグループの掘立柱建物跡群の各期に対応するものと考えられる。これらの土坑の中にはSK23・24・31・32・33・62のように複数の土坑が重複したり、土坑そのものの掘り込みが不定形で、土器片が多く出土するものがある。これらの土坑は西野遺跡におけるSK1001・1015などのあり方[1]と共通しており、土器の廃棄を目的とした遺構と考えられる。形態・規模は大きく異なるがSK129も同様の性格のものである可能性が高い。

溝

溝は150条以上検出された。これらの溝の大半は遺物が少なく、また、確実に共伴する遺物も明確でないため、時期の決定には困難が伴う。ある程度時期が推定できるのは以下の溝である。

①弥生時代

SD53は出土した土器や木製品から弥生時代後期と考えられる。SD54も位置や覆土の状況から弥生時代の可能性が高い。

②古墳時代

SD23はSI 1の周囲を馬蹄形状に取り囲む溝である。性格は不明であるが、SI 1との関係も考えられる。古墳時代前期と考えられる。

SD101は円形周溝状を呈し、古墳時代前期と考えられるSK126・127より古いものの、やはりこの溝も古墳時代前期の可能性が高い。

SD113からはほぼ完形の壺が出土している。古墳時代前期と考えられる。

③奈良・平安時代

SD20は覆土中から溝としては多量の土器が出土しており、時期も8世紀前半～9世紀後葉までかなり幅がある。主体は9世紀代である。

SD102も土器の様相には差があるが、古代の瓦の出土を考え合わせると、9世紀後半と考えられる。

④中世以降

SD10・125はほぼ平行する規模の大きな溝で、いずれも奈良・平安時代～中・近世に渡る遺物が出土しているが、主体となる遺物は15世紀以降のものである。

SD26・29はいずれも覆土中位に宝永のテフラの堆積が認められる。

SD129は現在の道路下で検出したもので、現在の道路と方向や幅が一致しており、溝というよりは道路状遺構としてよいものである。

SX17は底面に宝永テフラの堆積が認められる。

その他

方形周溝状遺構SX 1は覆土中からややまとまった土器が出土しており、8世紀中葉と考えられる。

第2節　遺跡の変遷

前述した遺構の時期及び遺構の分布状況から村上遺跡がどのように変遷したかをみてみたい。

I期　縄文時代後期

馬場台地区において遺構は検出されなかったものの、加曽利B 2式期から曽谷式期にかけての遺物包含層が検出された。出土した土器は器面の磨滅が著しいとはいえ、遺存状況の良好な個体が多く、これらを二次的な堆積によるものと考えることは困難である。遺構は検出されなかったものの、こうした遺物のあり方から、この時期に村上遺跡が初めて人間活動の舞台となったことは明らかである。本例は従来不明であった養老川下流右岸の微高地の土地利用を窺い知る資料となりうるのであろうが、現段階では類例に乏しく、今後の資料の増加を待ちたい。

なお、今回の調査によって、弥生時代以降の遺構が検出された段丘が、縄文時代後期には既に形成されていたことが確認された。

II期　弥生時代後期

馬場台地区では自然流路（SD53・54）が検出された。特にSD53には溝底に打ち込まれた杭列を伴っている。SD53は中央部に大きく攪乱を受けているため詳細は不明であるが、杭列の存在やその周辺から多量の流木が出土していること、そしてSD54や周囲の小規模な溝の配置等を考え合わせると、この杭列周辺が

「堰」[2]であった可能性が考えられる。「堰」であるとすれば、蛇行する河川の小規模な支流の屈曲点を利用して、水位を上昇させることによって周囲の溝（そして水田）へ導水を行っていたものであろう。当然流路周辺には水田の存在が推定されるが、検出には至らなかった。しかし、SD53内からは丸木弓が3点出土しており、周辺に水田そして集落が存在していた可能性が高い。

また、村上地区では沼地状の窪地(村上地区のほぼ中央のSD98とSD129にはさまれた幅約15m、長さ約50mほどの範囲)から弥生土器が多量に出土しており、この付近にも水田や集落が存在していた可能性は十分考えられる。

III期　古墳時代前期

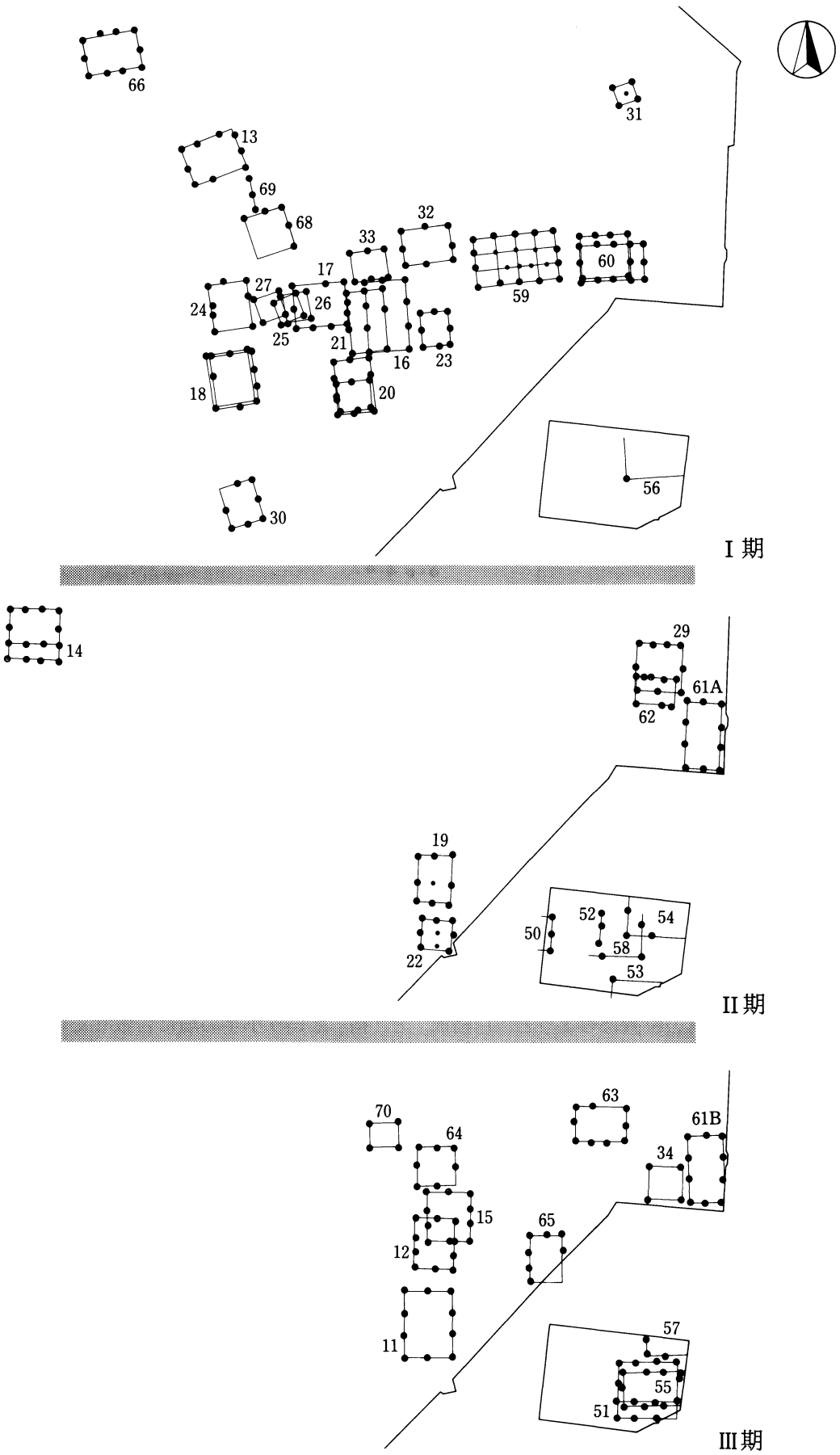
この時期に至り、初めて集落が営まれる。8軒（SI 9は除く）の住居跡は大きく北側の6軒（SI 1～6）と中央部の2軒（SI 7・8）という2つのグループに分けられる。同時期と考えられる土坑の分布と考え合わせると、それぞれのグループ周辺にさらに住居跡が存在する可能性が高い。

IV期　奈良・平安時代

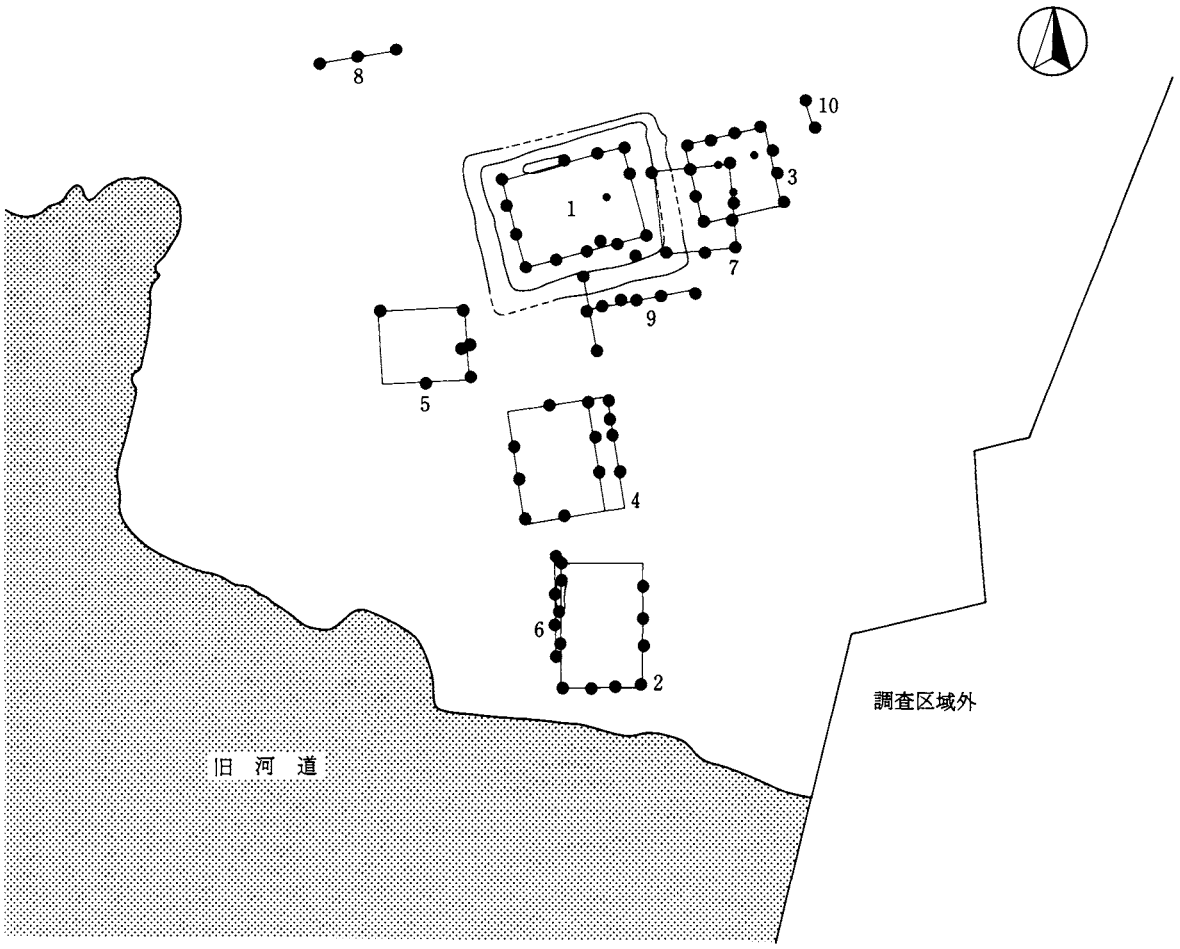
村上遺跡は古墳時代前期に集落が営まれた後、奈良時代に至りようやく再び集落が営まれるようになる。

奈良・平安時代の遺構としては、掘立柱建物跡、土坑、溝がある。なお、竪穴住居跡は全く検出されていない。これらの遺構のうち遺跡の主体となるのは掘立柱建物跡であるので、掘立柱建物跡のみ取上げることとする。

今回の調査では計65棟の掘立柱建物跡が検出された。これらの掘立柱建物跡の大半からは土器が出土していない。唯一SB 1からのみ掘立柱建物跡としては多量の土器が出土しているだけである。したがって、時期の比定は難しいが、前述のように65棟のうち61棟は奈良・平安時代に属するものと思われる。61棟の掘立柱建物跡のうち規模が明らかなのは48棟である。規模別にみると、4間×3間3棟、3間×3間1棟、3間×2間24棟、2間×2間13棟、1間×1間7棟となる。奈良・平安時代の竪穴住居跡は全く検出されておらず、遺跡の性格と関わる問題ではあるが、これらすべての掘立柱建物跡を単純に倉庫とすることはできない。東国の集落では、一般的に掘立柱建物跡は竪穴住居跡より検出例が少なかったが、近年では竪穴住居跡以上の検出例も増加しつつあるためである。掘立柱建物跡の機能については、山田水呑遺跡における分析[3]以後様々な意見が出されており[4]、検出された遺構相互そして遺跡全体の中で考えるべきであるが、ここではこの問題について深く立ち入る余裕はないため、規模により次のような機能を想定した。一番数多く検出された3間×2間の側柱建物は住居、1間×1間の側柱建物は簡単な倉か納屋（SB25・26・27・34・70)、2間×2間の側柱建物は作業場あるいは住居（SB20B・23・32・33・64・68)、2間×2間の総柱建物は倉庫(SB19・22)、そして3間×3間、4間×3間の建物も住居と考えられる。これらの建物は前述のように、Aグループでも少なくとも2時期、Bグループでは3時期にわたって変遷していったことが考えられ、村上遺跡においては8～9世紀代は竪穴住居は営まれず、掘立柱建物のみで集落が構成されていたことになる。特にBグループではIからIIそしてIII期と変遷するにつれて、掘立柱建物跡の構成・配置が大きく変わっていく。中でもIII期のそれは、棟筋を揃えたより「官衙」的とも言える建物配置となる。



第11図　Bグループの掘立柱建物跡（1：600）



第12図　Aグループの掘立柱建物跡（1：400）

V期　中世

掘立柱建物跡の一部が中世と考えられるほかに、数多く検出された溝の多くもこの時代と考えられる。SD10・125は調査時の所見から村上城の堀跡と考えられている。この2条の溝は「鉤の手」状に屈曲する規模の大きな溝である。溝の位置はちょうど「白幡前」と「宿」という小字の境に合致している。小字「宿」の東側には小字「堀之内」があり、村上城の伝承地とされている。さらに「自然堤防上にあって、最も高所に位置する「堀之内・宿」といった小字地区には、不自然に入り込んだ水田とクランク状に折れ曲がった道路があり、城の存在を強く示している」[5]という意見もある。これらのことを総合すると、小字「堀之内・宿」周辺に城が存在し、今回検出されたSD10・125という溝は城跡の堀の可能性は十分考えられる。この溝の南東約45mの地点の小学校の改築に伴った調査でも、中世と考えられる溝が検出されている[6]。今回検出された溝との関連が注目されるが、出土遺物の示す年代がやや異なり、両者を直接村上城に結び付けることはできない。村上城の実態についてはなお不明である。

中世と考えられる遺物は13世紀～15世紀に渡るが、その量は極めて少なく、集落が継続的に営まれた可能性は低い。

VI期　近世

馬場台地区の中央で検出されたSX17という大型の溝は、近年まで水田として利用されていたものであるが、底面の宝永テフラの堆積から18世紀初頭以前に構築されたものと考えられる。また、村上地区のSD123も覆土の状況から水田跡と考えられる。そのほかの溝についても、明確に時期を特定できないものの、大半はこの時代のものである可能性が高い。こうした溝のあり方などからは屋敷地とその背後の水田・畑といった景観を復原することもできよう。出土した陶磁器の大半も近世（18～19世紀）のものであり、その中に日常什器が多く含まれることから、継続的に集落が営まれていたことが考えられる。

第3節　結語　－古代における村上遺跡の性格－

村上遺跡は養老川下流右岸の段丘上に営まれた奈良・平安時代を中心とする遺跡である。今回調査の対象となったのは113,800㎡と大規模なものになるが、調査の結果からもわかるように、遺構は段丘上のみから検出され、周辺の旧河道はもちろんのこと、自然堤防上からも全く検出されていない。遺構が存在する段丘はさらに北西及び南東方向に延びていることから、遺跡全体はさらに広大な広がりを有している可能性が考えられる。したがって、村上遺跡全体についてのさまざまな問題について検討を加えることはさけたい。ここでは、今回の調査の結果、この遺跡の中心となる時代である奈良・平安時代について、調査の成果をまとめ、若干の考察を行うこととしたい。

奈良・平安時代の遺構としては、掘立柱建物跡、土坑、溝があるが、竪穴住居跡は全く検出されていない。これらの遺構の年代は掘立柱建物跡出土土器を基本にして考えると、8世紀前半から9世紀中葉にまで及ぶものである。古墳時代前期以降人々の住んだ形跡のない村上遺跡に、8世紀前半に突如として掘立柱建物のみの集落が出現するのである。この背景は何であろうか。もう一度掘立柱建物跡の内容を整理してみたい。

まず、Aグループとした10棟の掘立柱建物跡である。このうちSB8・9・10は掘立柱建物跡としては疑問が残る遺構で、柵列の可能性も考えられるものである。また、その他7棟の掘立柱建物跡も攪乱が著しく、遺存状態が悪い。SB1は身舎の周囲に溝状の庇掘方を有するというやや特殊な構造の掘立柱建物跡で、東側に位置するSB3とは柱筋を揃える形で、東西に並んで検出されている。また、南端に位置するSB2の柱の掘方の一部は布掘状を呈しており、SB1と共通した特徴を示している。SB2とSB6は同一場所での建替えと考えられ、Aグループの掘立柱建物跡は少なくとも2時期に分けることができる。SB1の年代は8世紀第一四半期と考えられる。

Aグループの掘立柱建物跡は、以上のような特徴を示している。掘立柱建物跡の配置には、ある程度の規格性はあるものの、官衙遺跡のような厳密な規格性は認められない。

さらに

1　柱間間隔もバラツキが多く、基準となる尺度も存在していない。

2　掘立柱建物跡の規模も全体に小さい。

3　掘立柱建物跡の周囲を明確に溝や柵列で区画しない。

4　文字関係の資料は皆無で、緑釉陶器や帯金具も出土していない。

といった特徴を示す。

これらのことを総合すると、Aグループをいわゆる官衙遺跡としてとらえることはできない[7]。

次にＢグループとした47棟の掘立柱建物跡である。これらの掘立柱建物跡は前述のように、大きく３時期に分けることができる。そして、その年代は８世紀第４四半期から９世紀前半まで及ぶものである。Ⅰ期からⅡ期、そしてⅡ期からⅢ期へと変遷するにつれて、掘立柱建物跡の配置・構成が大きく変わり、Ⅲ期のそれは「官衙」的とも言える建物配置となる。

しかし

1　柱間間隔もバラツキが多く、基準となる尺度も存在していない。

2　掘立柱建物跡の規模も全体に小さい。

3　掘立柱建物跡の周囲を明確に溝や柵列で区画しない。

4　文字関係の資料は皆無に等しく（墨書土器は１点のみ）、緑釉陶器や帯金具は極めて少ない。

といった特徴を示す。

これらのことを総合すると、ＢグループもＡグループ同様にいわゆる官衙遺跡としてとらえることはできない。

そこで、遺跡の時期、立地、地形環境、そして遺構・遺物、これらの条件を総合して遺跡の性格についての想定を行ってみたい。

まずはじめに通常の集落とした場合である。周辺の地形を考えた時、遺跡の北側には後に条里制が施行された地域が大きく広がっていることから、この遺跡周辺は水田耕作に適しており、水田耕作に依存した集落が成立していたと考えることができる。農具の出土が皆無であることが問題となるが、沖積地上に立地する遺跡であることを考慮に入れれば、鉄製品が遺存し難い環境のせいと考えてよかろう。なお、管状土錘が多く出土していることから漁業の問題も考慮にいれねばならないが、その量は決して多いものではなく、専業的に漁業を行っていたとは考えにくい[8]。基本は水田耕作と考えられる。村上遺跡の掘立柱建物跡が営まれた８世紀前半～９世紀中葉という時期は、東国において竪穴住居跡の規模が縮小する代わりに、掘立柱建物跡が普及し始める時期と重なってくる[9]。村上遺跡の場合、竪穴住居跡は全く検出されず、すべて掘立柱建物跡である。そして、その多くは住居と考えられる。なぜ住居が竪穴住居でなくすべて掘立柱建物なのかについては、遺跡の立地から掘立柱建物のほうがこうした沖積地においては、より居住性に優れていたためと考えられる[10]。同時にこの時期は三世一身法（723年）や墾田永年私財法（743年）による私的墾田経営が公認されつつあった時期でもある。そして、「計画村落」とも呼ばれる大規模な開拓集落が出現する時期でもある。以上のことから、村上遺跡は８世紀の中葉以降急激に進行した開発に伴って出現[11]した農村集落と想定することも可能である。こうした開発を担っていたのは、在地の有力者と考えられ、同時にこの有力者は律令政治の末端に連なっていたことが帯金具の出土から想像される。したがって、村上遺跡はこうした在地の有力者を中心とした集落の可能性がある。

しかし、今回の調査区は国府推定地の一つである村上地区[12]に隣接しており、当時の交通上重要な位置を占めたであろう養老川の旧河道に面する位置である。こうした重要な地域に果たして通常の集落を想定することが可能かという問題が出てくる。上総国府の位置についてはいまだ確定をみていない。最近の市原市の行った調査においても国府解明の手がかりを得るに至っておらず、その結果からは、村上地区に国府が存在した可能性は他の地区よりは低くなっている[13]。今回の調査では直接国府に関わる遺構・遺物は検出されず、国府解明に関わる新たな情報を提供することはできなかった。ただ、数多く発見された掘立柱建物跡を初め、遺構はすべて段丘上から検出されており、旧河道はもちろんのこと、自然堤防上からも

検出されなかった[14]ことは、八町四方の国府域というものをこの村上地区に想定することは困難であることは明らかである。段丘の広がりを考えると、掘立柱建物跡群はさらに南東方向に広がることが予想される。したがって、本来の掘立柱建物跡群の広がりをすべて捉えることはできなかったが、検出された掘立柱建物跡の内容（8世紀前半から9世紀後半まで掘立柱建物が営まれ、棟筋を揃えるような建物配置をとる時期もある）からはやはり通常の集落とするには躊躇せざるを得ない。その場合遺跡の位置が重要な手がかりとなる。国分寺の西に位置し、養老川の旧河道に面して立地するAグループの掘立柱建物跡については、調査当初から想定されたように養老川の水運を利用した「津」[15]の一部である可能性が高いと言えよう。その場合この施設は約16km上流に位置する永田・不入窯跡の製品を国府・国分寺へ供給する際に重要な役割を果たしていたことが予想される。しかし、このAグループの掘立柱建物跡は8世紀代前半のみで占められることから、「津」であるとすればその位置は時代によって移動したことが予想される。その場合Aグループの北東約230mに位置するBグループを、移動した「津」とすることもできる。「津」と考えられる施設は当初南側（Aグループ）にあったが何らかの理由（流路の変遷や施設規模の拡大等）で北側（Bグループ）へ移動したと考えるわけである。しかし、Bグループの掘立柱建物跡は旧河道から大きく離れること、建物の構成がAグループと異なることから、「津」というよりも、別の性格の施設と考えた方がよさそうである。この施設とは、仮に国府に関わる付属施設であるとすれば、国庁周辺に分散的に設けられた施設の一つ、あるいは国府から離れたところに設置され、経済活動の拠点となった施設[16]と想定することができよう。

以上のように8～9世紀の村上遺跡は、その立地から通常の集落遺跡と考えることはできず、当時の交通上重要な役割を果たしたであろう養老川に深く関わって成立した遺跡と考えられる。国府に関わる様々な施設や「津」の実態[17]については、考古学的には十分明らかにはなっていないが、掘立柱建物跡を中心とする遺構の内容から、村上遺跡は単なる物資の荷揚げ・仮保管場所以上の役割[18]を果たしていたことも考えられる。遺構の内容はともかく、いわゆる官衙遺跡に通常見られるような遺物が全く見られないことが、逆に遺跡の性格を鋭く反映しているのではないかと考えられる。

いずれにしても今回の調査は、さらに大きな広がりを有するであろう遺跡の一部を調査したに過ぎないわけで、遺構はともかく、遺物からは遺跡の性格に直接つながるような手がかりを得ることはできなかった。したがって、検出された遺構及び遺跡の立地から遺跡の性格について上記のような想定を行ってみた。村上遺跡周辺に国府が存在した可能性はより低くなったとはいえ、国府に関連する遺跡であることには変わりないわけで、周辺の状況がさらに明らかになることによって、今回検出された遺構群の位置付けも大きく変わってくる可能性が考えられる。

注1　今泉潔ほか　1989『市原市西野遺跡・白山遺跡・村上遺跡発掘調査報告書』　財団法人千葉県文化財センター

2　こうした堰を有する灌漑システムは古代における開発の第一段階とされている。

広瀬和雄　1983「古代の開発」『考古学研究』30－2

3　石田広美　1977「掘立柱建物址の分析」『山田水呑遺跡』　山田水呑遺跡調査会

4　掘立柱建物跡の機能については次のような意見があり、側柱建物は住居、総柱建物は倉庫とする説が一般的である。

国平健三　1982「相模国の奈良・平安時代集落構造（中）」『神奈川考古』13

井上尚明　1985「古代集落における掘立柱建物跡について－八・九世紀の北武蔵を中心として－」『土曜考古』10

伊丹徹　1986「奈良・平安時代相模国の集落遺跡における大形住居址と掘立柱建物－再び鳶尾・向原・上浜田遺跡の成果から－」『神奈川考古』22

新井仁　1987「東国における奈良・平安時代集落の様相」『青山考古』5

広瀬和雄　1989「畿内の古代集落」『国立歴史民俗博物館研究報告』22

大上周三　1990「掘立柱建物址について」『草山遺跡　III』　神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告18

なお、側柱建物のうち2間×2間、3間×2間のものを倉庫とする意見もある。

中田英ほか　1983「掘立柱建物遺構について」『向原遺跡』　神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告1

5　山口直樹・田所真　1986『村上城跡』　財団法人市原市文化財センター

6　前掲注5

7　山中敏史　1994「官衙遺跡の判定方法」『古代地方官衙遺跡の研究』

なお、村上遺跡を官衙遺跡としてとらえようとする意見もある。

田所真　1994「村上遺跡群」『市原市文化財センター年報　平成2年度』　財団法人市原市文化財センター

8　坂井秀弥　1996「水辺の古代官衙遺跡－越後平野の内水面・舟運・漁業－」『古代王権と交流3　越と古代の北陸』

9　松村恵司　1989「村のくらし」『古代史復元』9

渋江芳浩　1988「東国平安時代集落の考古学的検討」『歴史評論』454

10　一般的に掘立柱建物は竪穴住居に比べて、立地条件にしばられないとされている。

宮本長二郎　1987「掘立柱建物の普及」『世界考古学大系　日本編　補遺』

西日本では掘立柱建物は台地上の遺跡に先行して低湿地に立地する遺跡から採用されたとされている。

甲元眞之　1986「農耕集落」『岩波講座　日本考古学4　集落と祭祀』

また、関東地方の多くの集落において竪穴住居が古代まで存続するのを、気候・環境面から説明しようとする考えもある。

荒井健治　1995「国庁周辺に広がる集落遺構の性格について－武蔵国庁周辺の状況をもって－」『国立歴史民俗博物館研究報告』63

11　小笠原好彦　1983「東日本における掘立柱建物集落の展開」『考古学論叢』I

木本元治　1983「南東北地方の古代集落における掘立柱建物について」『考古学論叢』II

12　須田勉　1976「上総国府の諸問題（1）－特にその所在地をめぐって－」『古代』61

13　高橋康男　1994『市原市上総国府推定地確認調査報告書（1）』　市原市教育委員会・財団法人市原市文化財センター

14　「自然堤防は常に洪水の危険性」があることを考えれば当然である。

明石新　1995「相模国府域の様相－国府域内の集落の分析をとおして－」『考古論叢神奈河』4

15　「津は国府と切っても切れない関係にある」とされている。前掲注14

16　国司館と推定される遺構の一部に、こうした機能をも併せ持つ施設が想定されている。

鬼頭清明　1986「国司の館について」『国立歴史民俗博物館研究報告』10

山中敏史　1994「曹司・館の構造と機能」『古代地方官衙遺跡の研究』

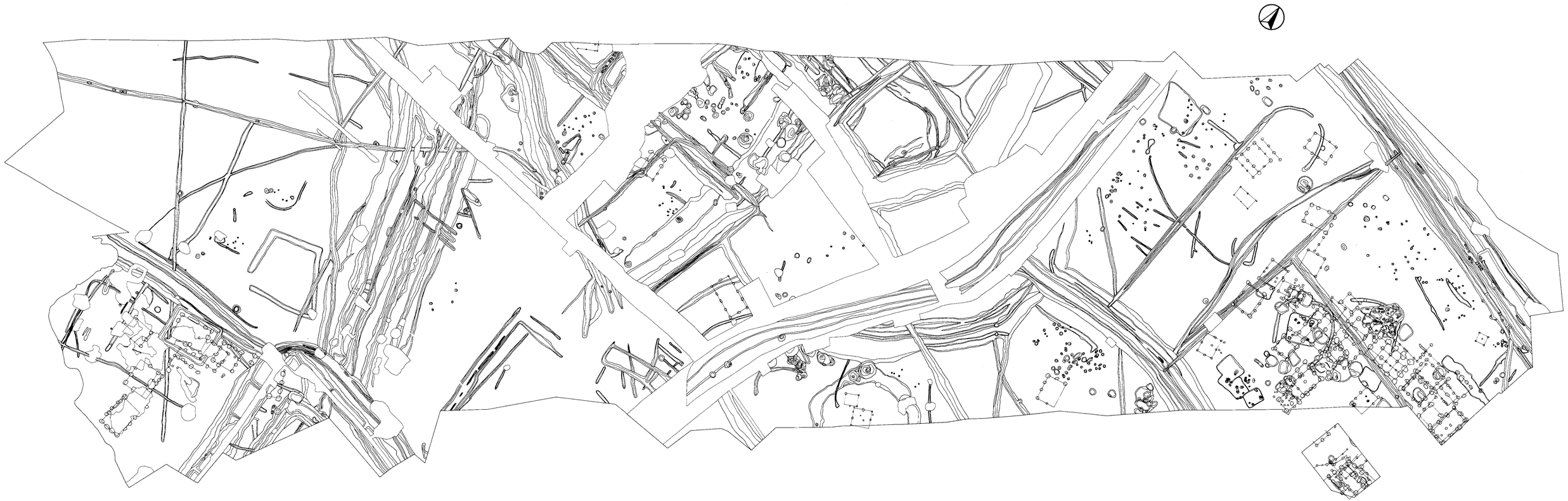
17 「津」については歴史地理学的な研究が主である。

千田稔　1979「水運と港津」『古代日本の交通路』Ⅳ（上総国の外港は養老川河口部と想定している）

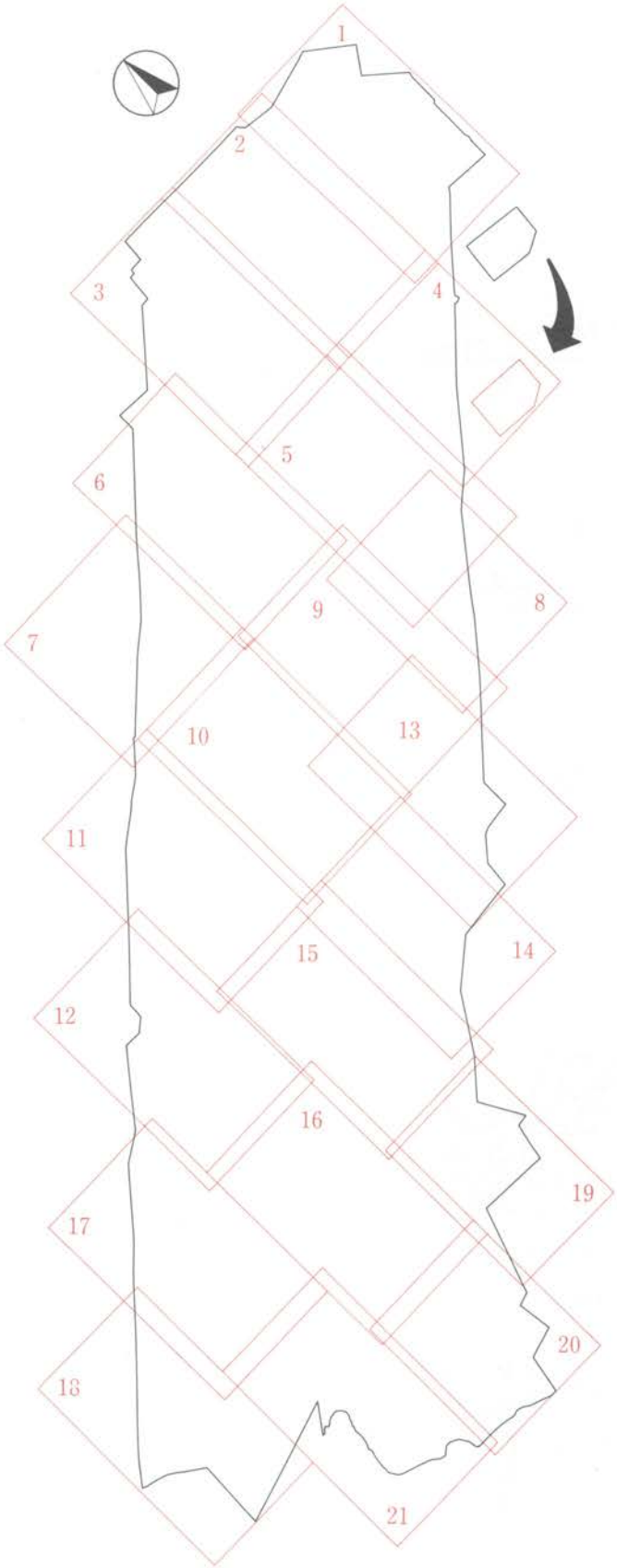
日下雅義　1985「摂河泉における古代の港と背後の交通路について」『古代学研究』107

18 村上遺跡の性格を考える上で、「国府の付近には、単に行政的施設のみではなく、交易に関連した集住区が成立していたことが推定できる」という意見は参考になろう。

鬼頭清明　1995「古代における津の都市的様相」『国立歴史民俗博物館研究報告』63



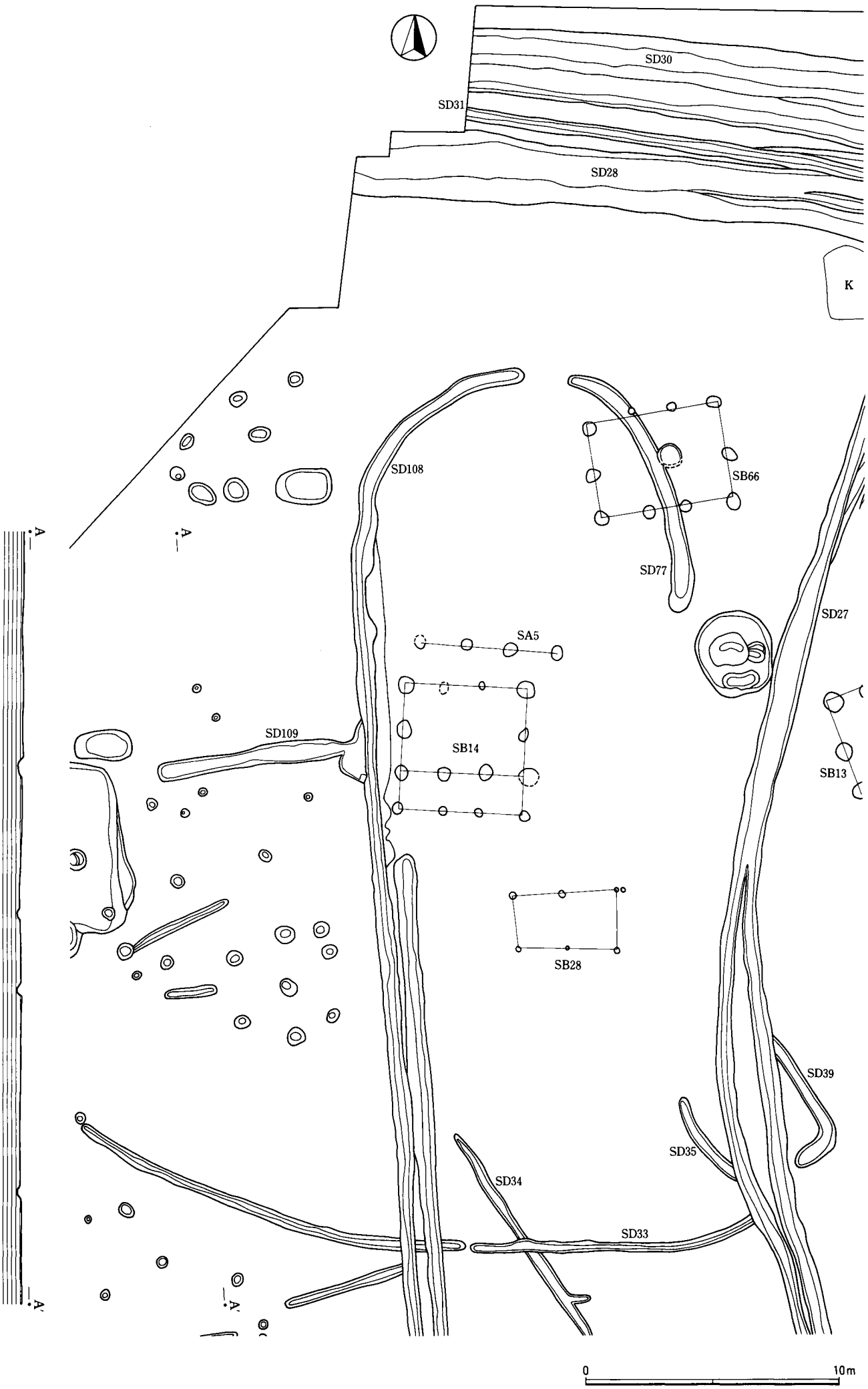
第13図　村上地区遺構配置図



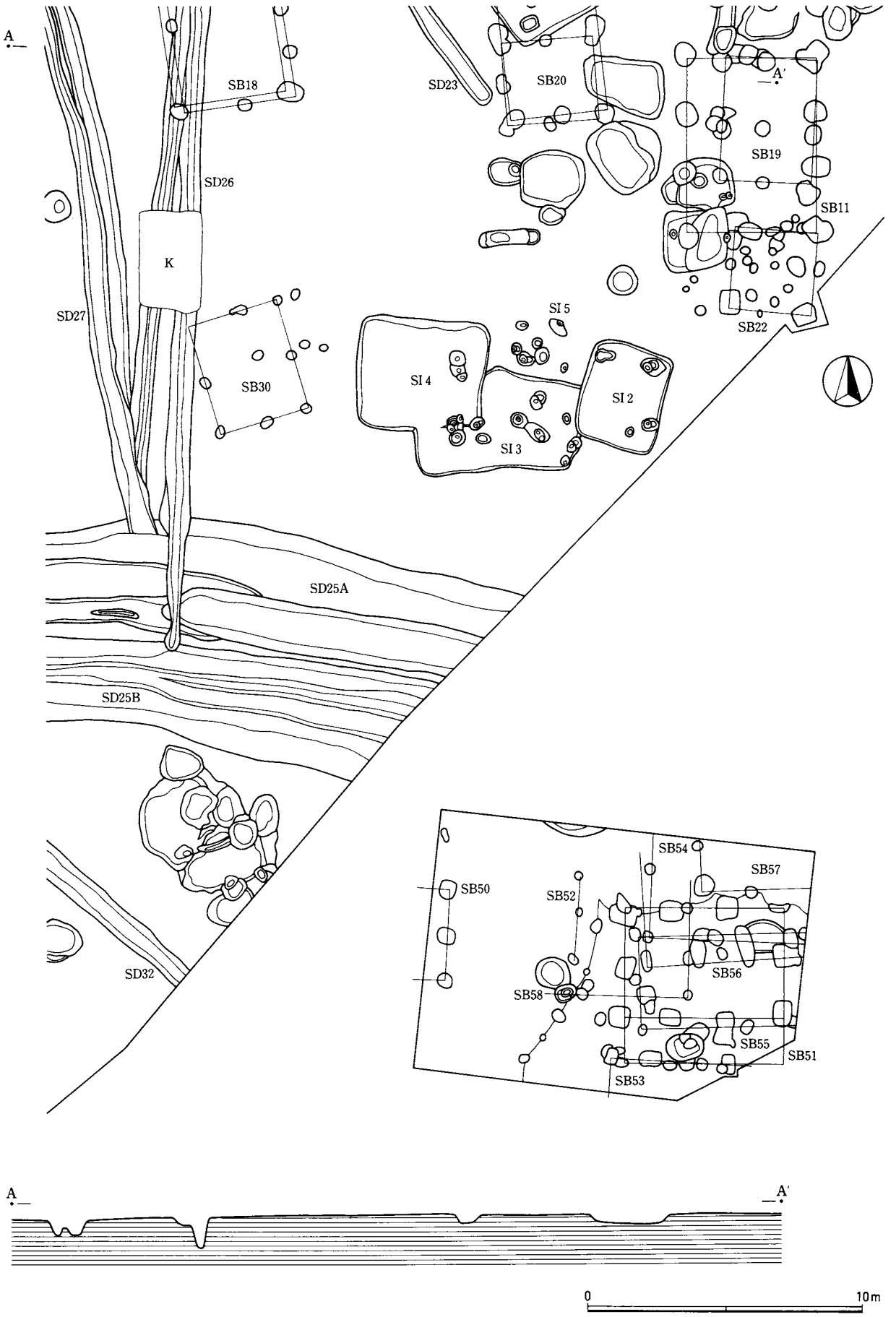
第14図　村上地区遺構全体図区割図

第15図　村上地区遺構全体図（1）

第16図　村上地区遺構全体図（2）

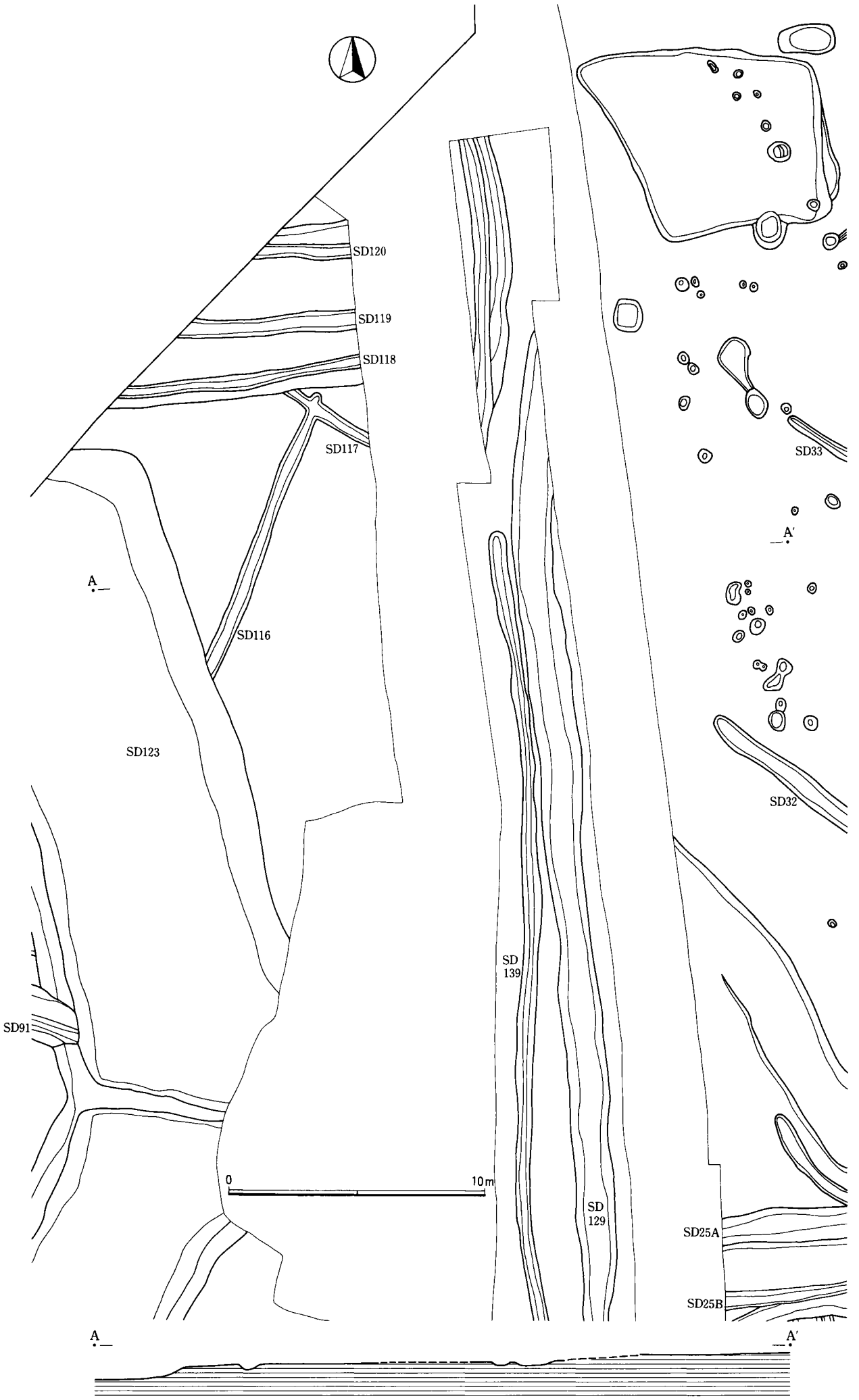


第17図　村上地区遺構全体図（3）

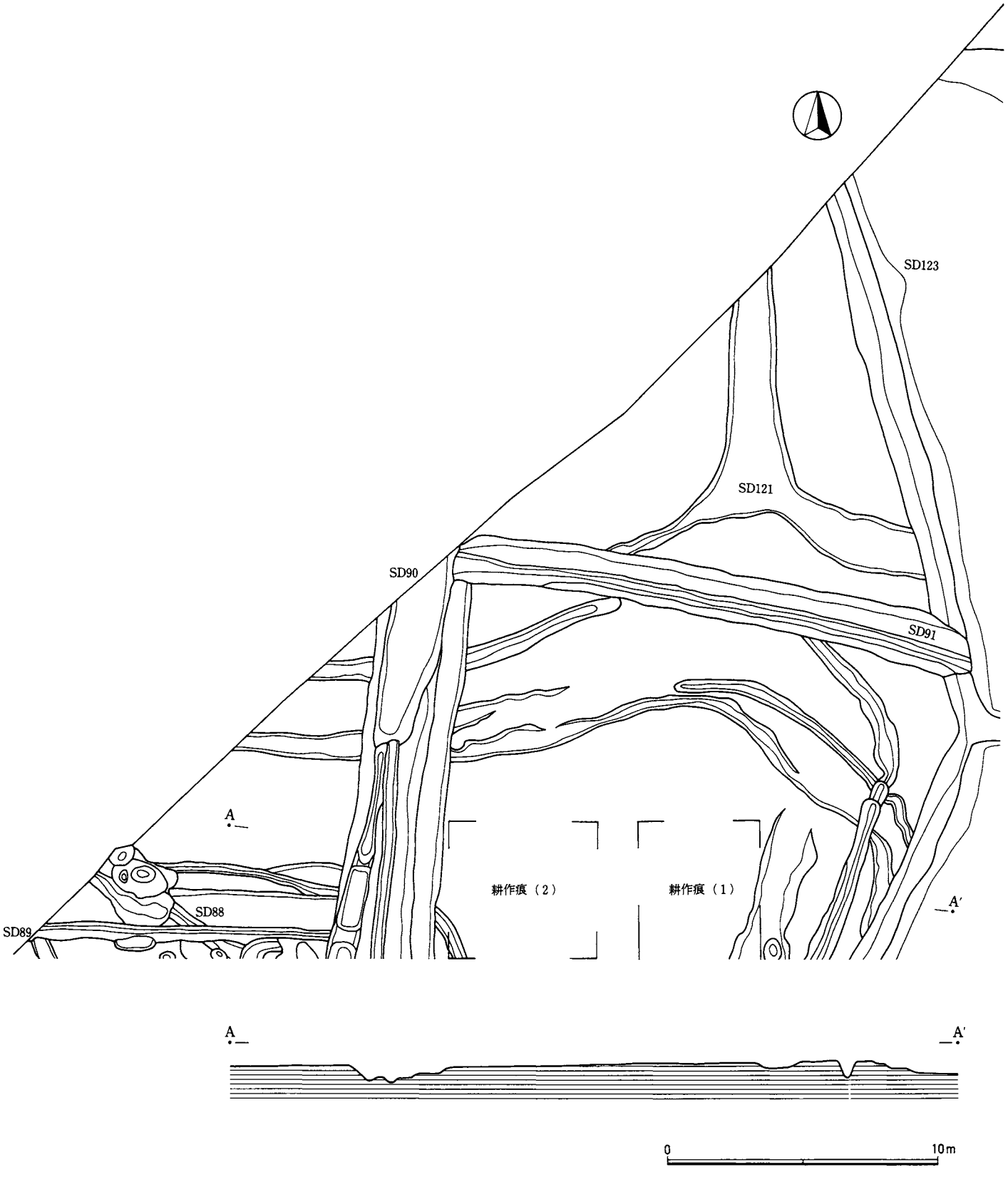


第18図　村上地区遺構全体図（4）

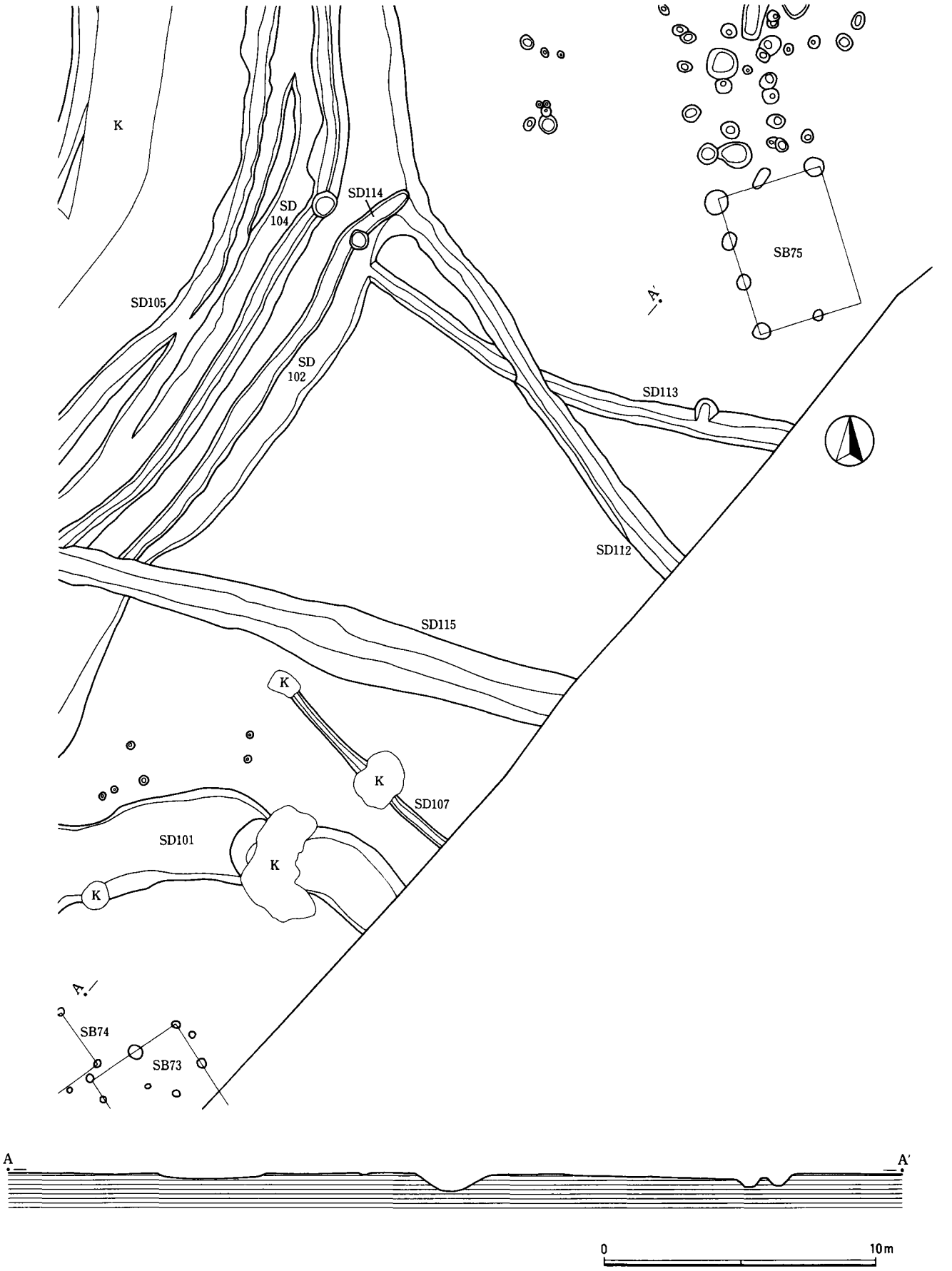
第19図　村上地区遺構全体図（5）



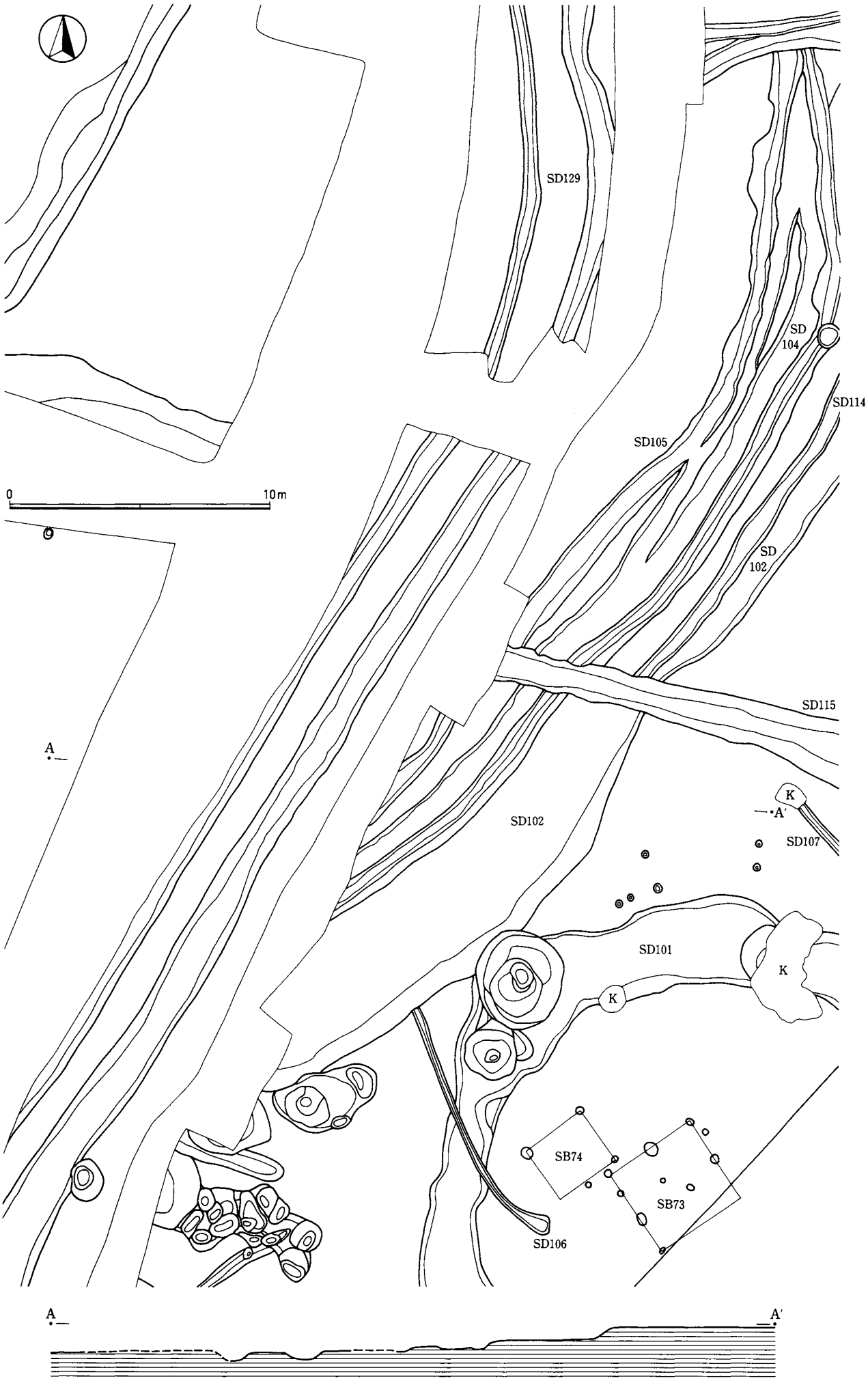
第20図　村上地区遺構全体図（6）



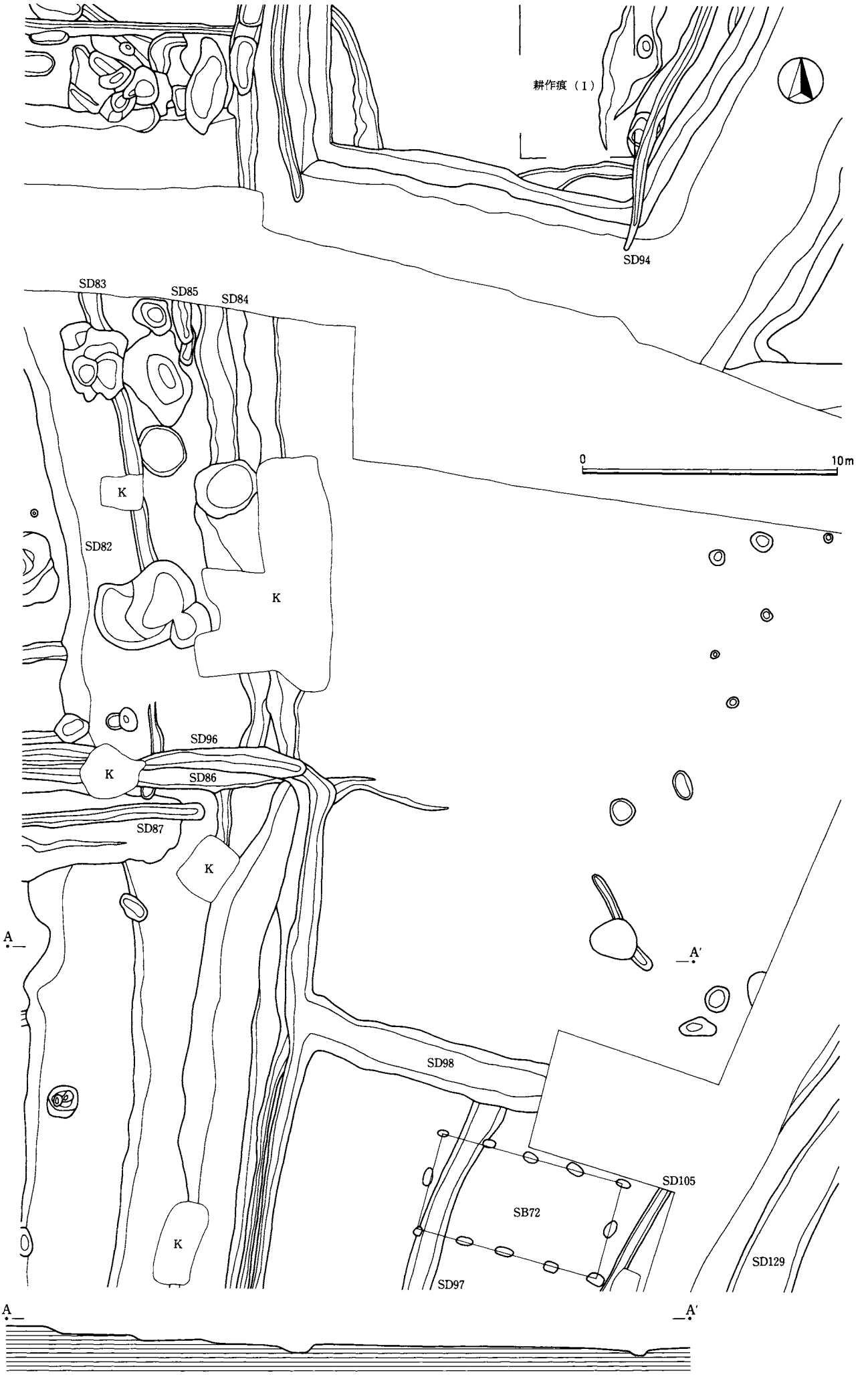
第21図　村上地区遺構全体図（7）



第22図　村上地区遺構全体図（8）

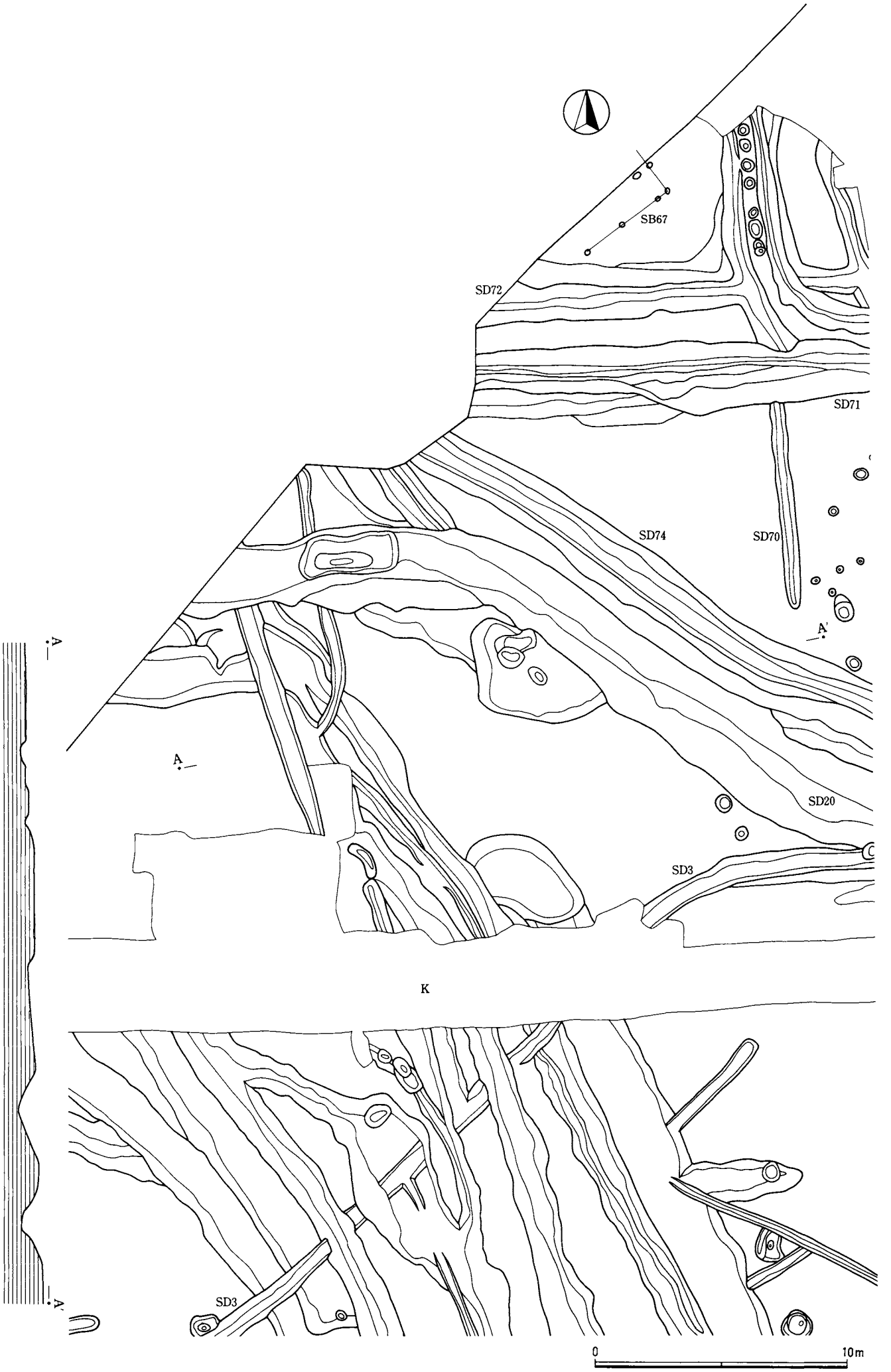


第23図　村上地区遺構全体図（９）

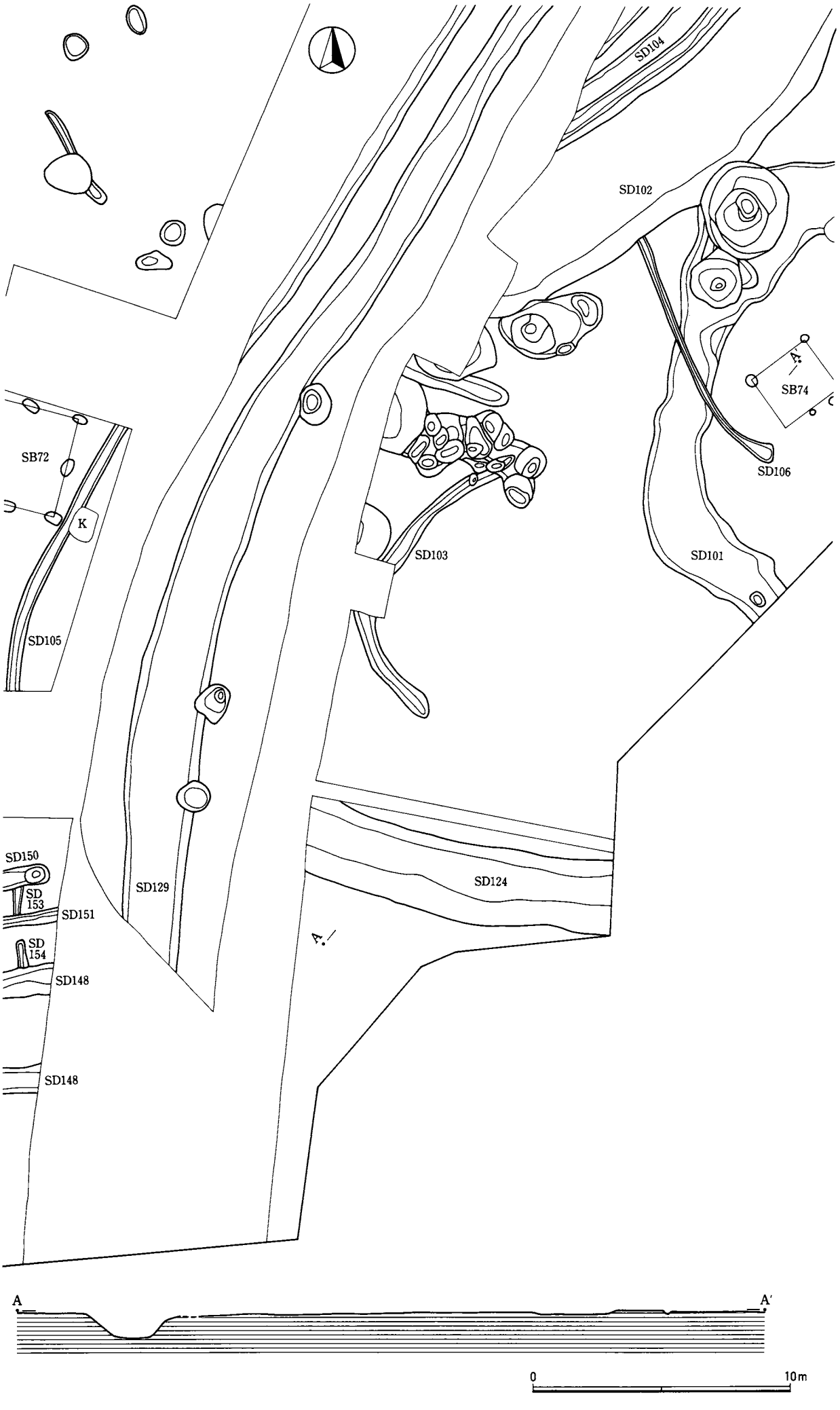


第24図　村上地区遺構全体図（10）

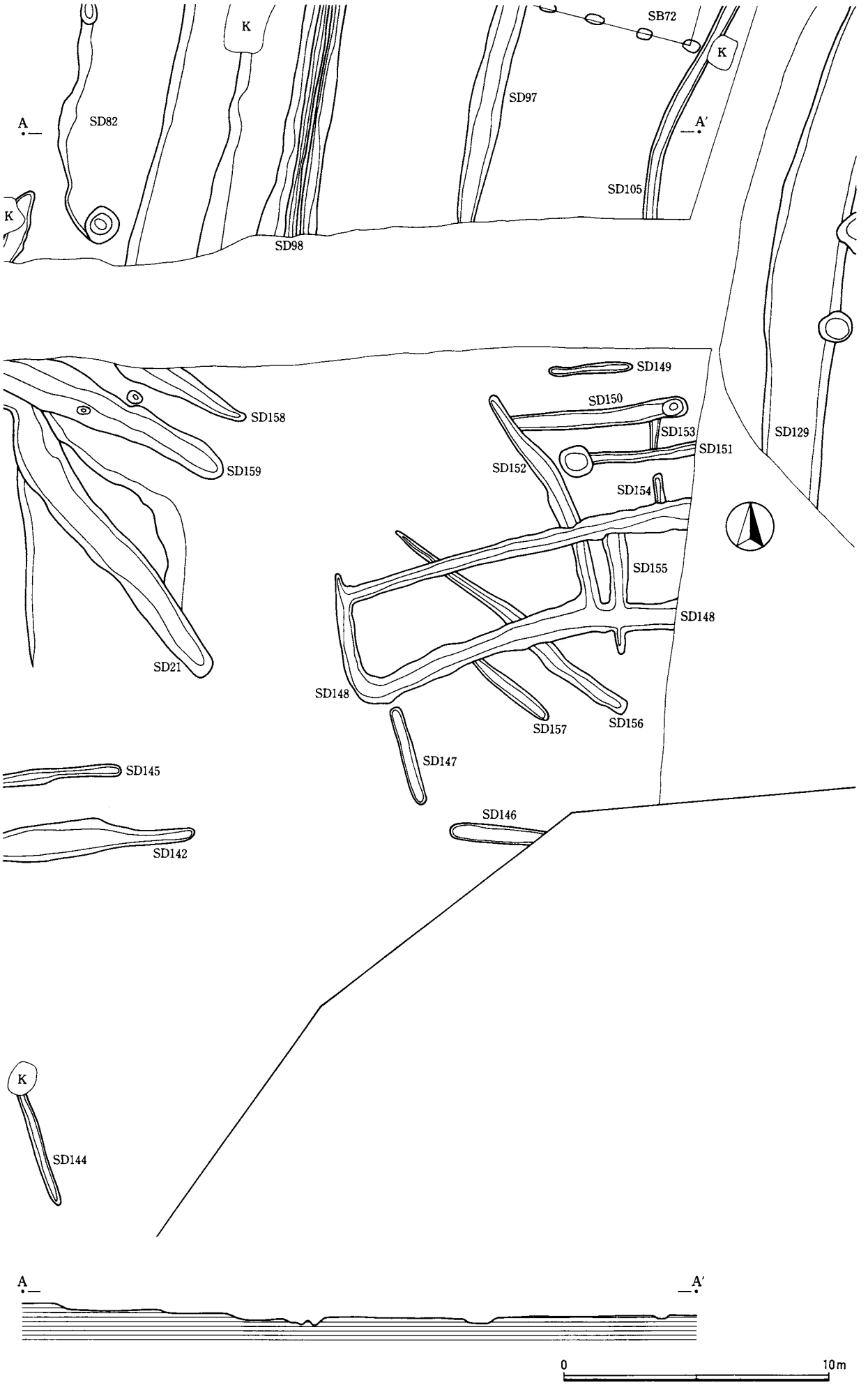
第25図　村上地区遺構全体図（11）



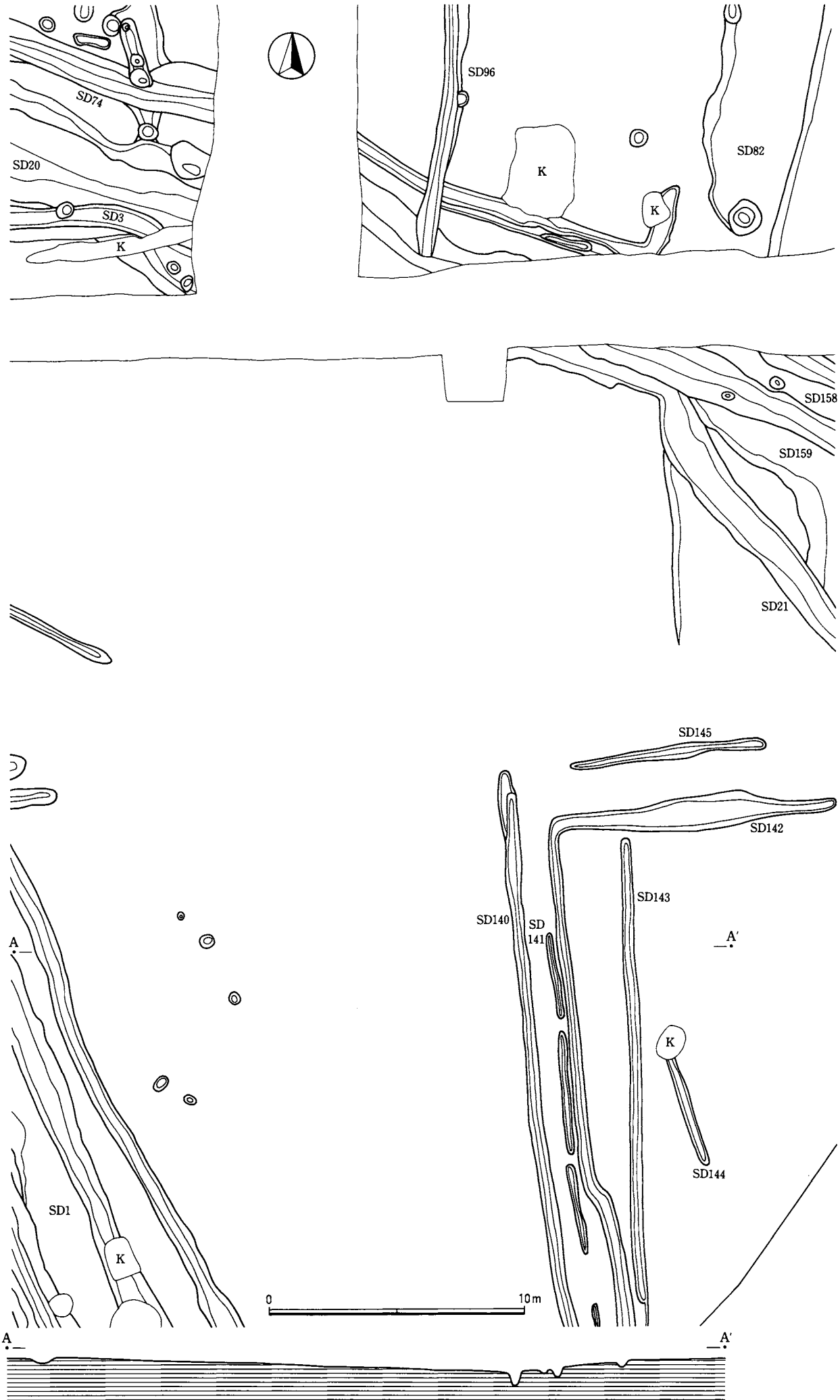
第26図　村上地区遺構全体図（12）



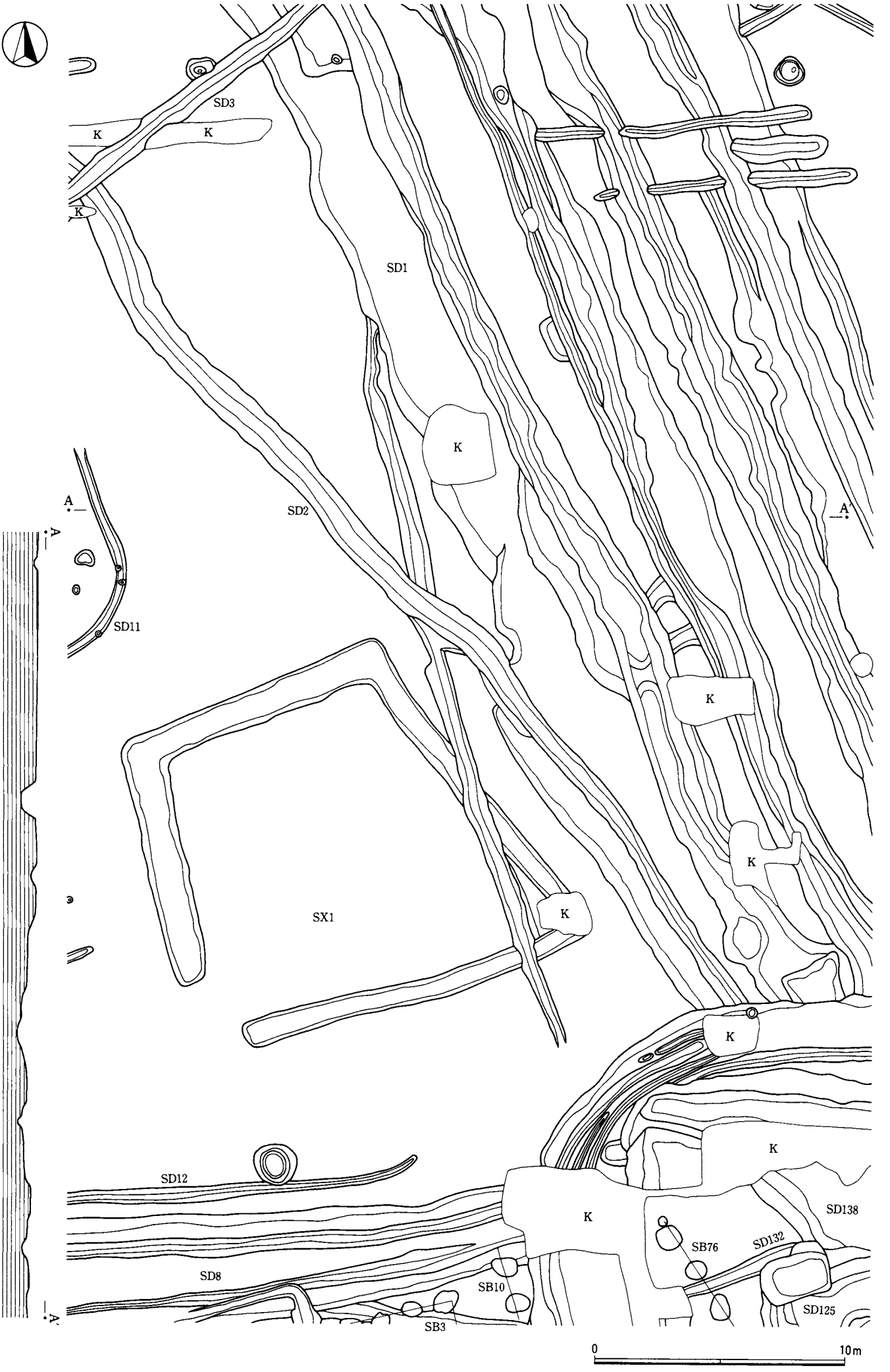
第27図　村上地区遺構全体図（13）



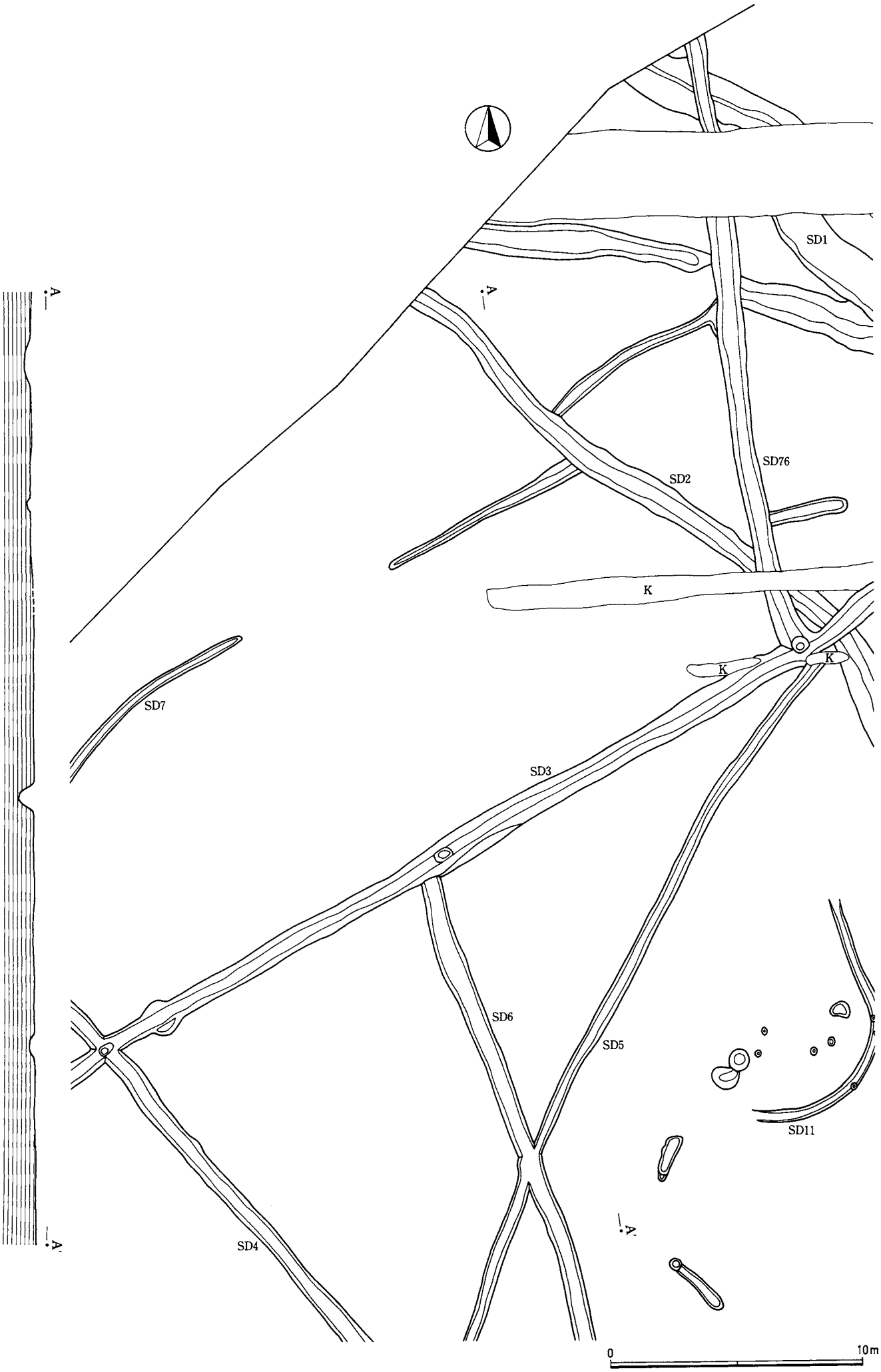
第28図　村上地区遺構全体図（14）



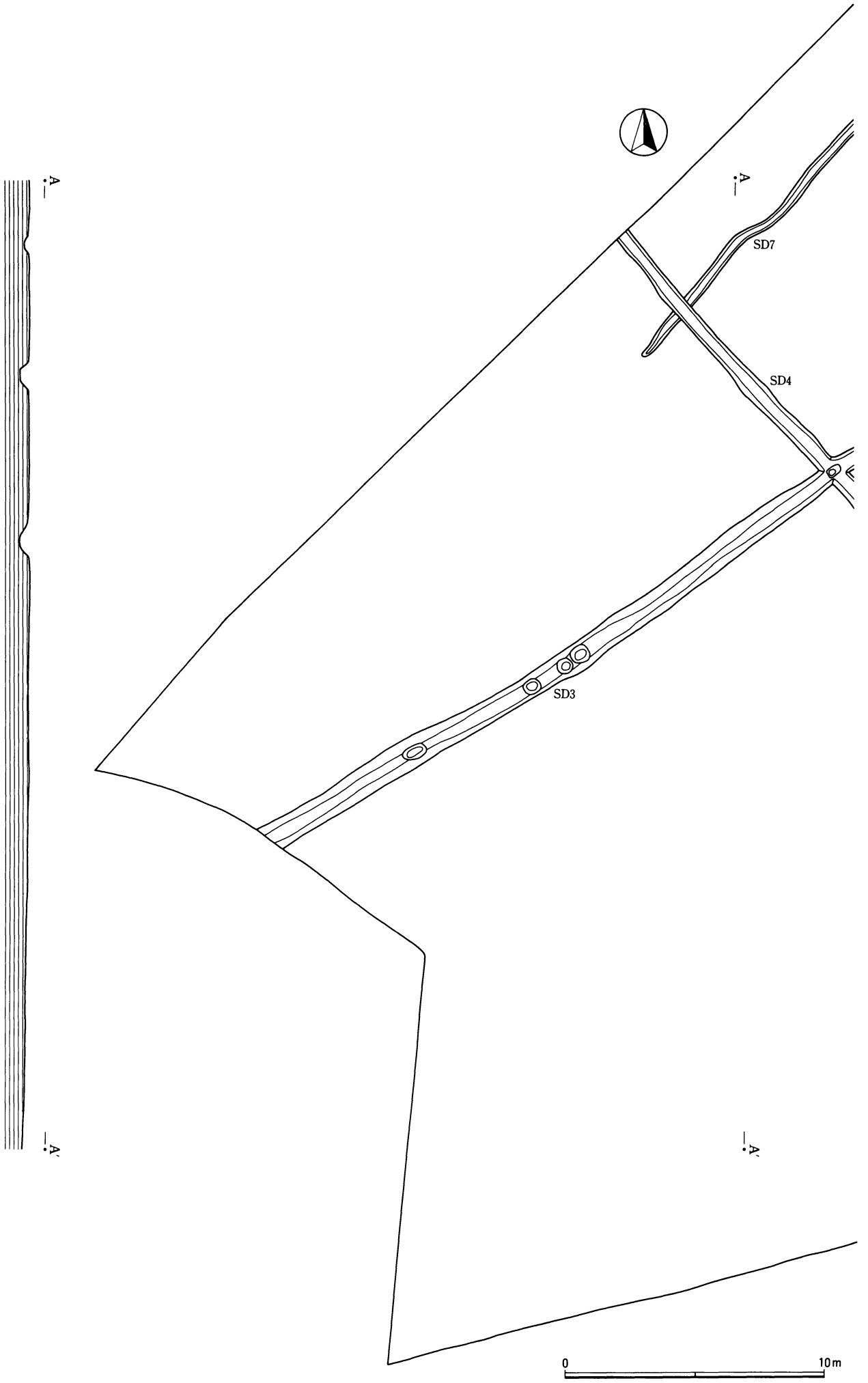
第29図　村上地区遺構全体図（15）



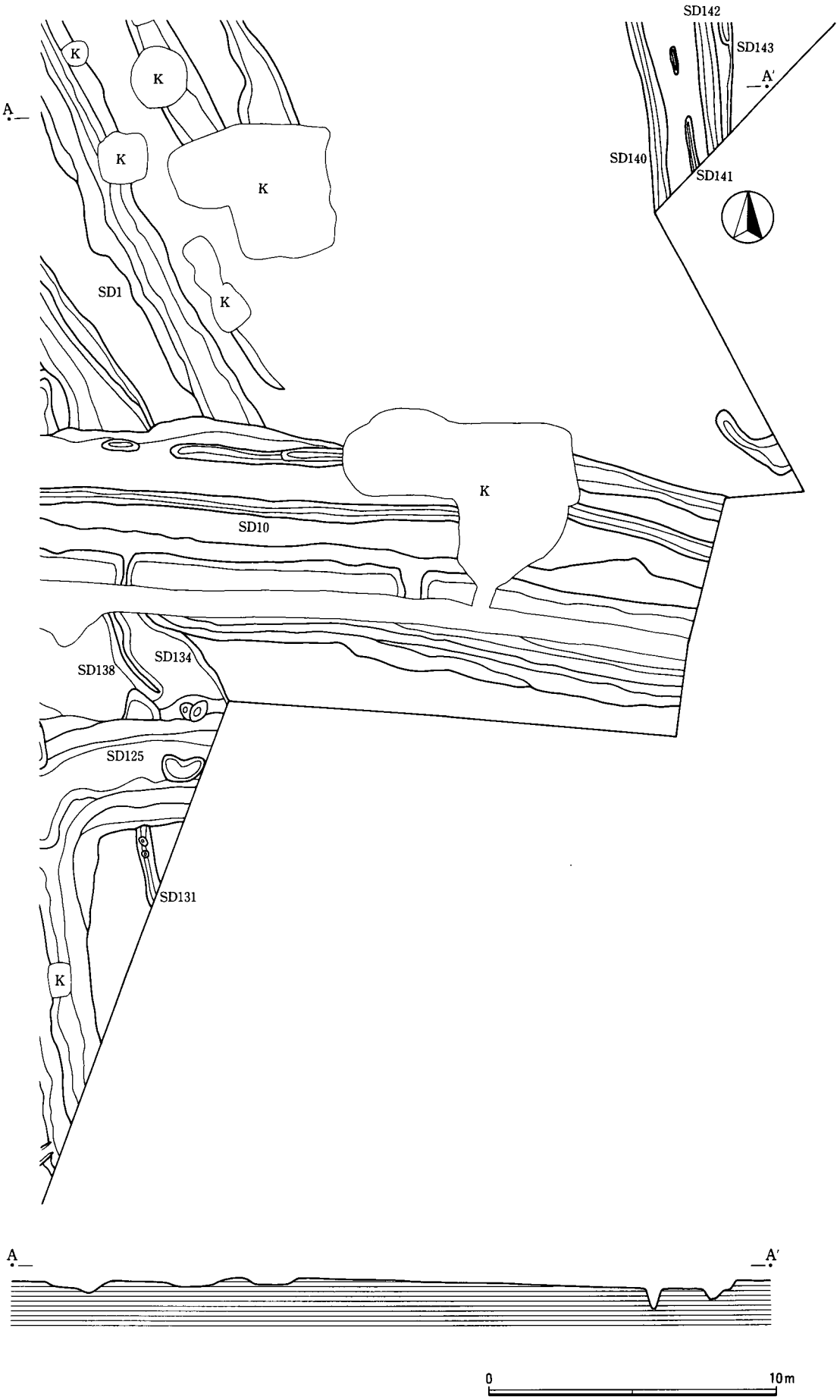
第30図　村上地区遺構全体図（16）



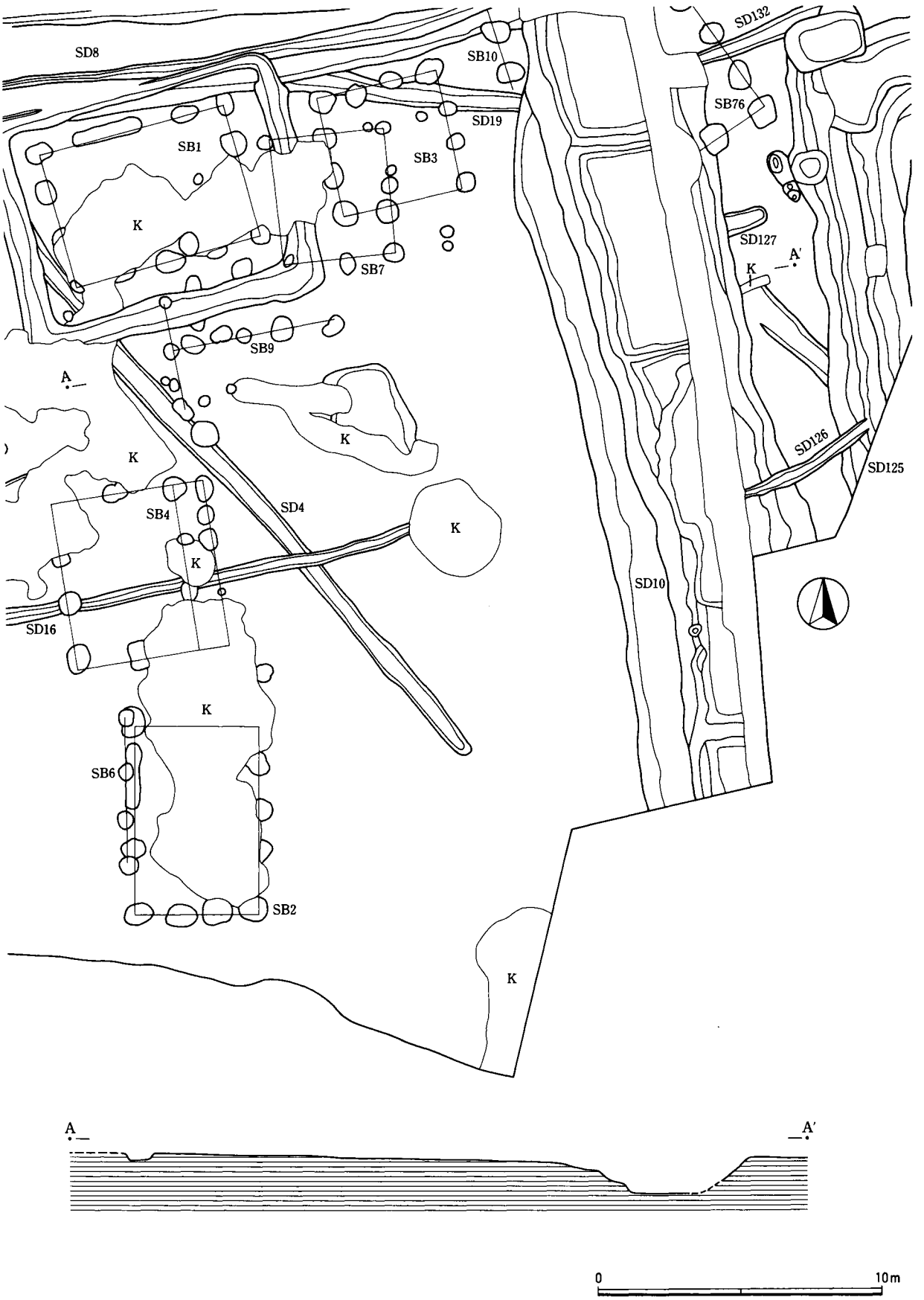
第31図　村上地区遺構全体図（17）



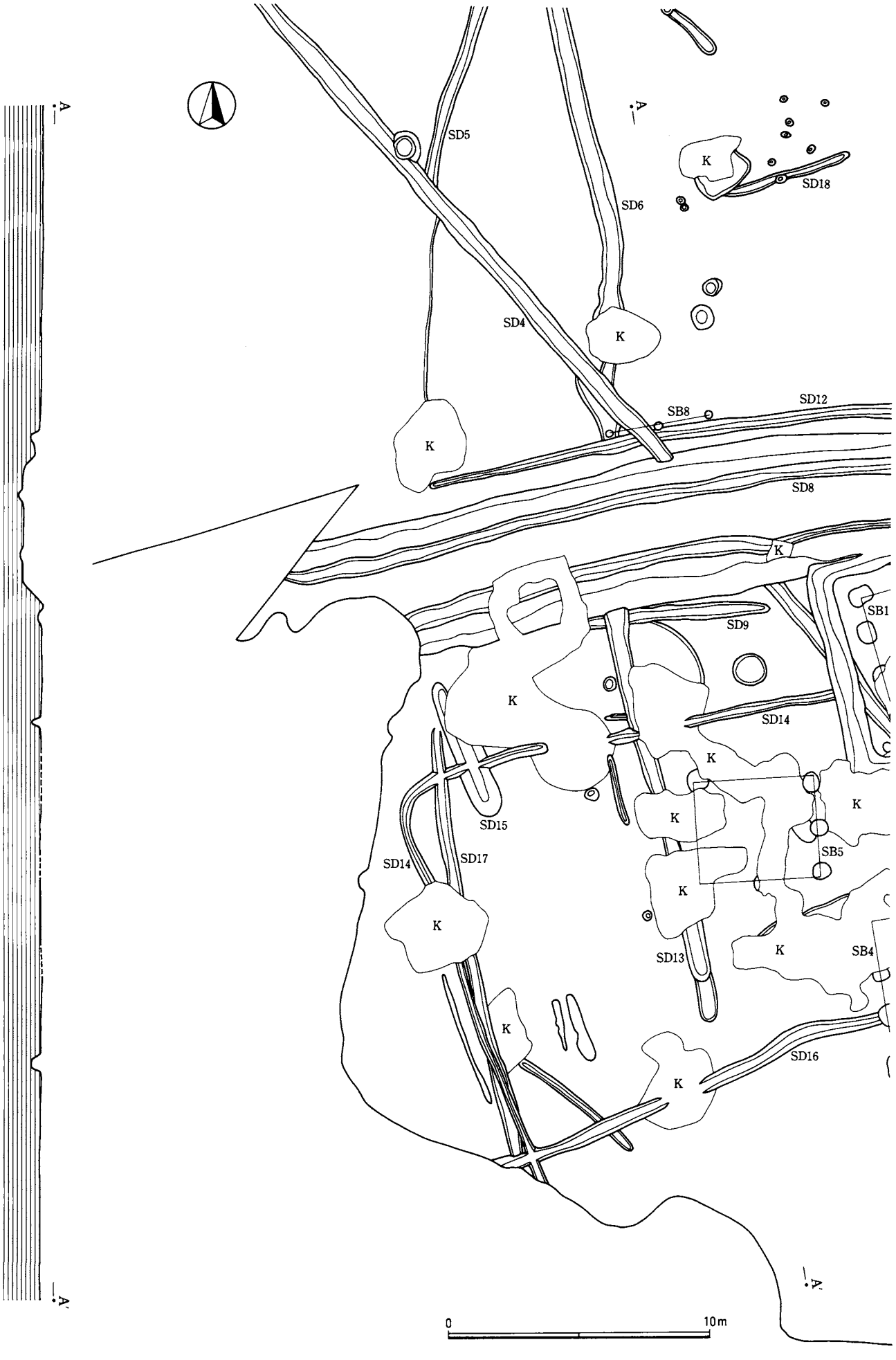
第32図　村上地区遺構全体図（18）



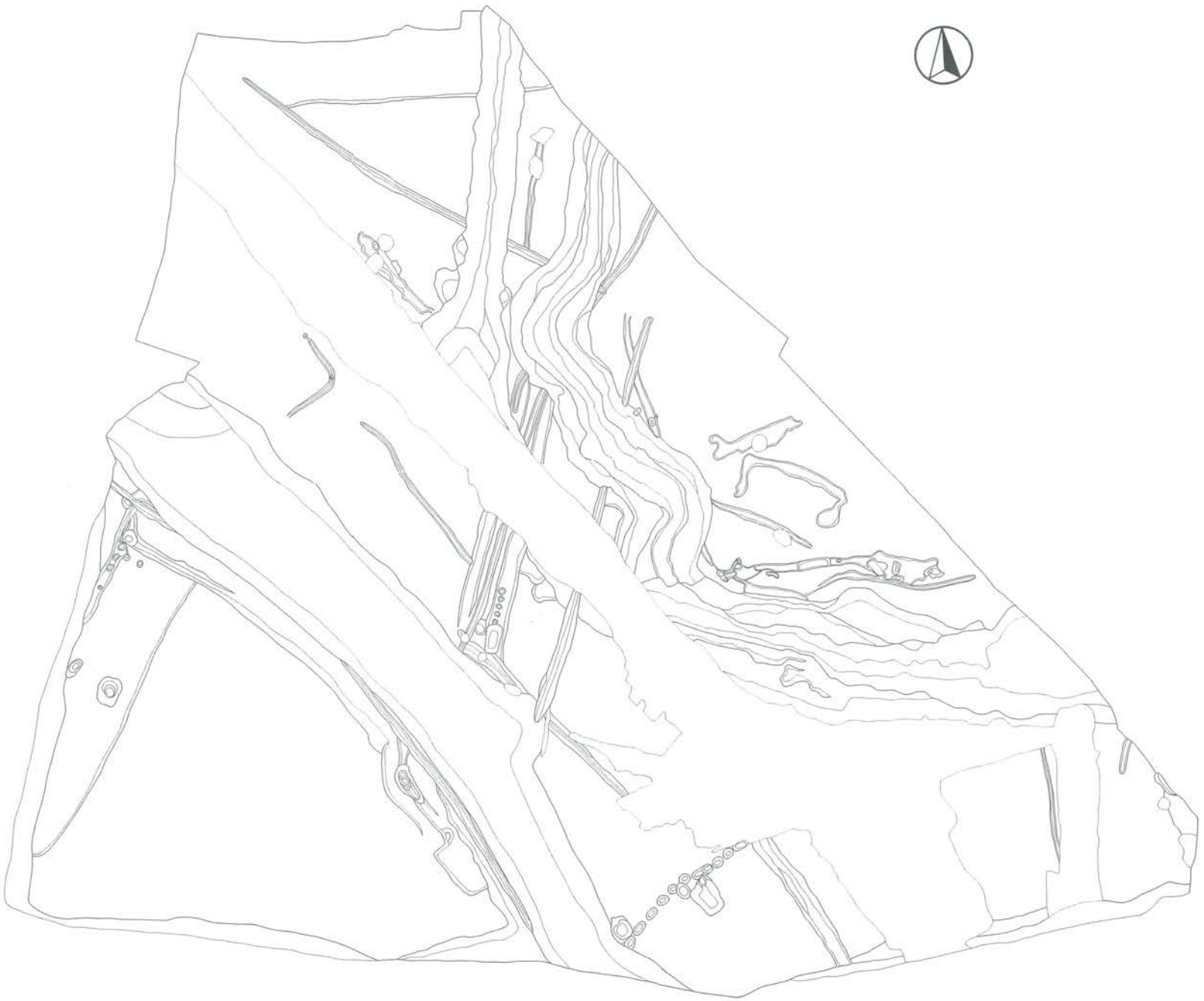
第33図　村上地区遺構全体図（19）



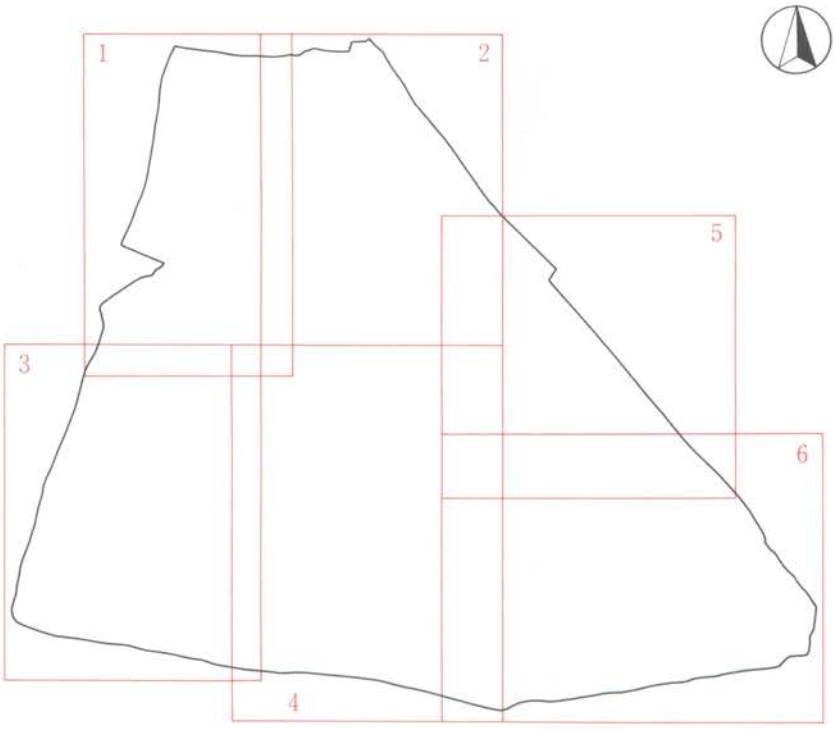
第34図　村上地区遺構全体図（20）



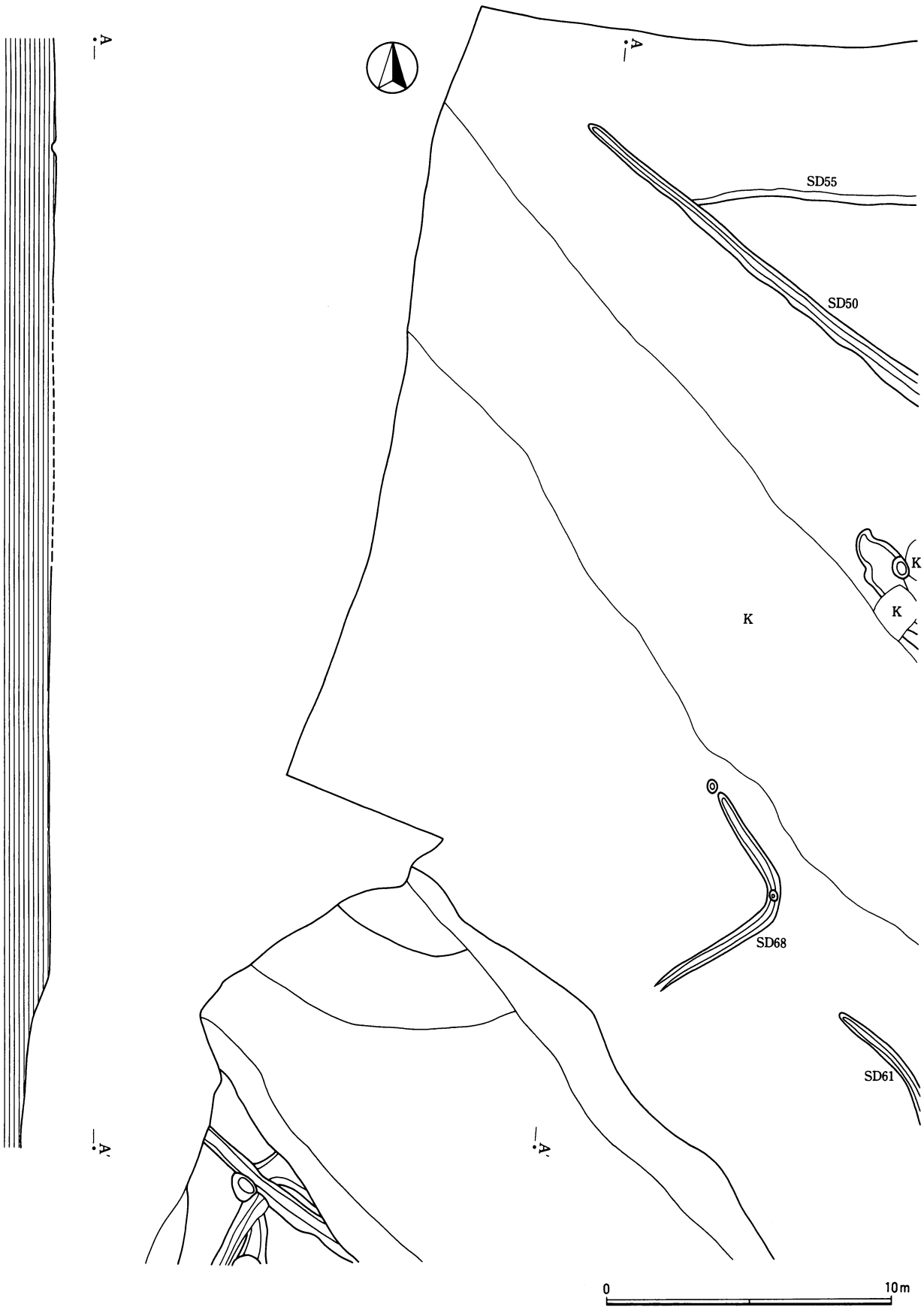
第35図　村上地区遺構全体図（21）



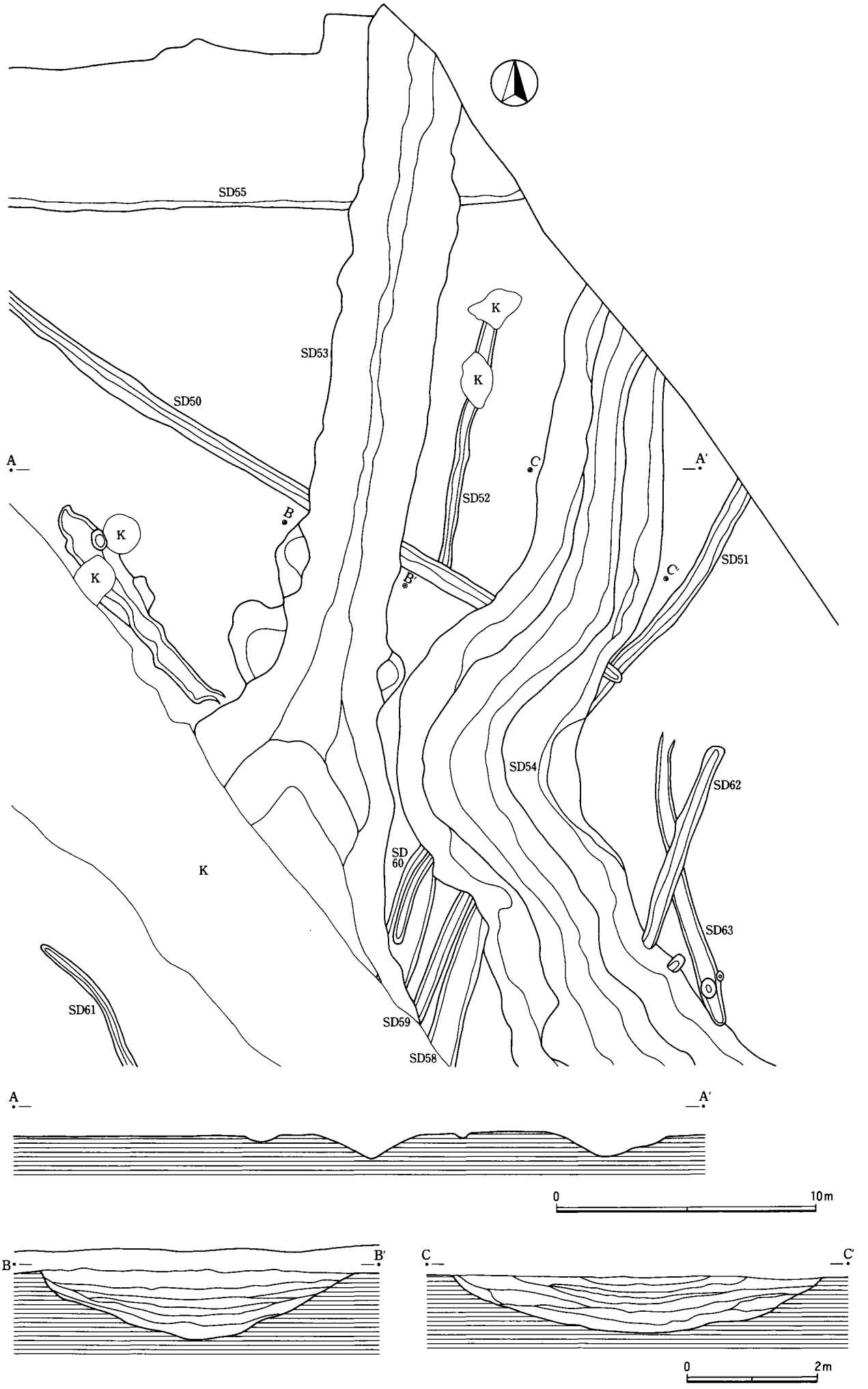
第36図　馬場台地区遺構配置図



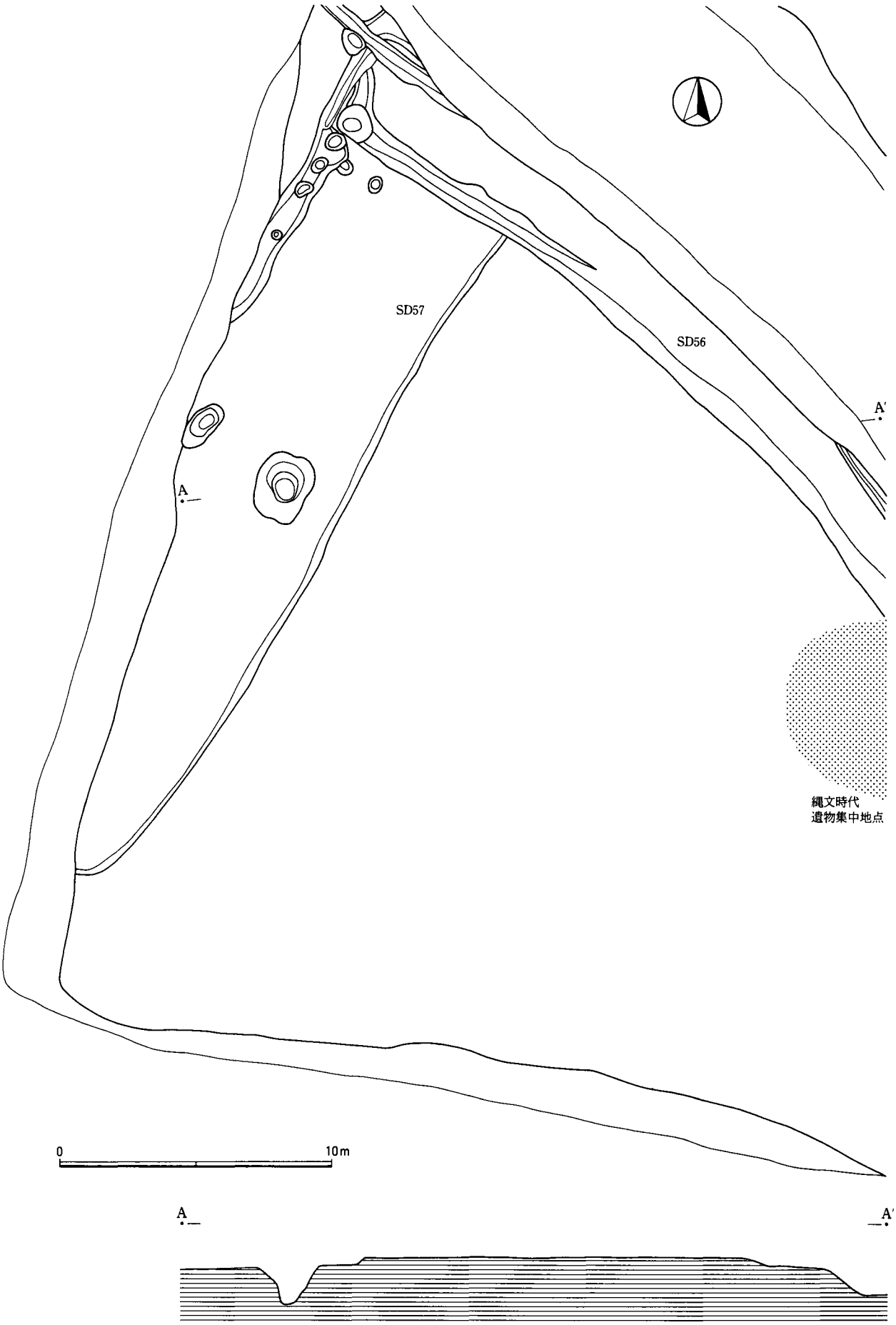
第37図　馬場台地区遺構全体図区割図



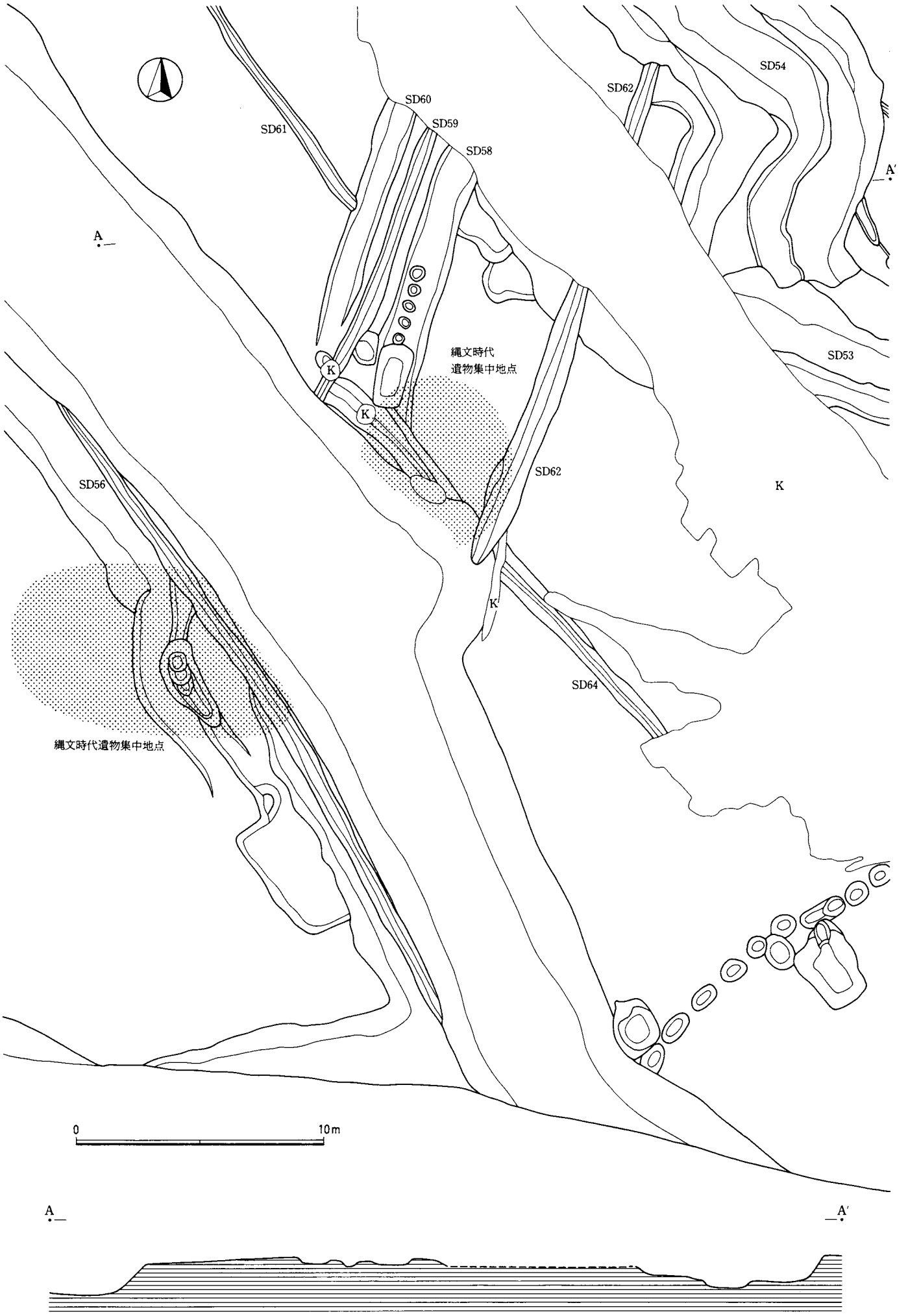
第38図　馬場台地区遺構全体図（1）



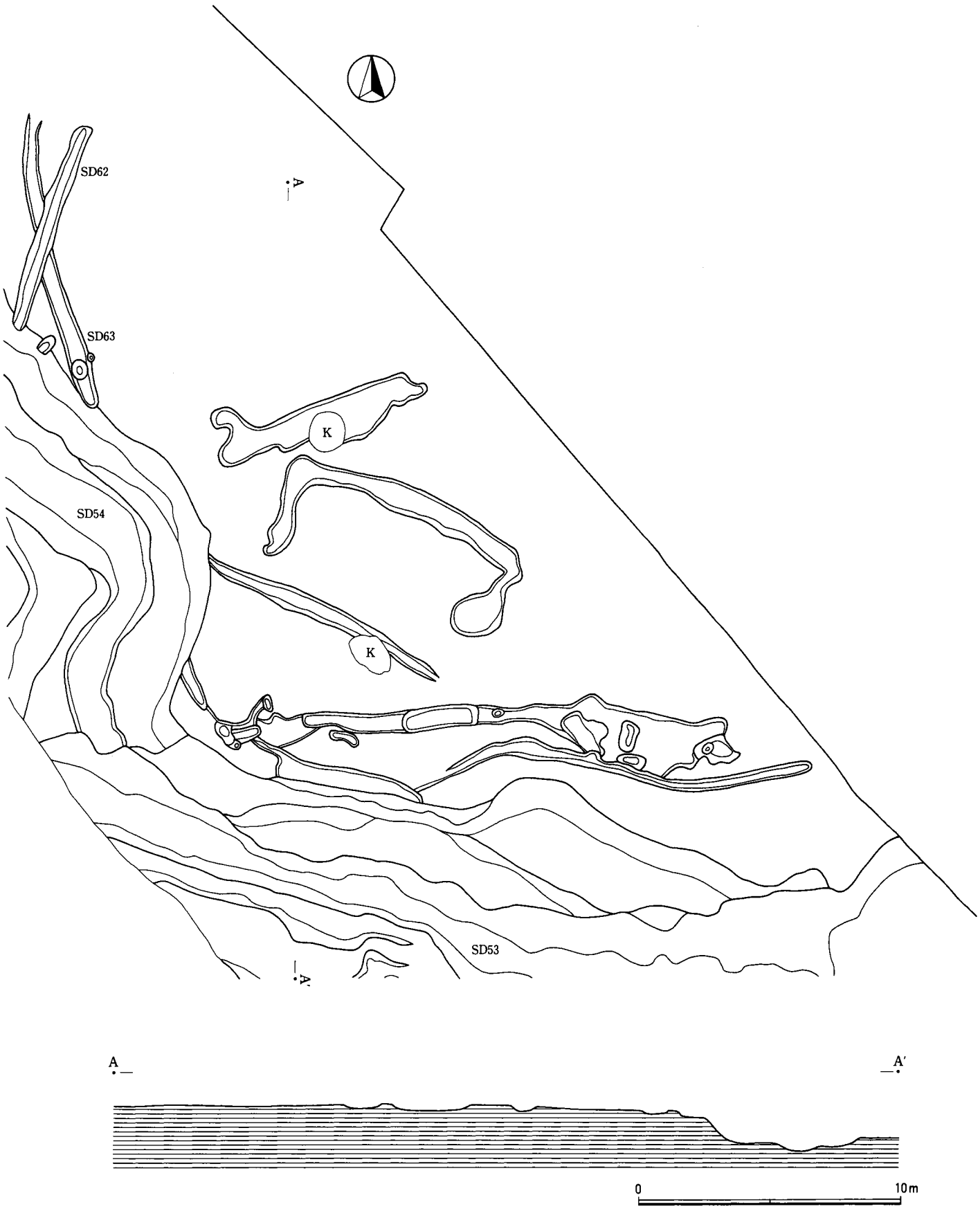
第39図　馬場台地区遺構全体図（2）



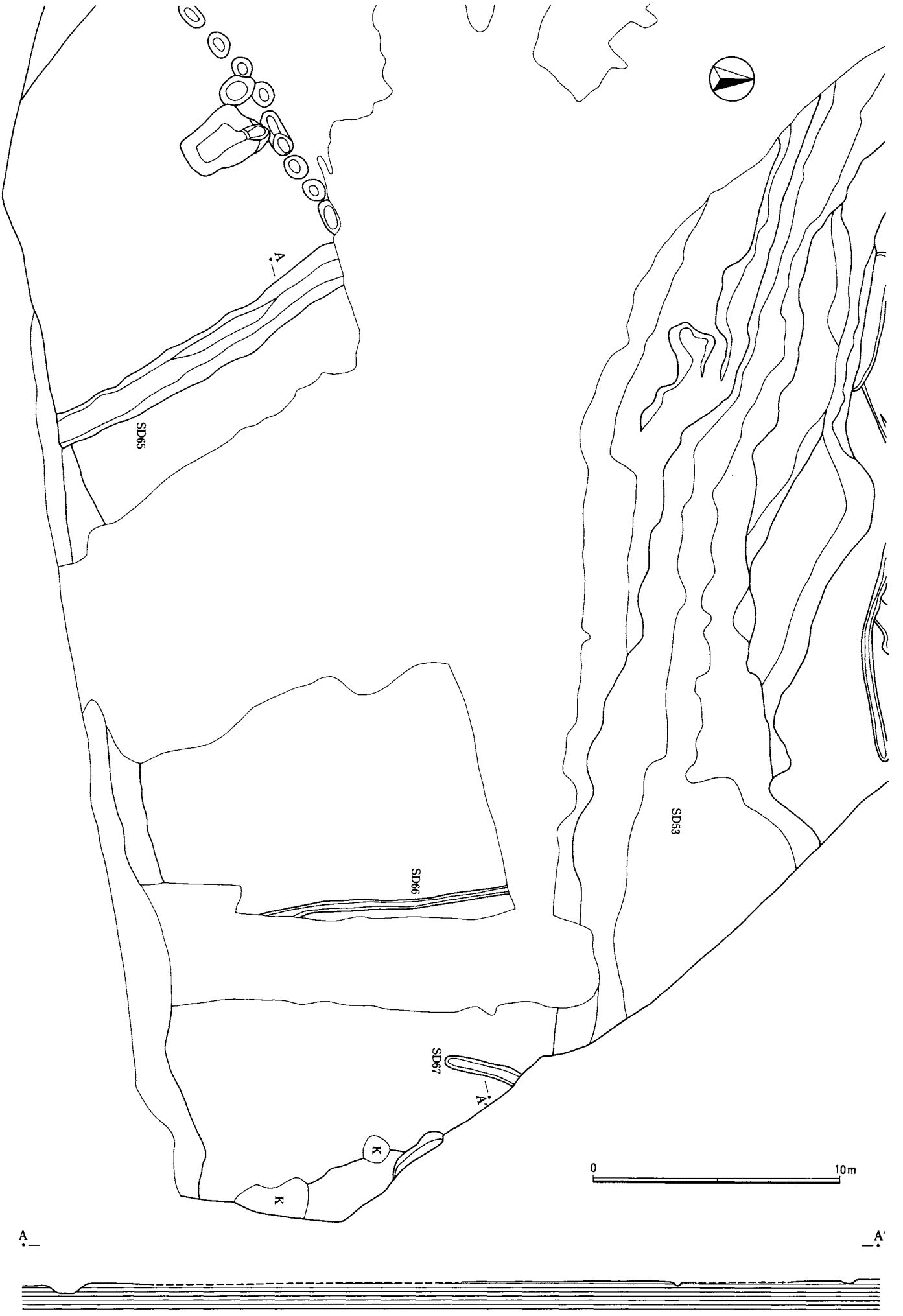
第40図　馬場台地区遺構全体図（3）



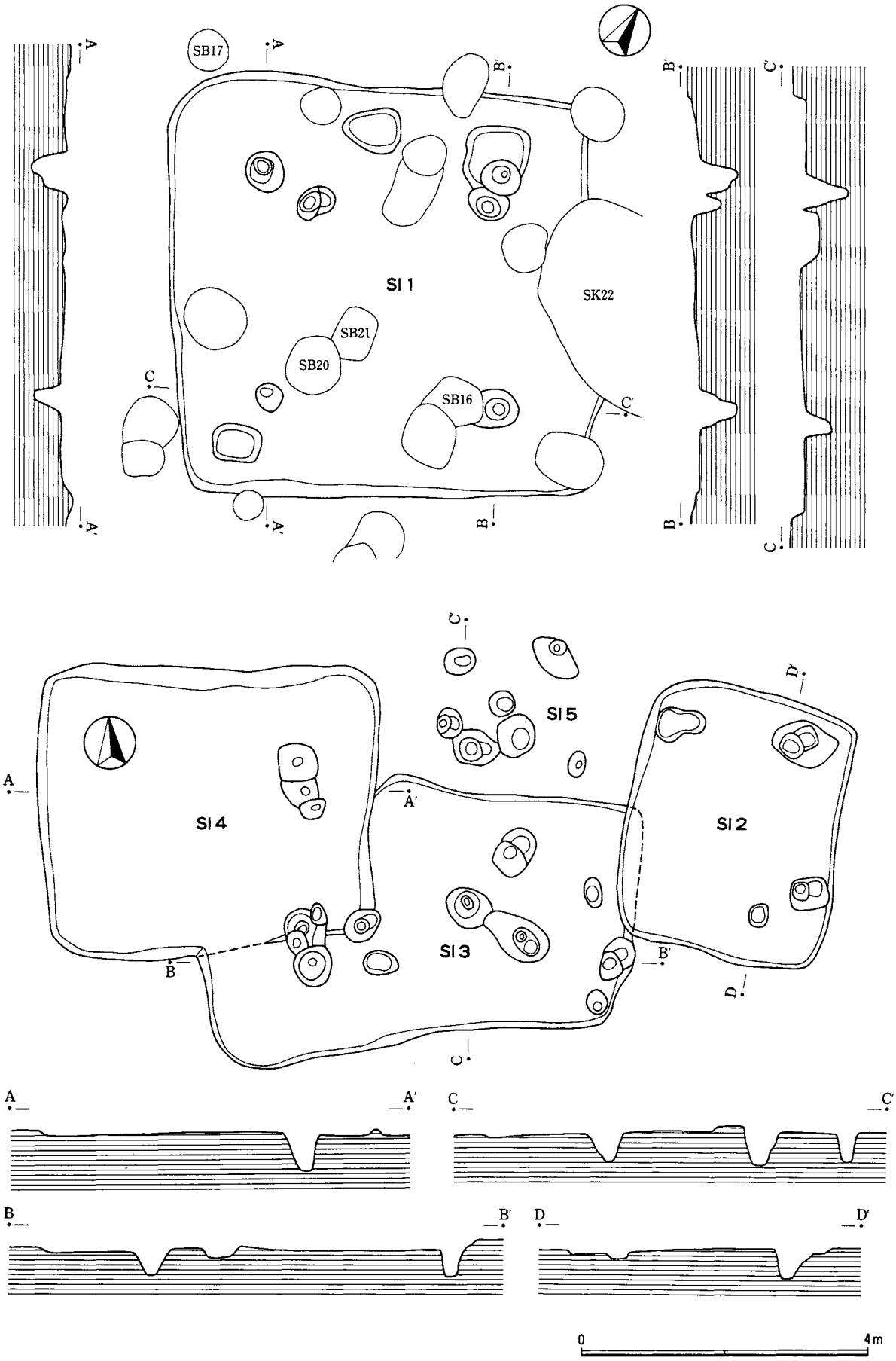
第41図　馬場台地区遺構全体図（4）



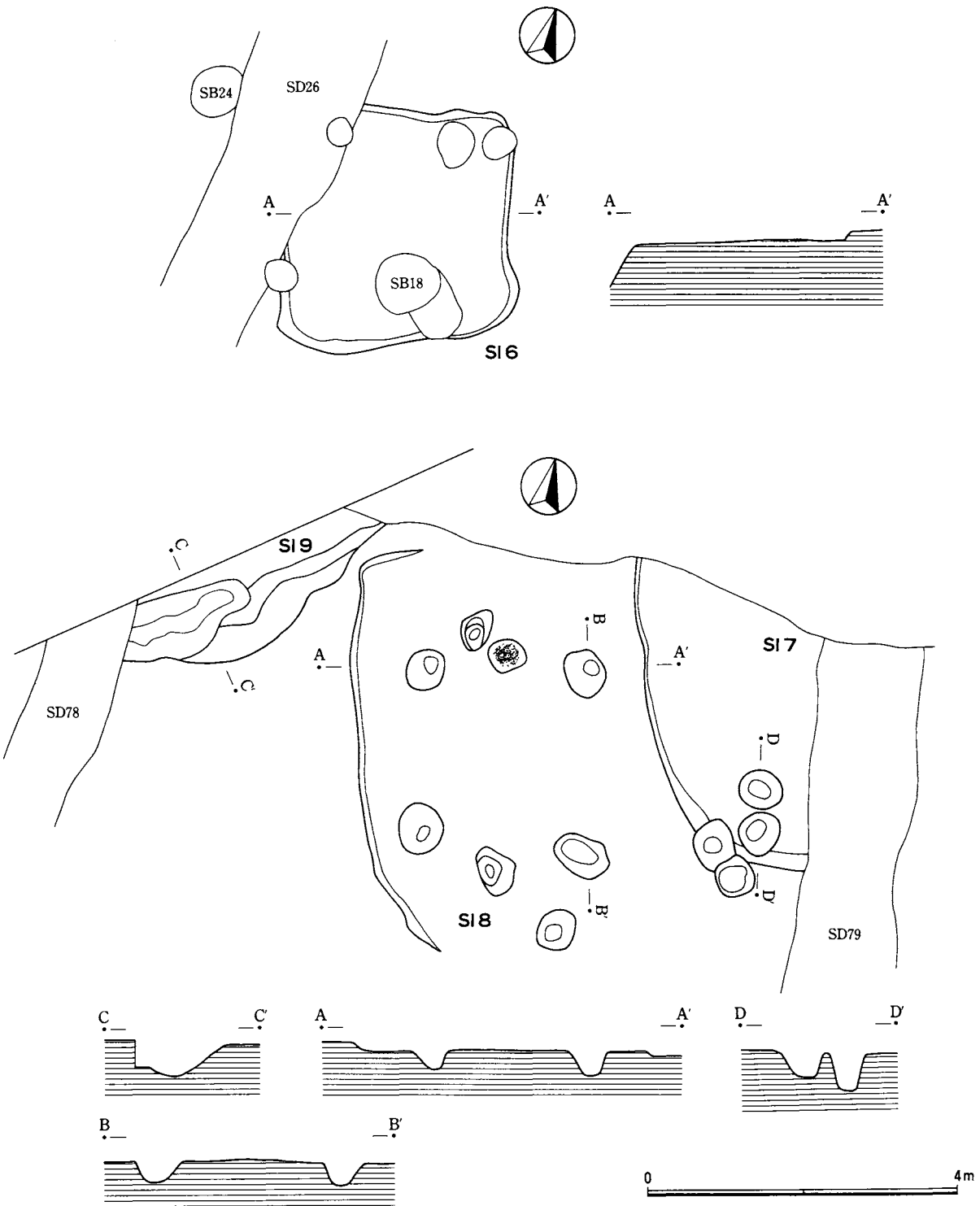
第42図　馬場台地区遺構全体図（5）



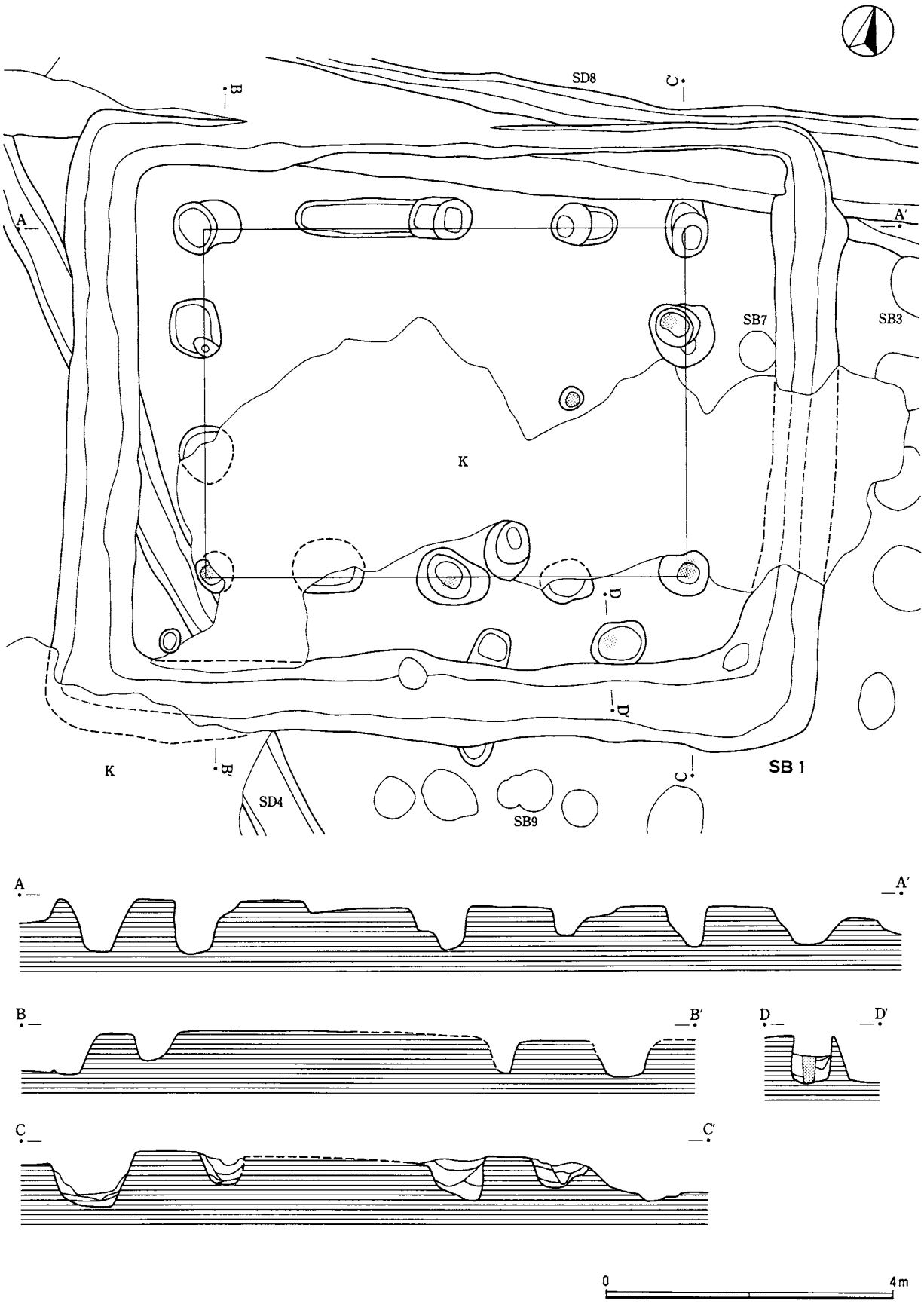
第43図　馬場台地区遺構全体図（6）



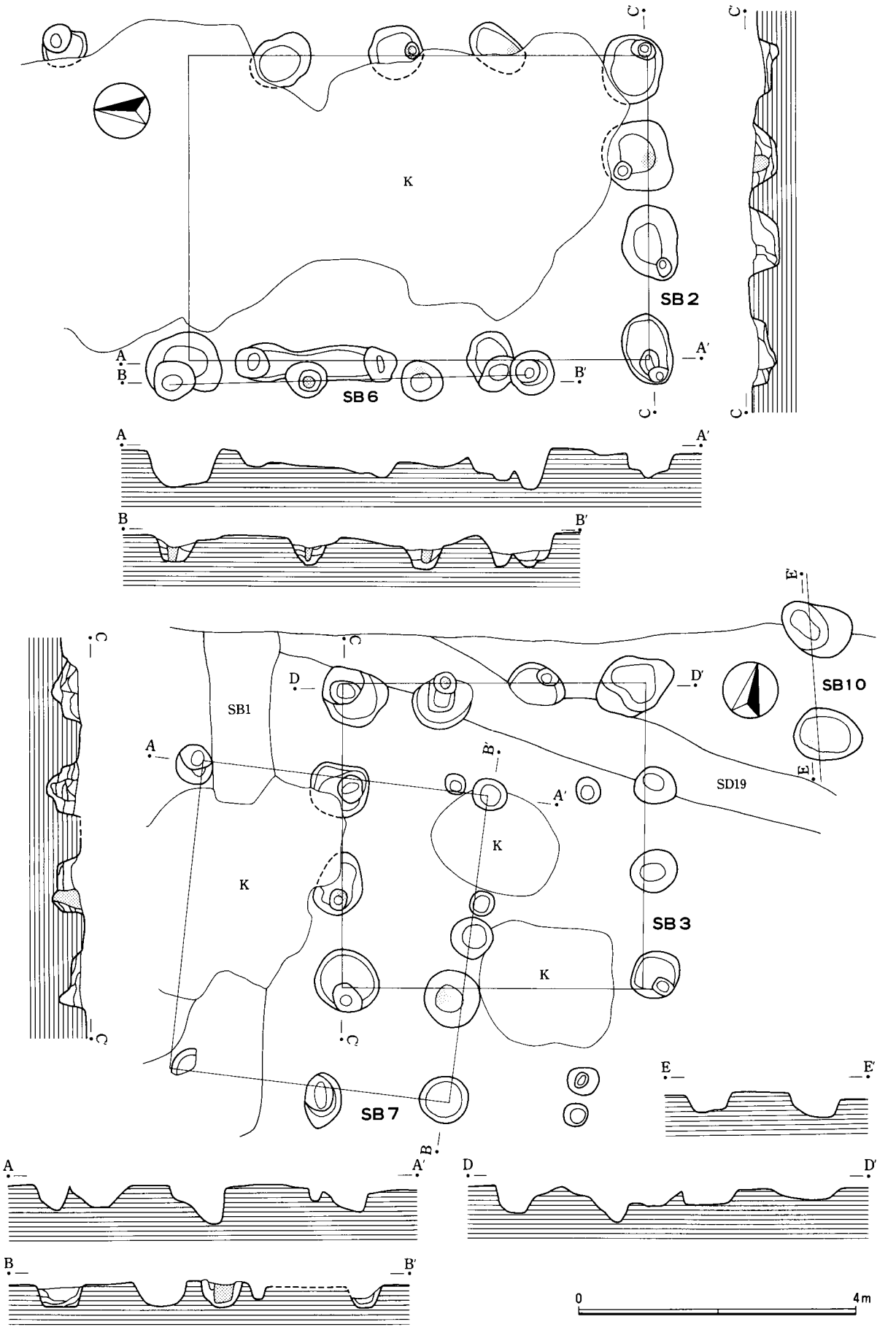
第44図　住居跡（1）



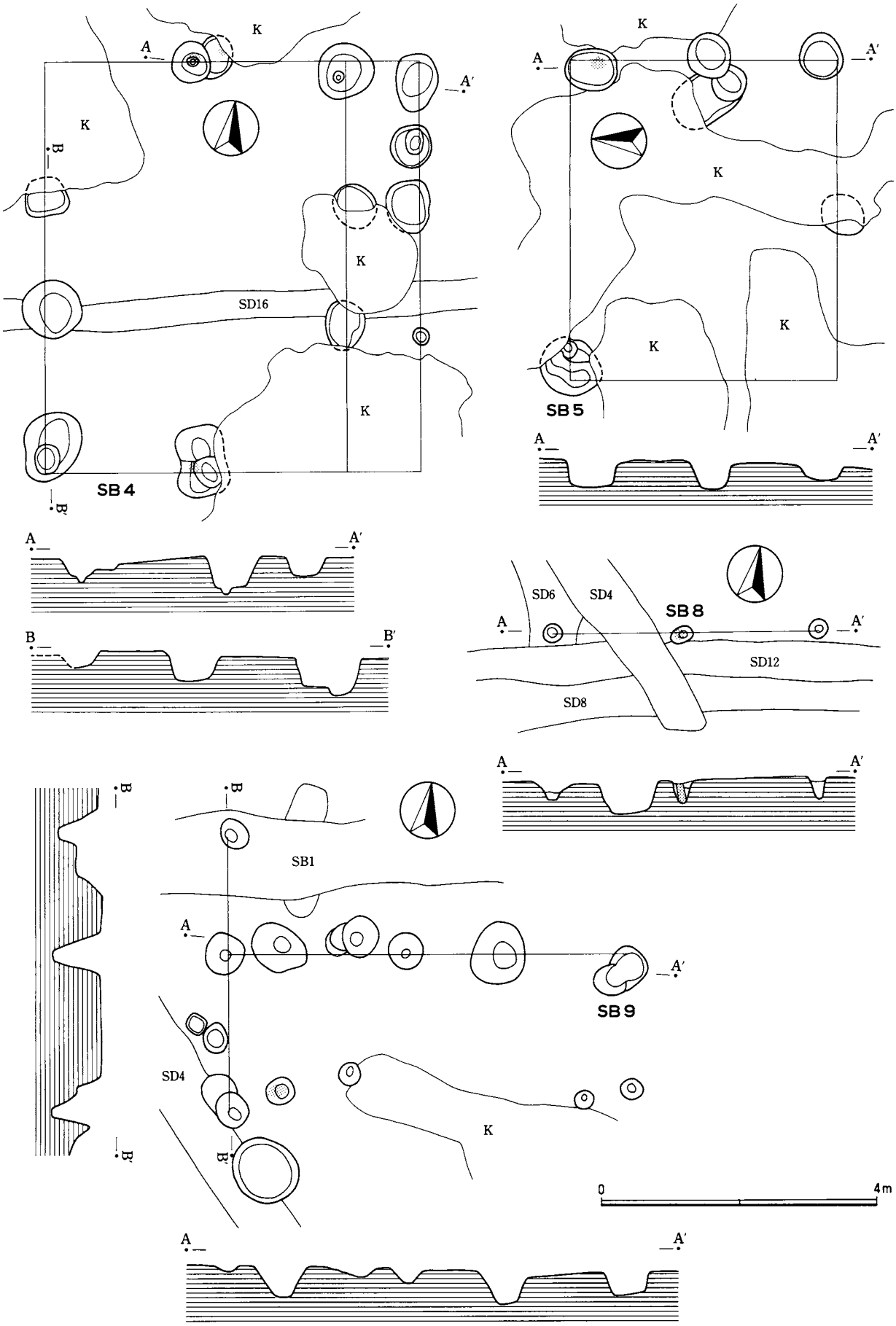
第45図　住居跡（2）



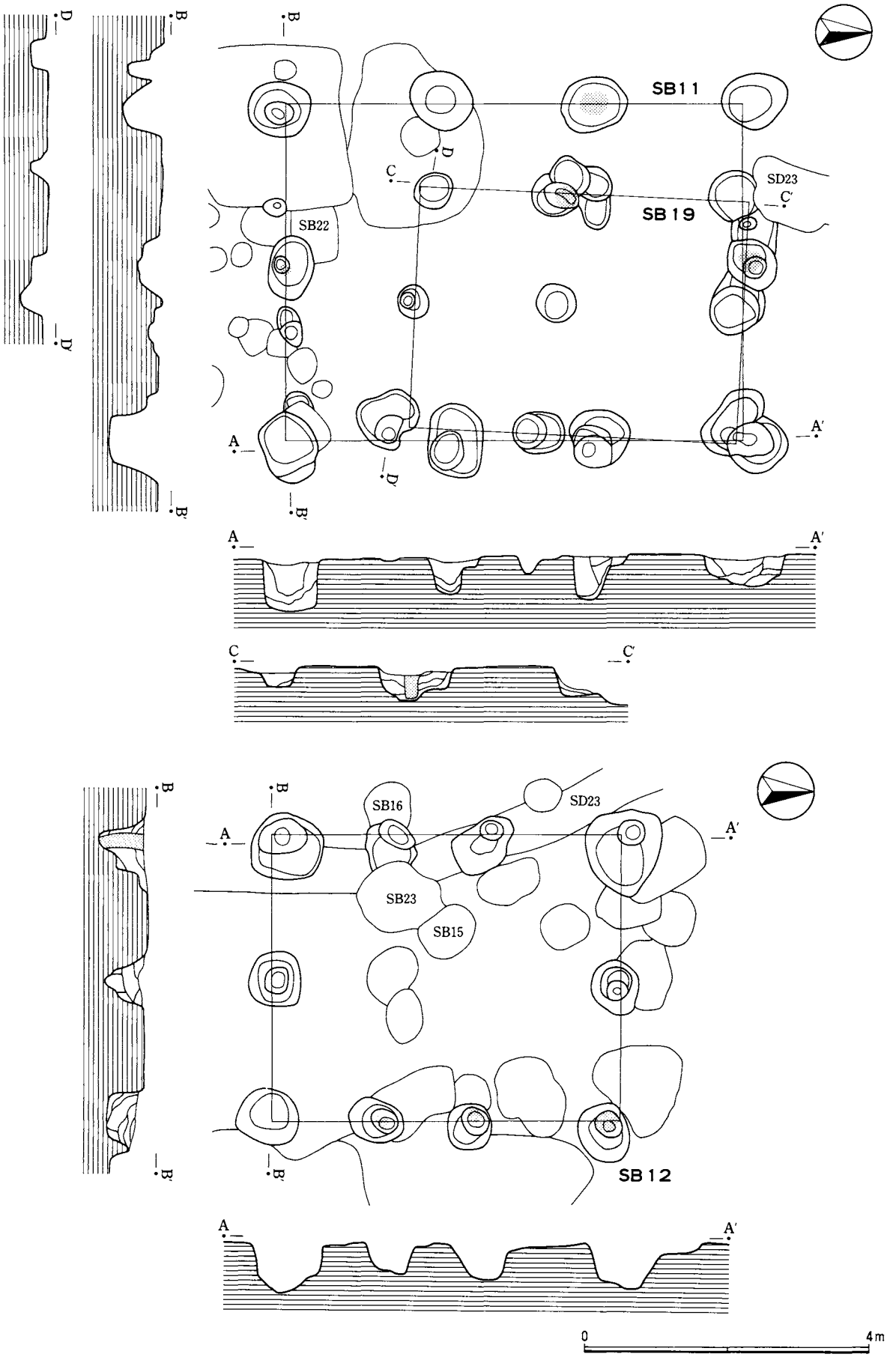
第46図　掘立柱建物跡（1）



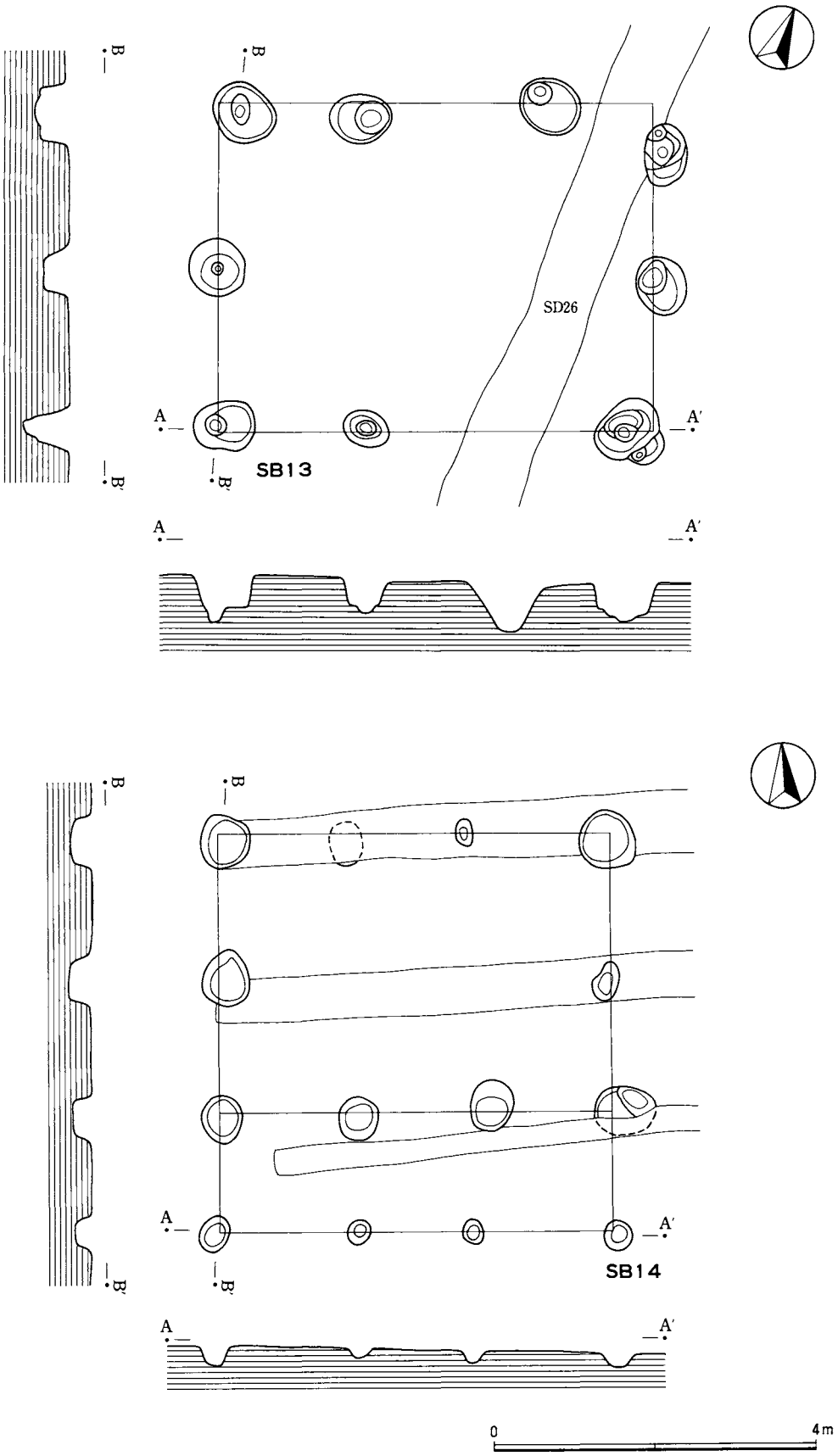
第47図　掘立柱建物跡（2）



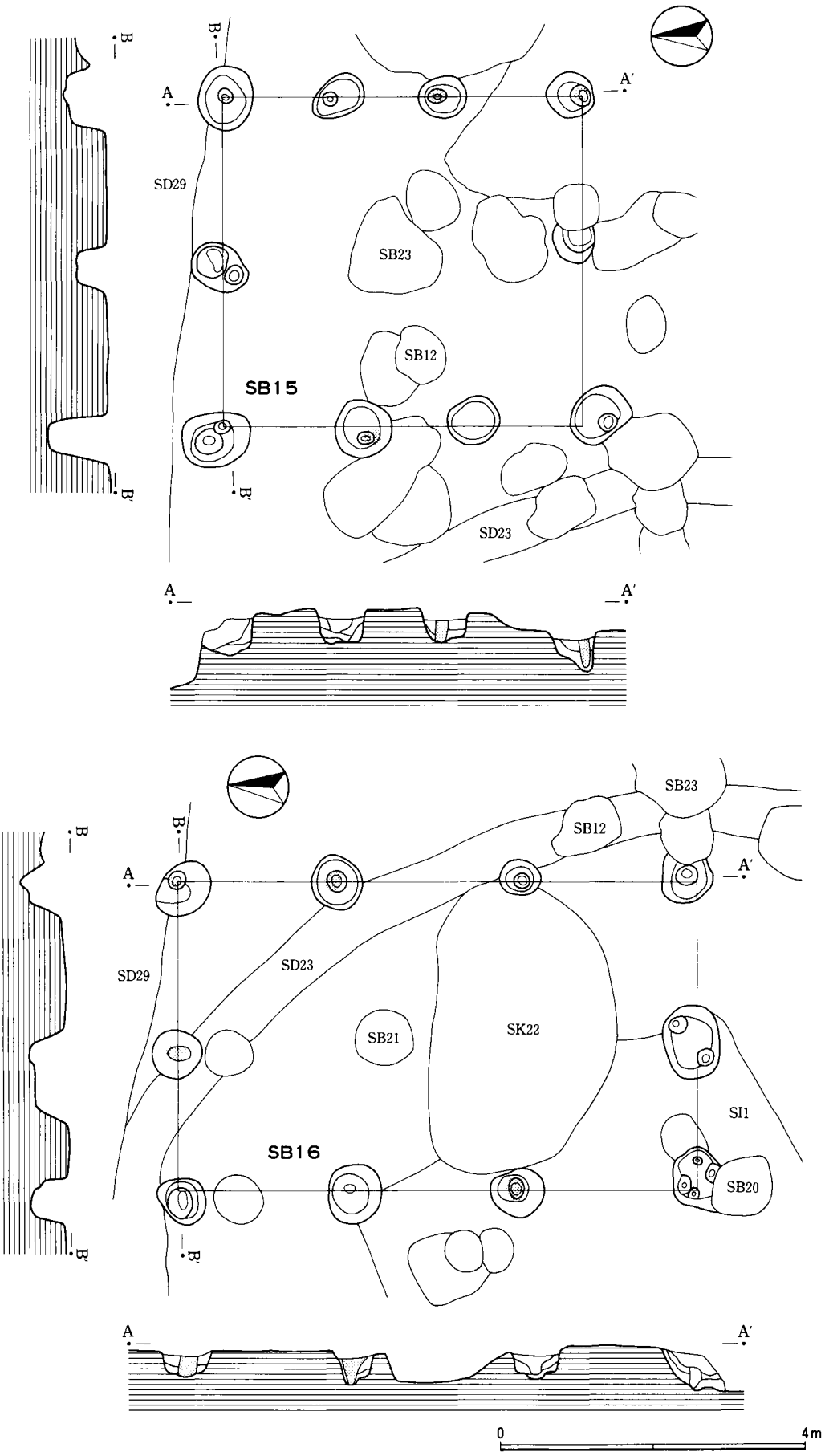
第48図　掘立柱建物跡（3）



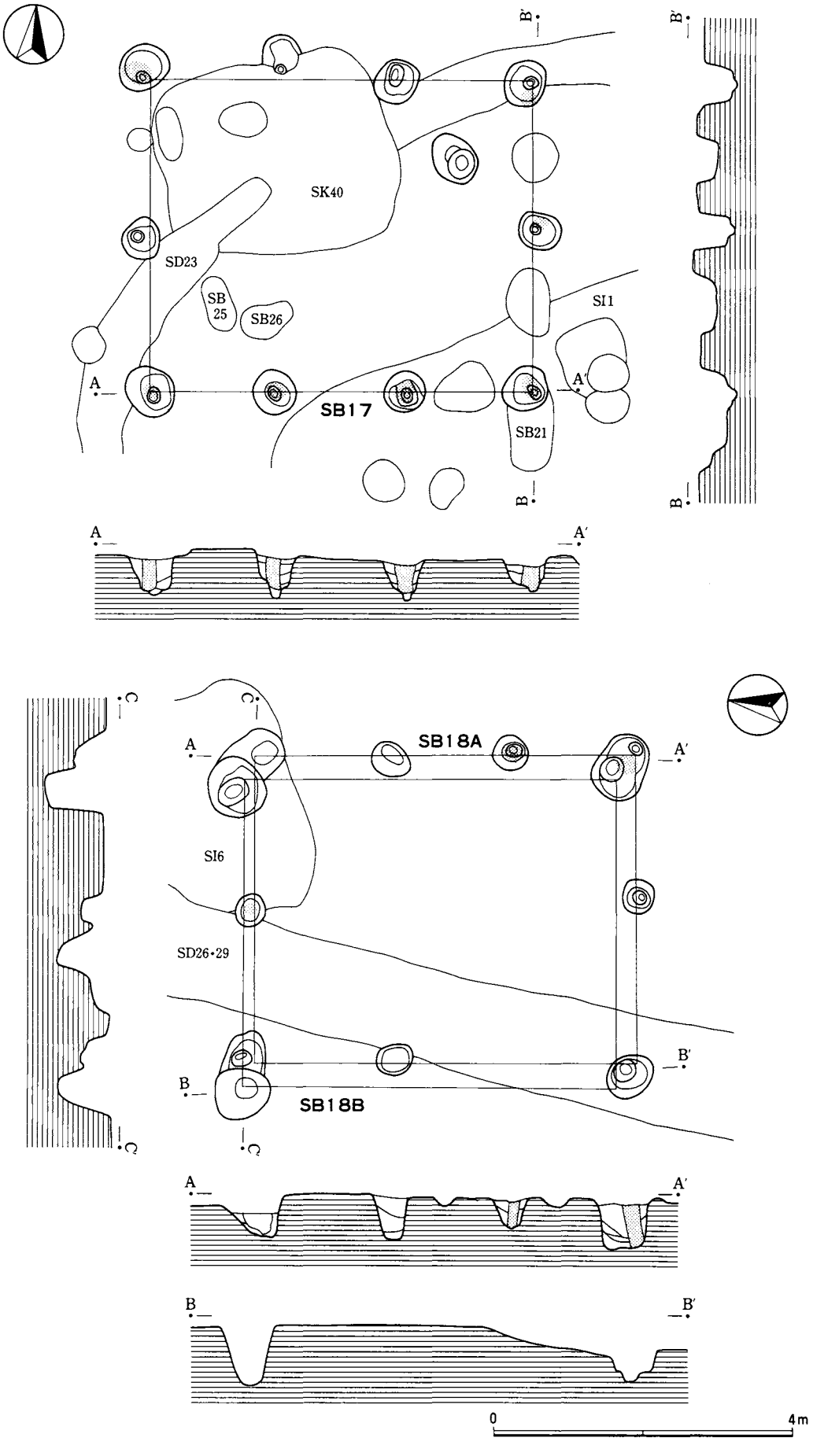
第49図　掘立柱建物跡（4）



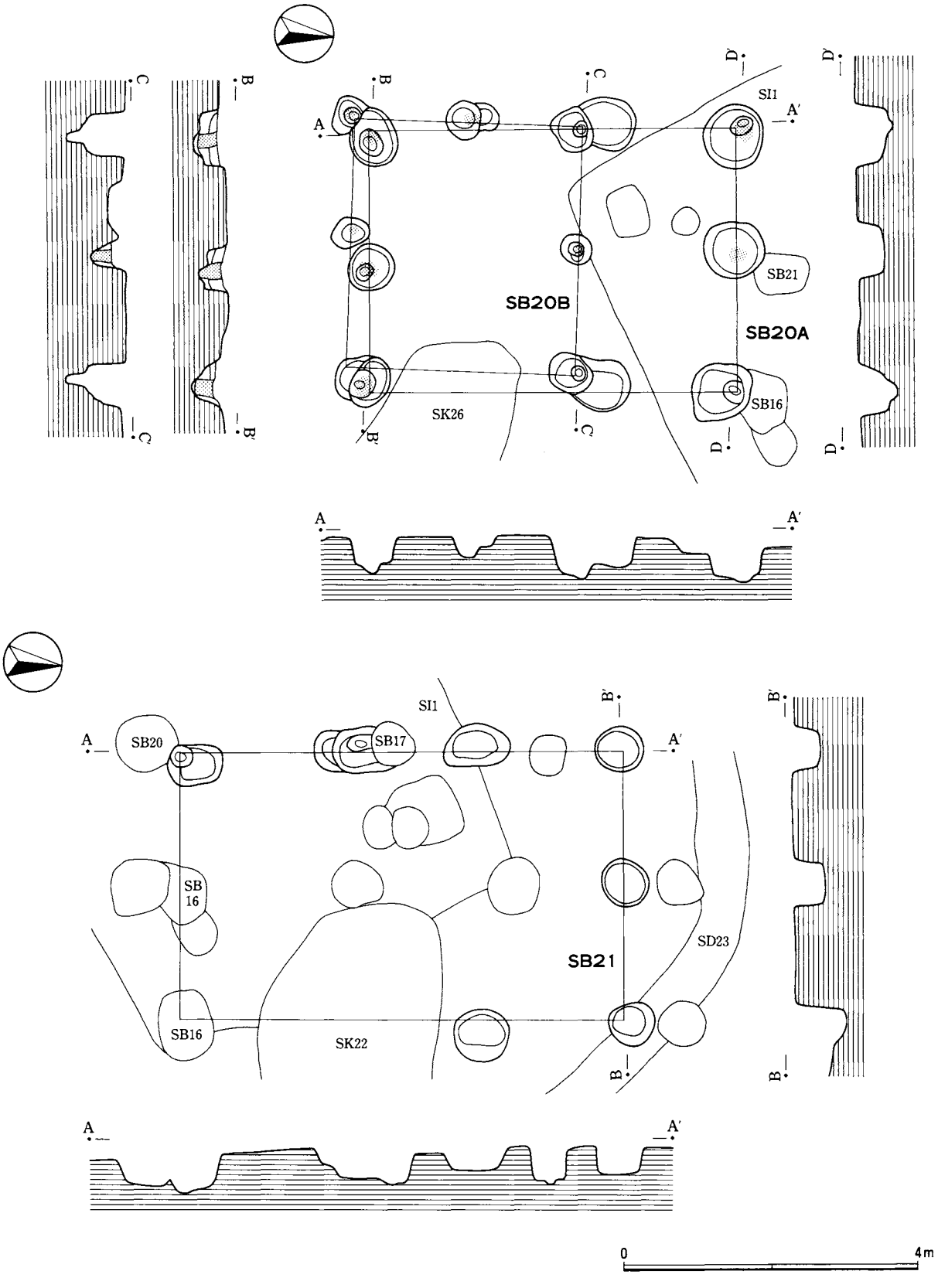
第50図　掘立柱建物跡（5）



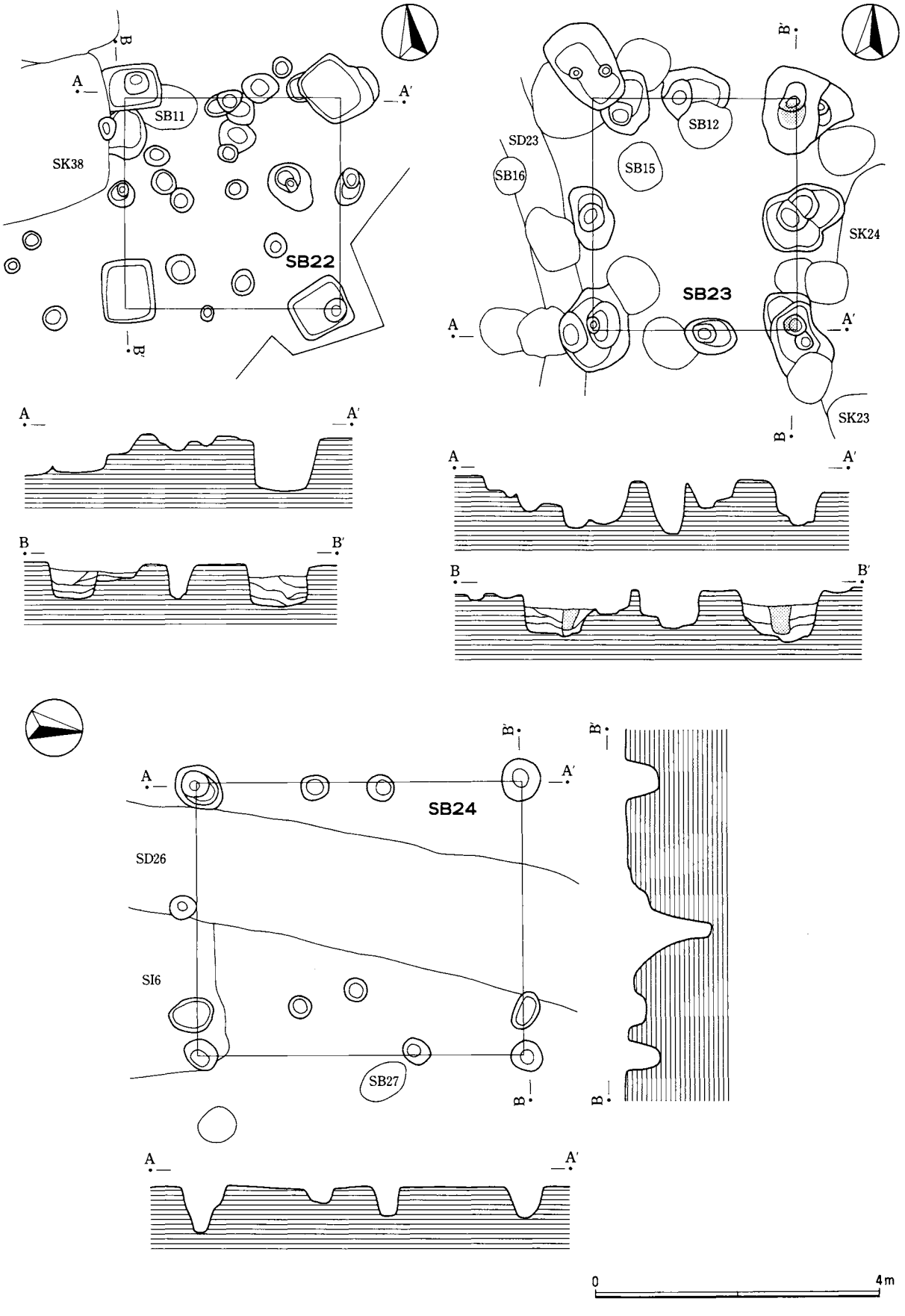
第51図　掘立柱建物跡（6）



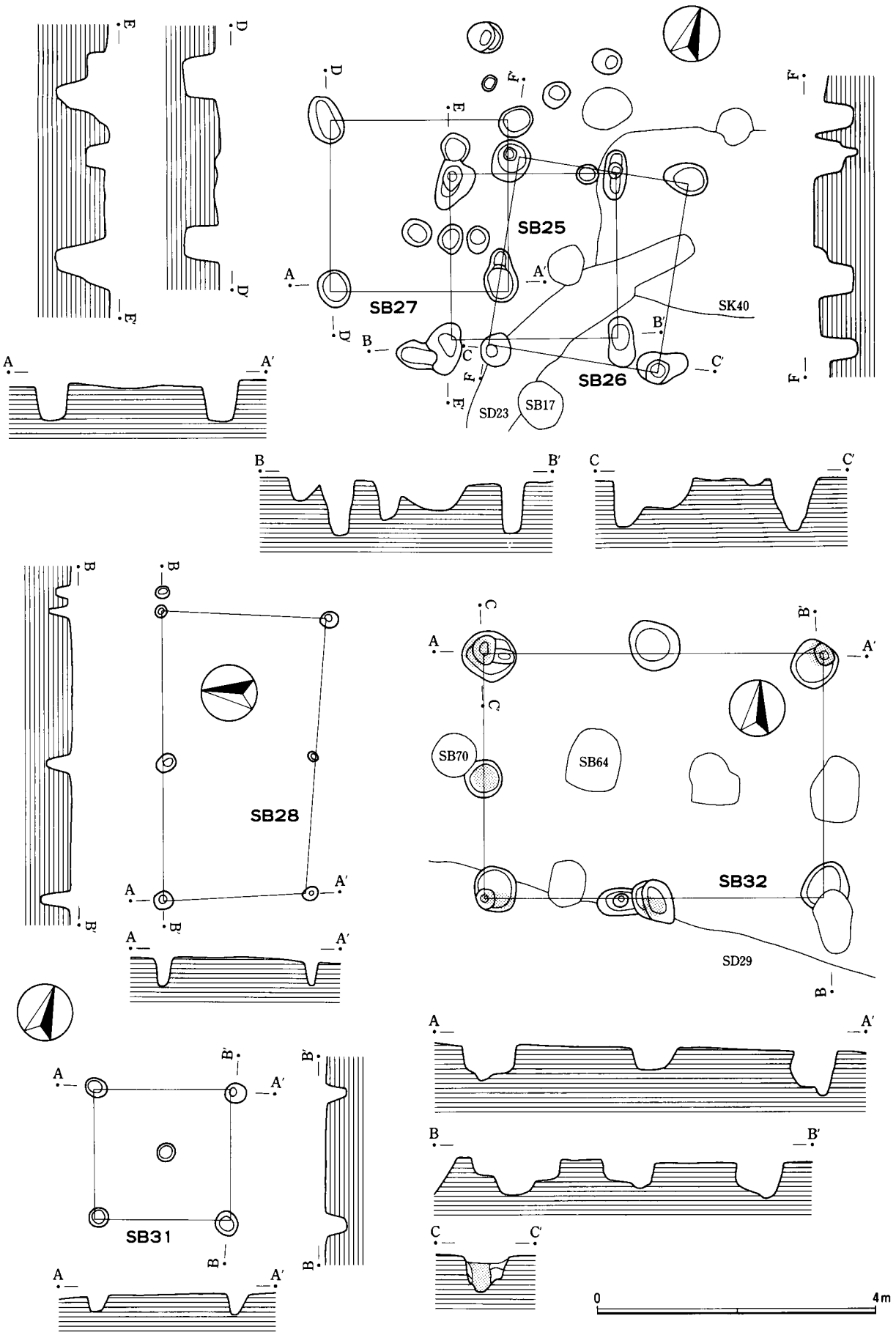
第52図　掘立柱建物跡（7）



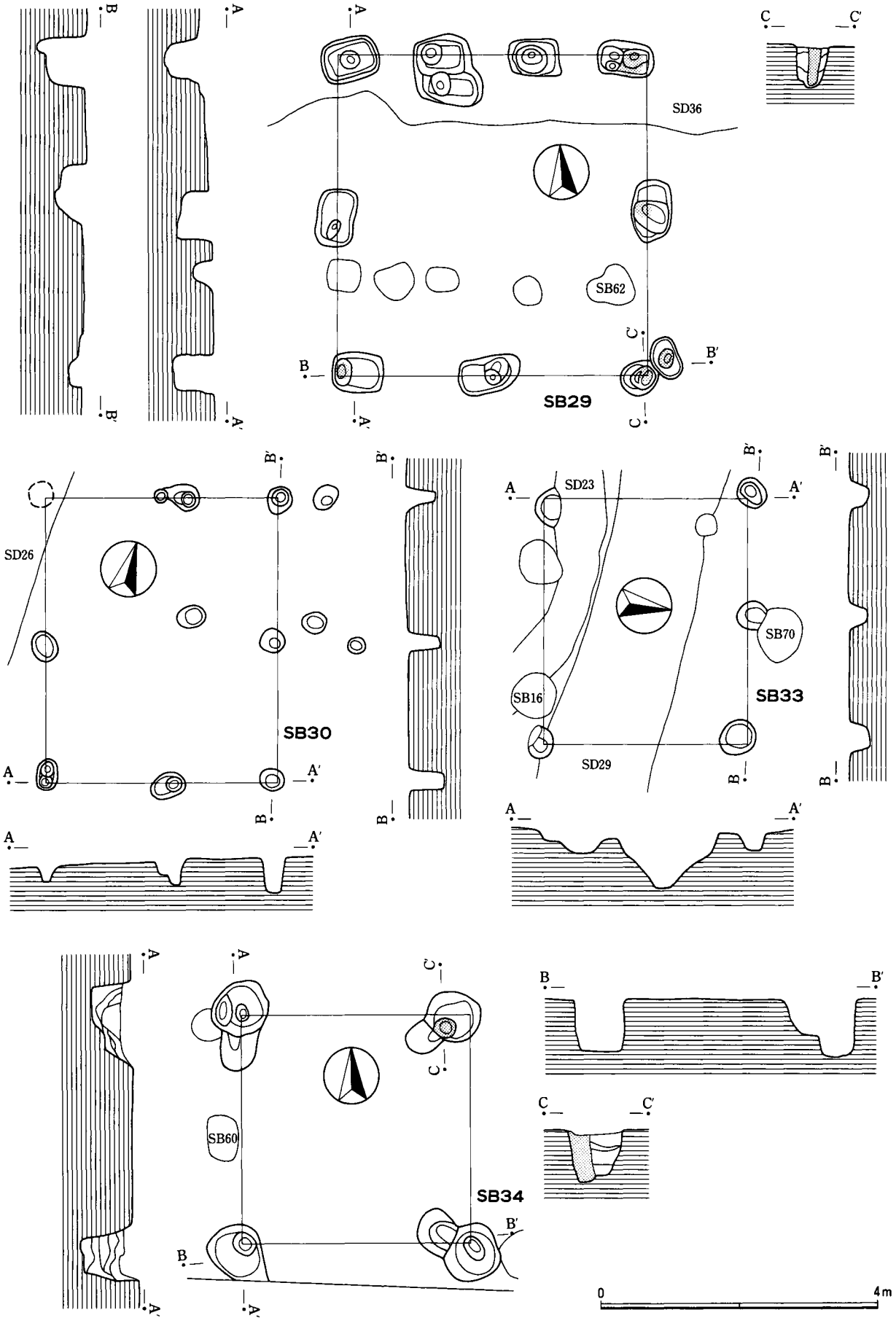
第53図　掘立柱建物跡（8）



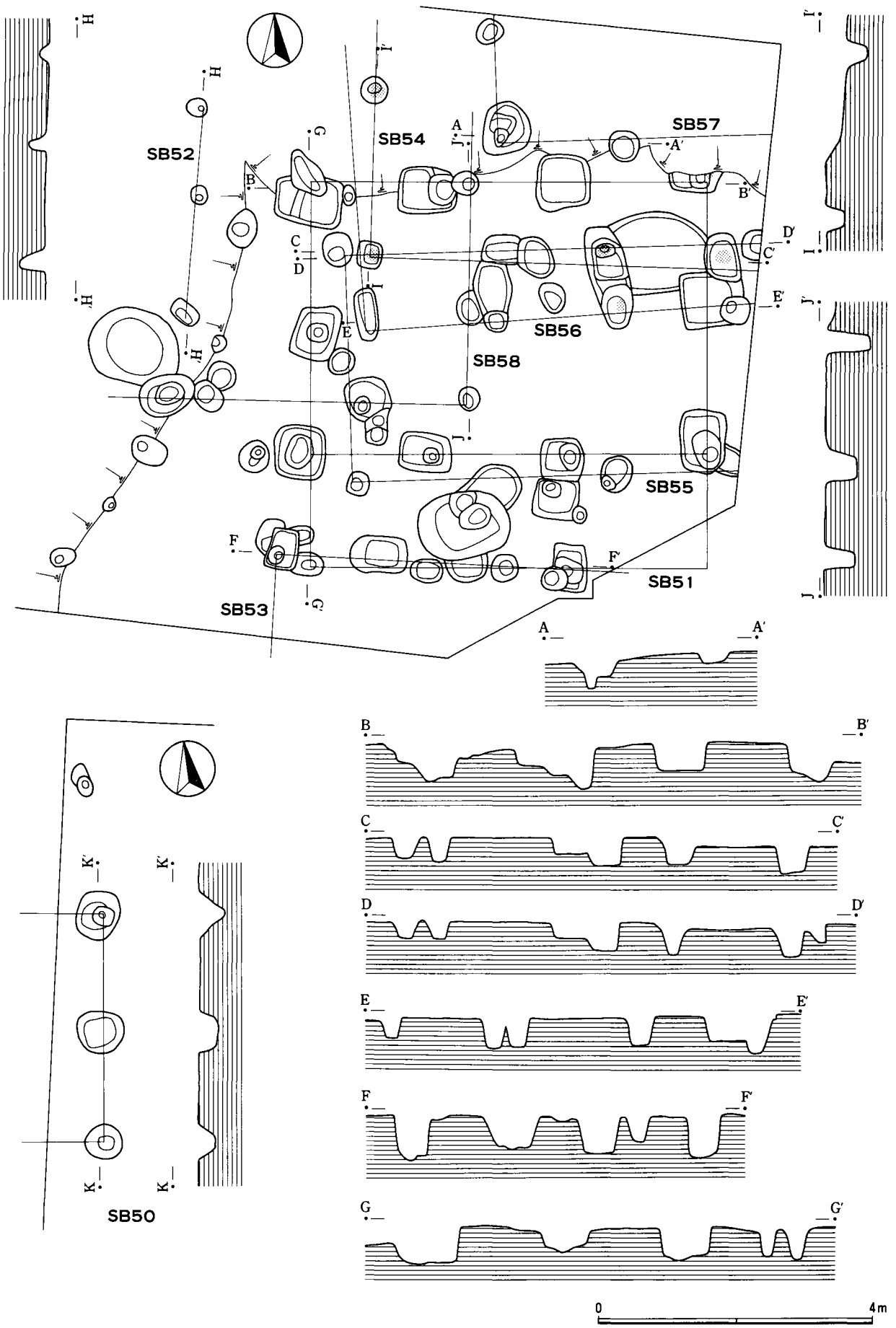
第54図　掘立柱建物跡（9）



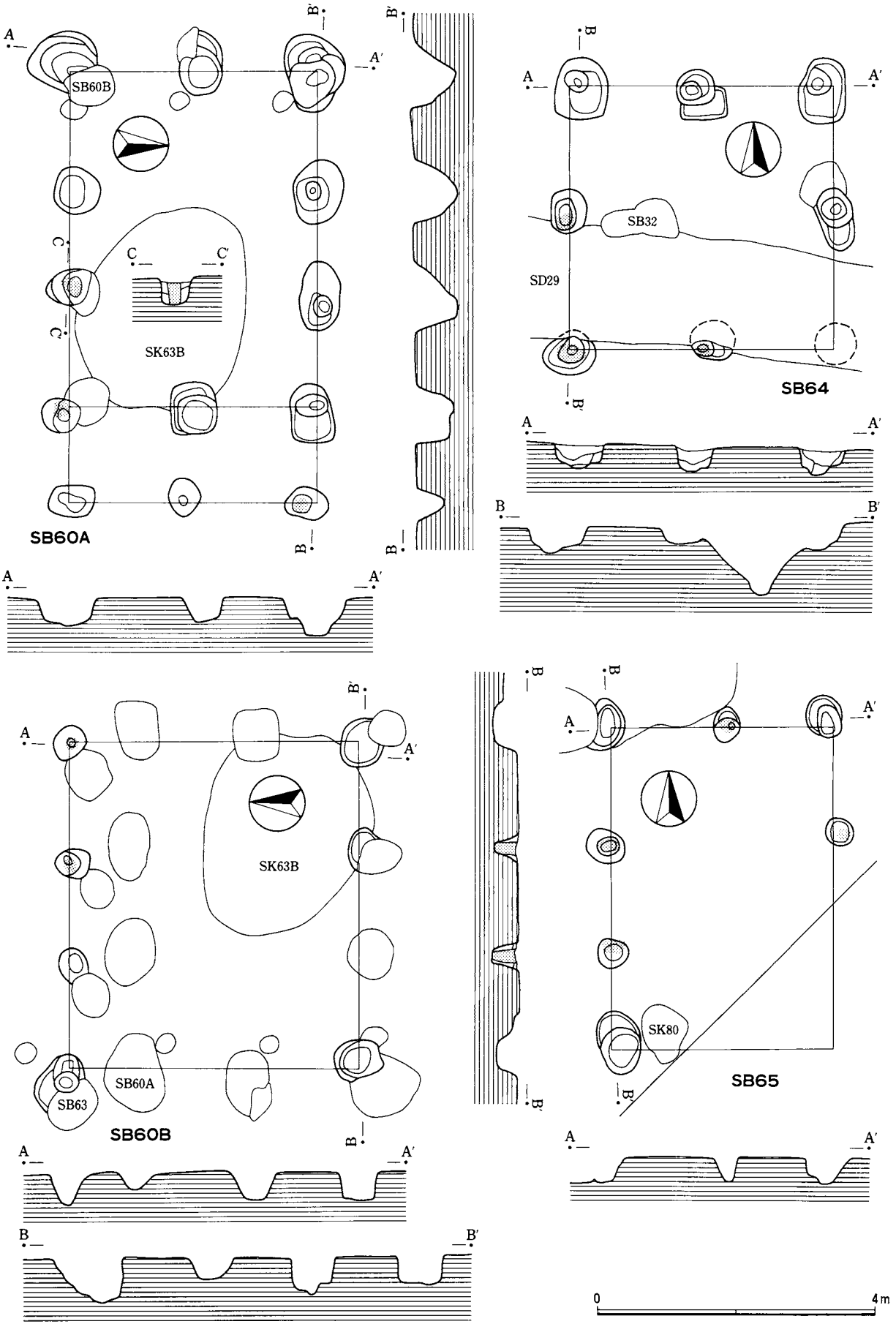
第55図　掘立柱建物跡（10）



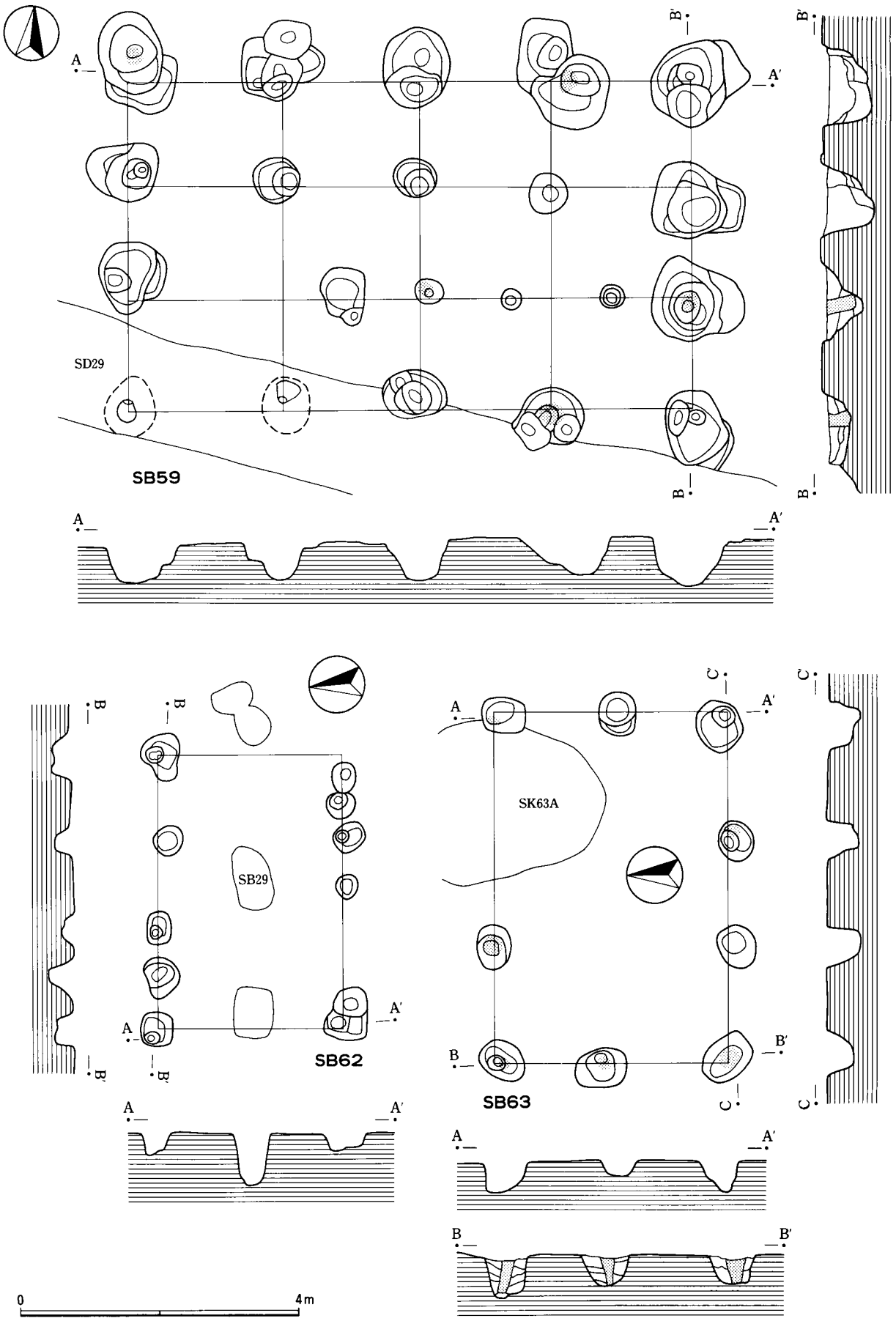
第56図　掘立柱建物跡（11）



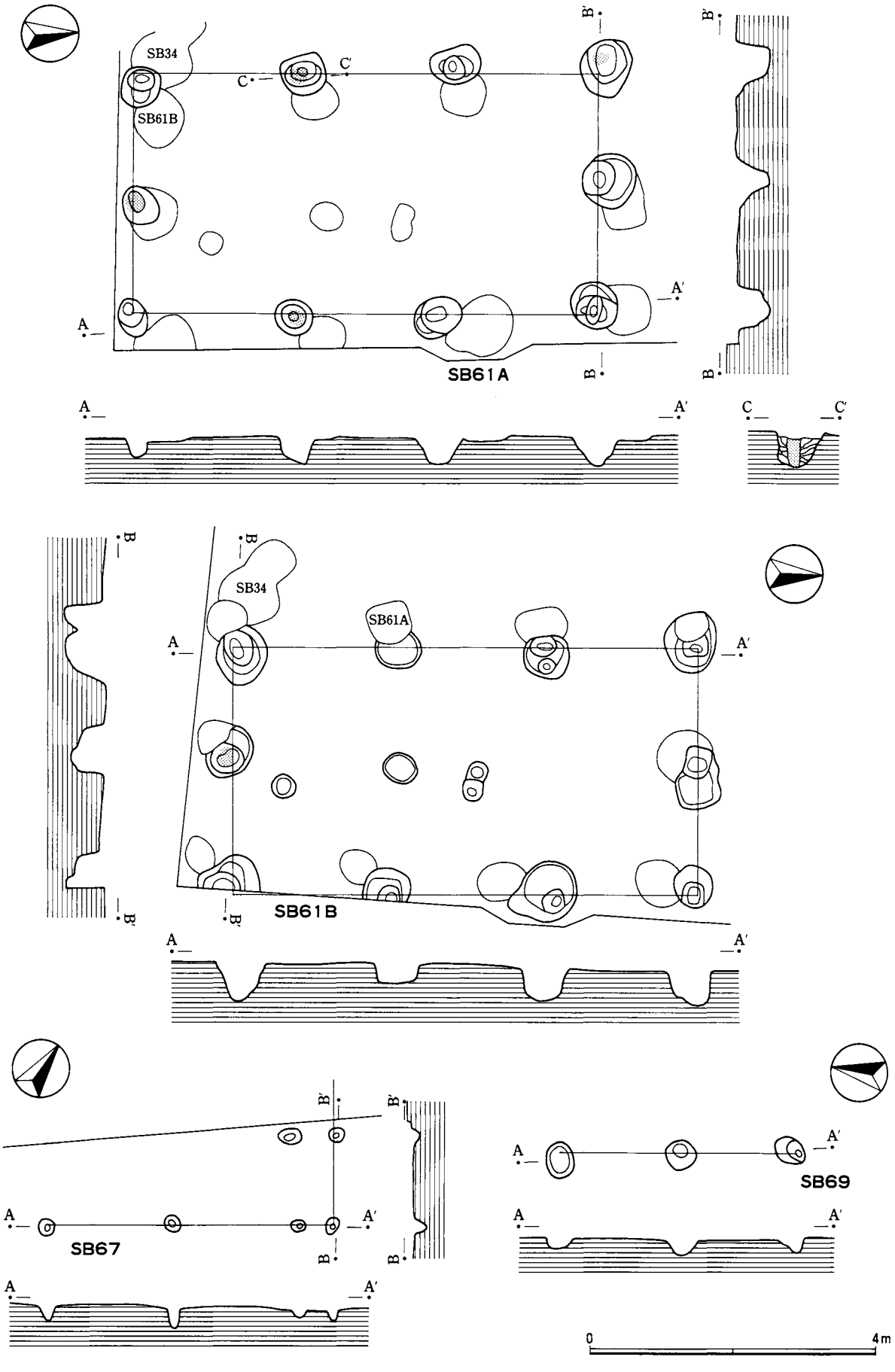
第57図　掘立柱建物跡（12）



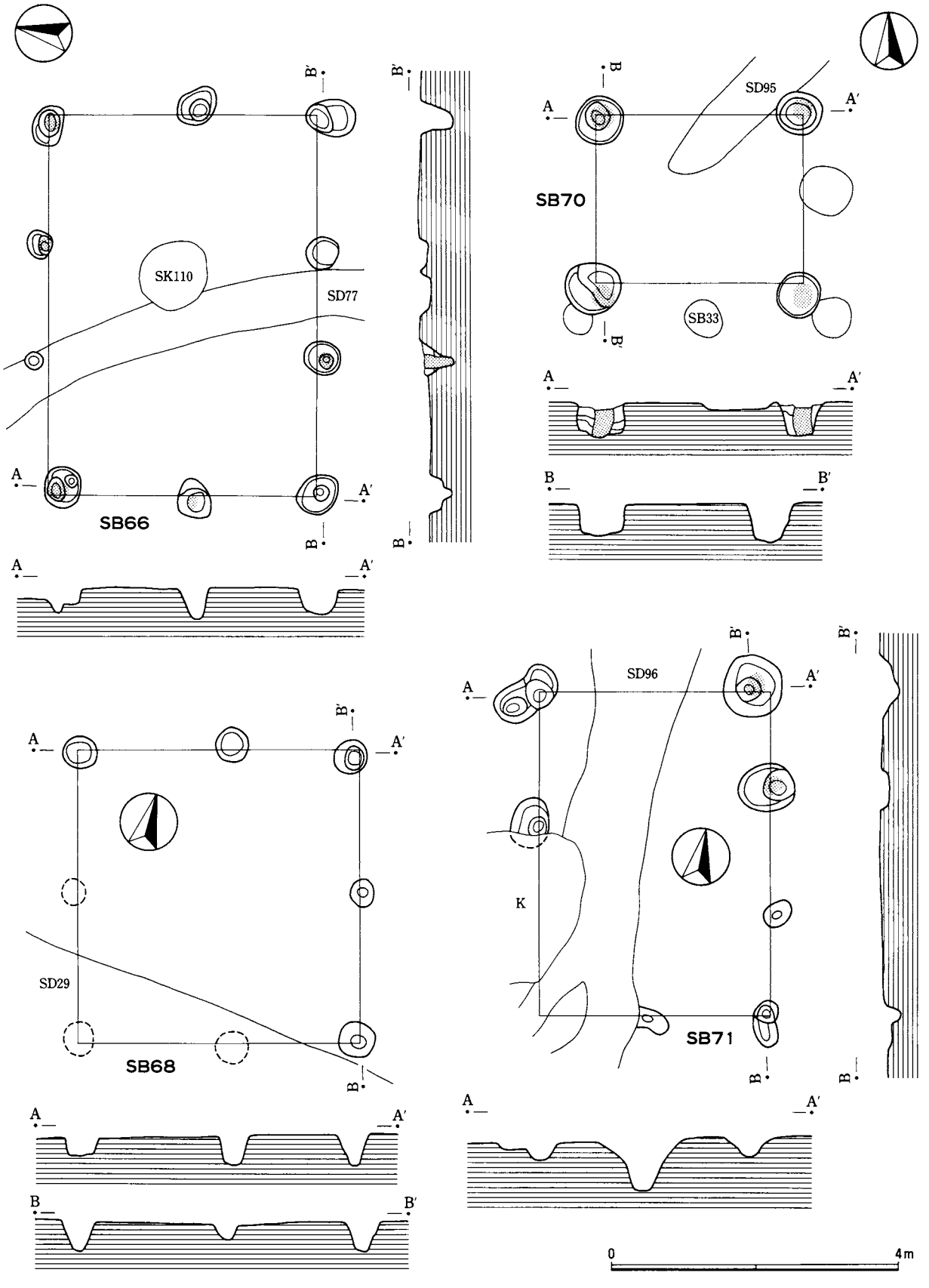
第58図　掘立柱建物跡（13）



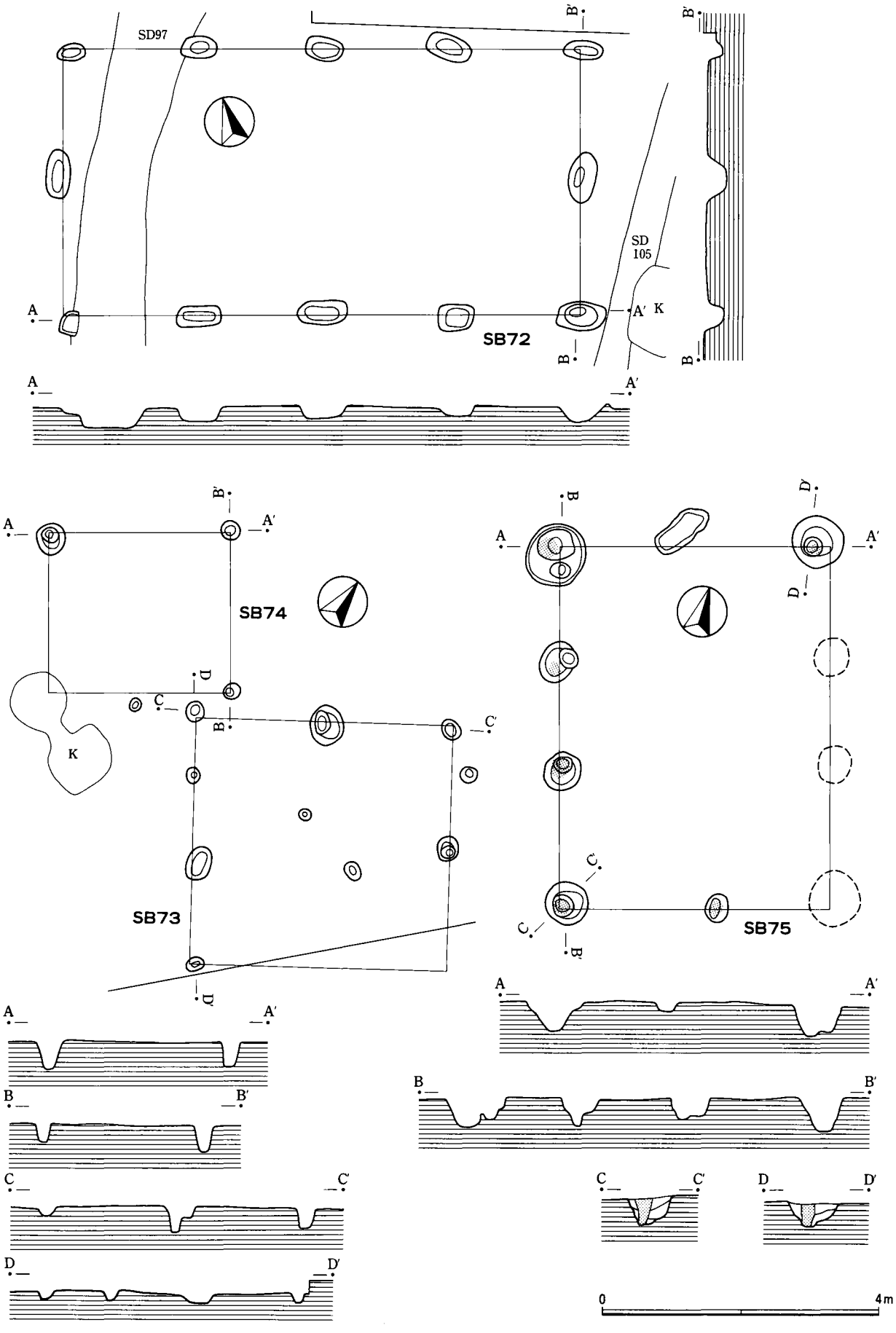
第59図　掘立柱建物跡（14）



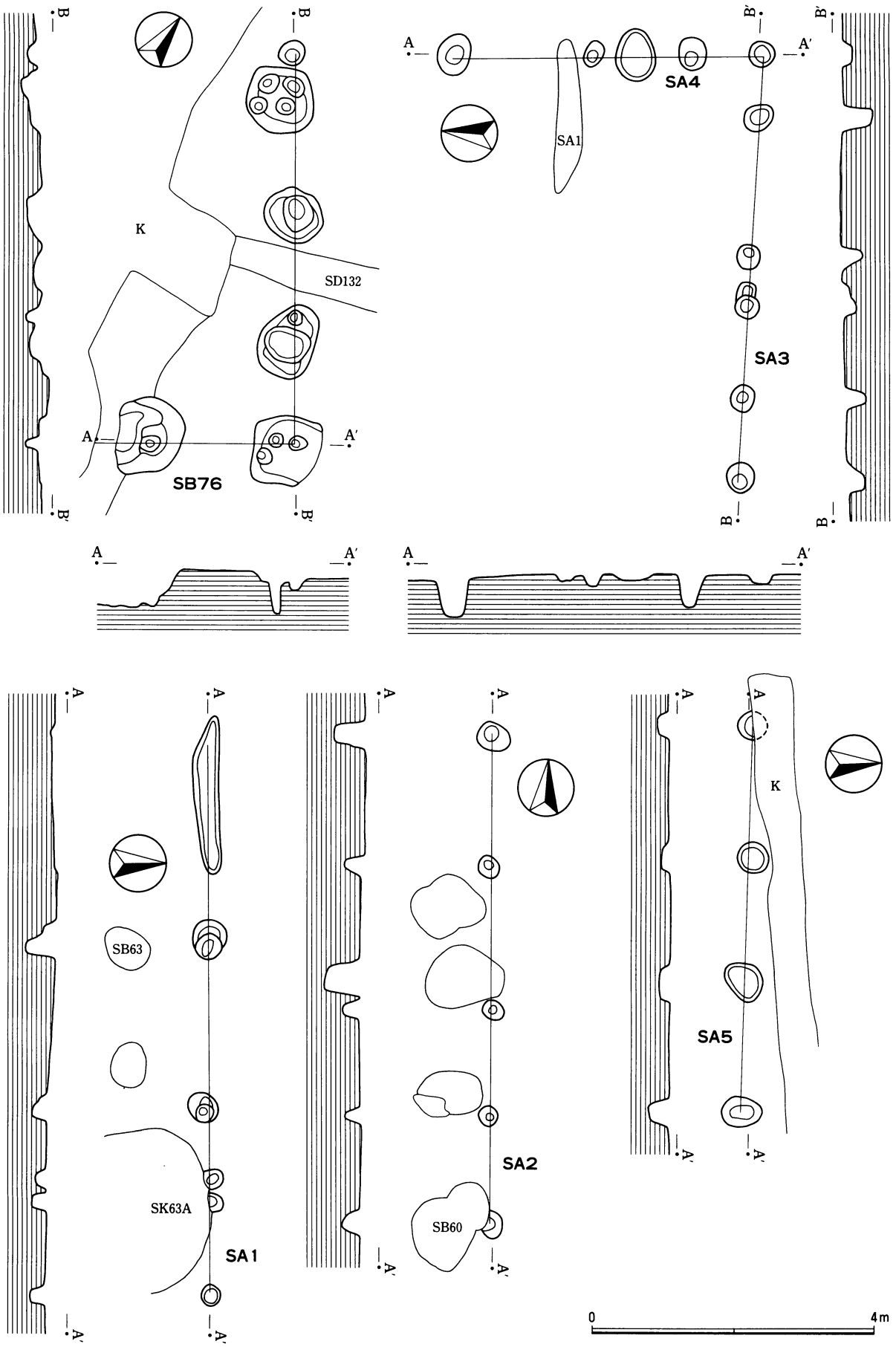
第60図　掘立柱建物跡（15）



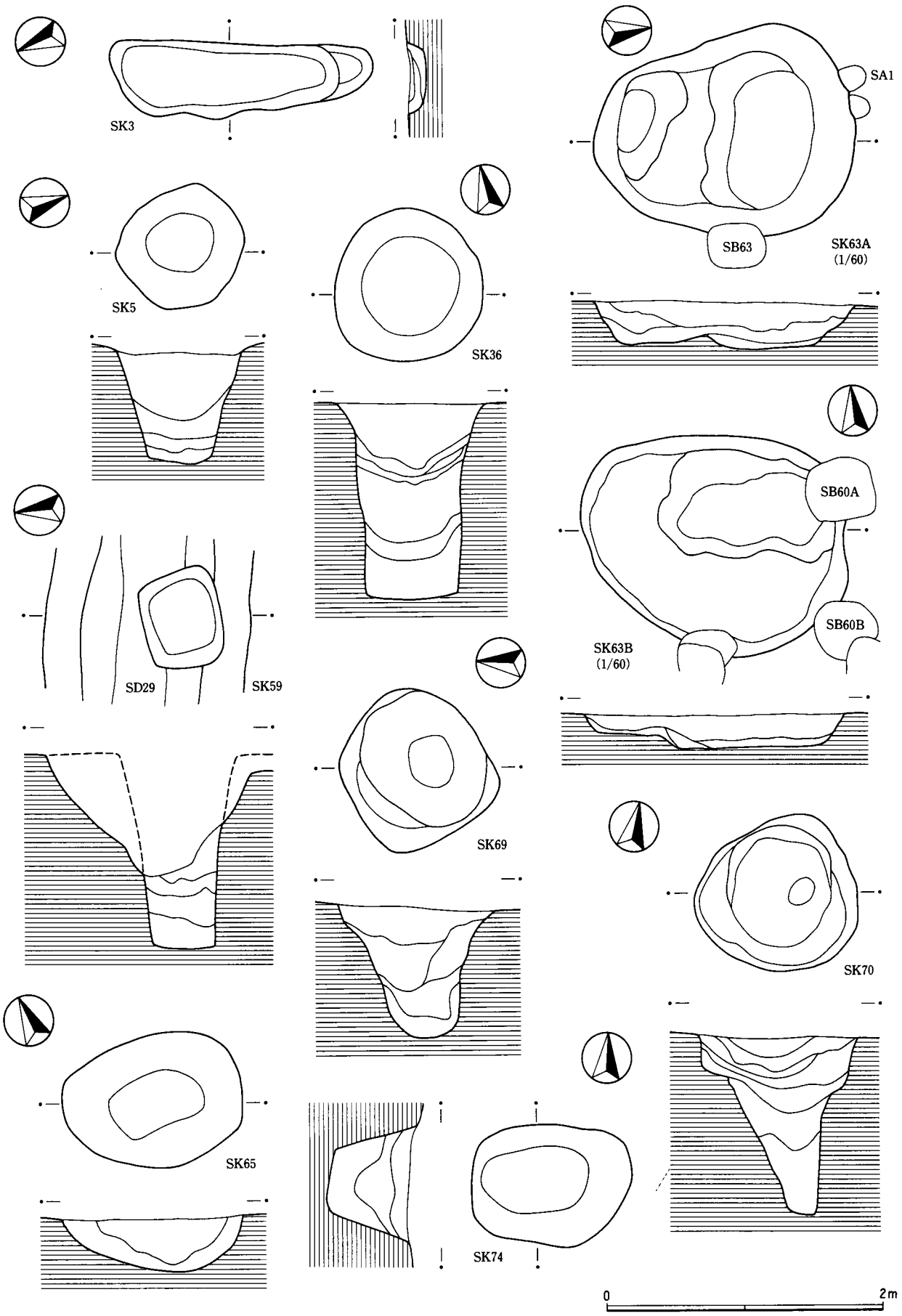
第61図　掘立柱建物跡（16）



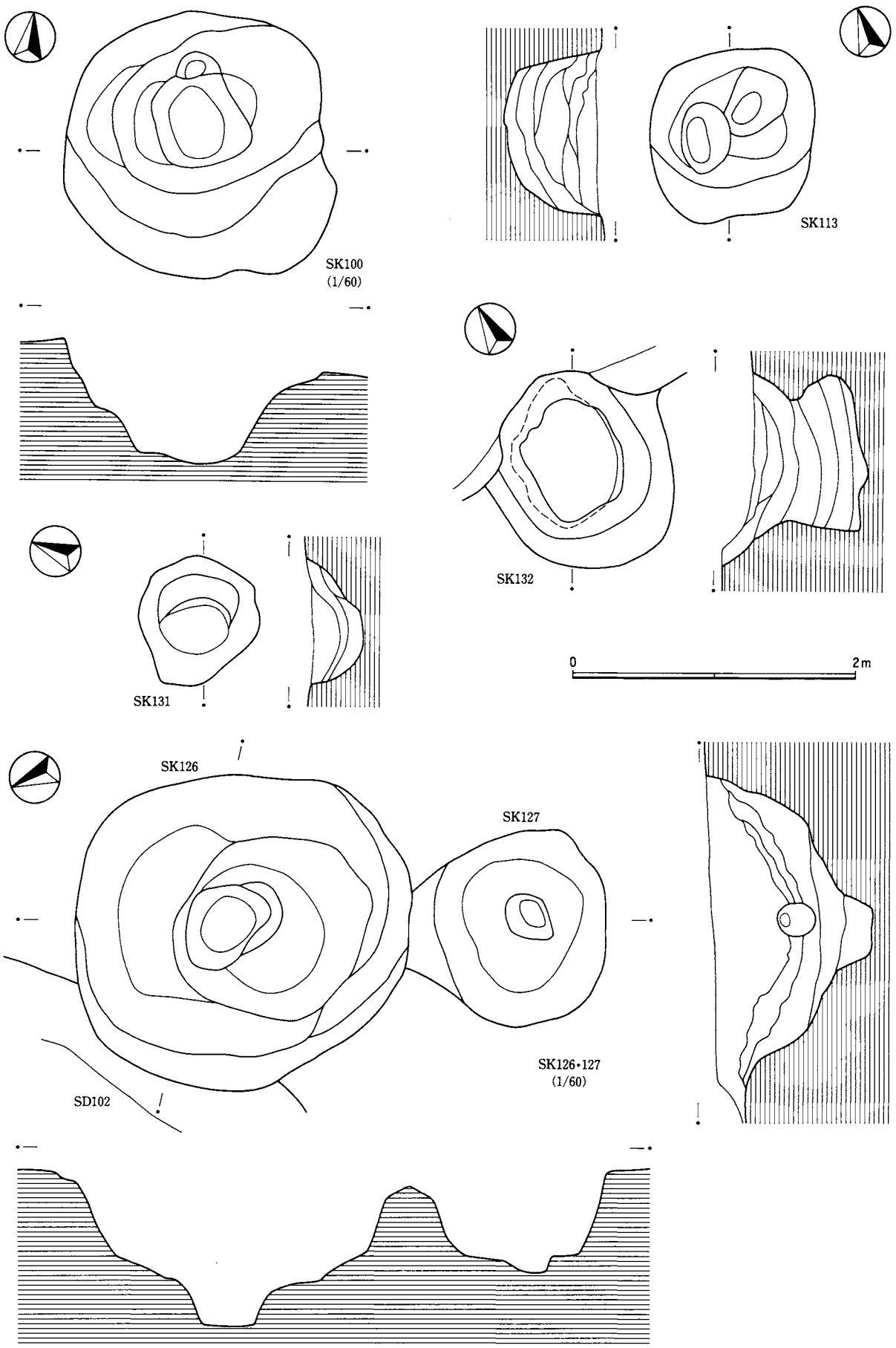
第62図　掘立柱建物跡（17）



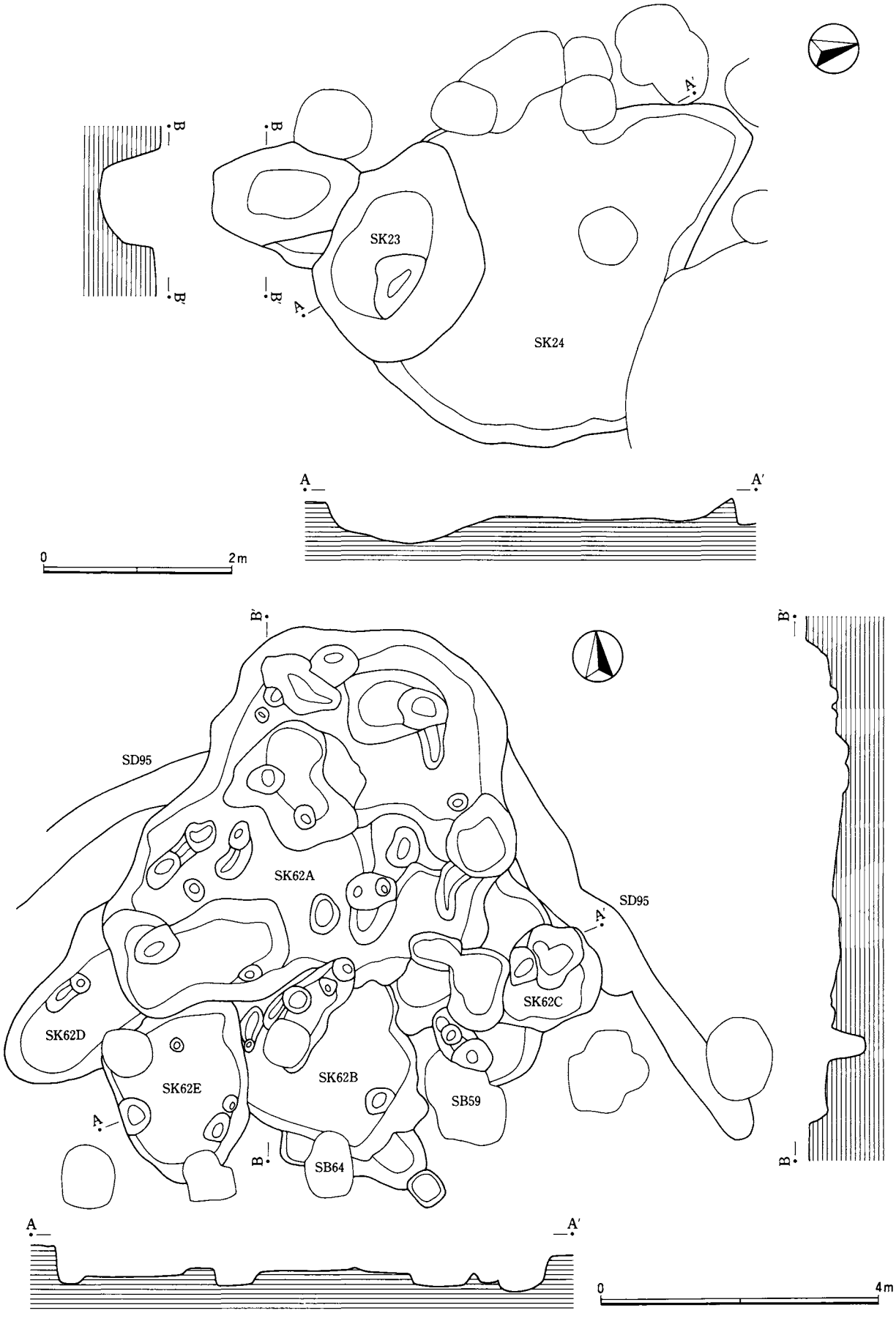
第63図　掘立柱建物跡（18）、柵列


SK3
SA1
SB63
SK63A
(1/60)
SK5
SK36
SB60A
SB60B
SK63B
(1/60)
SD29
SK59
SK69
SK70
SK65
SK74
0
2m

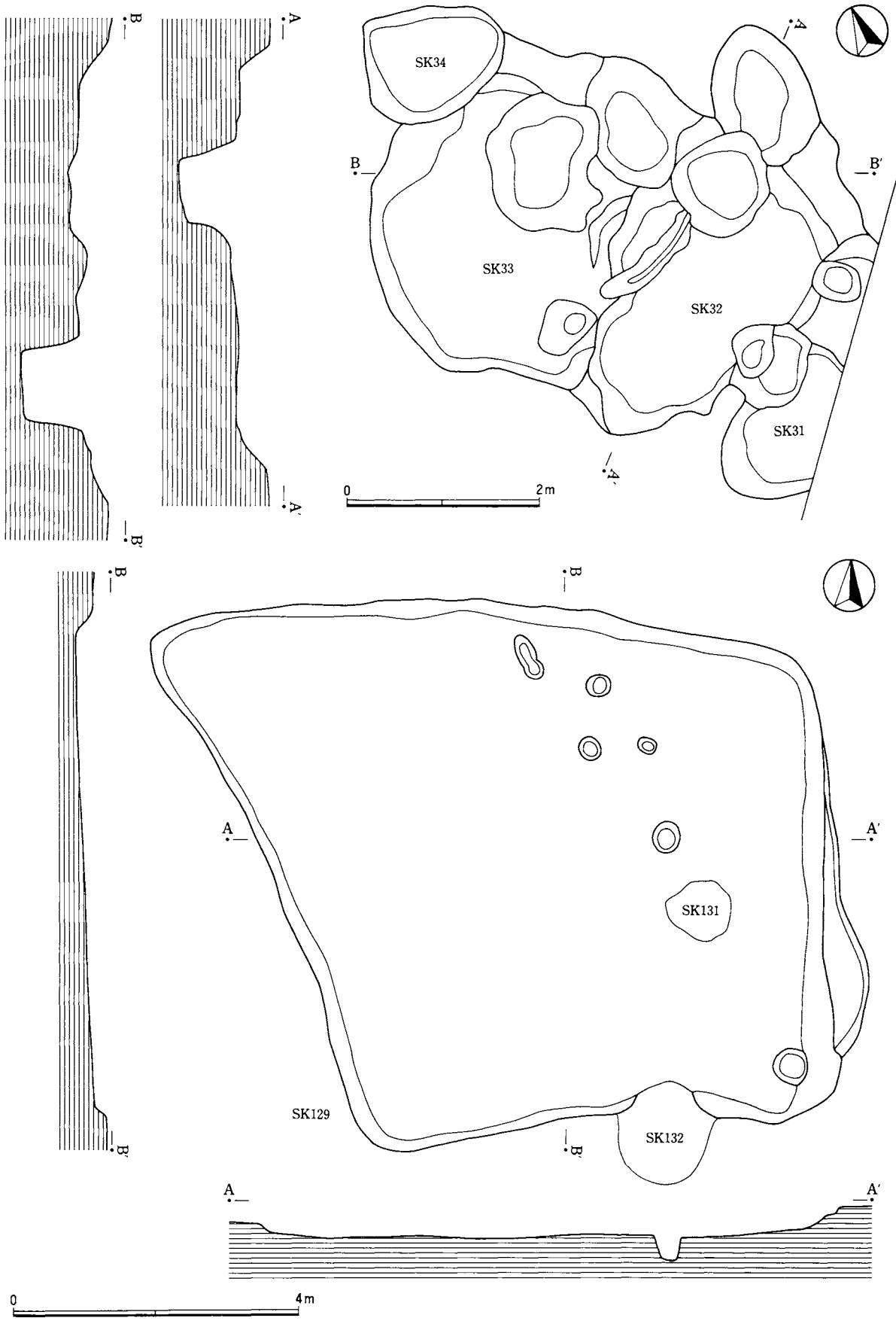
第64図　土坑（1）


SK100
(1/60)
SK113
SK132
SK131
0
2m
SK126
SK127
SK126・127
(1/60)
SD102

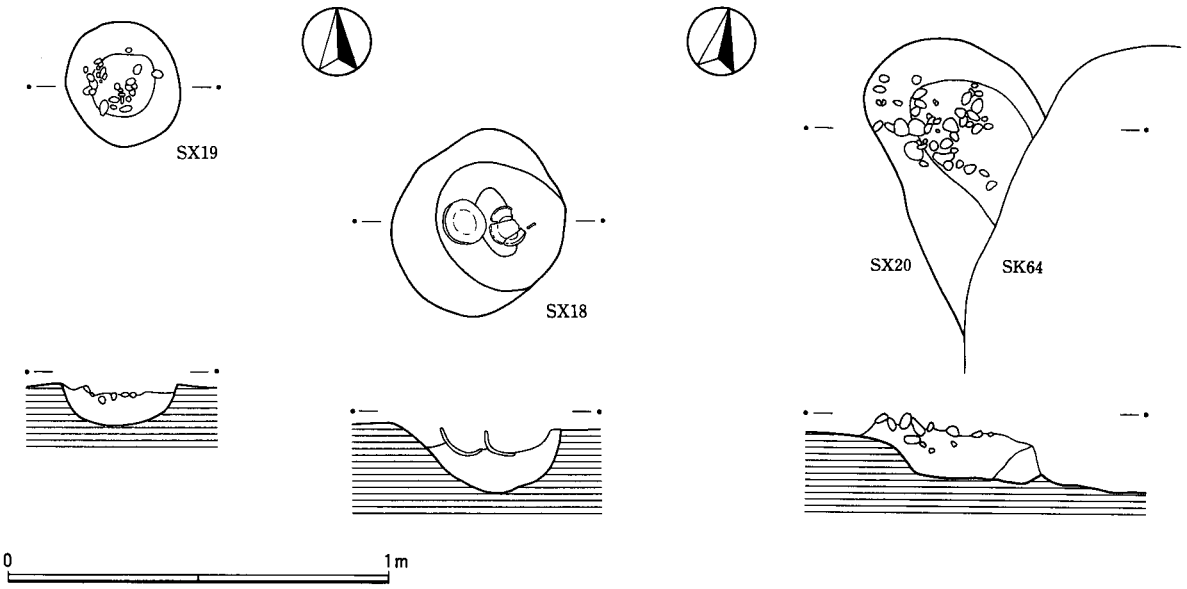
第65図　土坑（2）


SK23
SK24
A
A′
B
B′
0
2m
SD95
SK62A
SK62B
SK62C
SK62D
SK62E
SB59
SB64
0
4m

第66図　土坑（3）

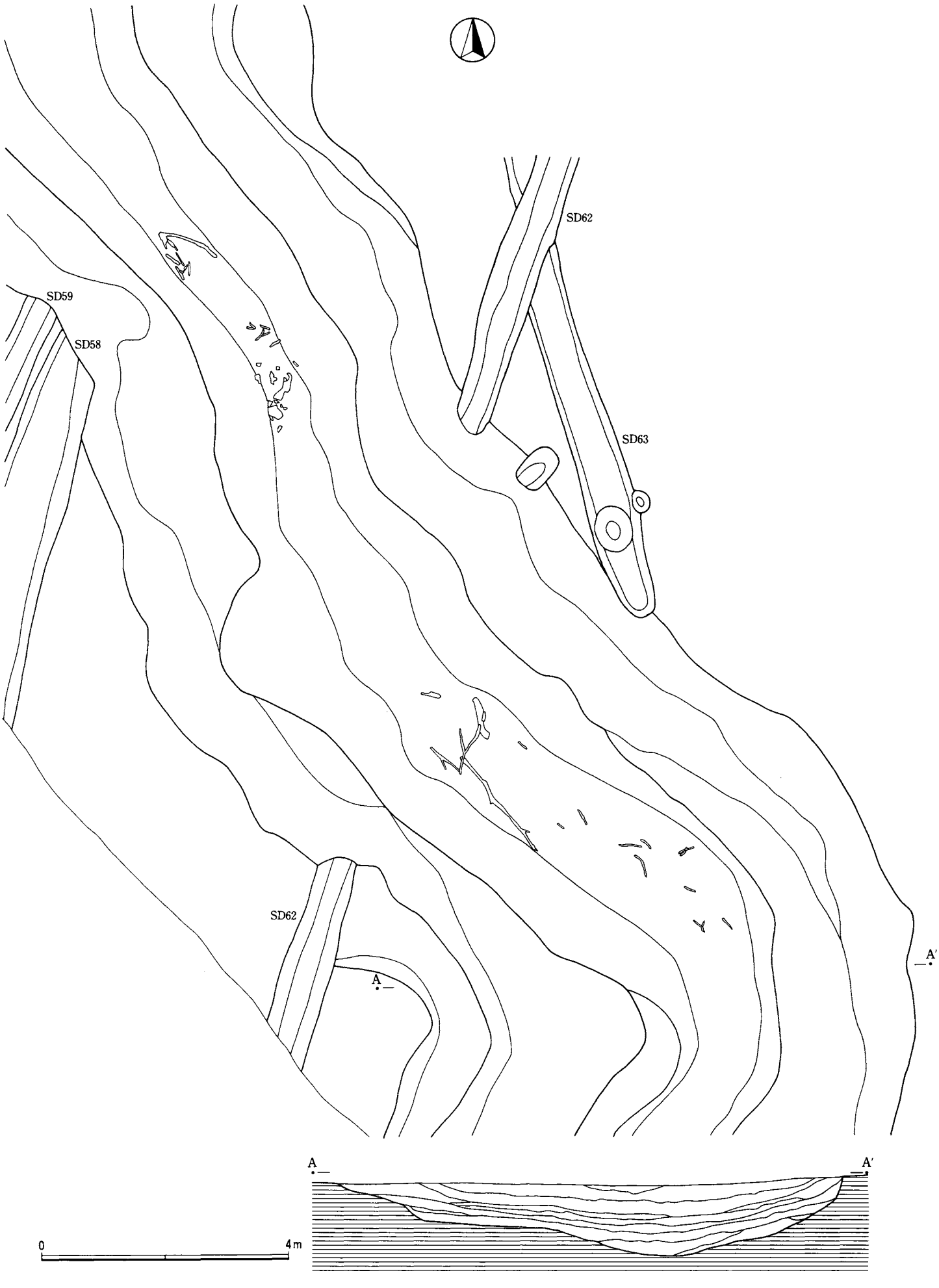


第67図　土坑（4）

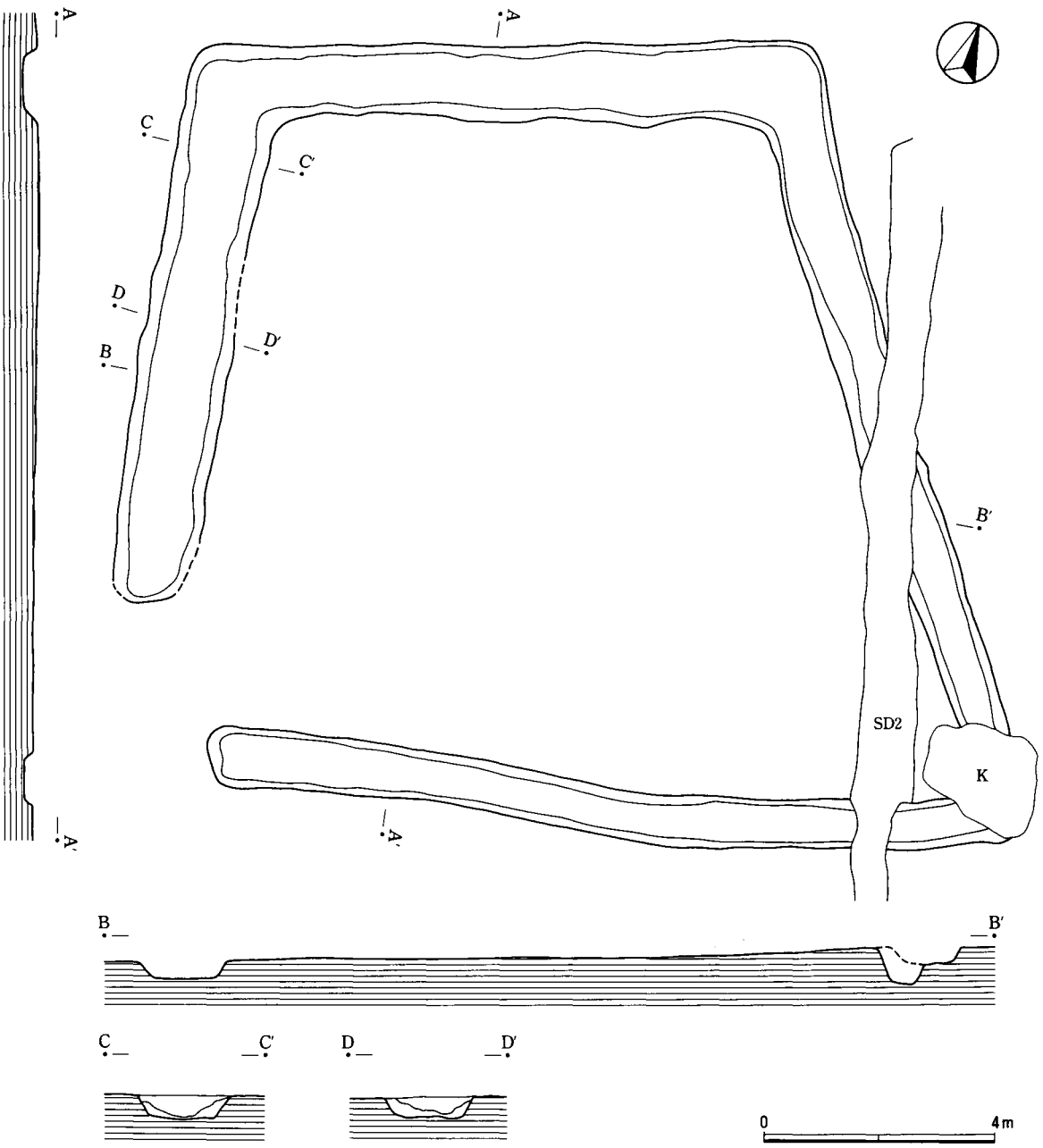


第68図　土坑（5）

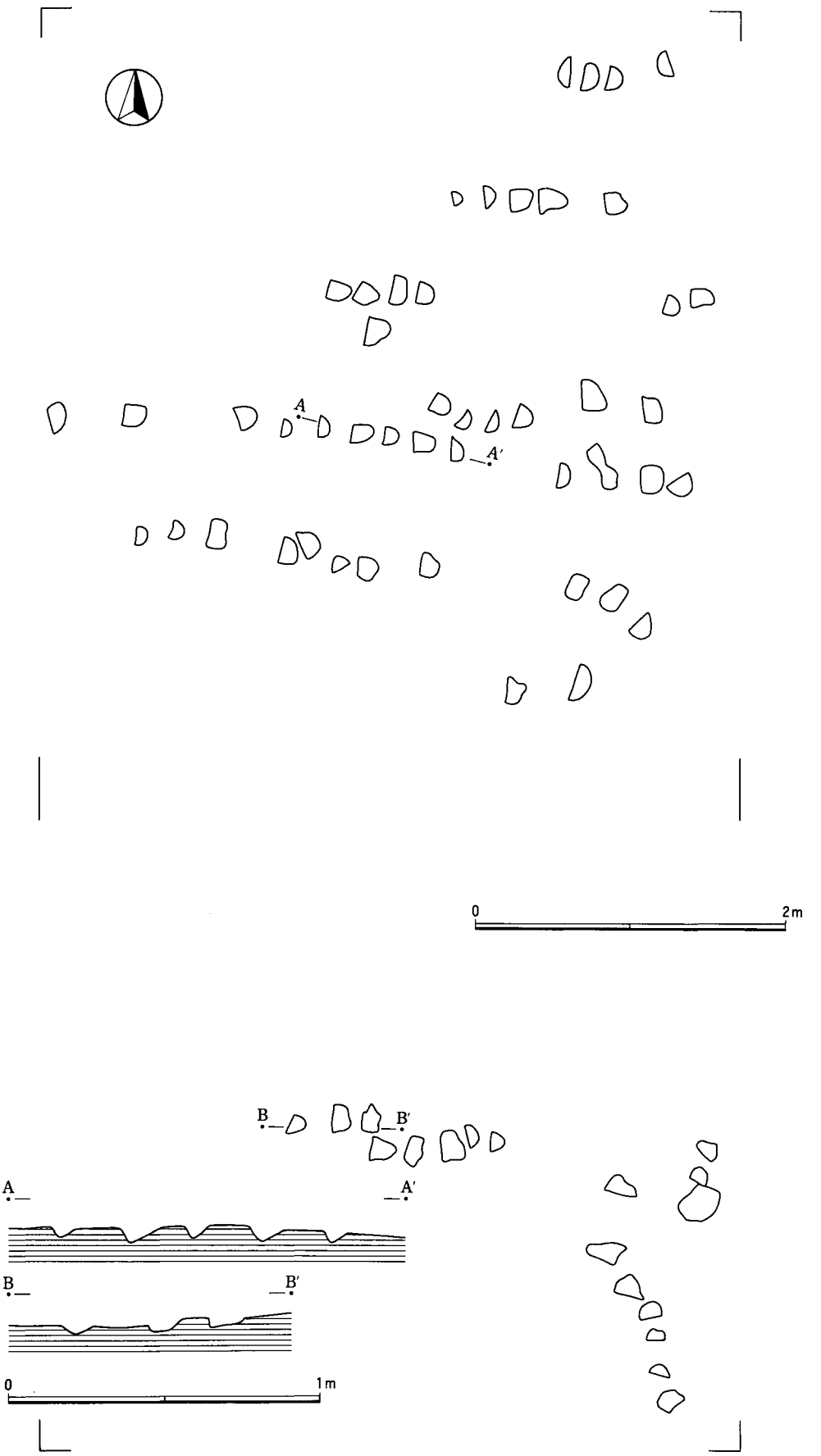
第69図　SD53木製品出土状況



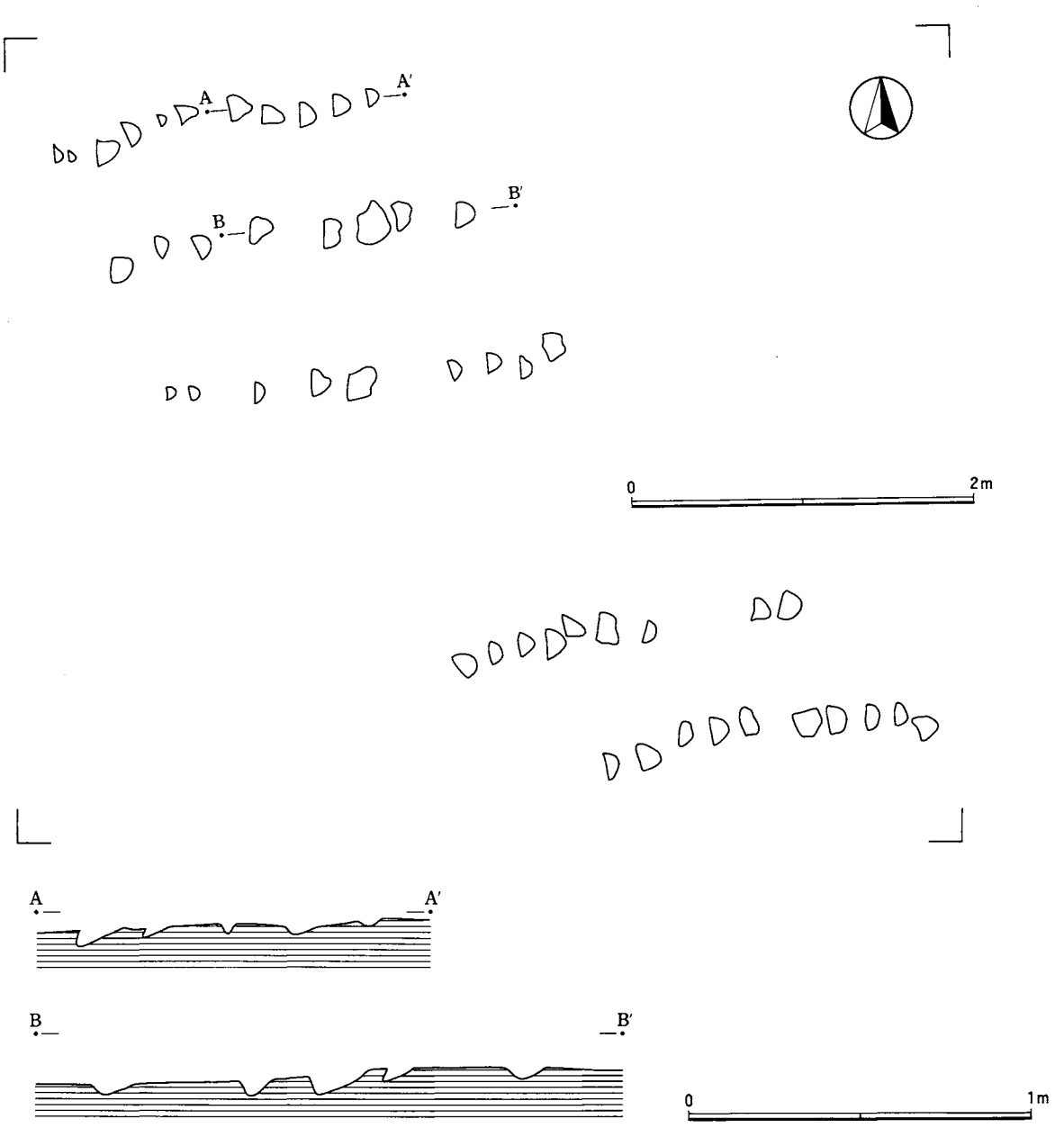
第70図　SD54木製品出土状況



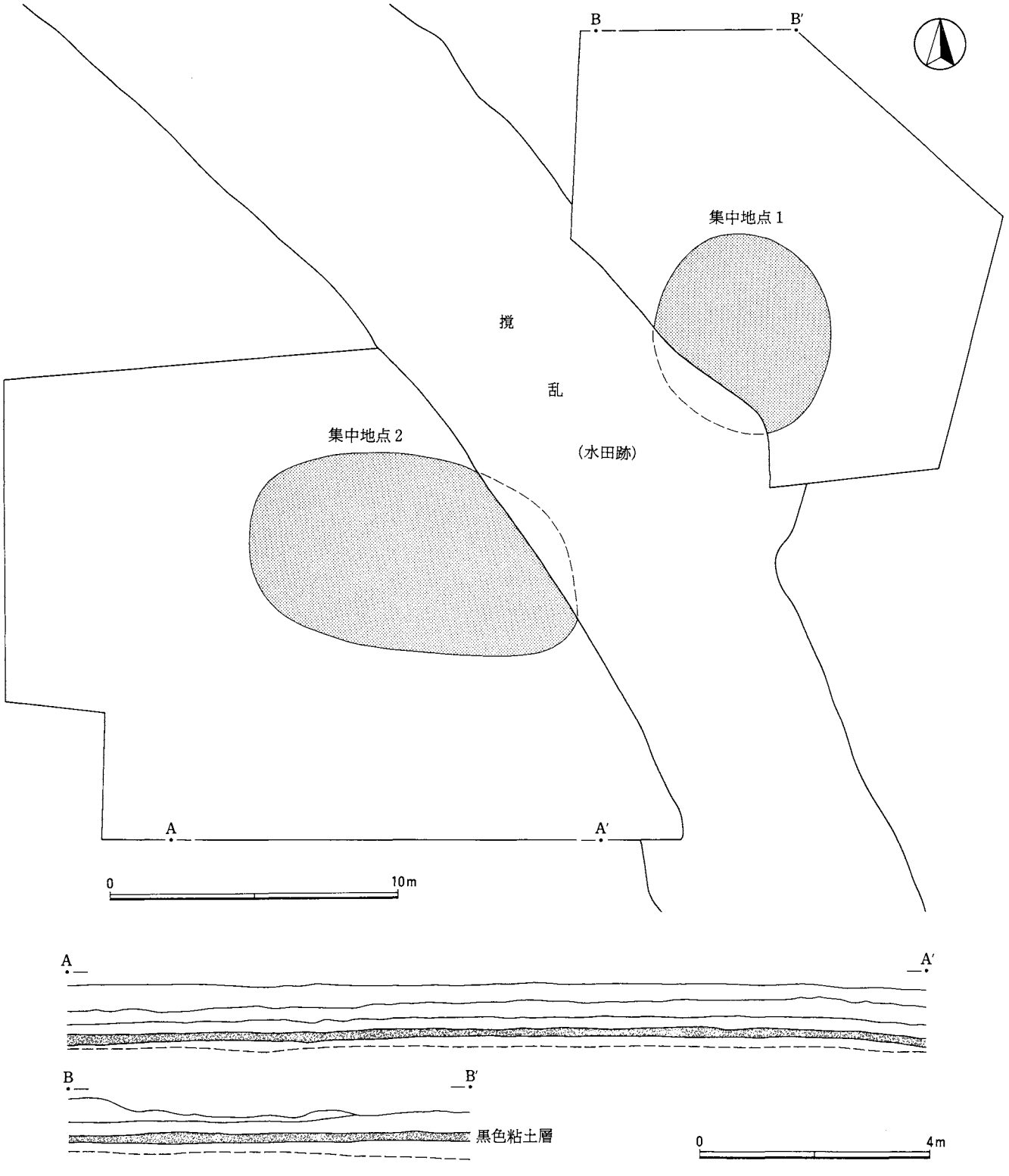
第71図　方形周溝状遺構（SX 1）



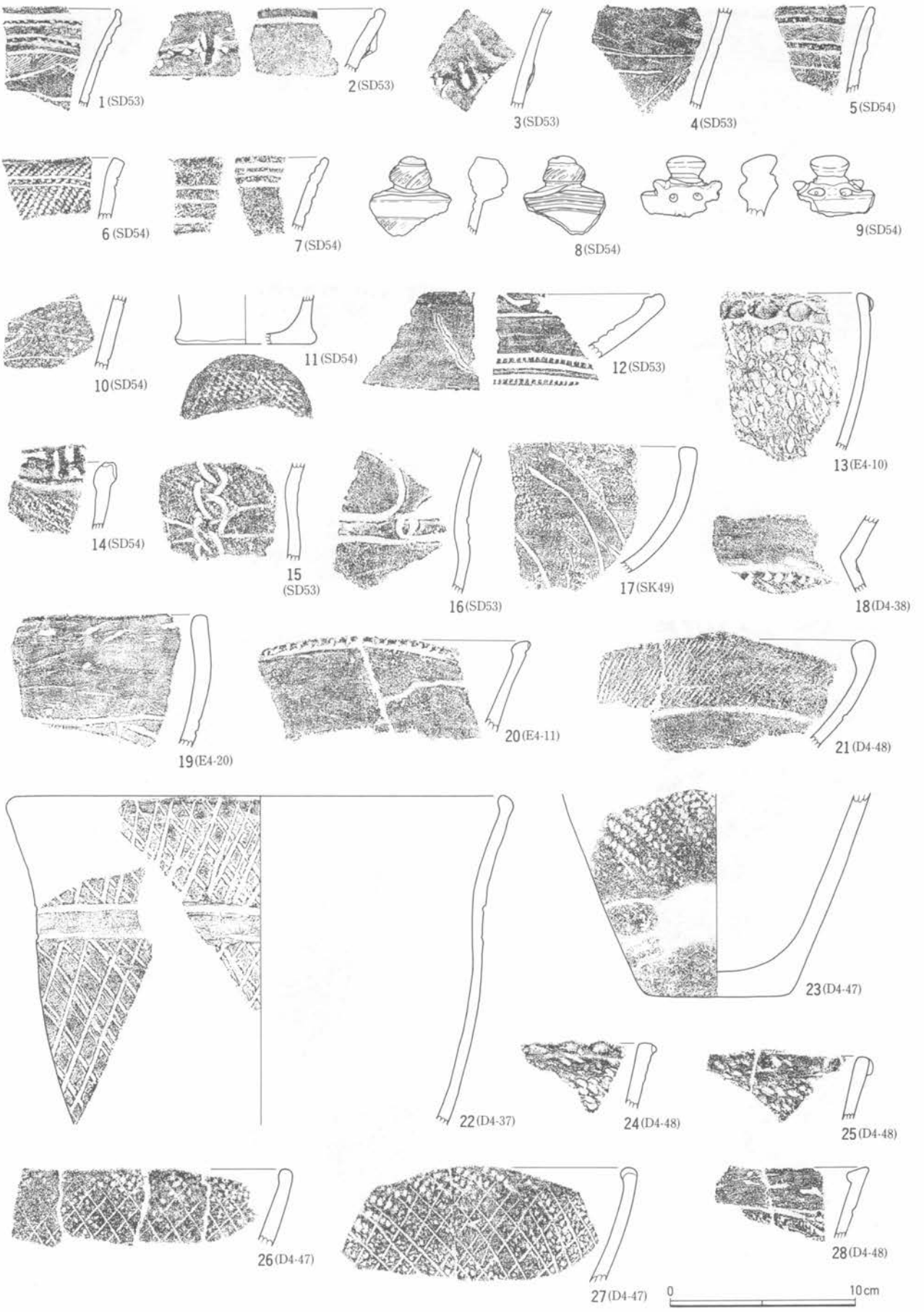
第72図　耕作痕（1）



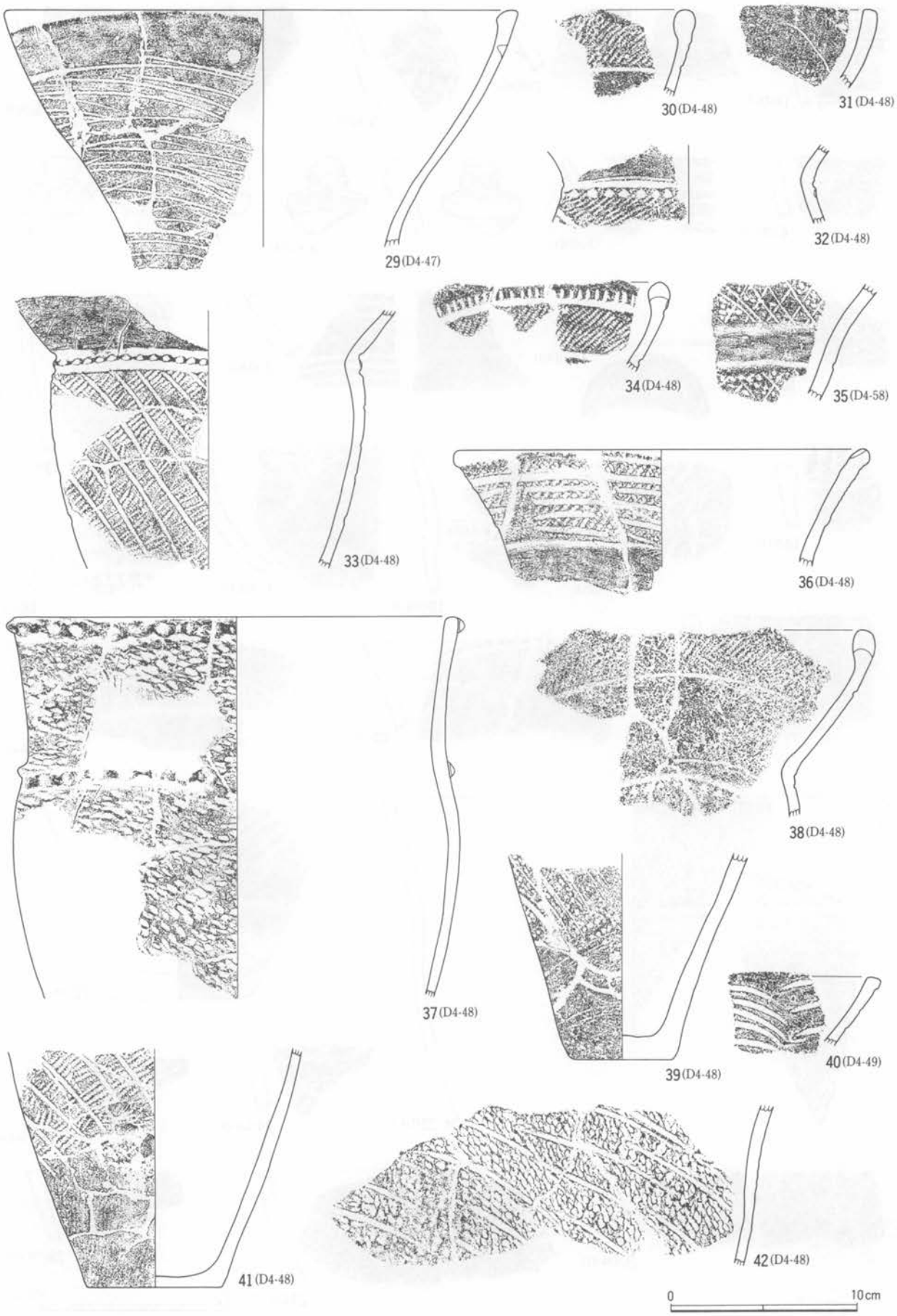
第73図　耕作痕（2）



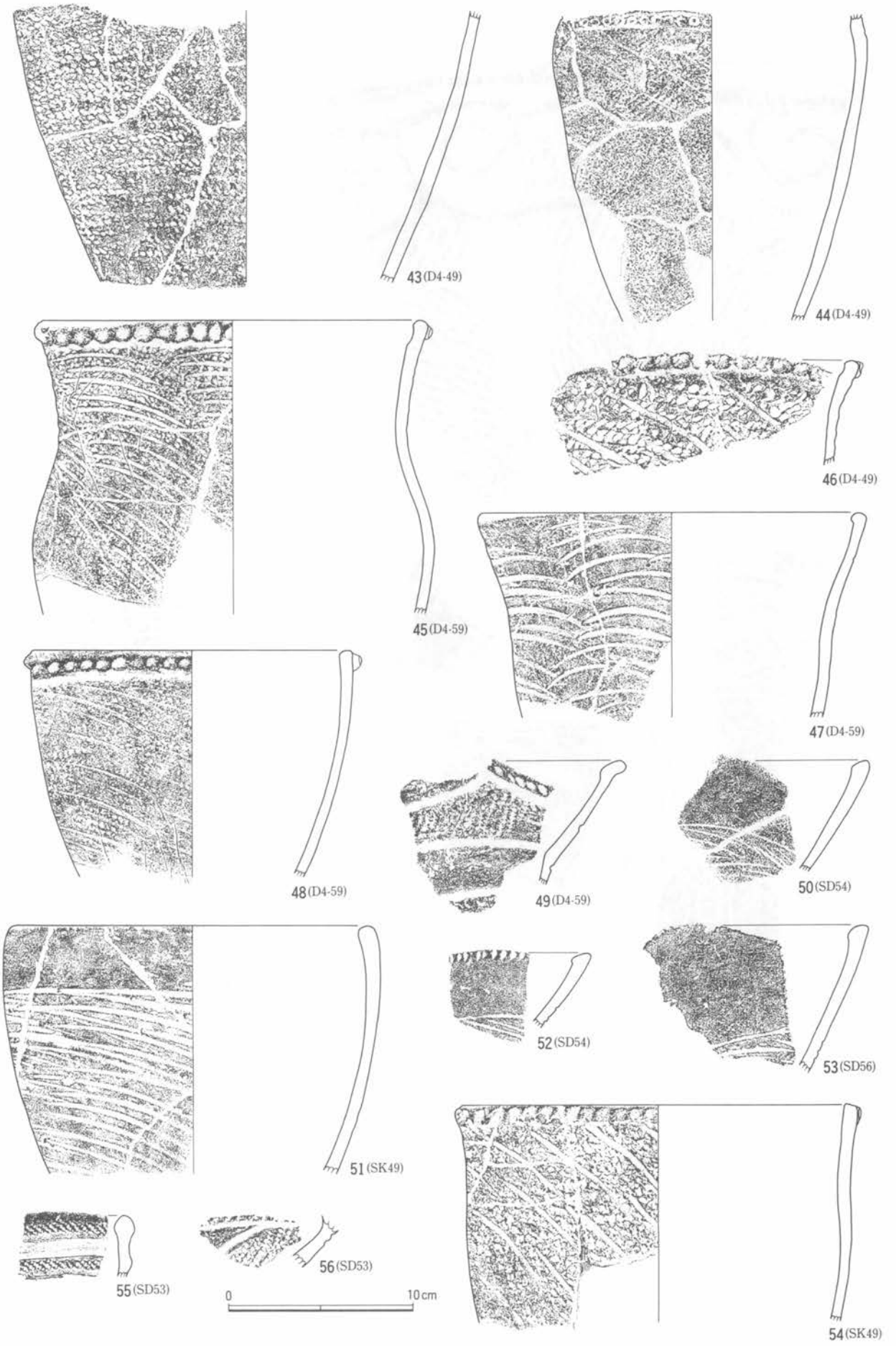
第74図　縄文時代遺物包含層



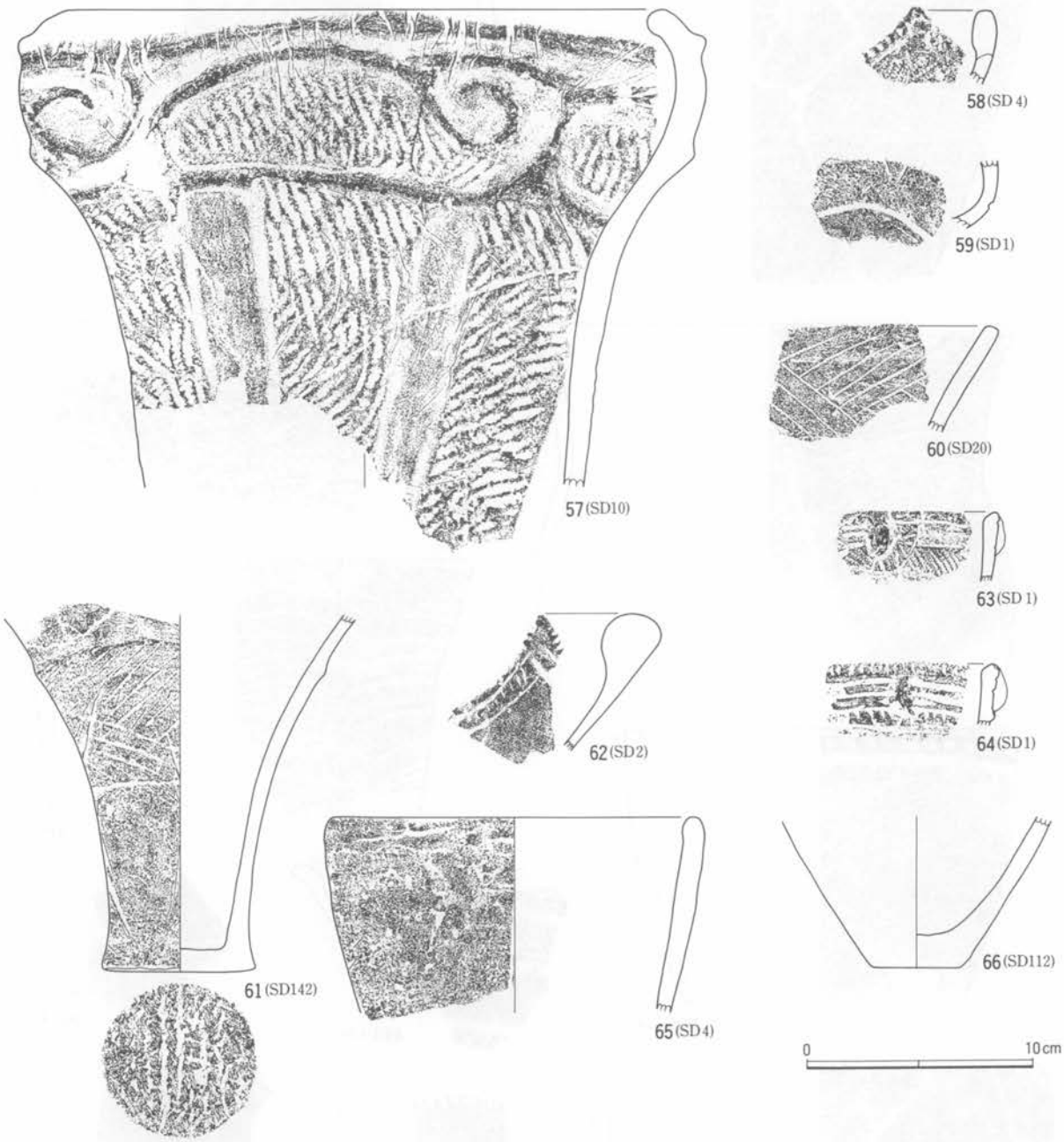
第75図　縄文時代の土器（1）



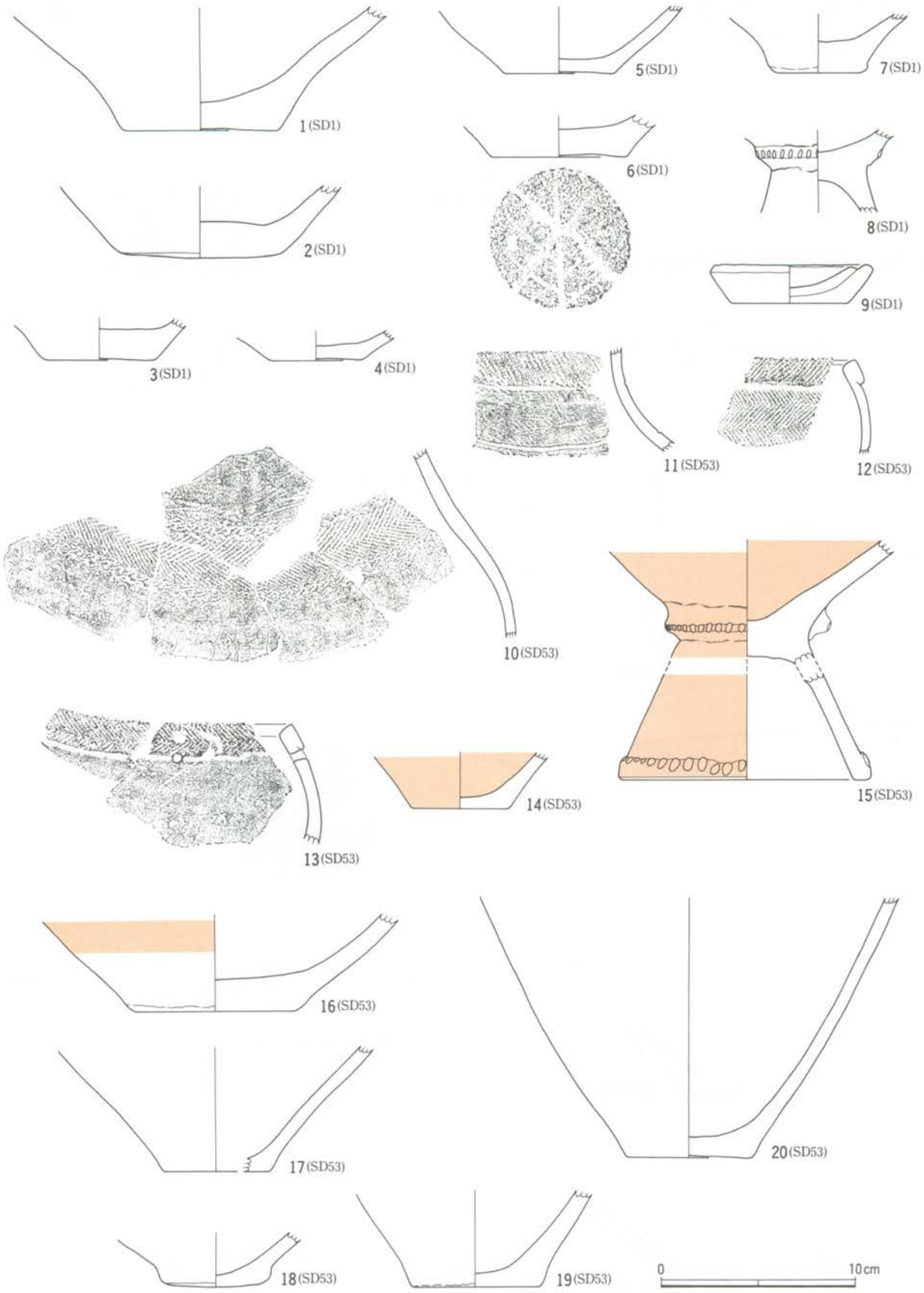
第76図　縄文時代の土器（2）



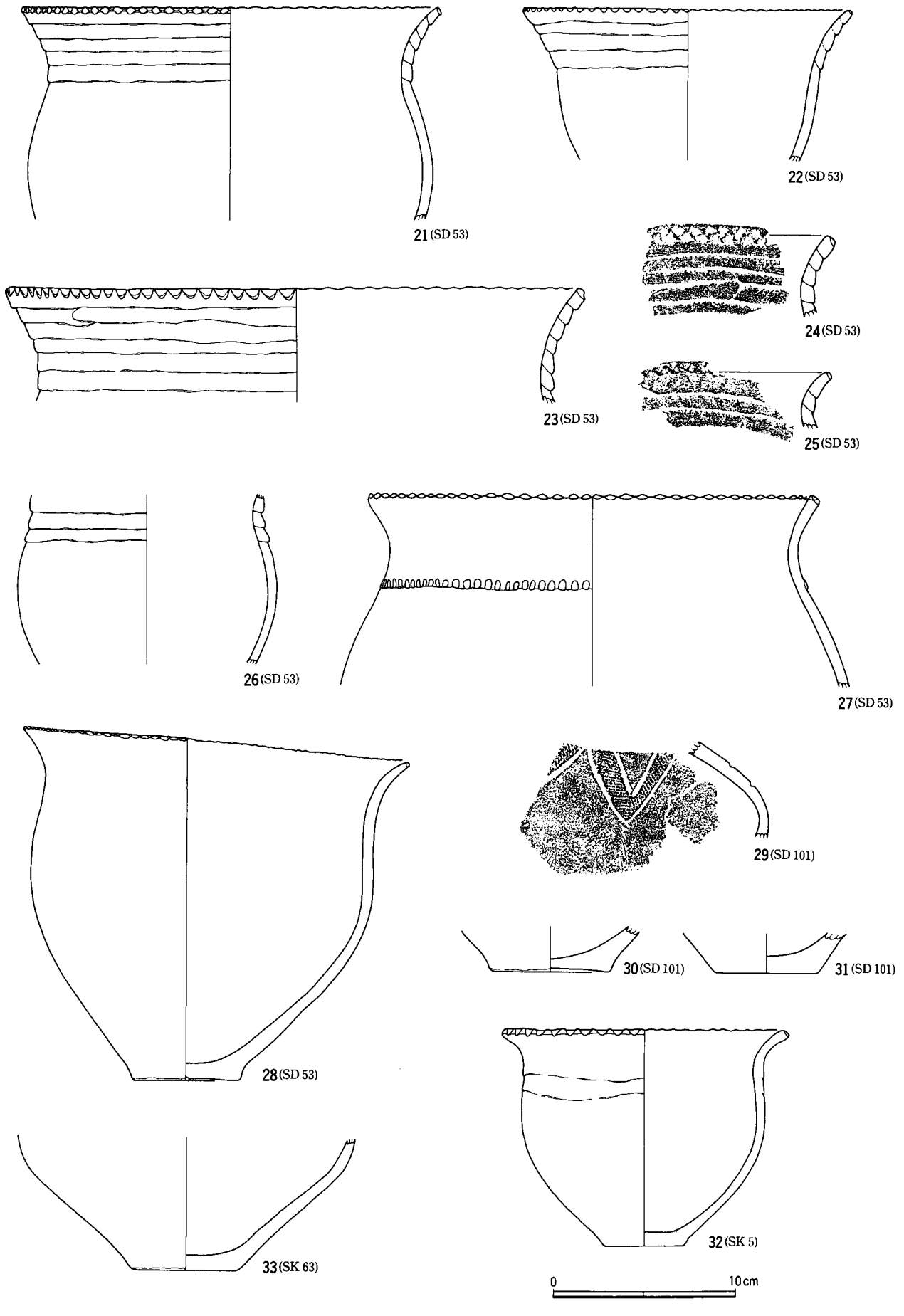
第77図　縄文時代の土器（3）



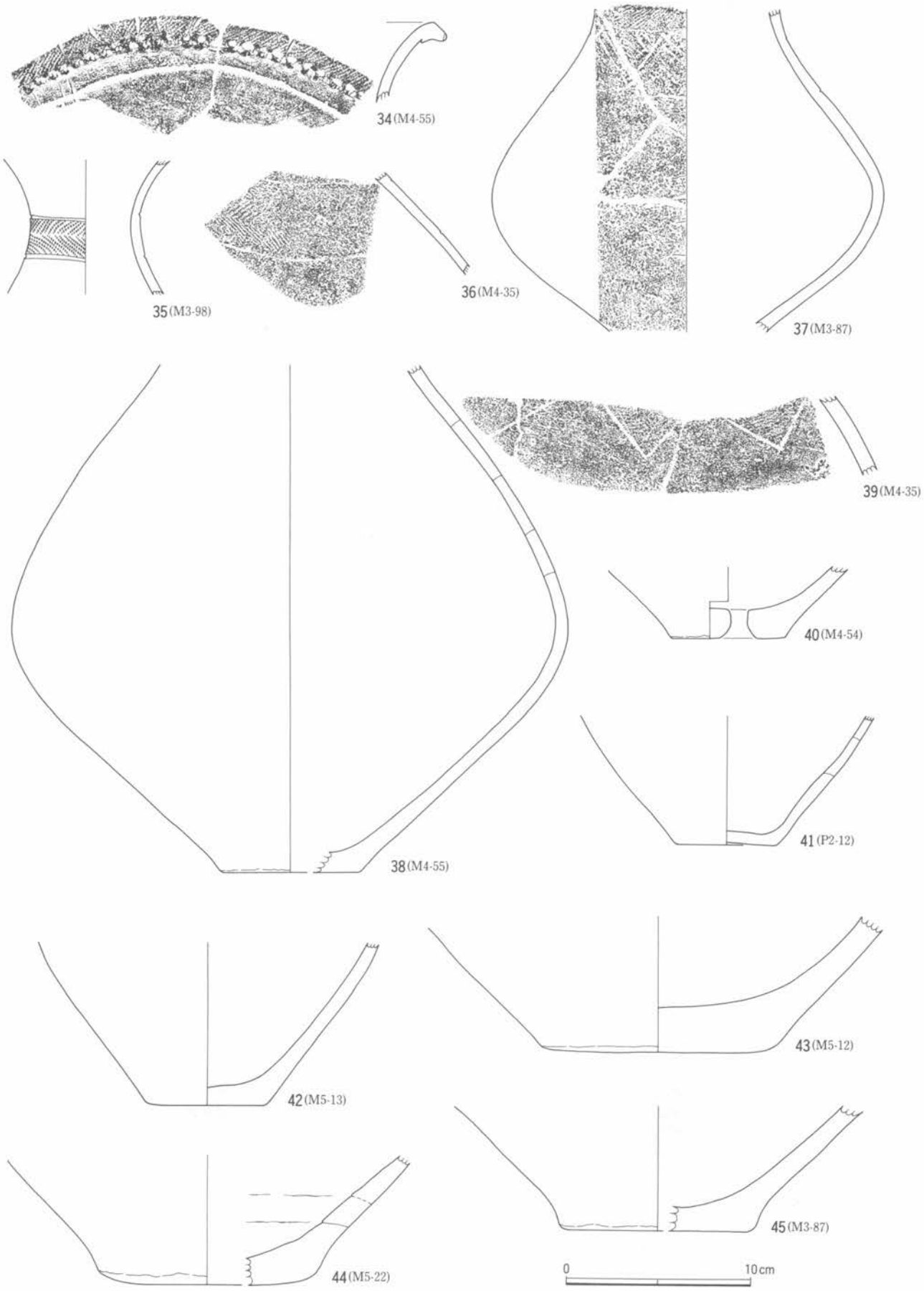
第78図　縄文時代の土器（4）



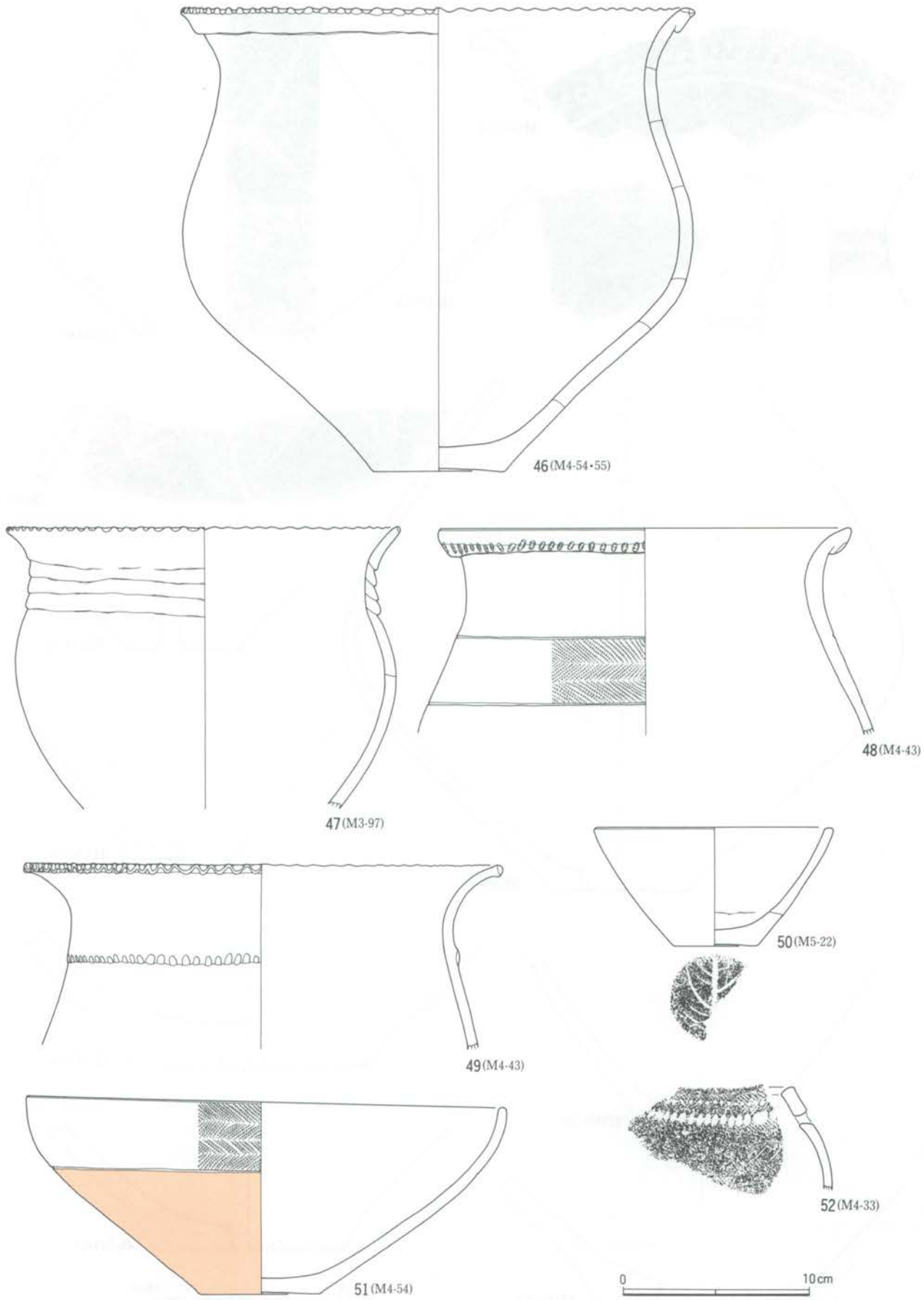
第79図　弥生時代の土器（1）



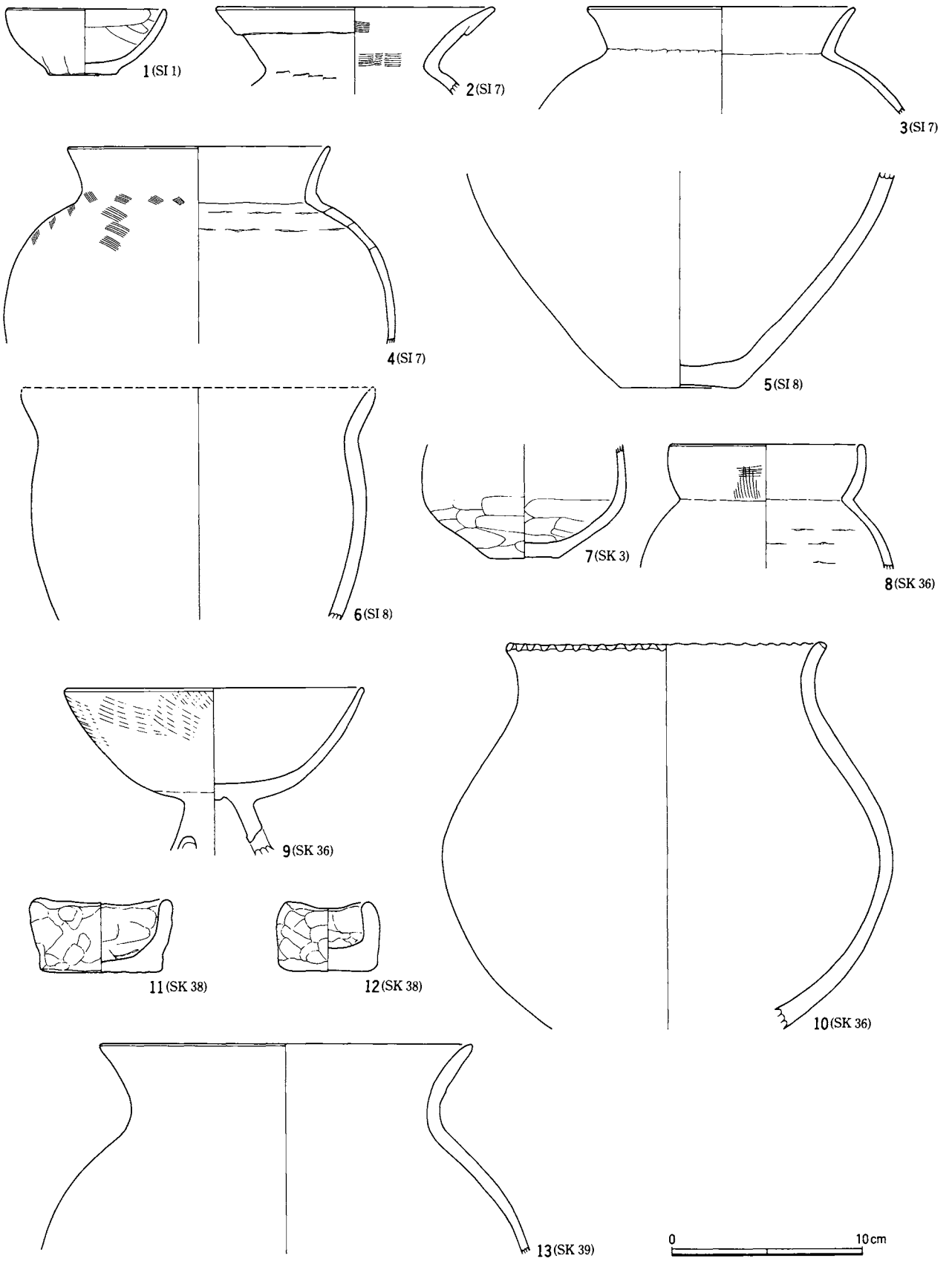
第80図　弥生時代の土器（2）



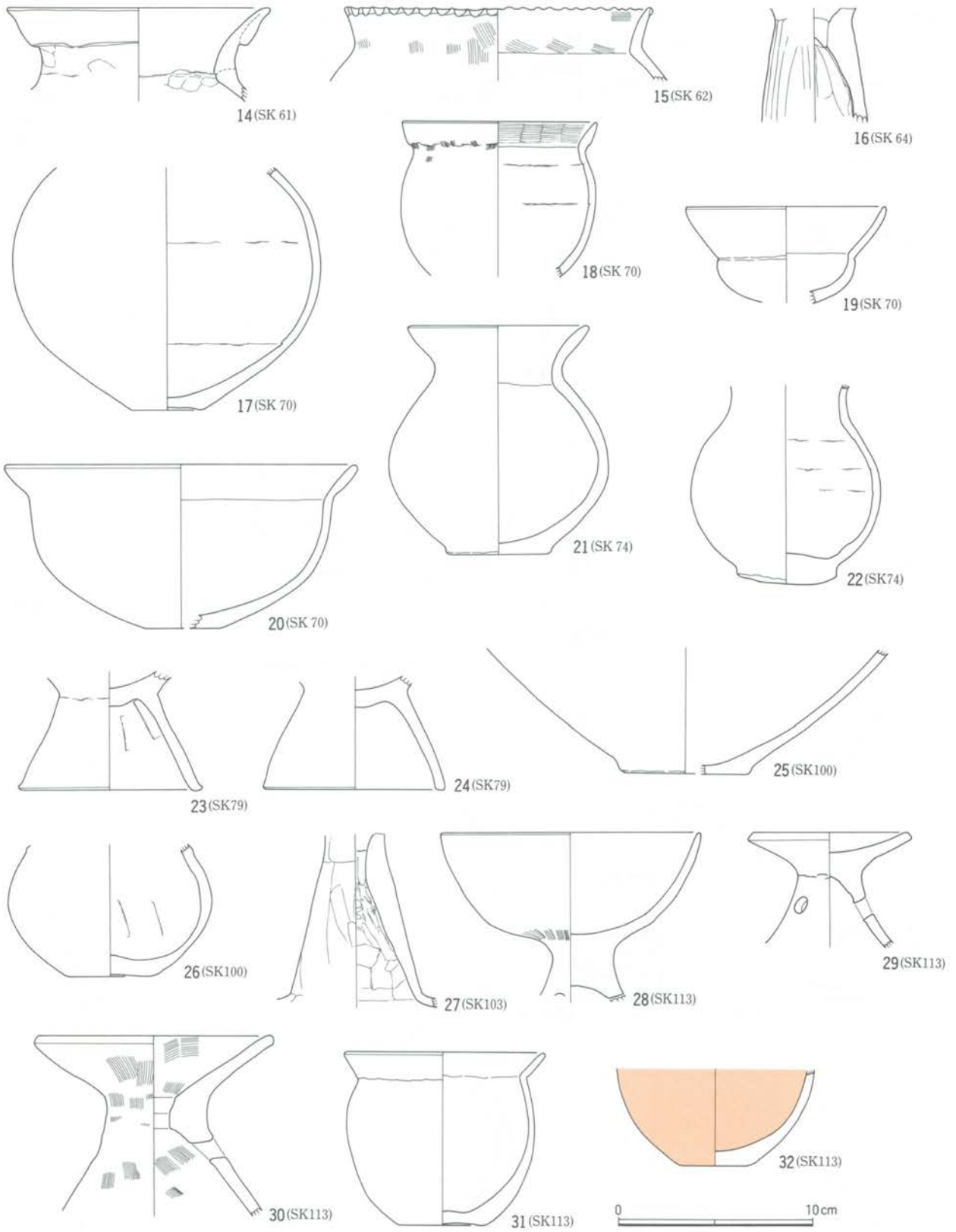
第81図　弥生時代の土器（3）



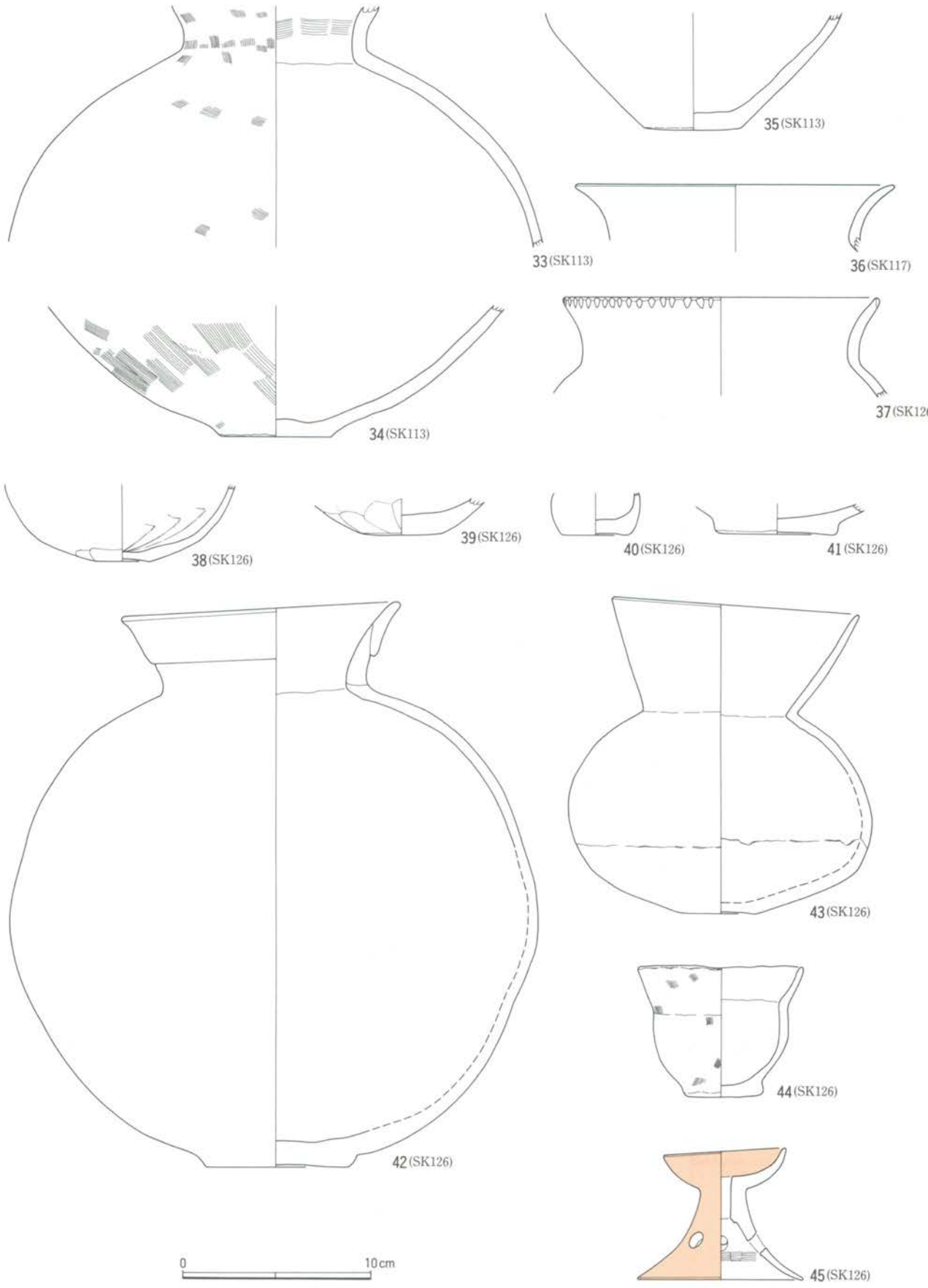
第82図　弥生時代の土器（4）



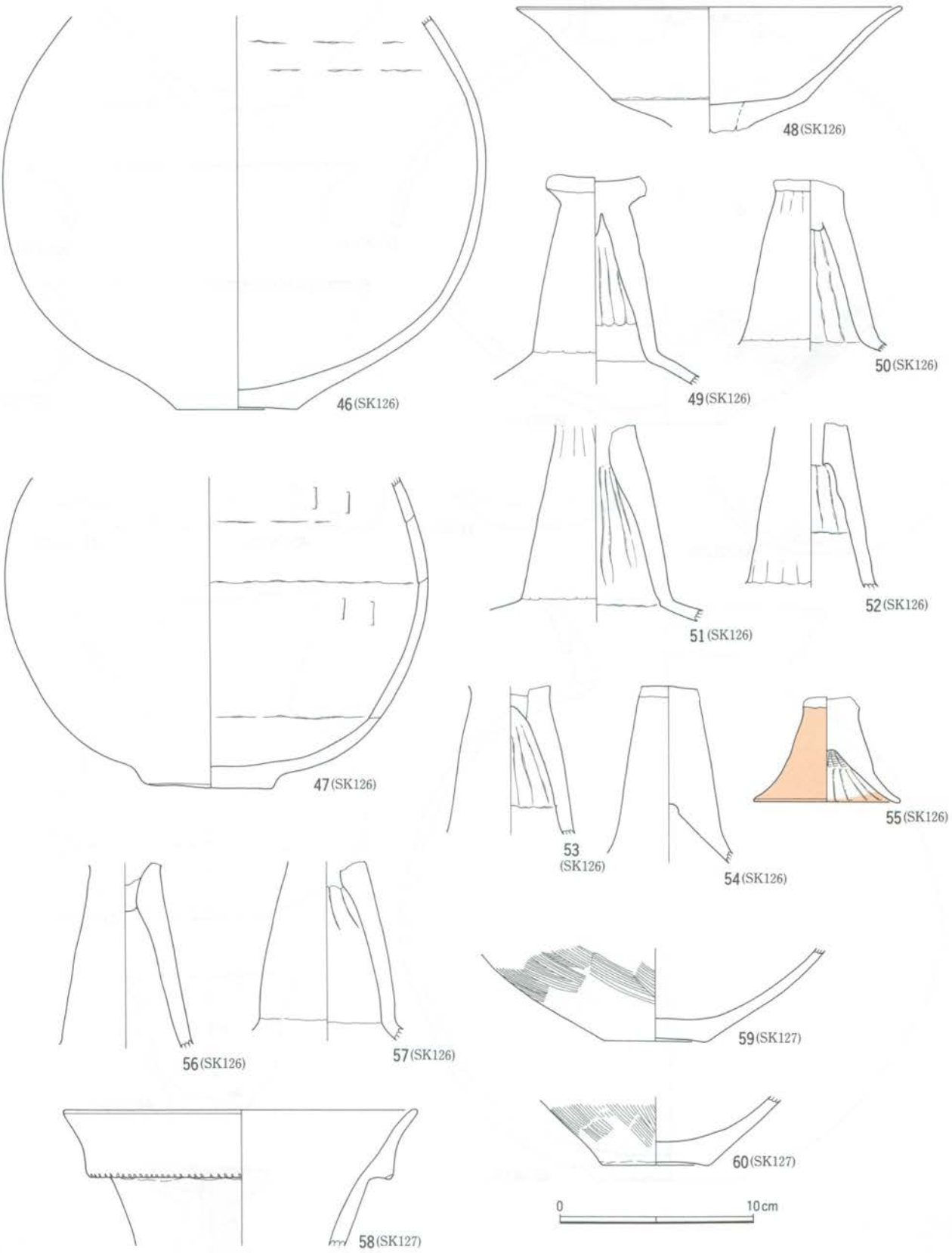
第83図　古墳時代の土器（1）



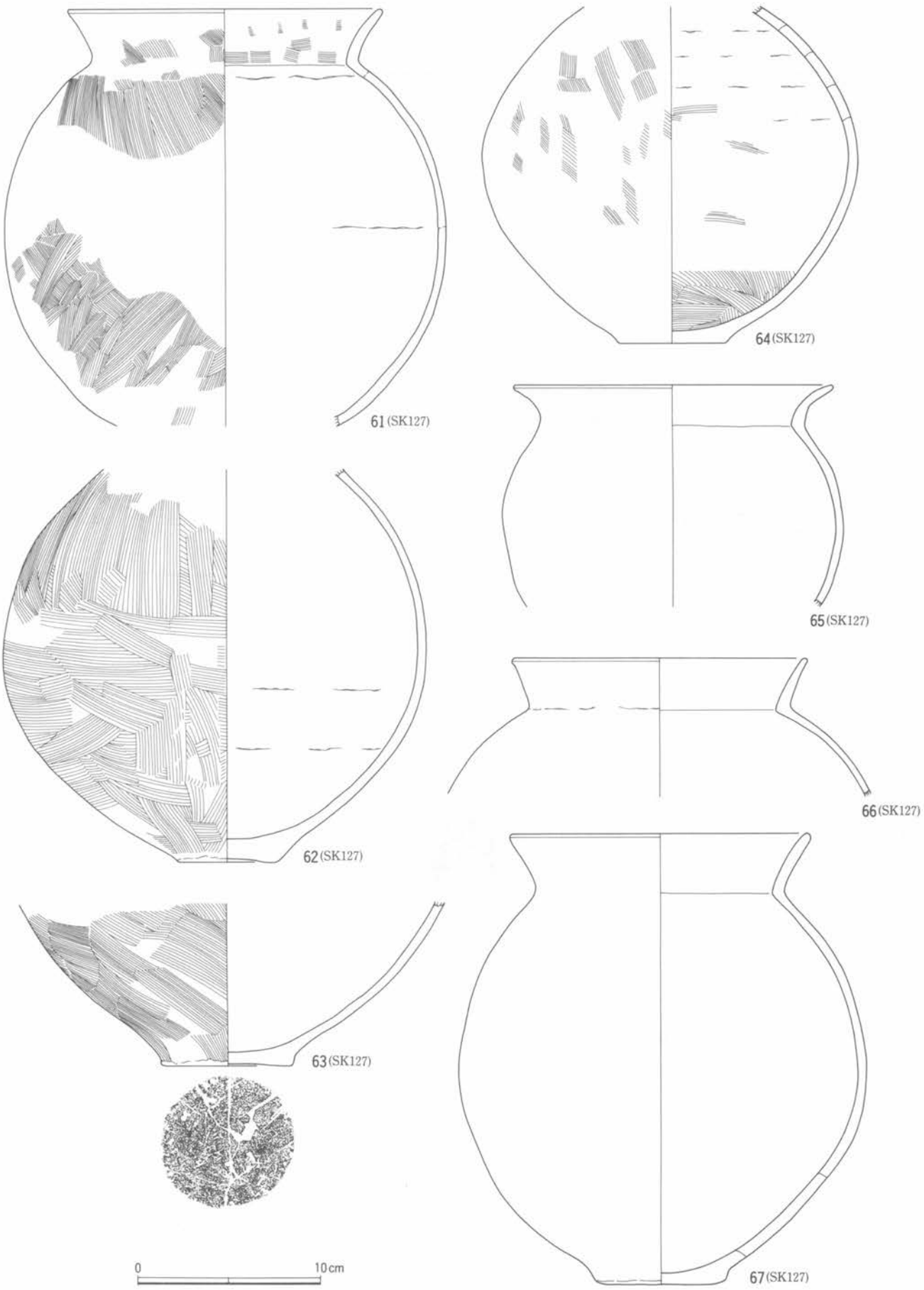
第84図　古墳時代の土器（2）



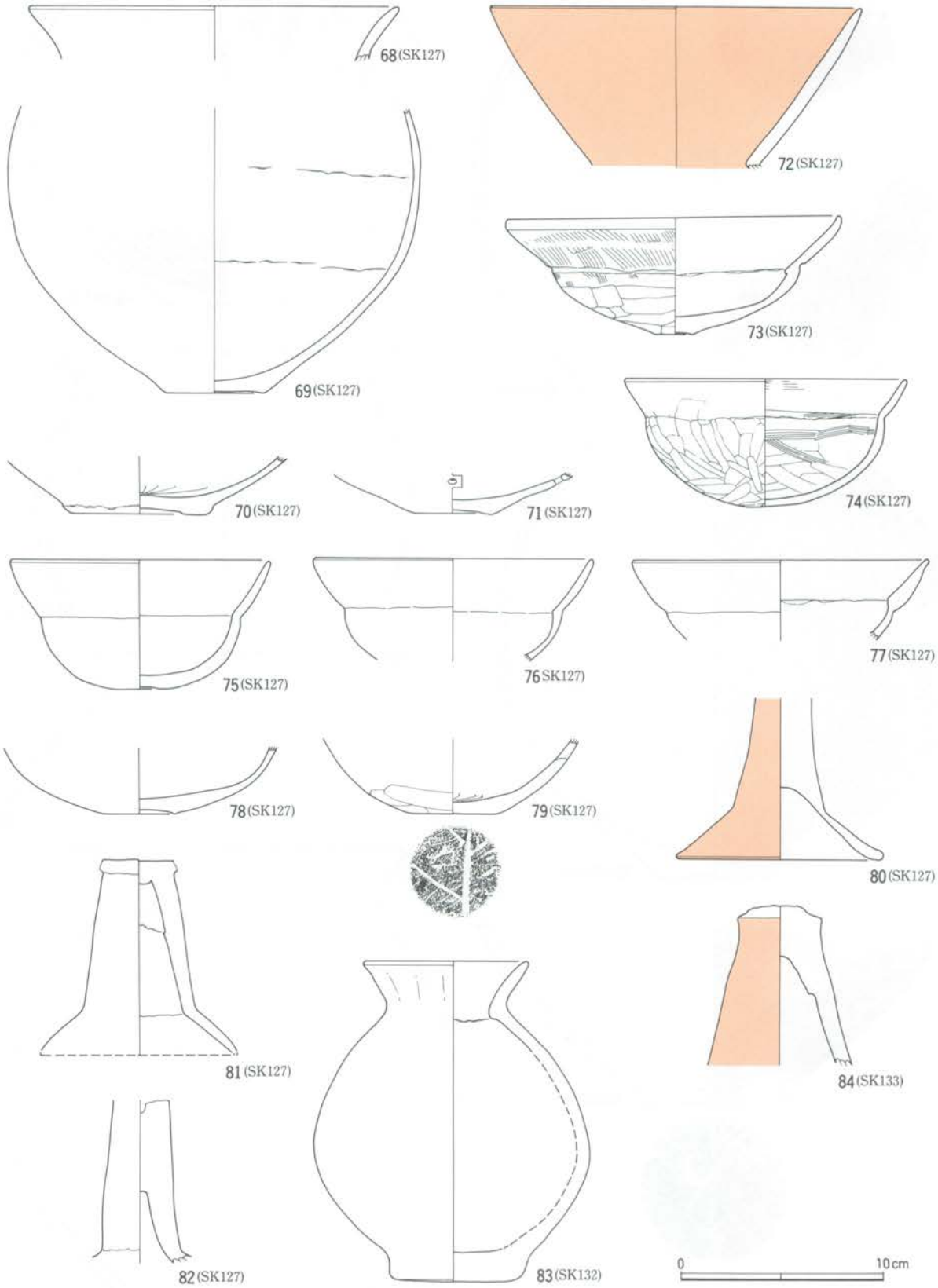
第85図　古墳時代の土器（3）



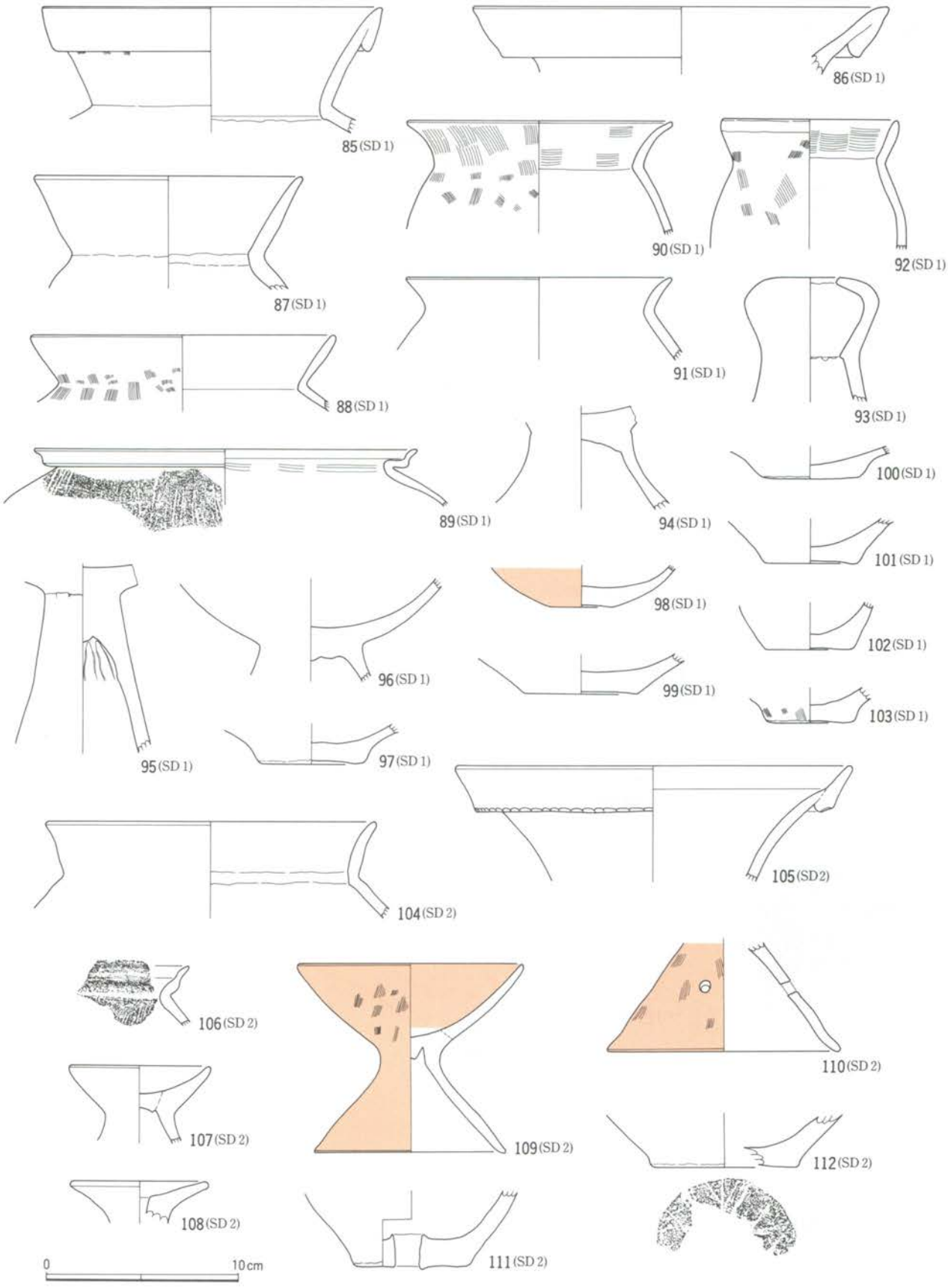
第86図　古墳時代の土器（4）



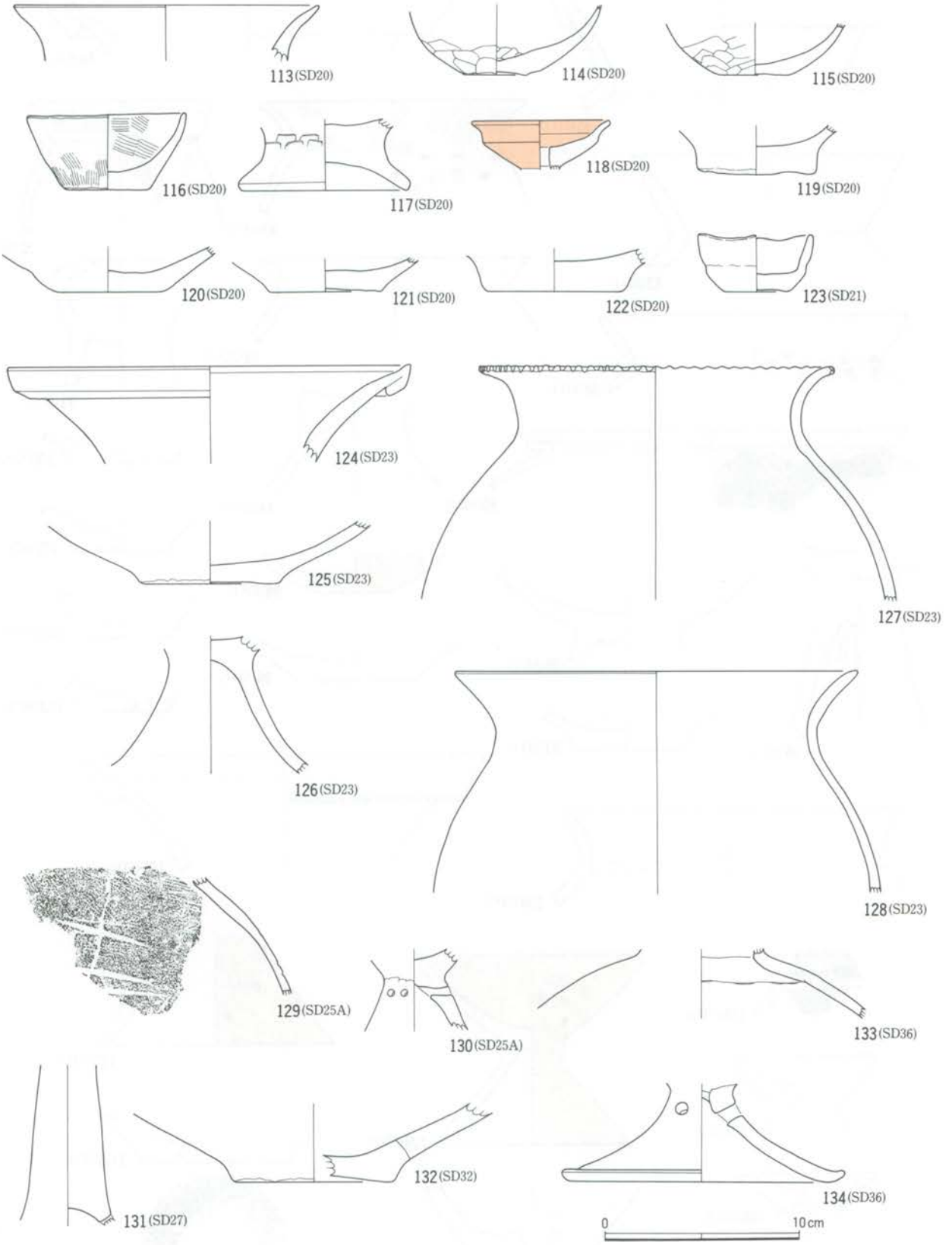
第87図　古墳時代の土器（5）



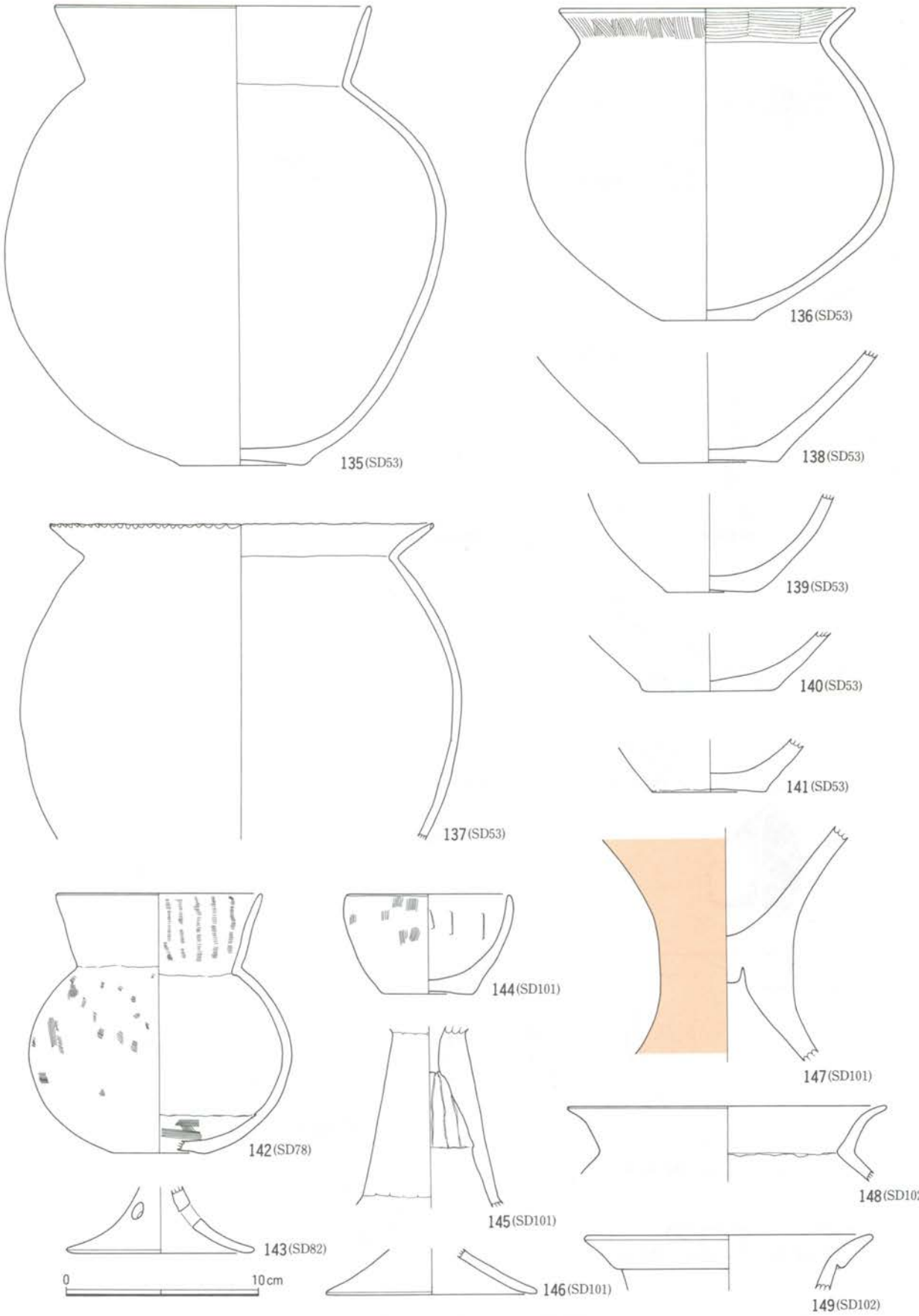
第88図　古墳時代の土器（6）



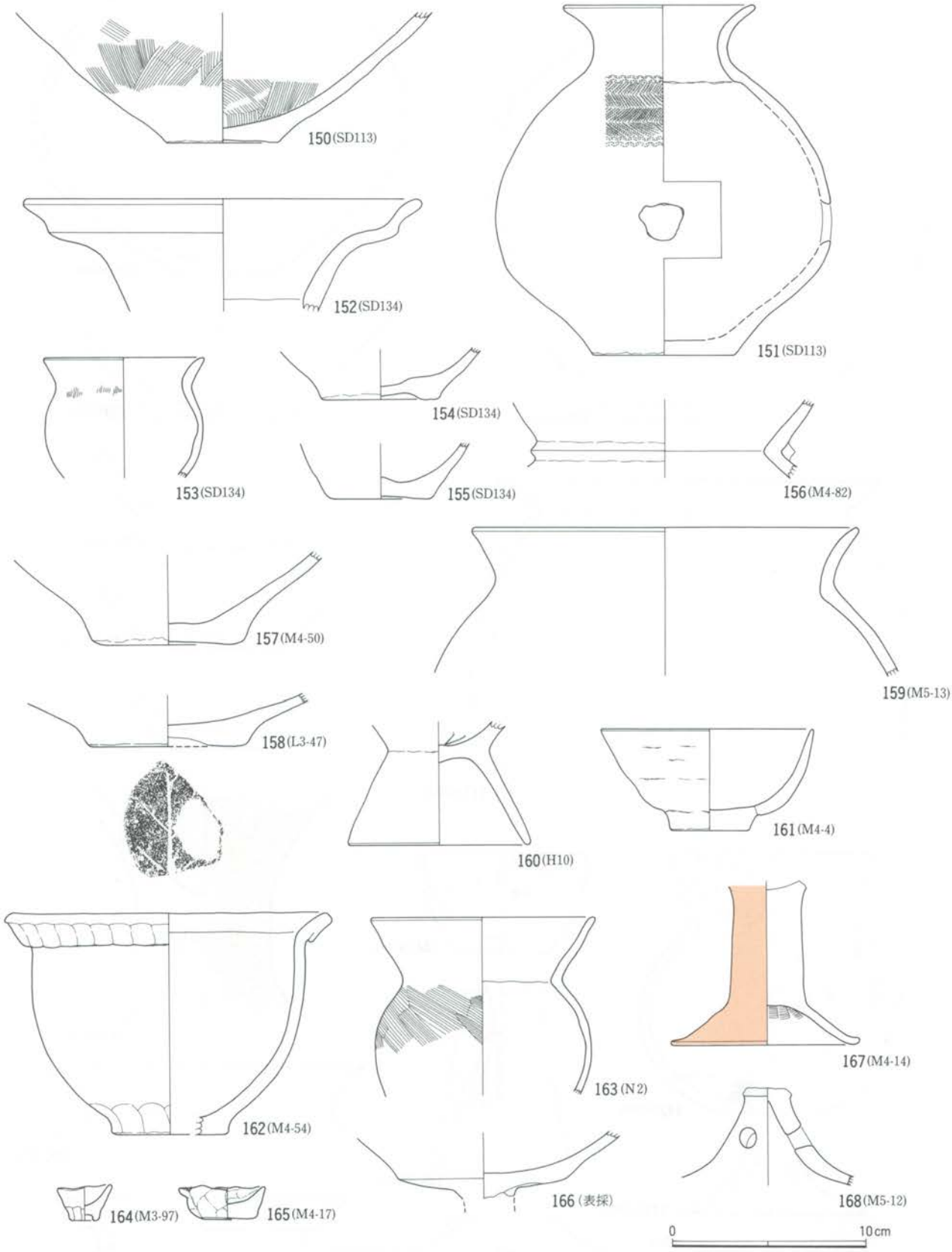
第89図　古墳時代の土器（7）



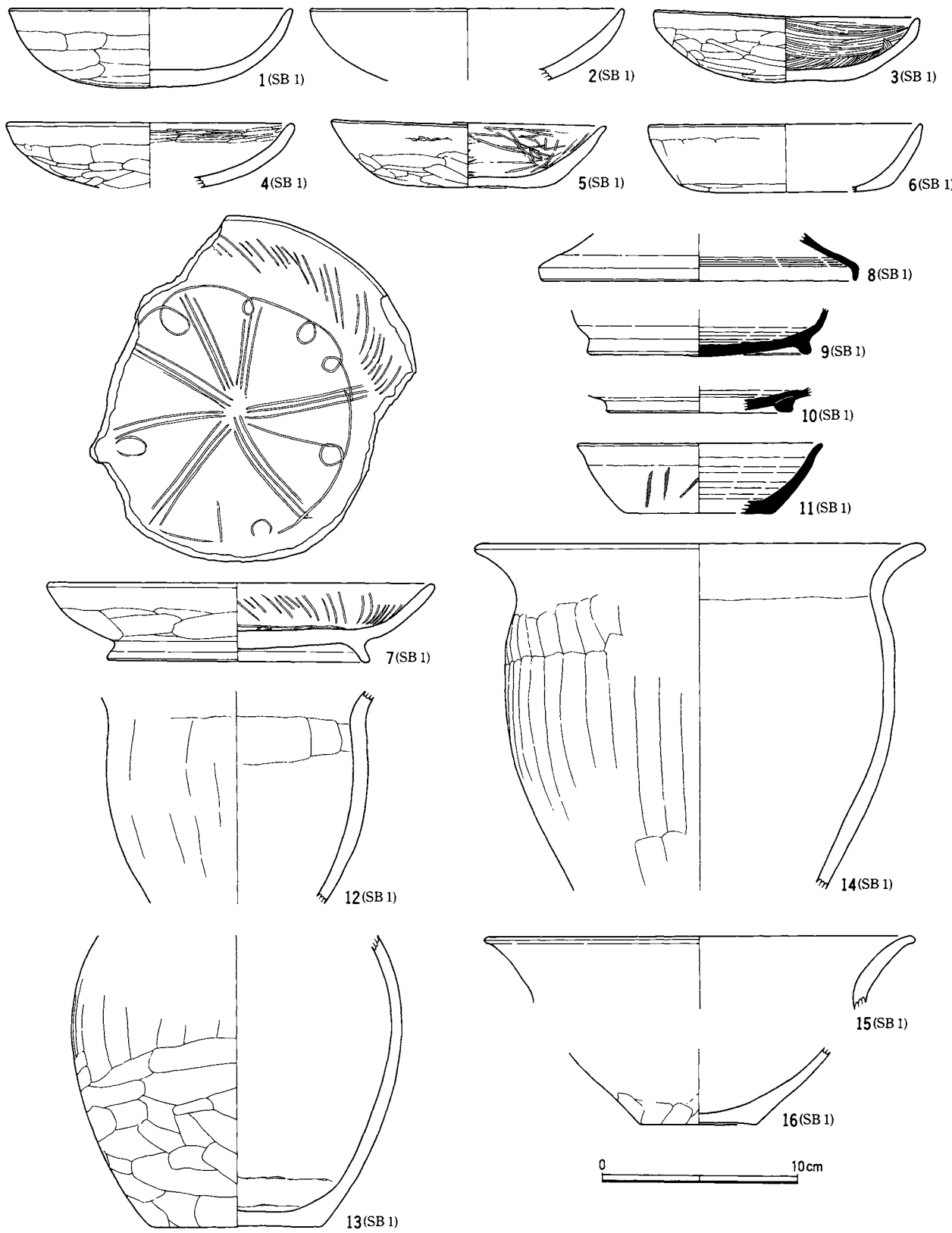
第90図　古墳時代の土器（8）



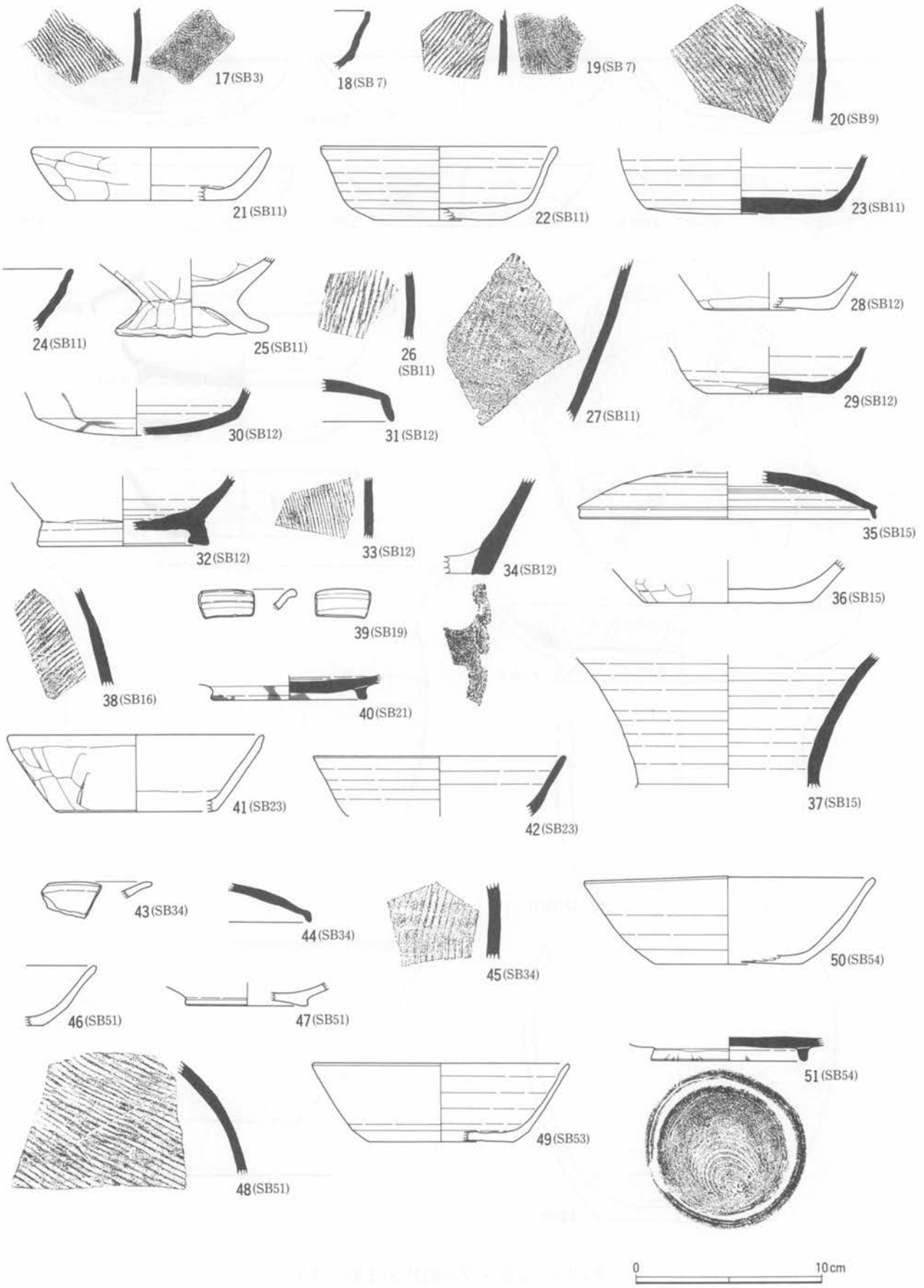
第91図　古墳時代の土器（９）



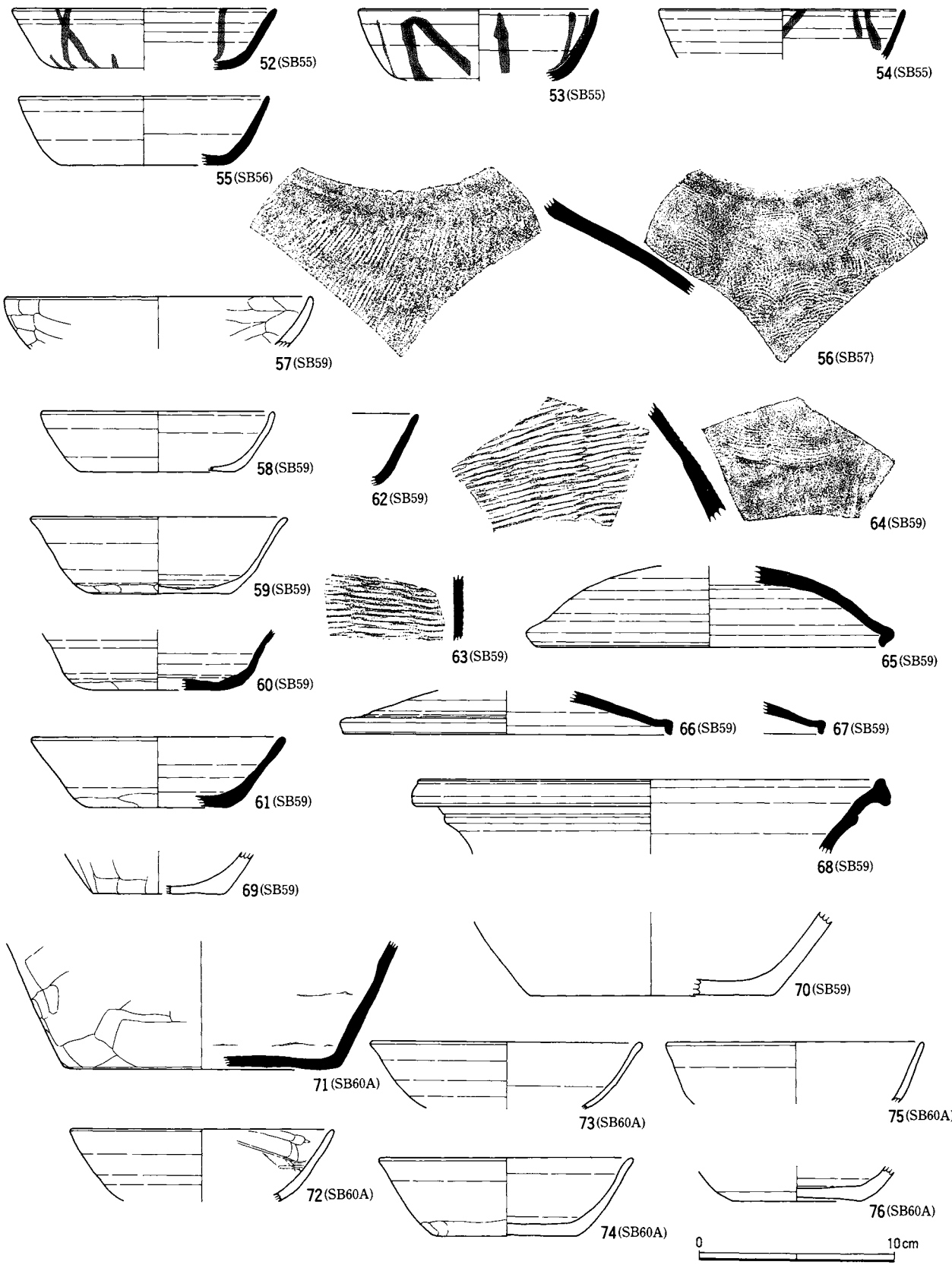
第92図　古墳時代の土器（10）



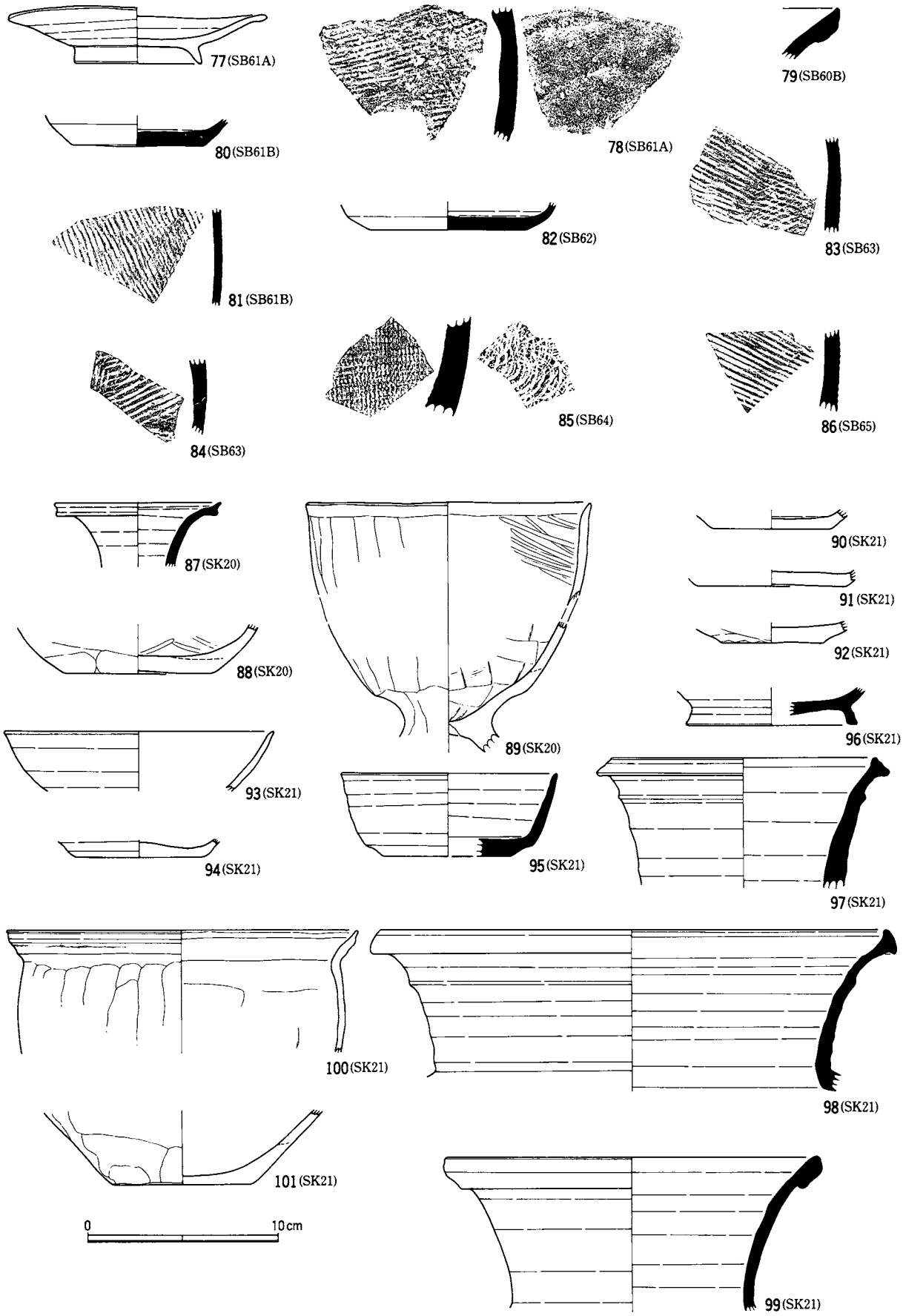
第93図　奈良・平安時代の土器（1）



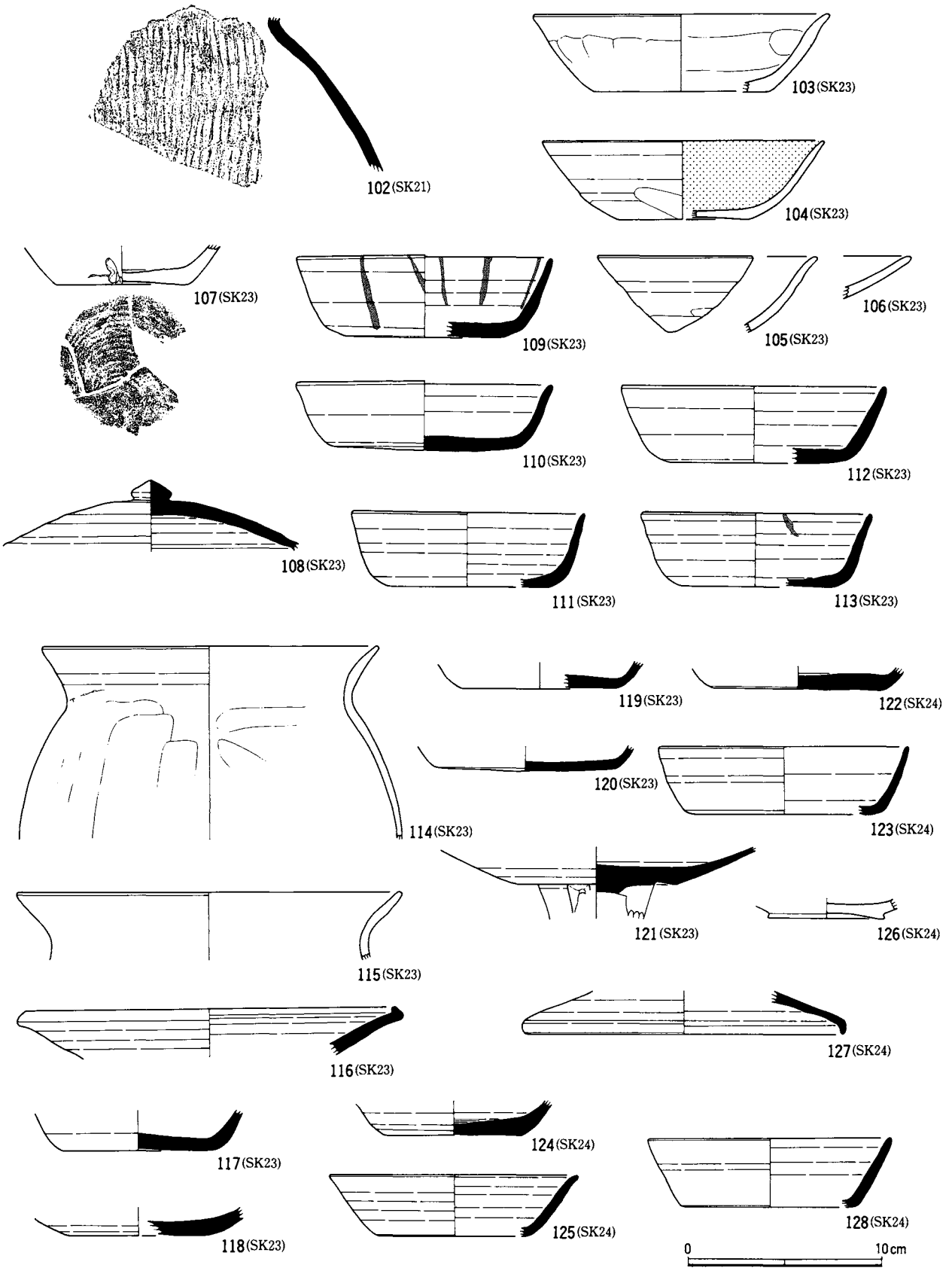
第94図　奈良・平安時代の土器（2）



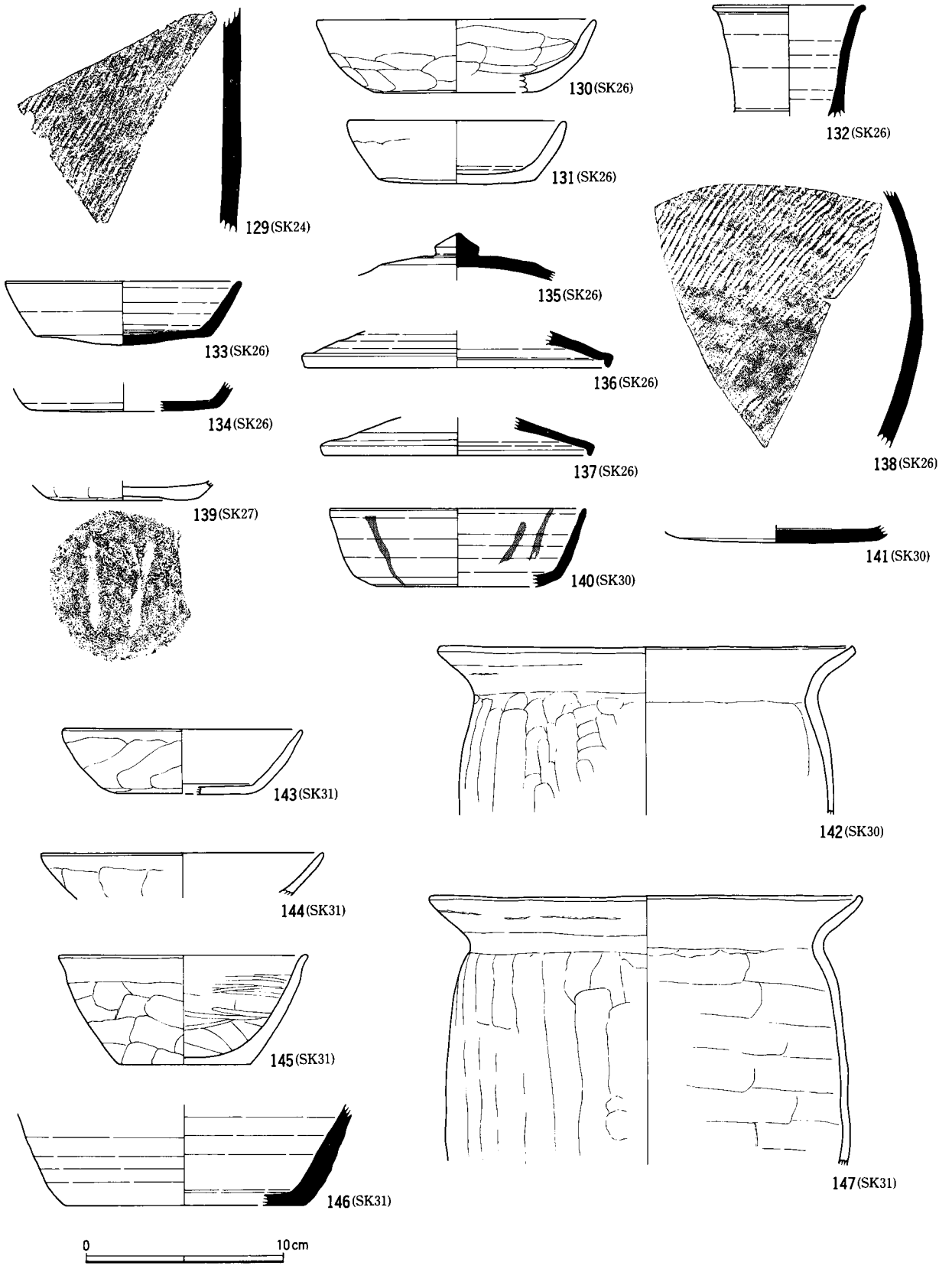
第95図　奈良・平安時代の土器（3）



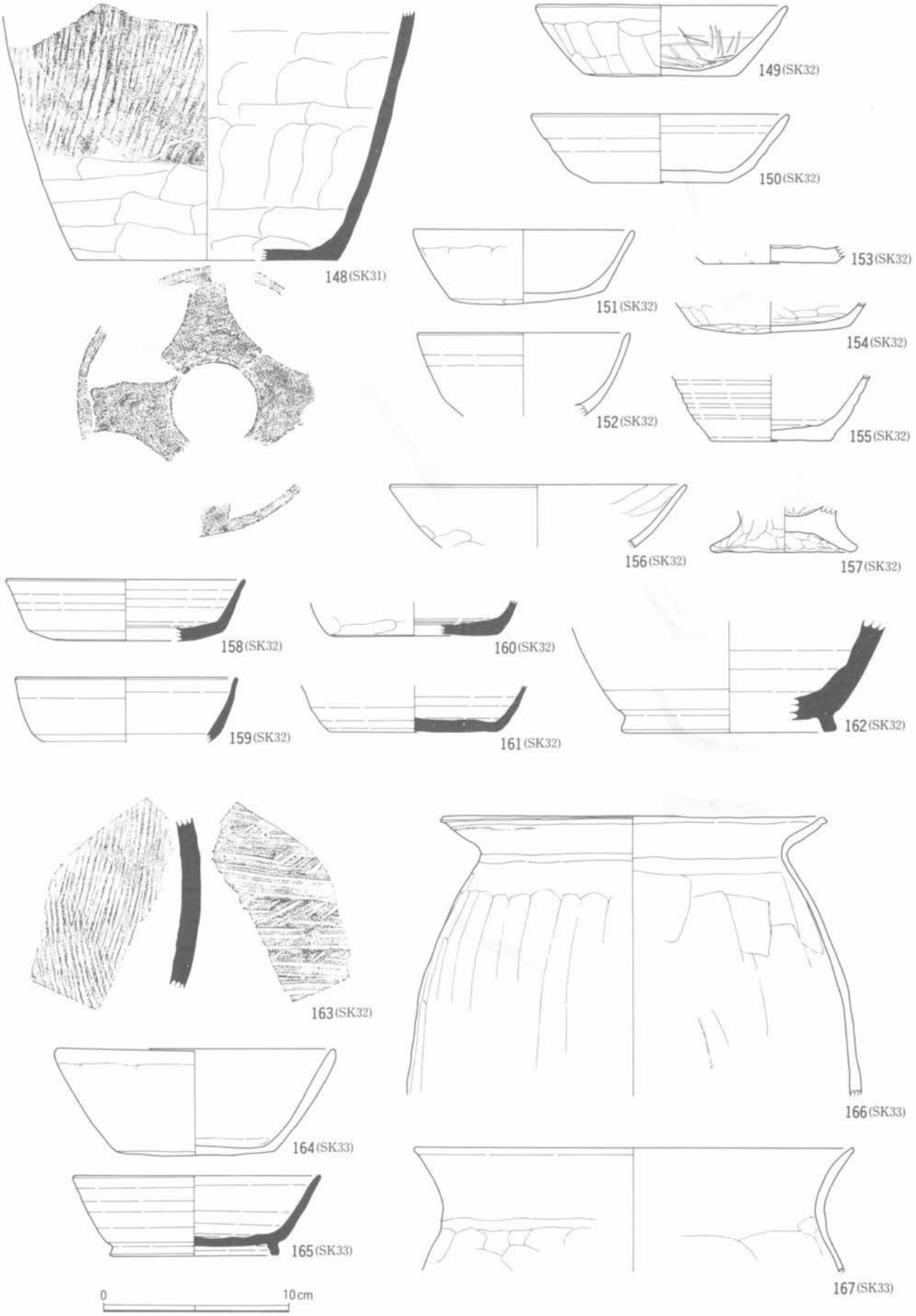
第96図　奈良・平安時代の土器（4）



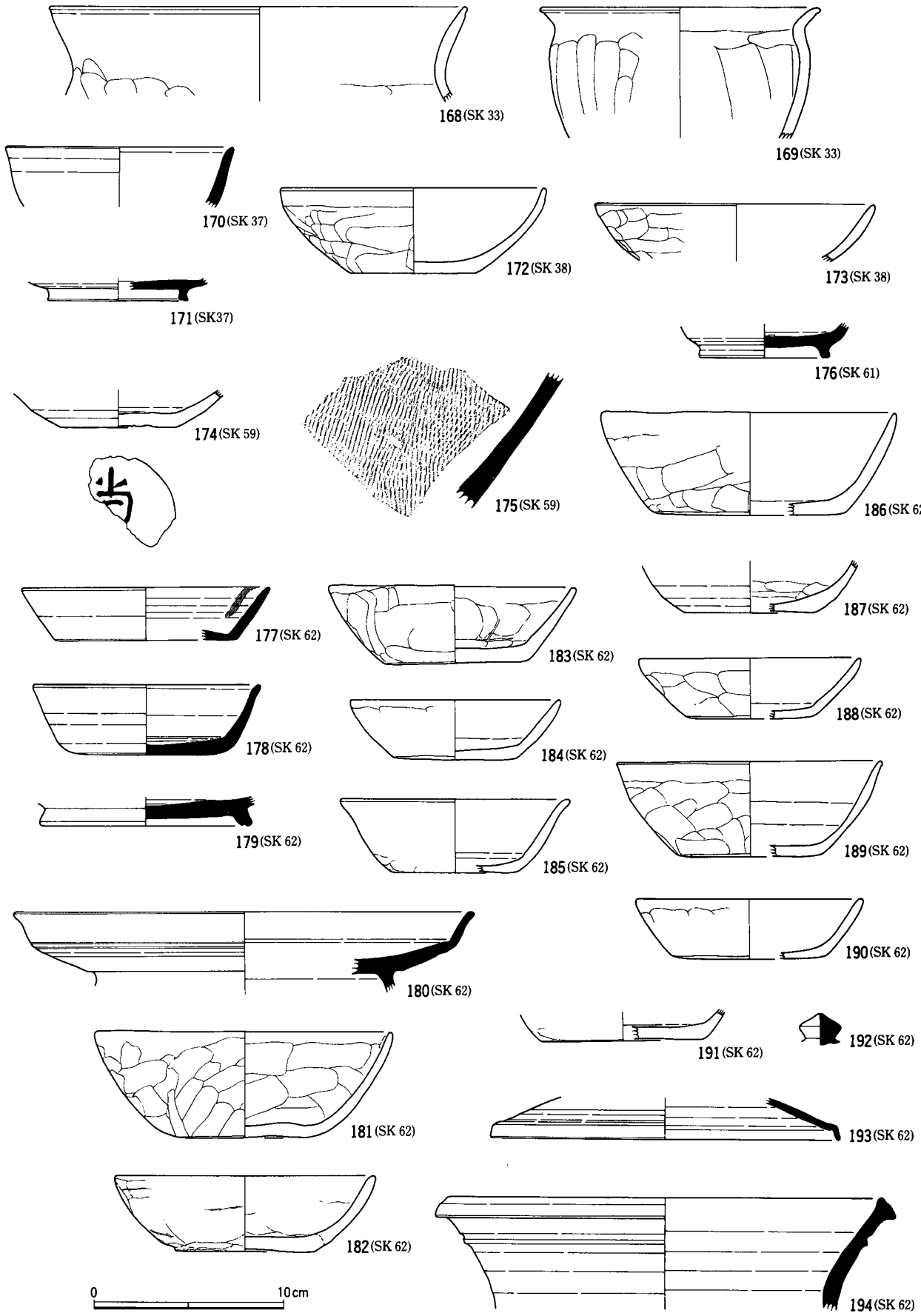
第97図　奈良・平安時代の土器（5）



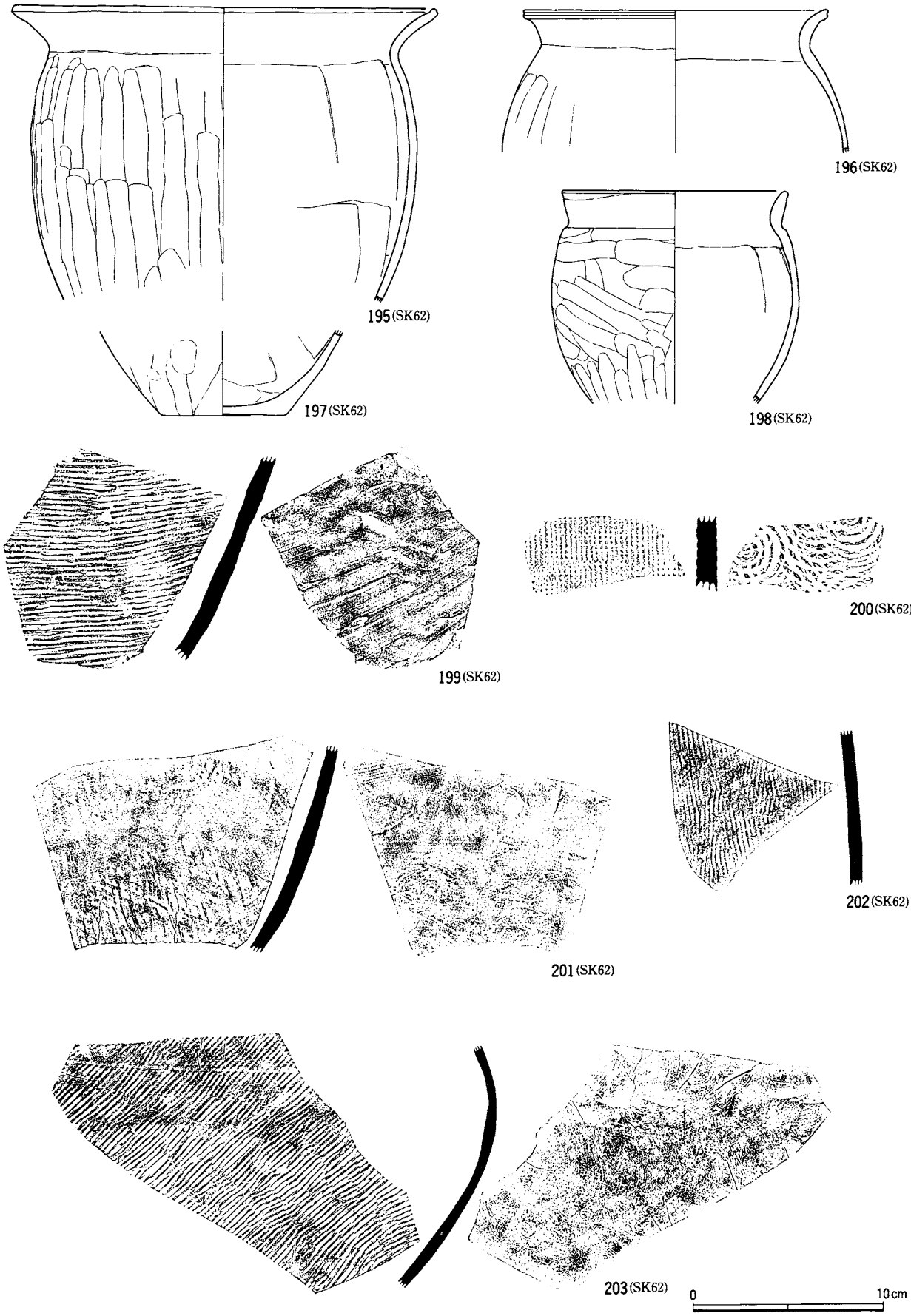
第98図　奈良・平安時代の土器（6）



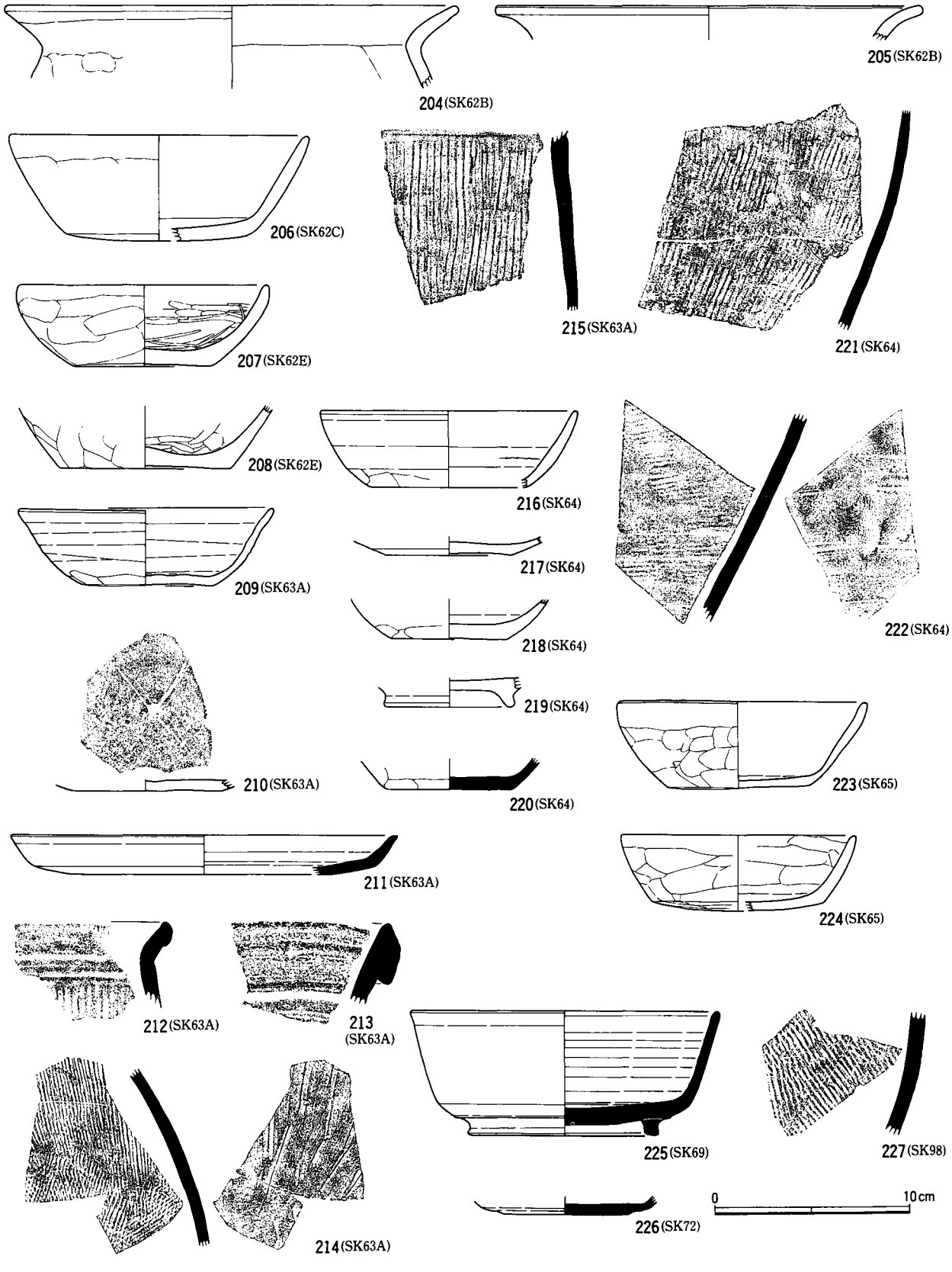
第99図　奈良・平安時代の土器（7）



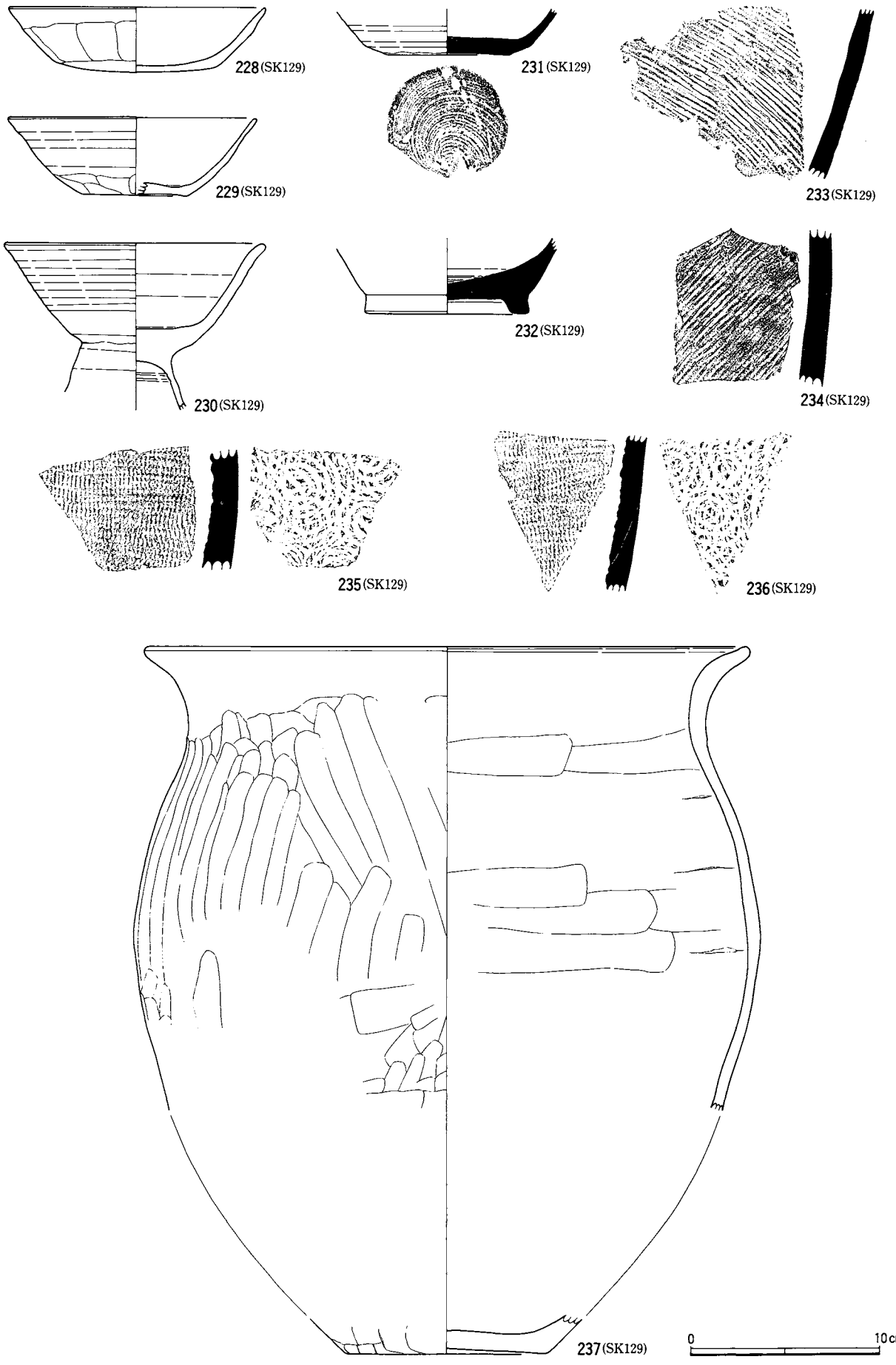
第100図 奈良・平安時代の土器（8）



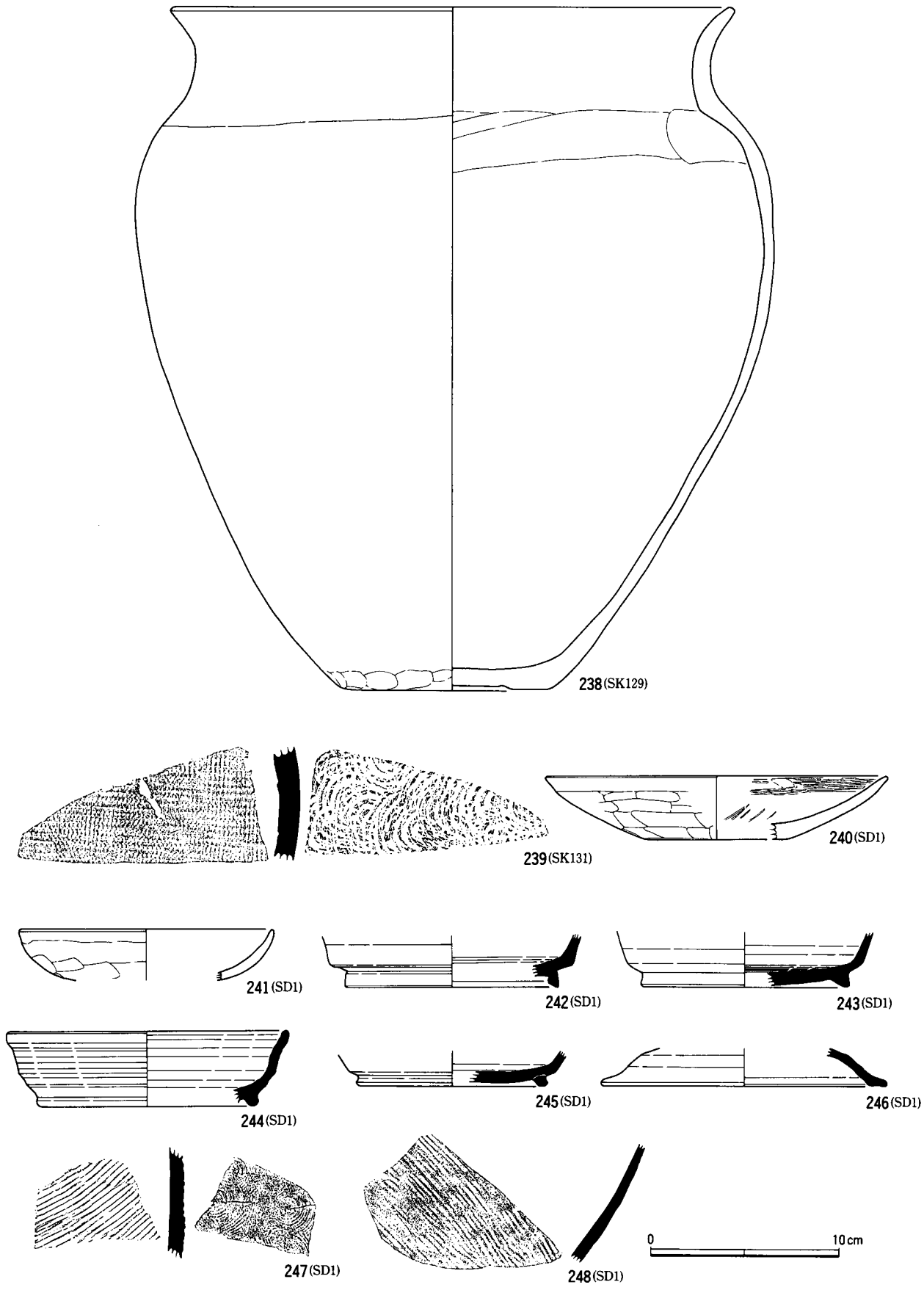
第101図 奈良・平安時代の土器（9）



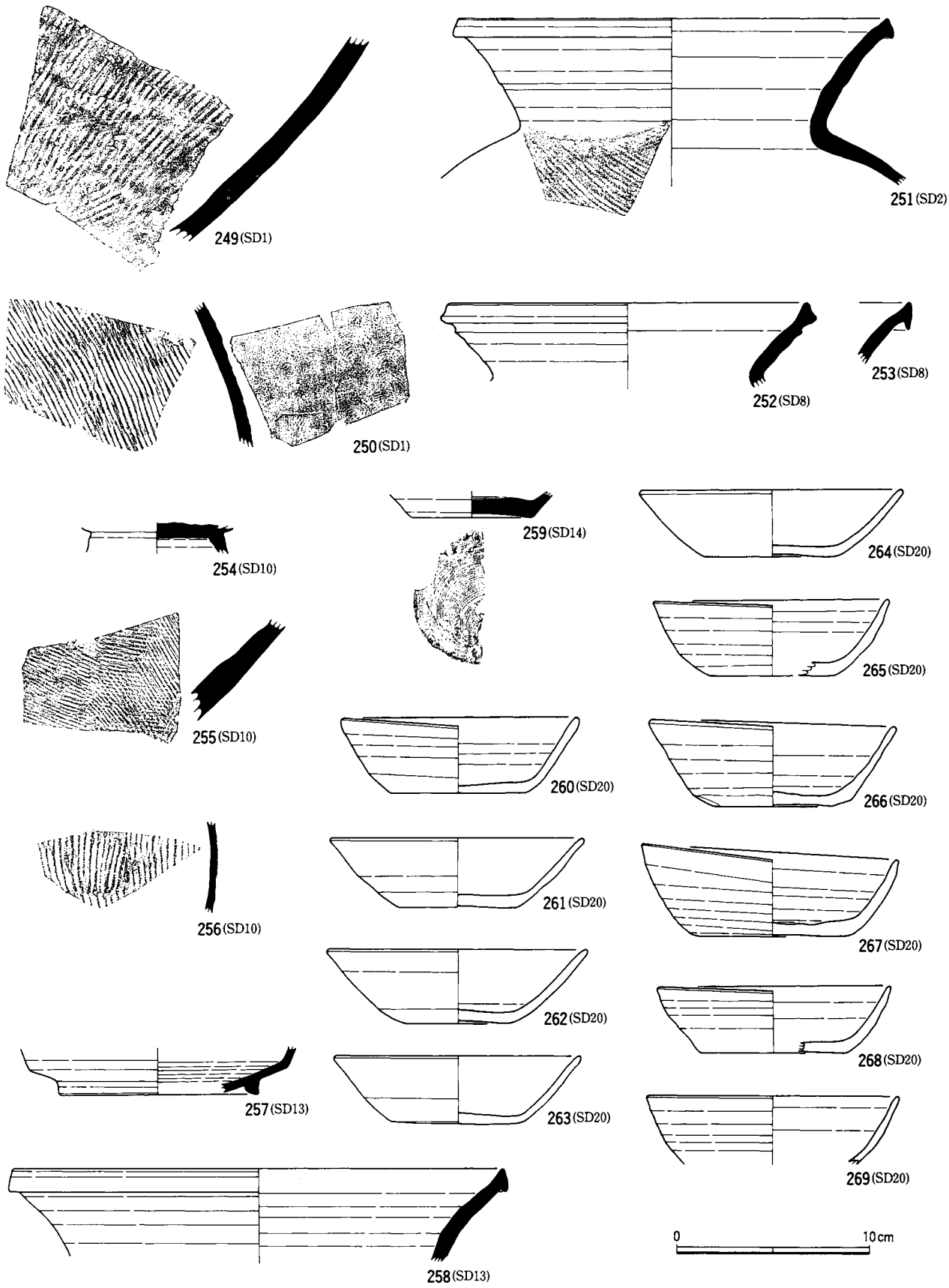
第102図 奈良・平安時代の土器（10）



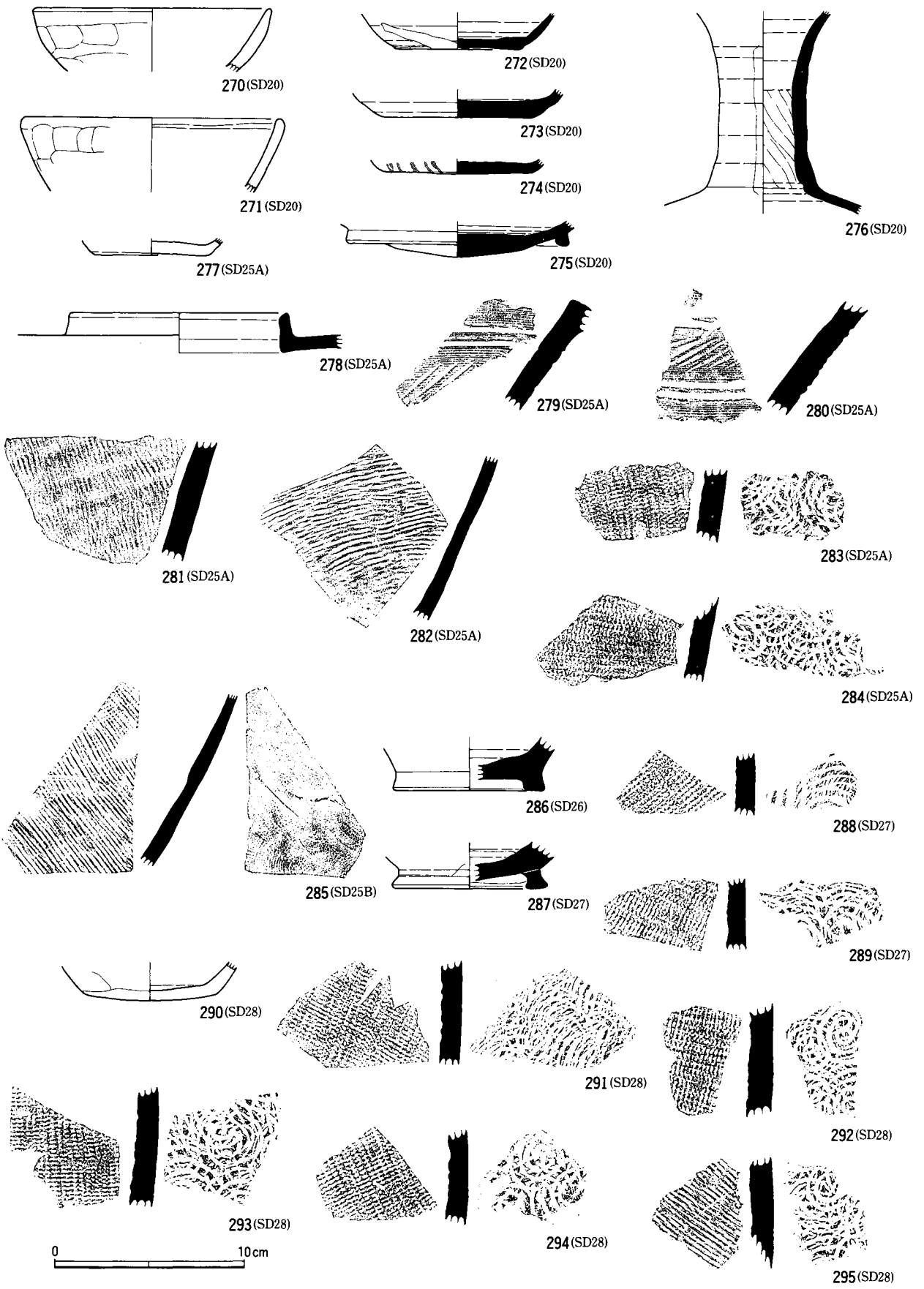
第103図 奈良・平安時代の土器（11）



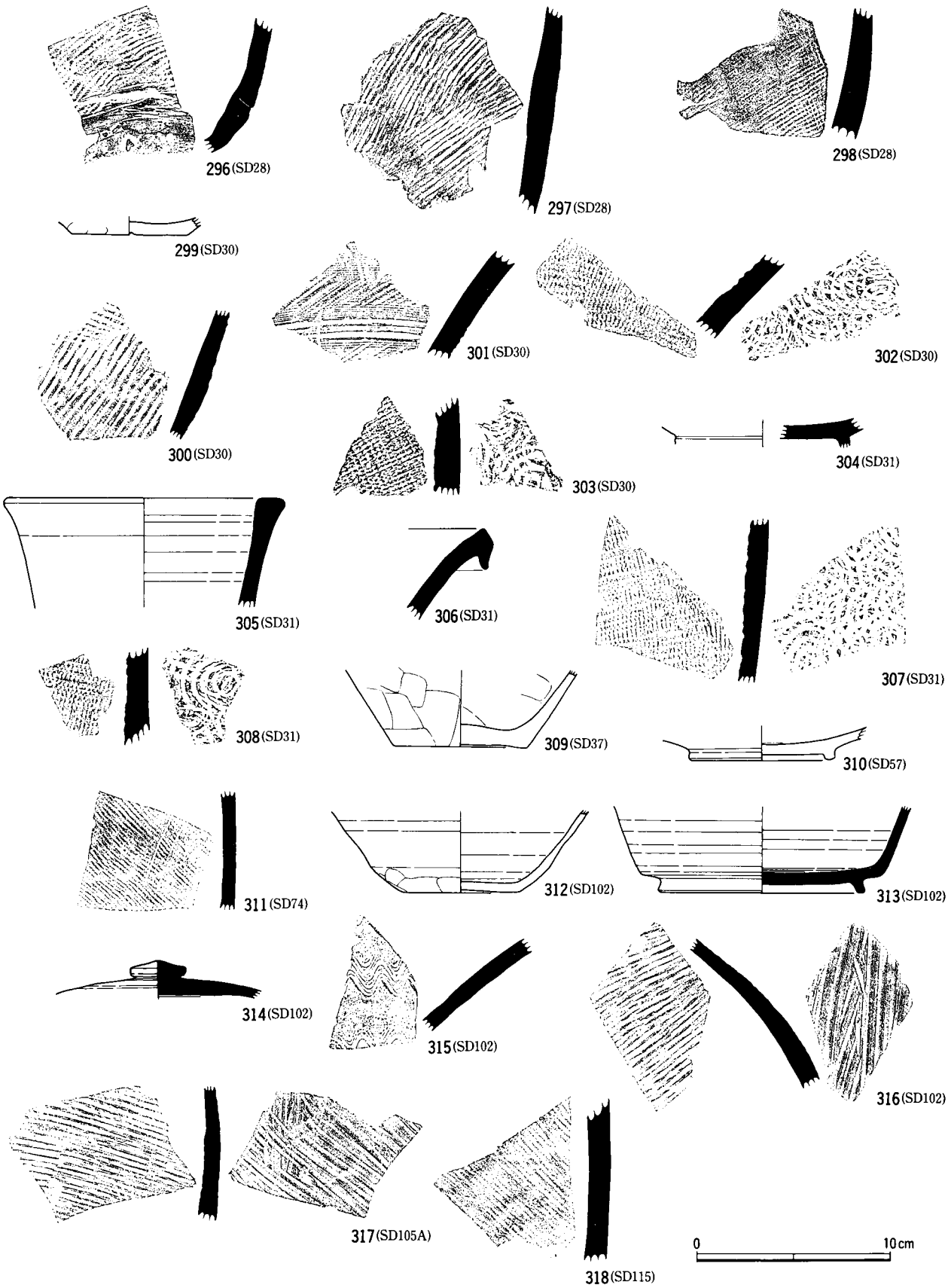
第104図 奈良・平安時代の土器 (12)



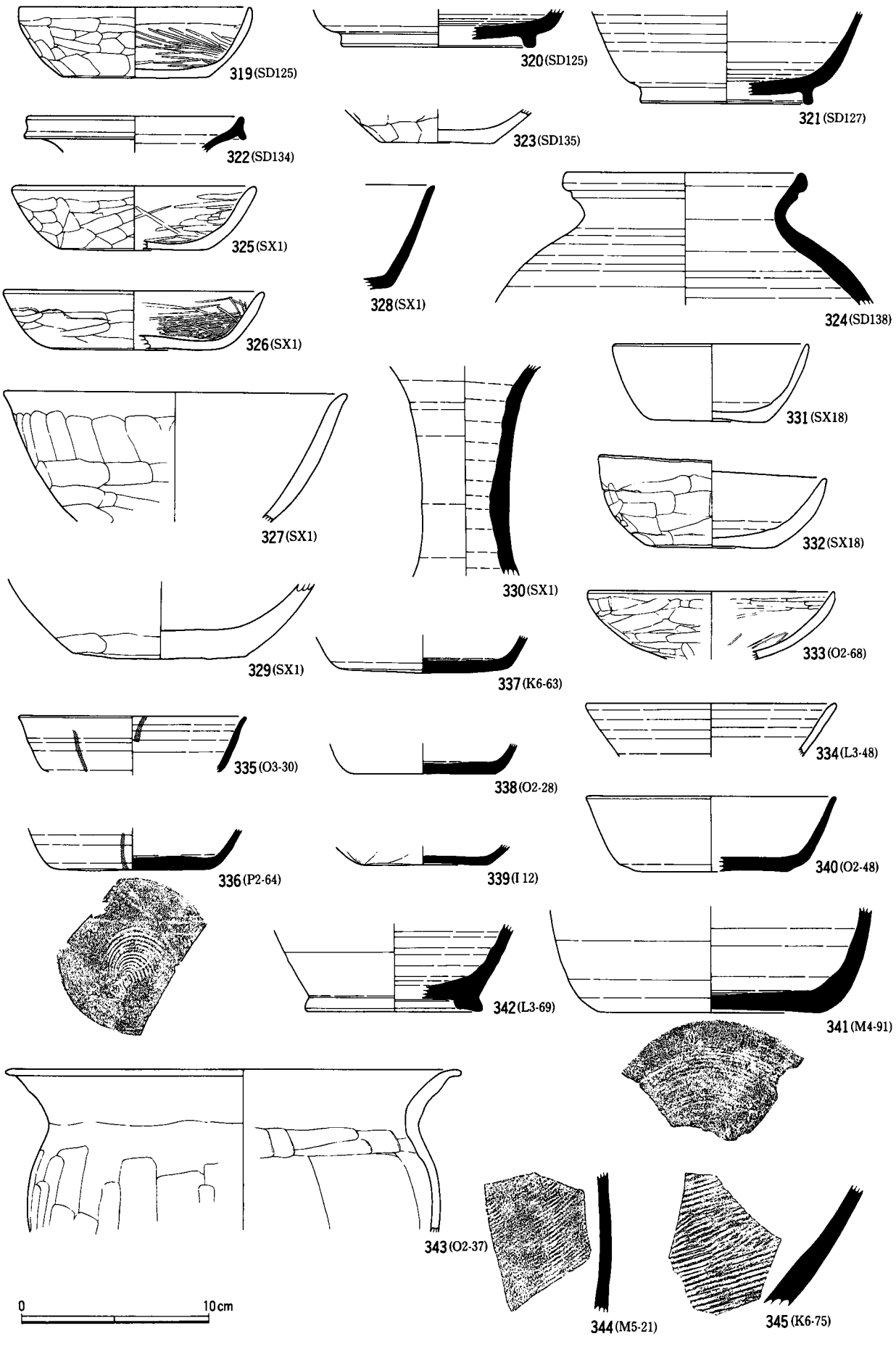
第105図 奈良・平安時代の土器（13）



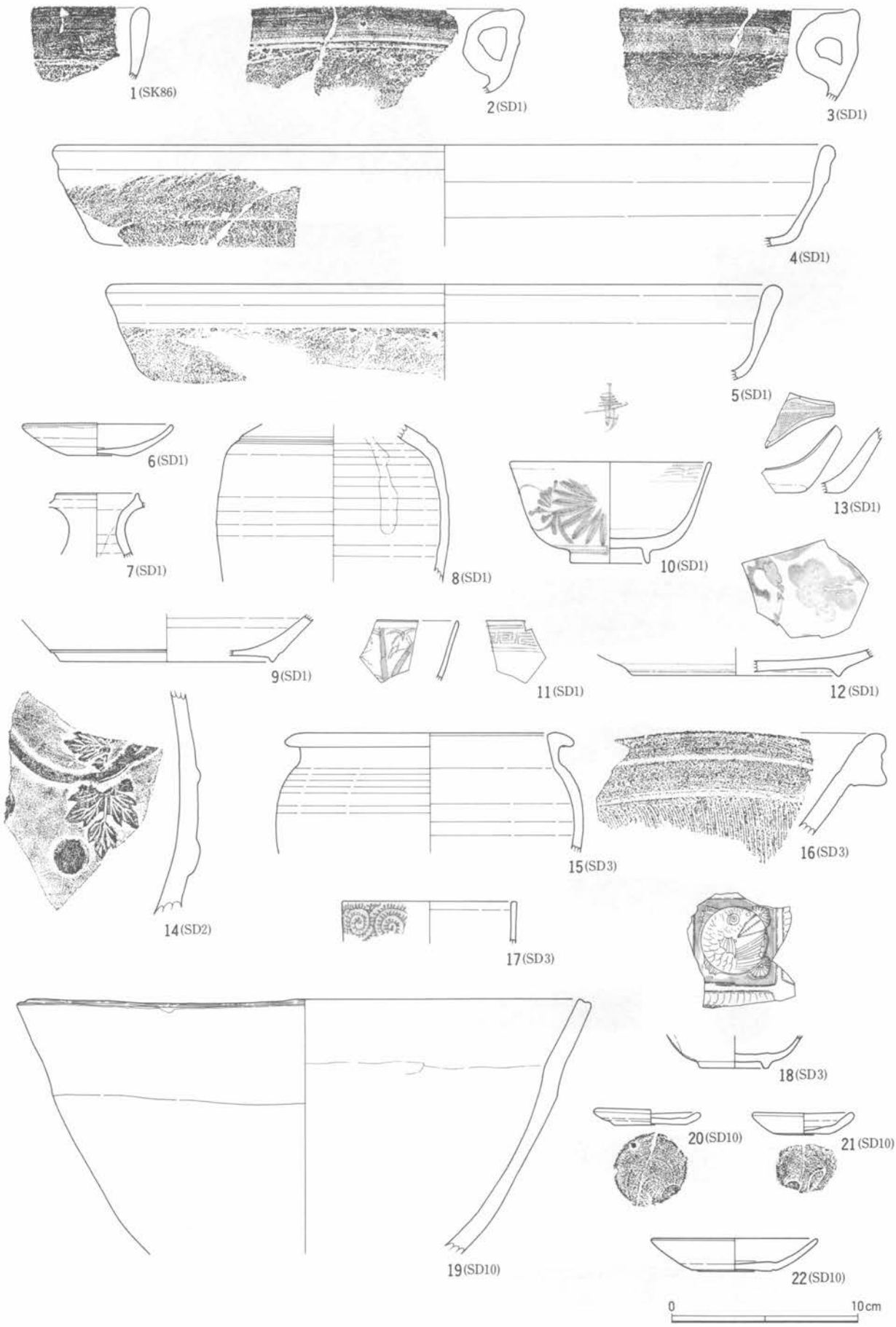
第106図 奈良・平安時代の土器（14）



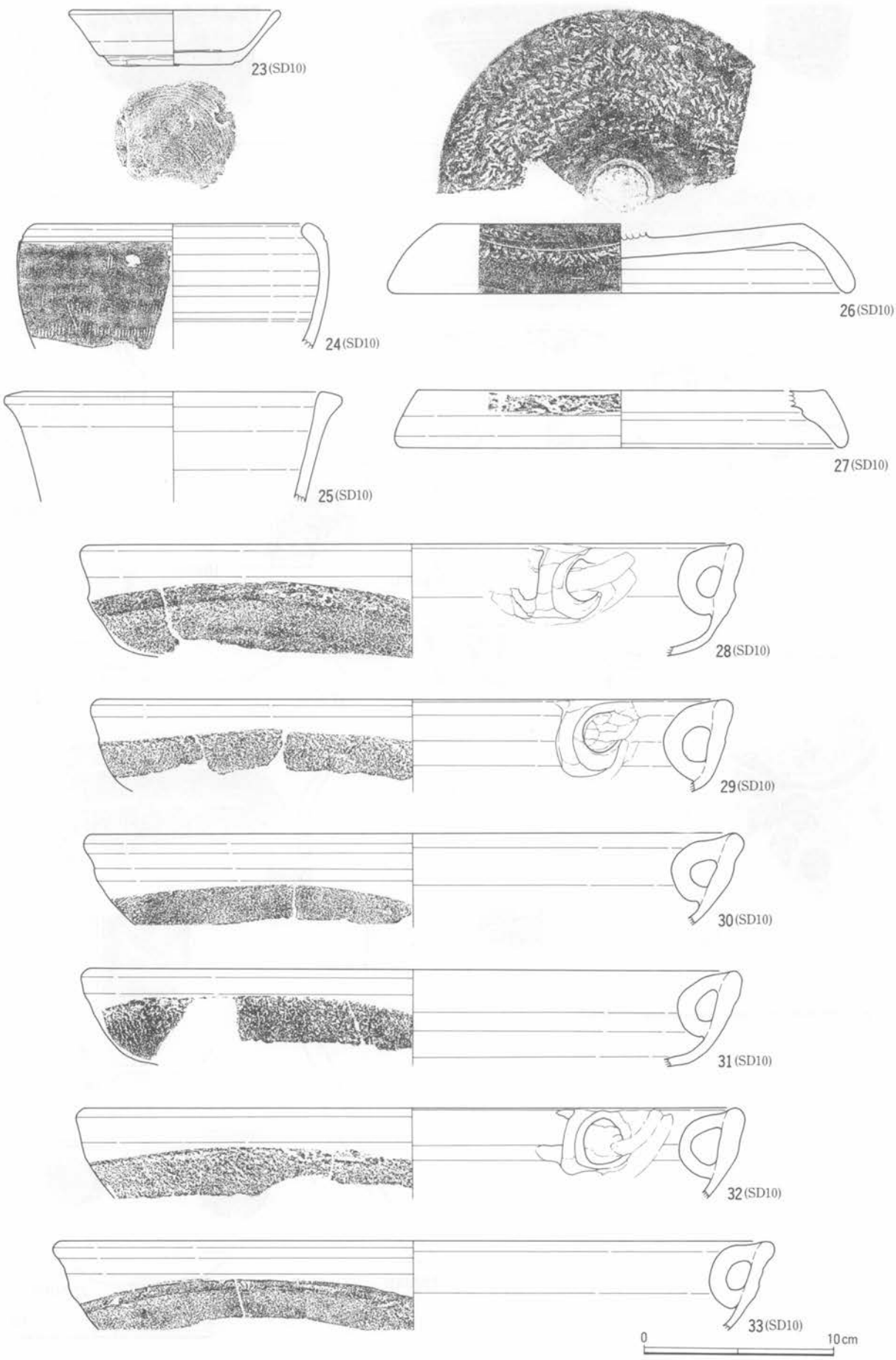
第107図 奈良・平安時代の土器（15）



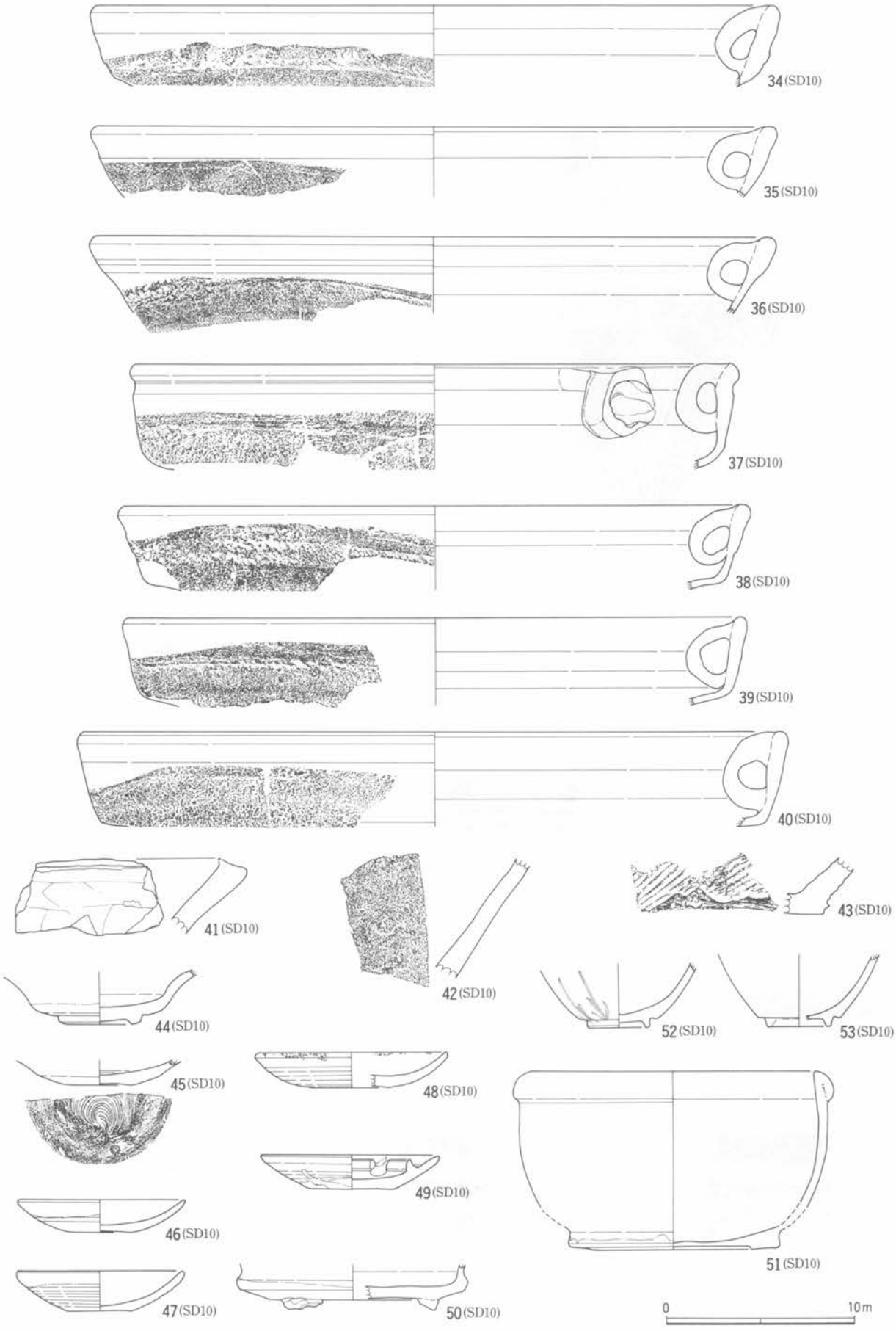
第108図 奈良・平安時代の土器（16）



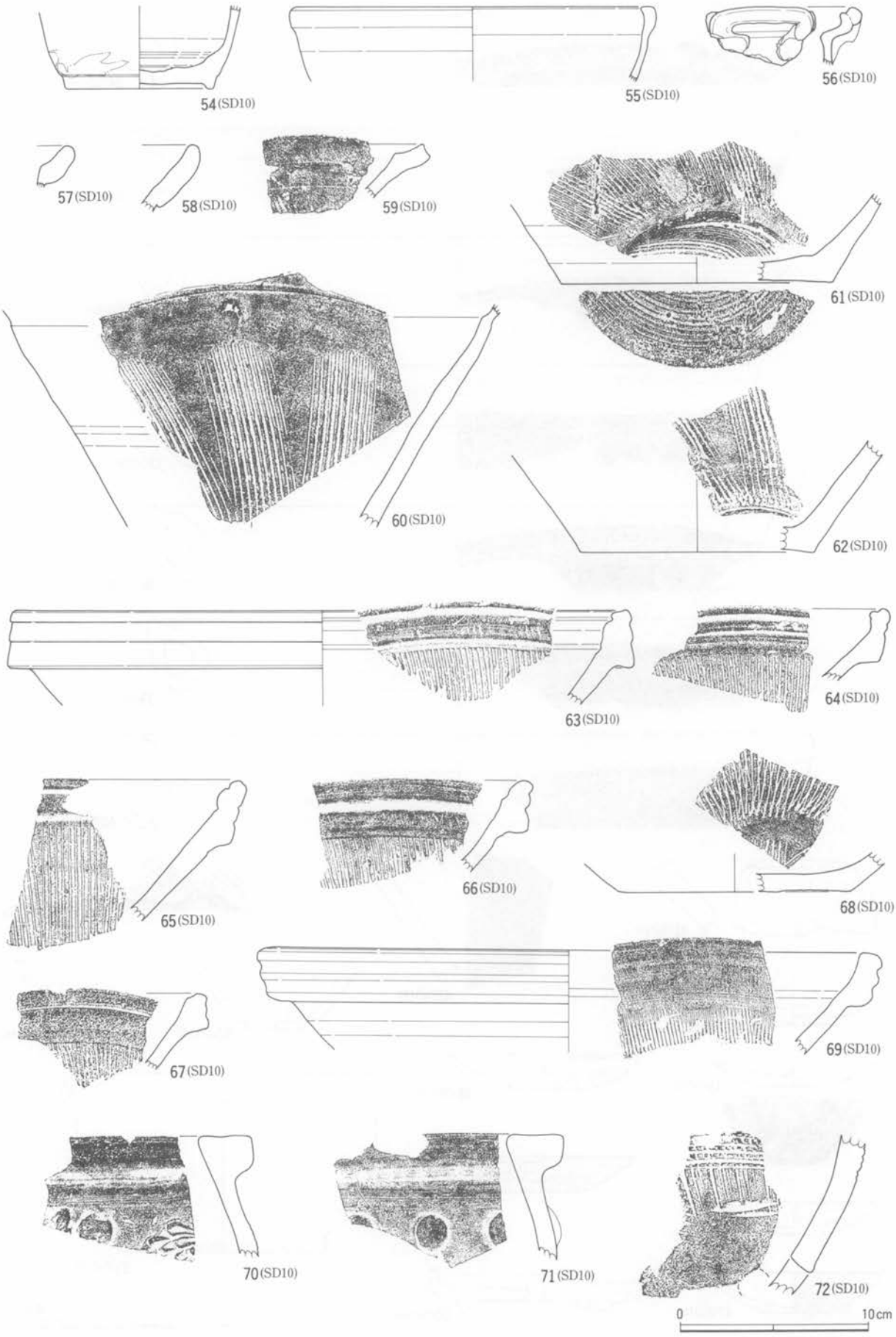
第109図 中・近世の陶磁器（1）



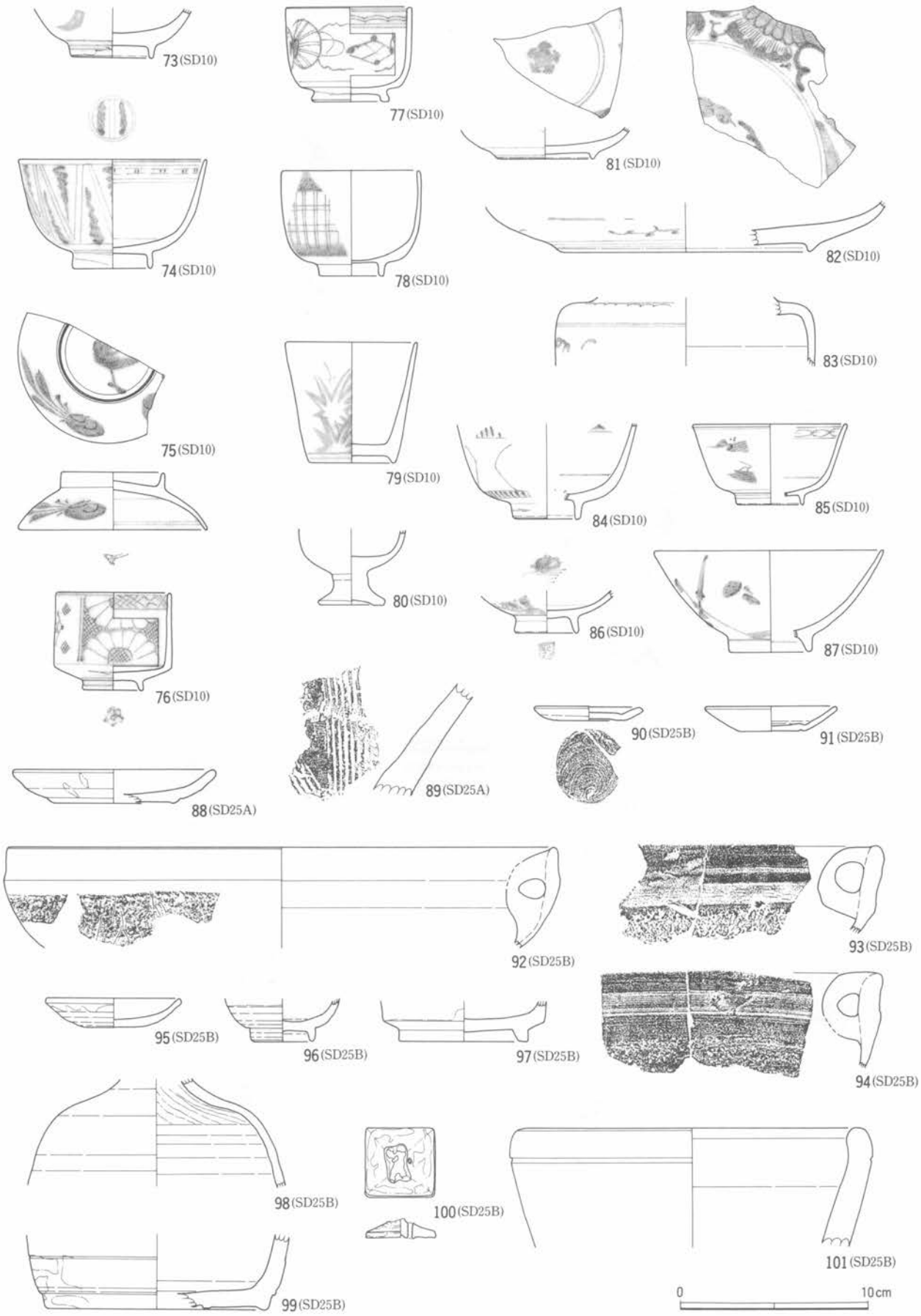
第110図 中・近世の陶磁器（2）



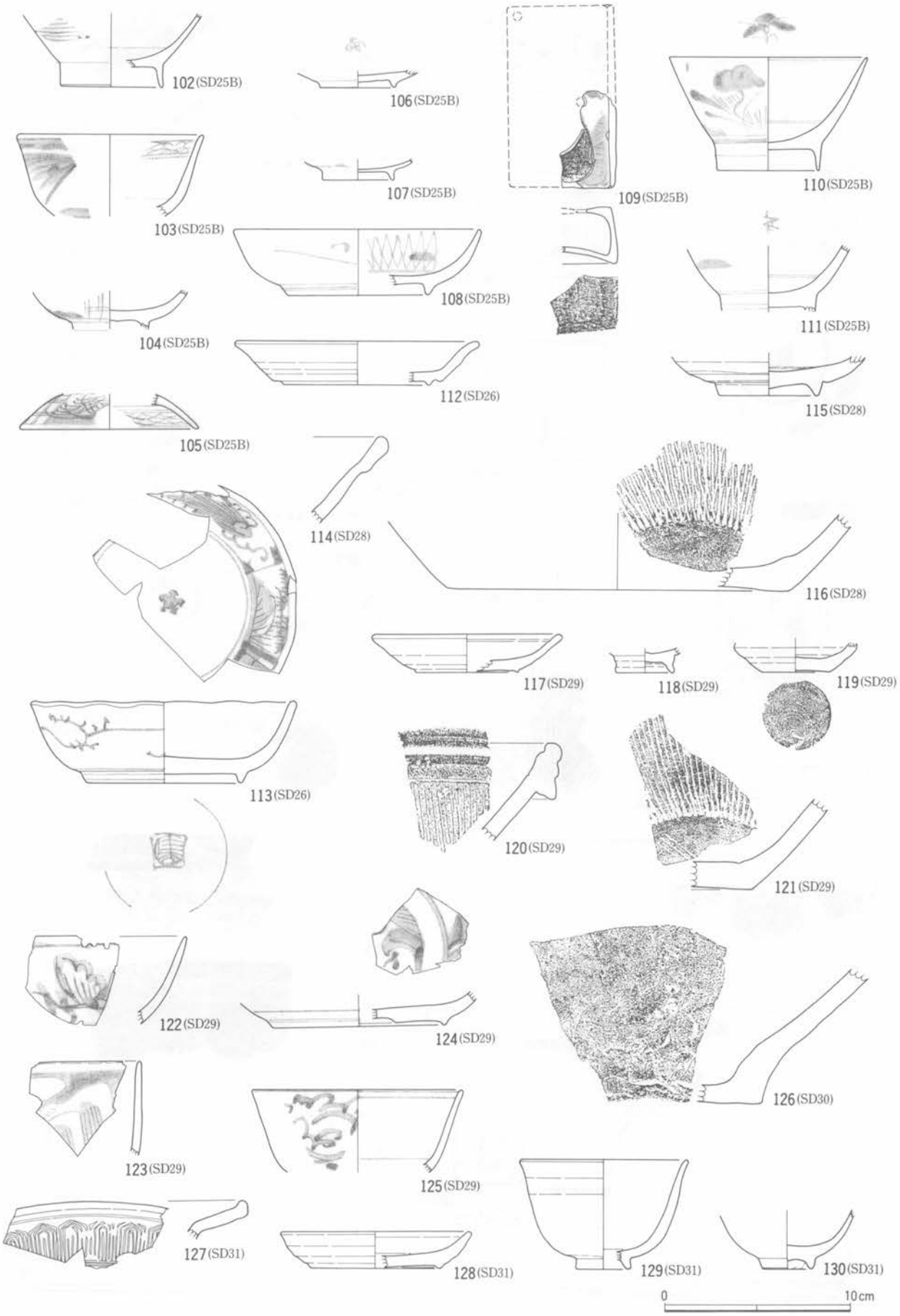
第111図 中・近世の陶磁器（3）



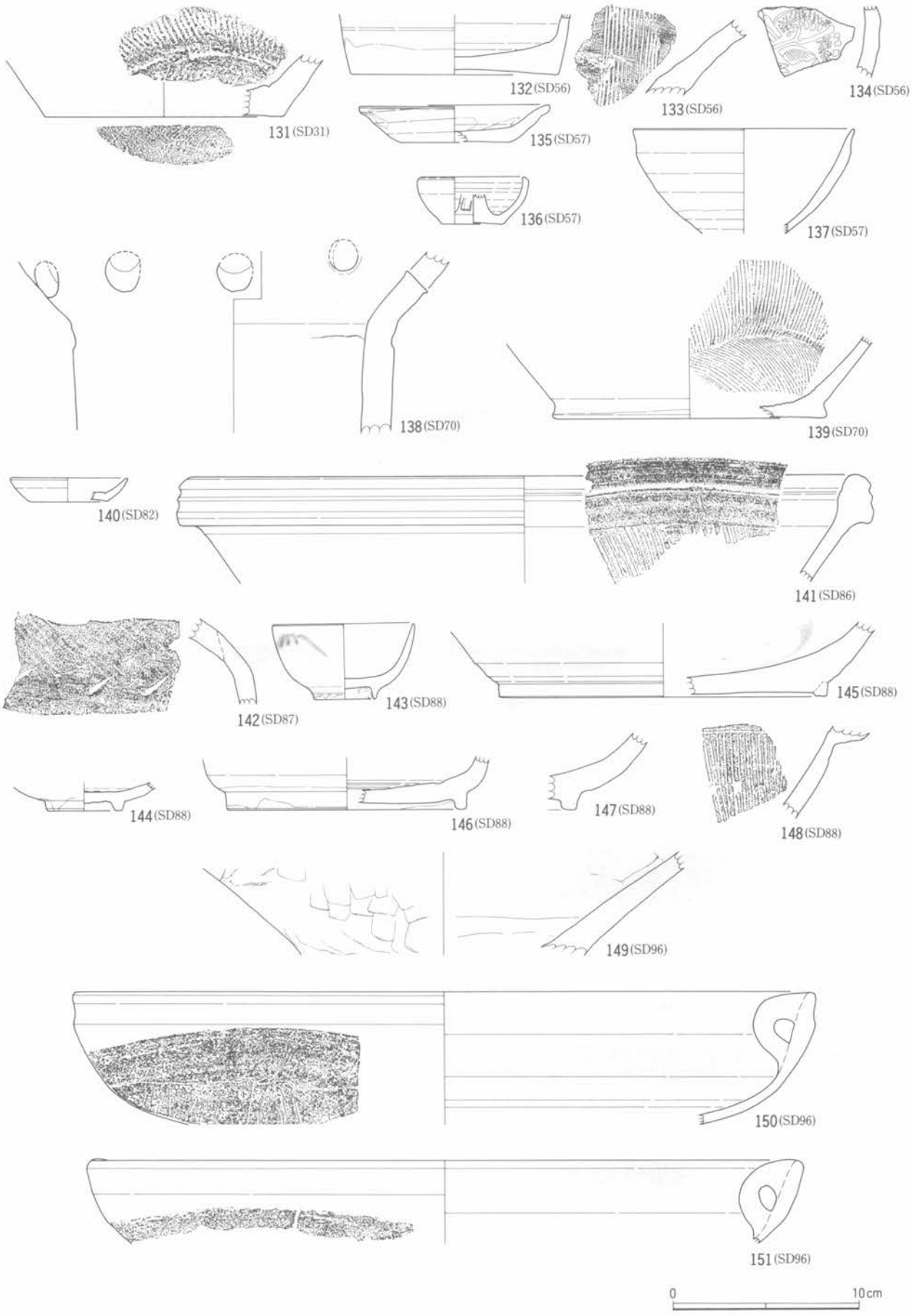
第112図 中・近世の陶磁器（4）



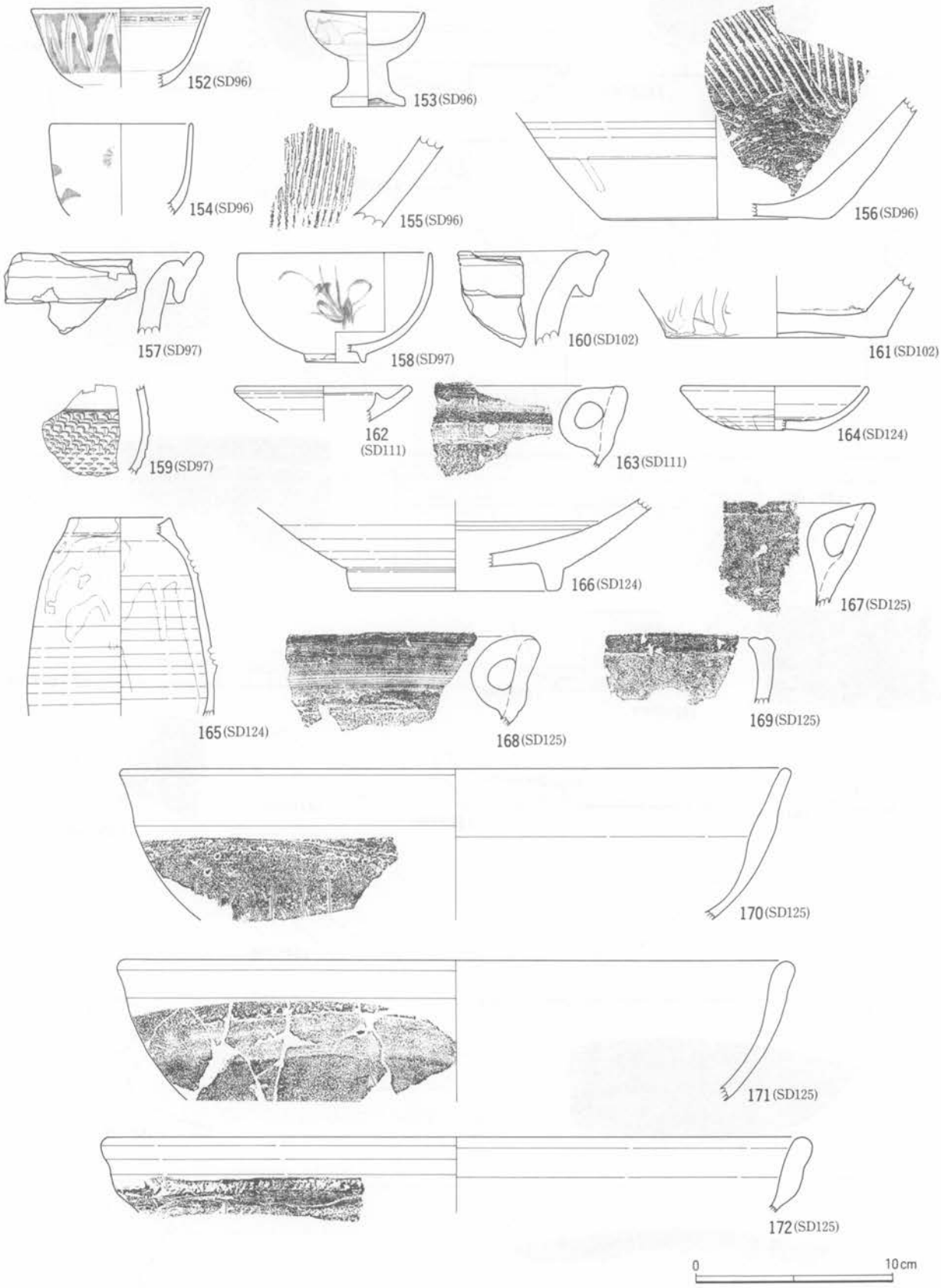
第113図 中・近世の陶磁器（5）



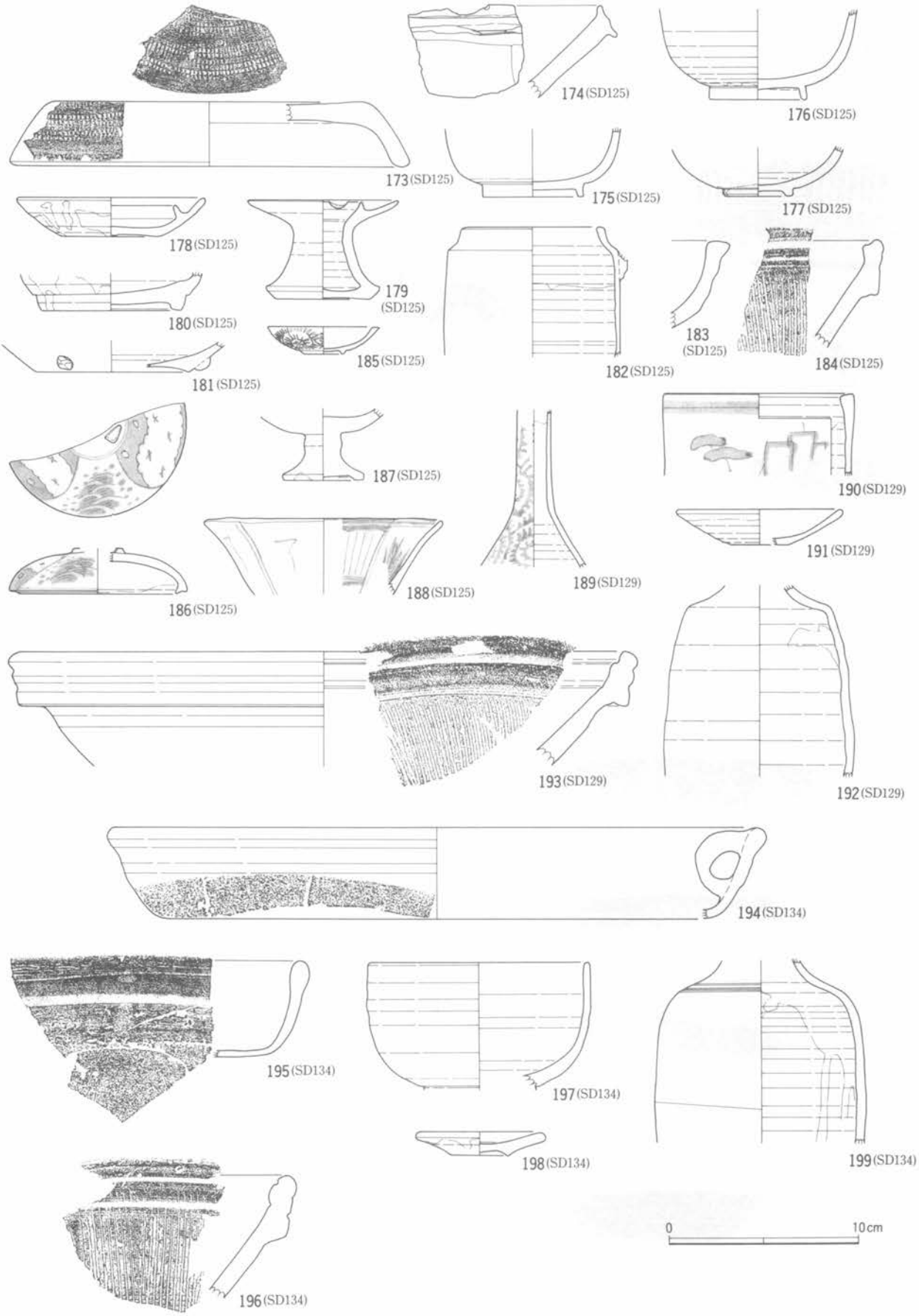
第114図 中・近世の陶磁器（6）



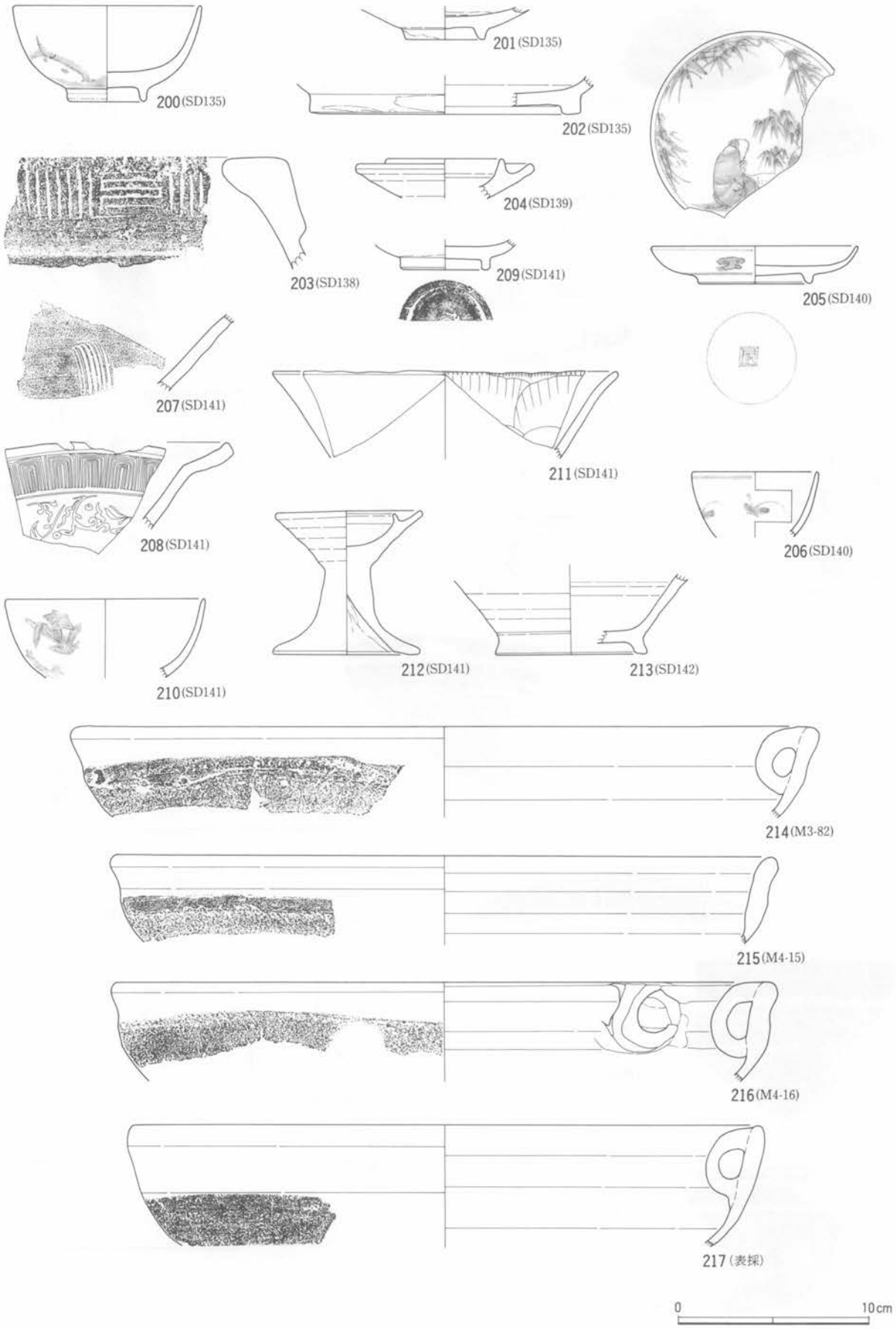
第115図 中・近世の陶磁器（7）



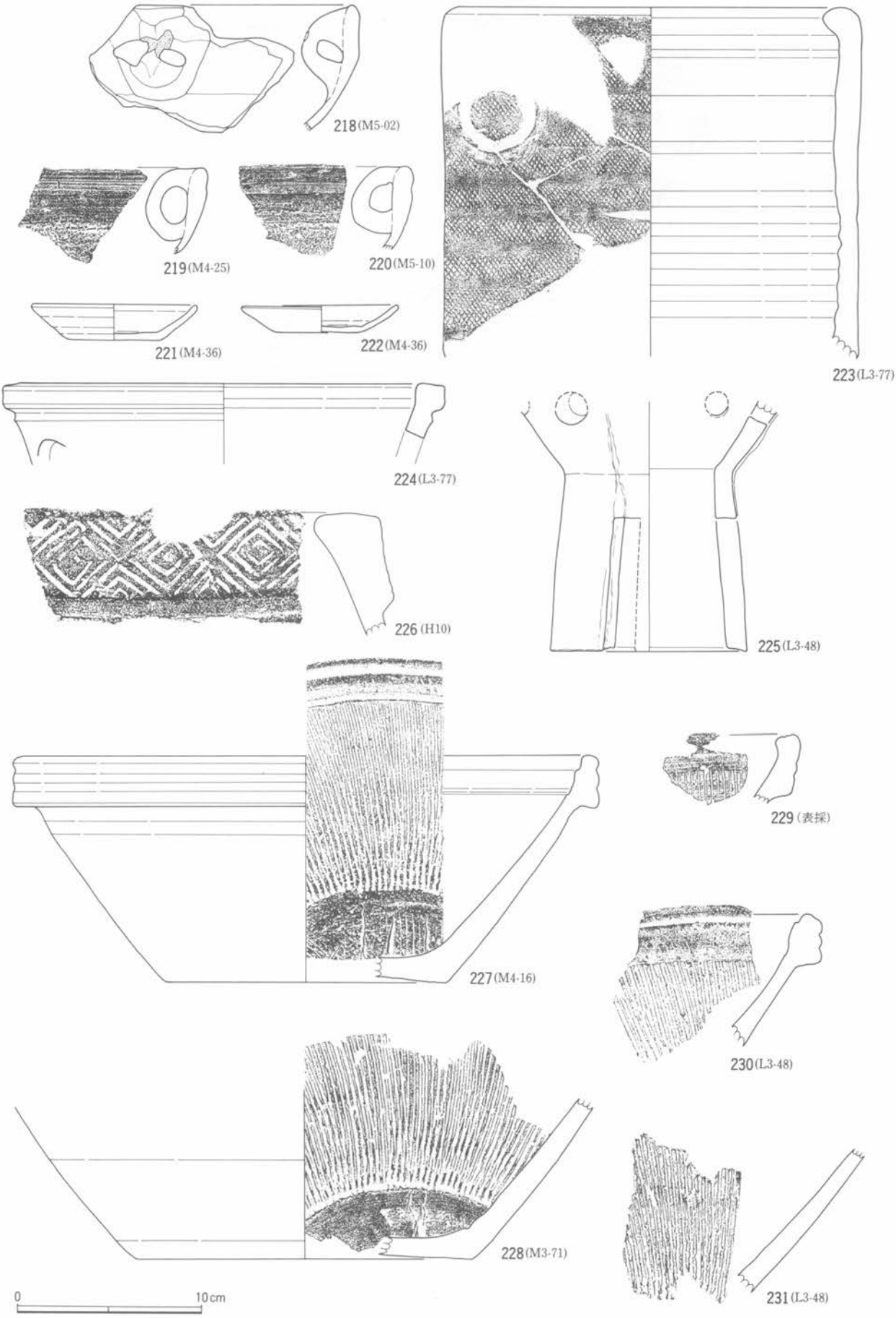
第116図 中・近世の陶磁器（8）



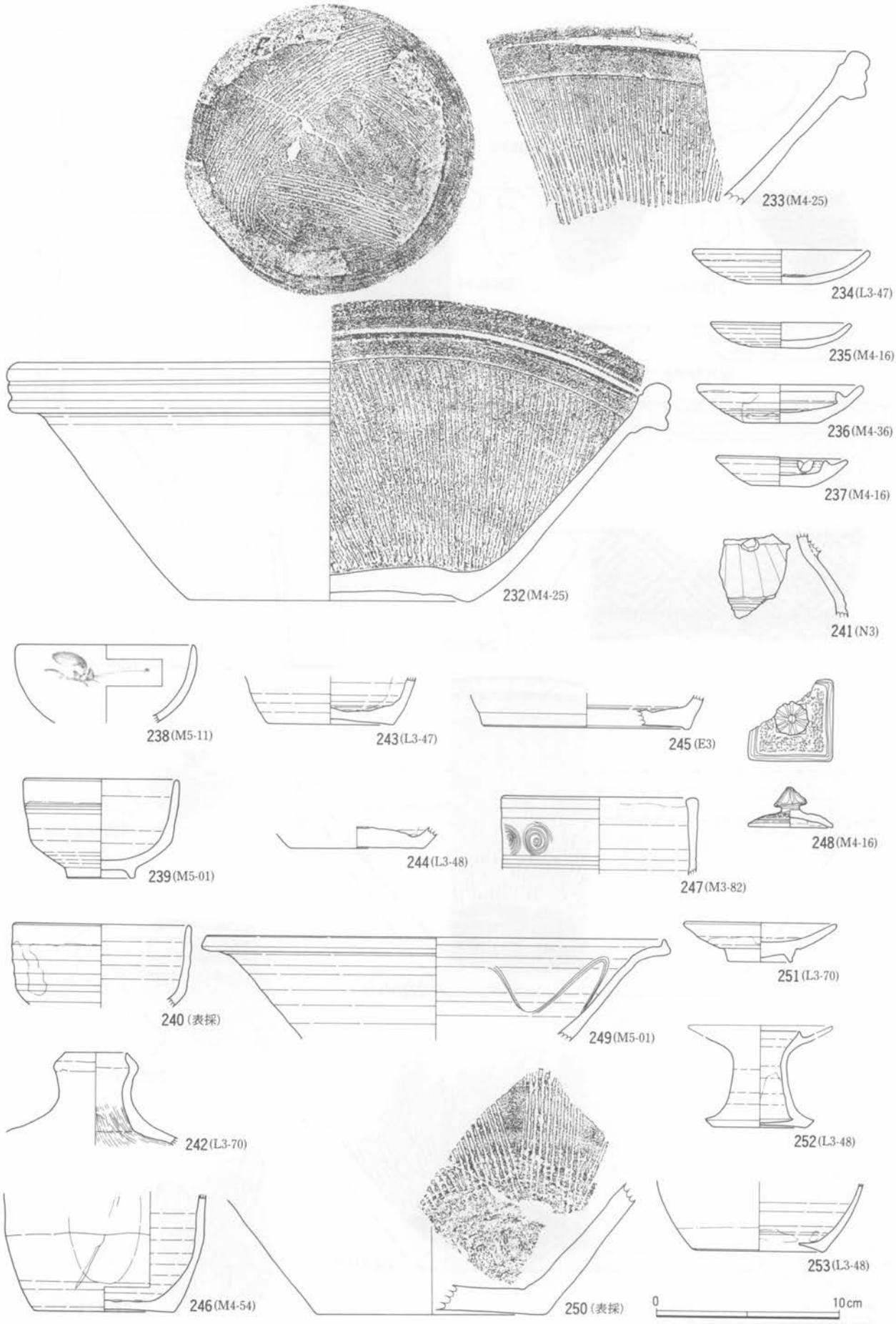
第117図 中・近世の陶磁器（9）



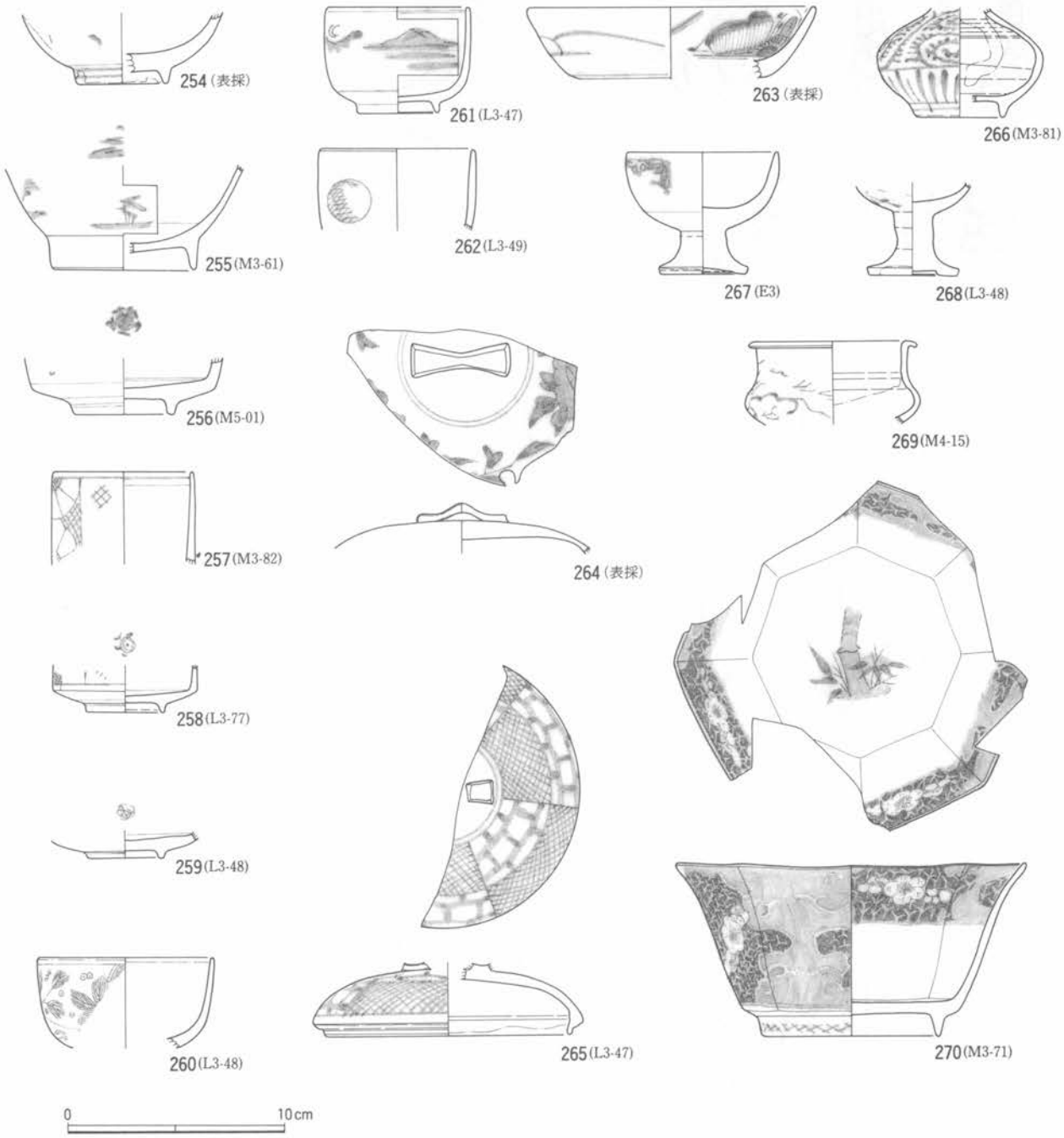
第118図 中・近世の陶磁器（10）



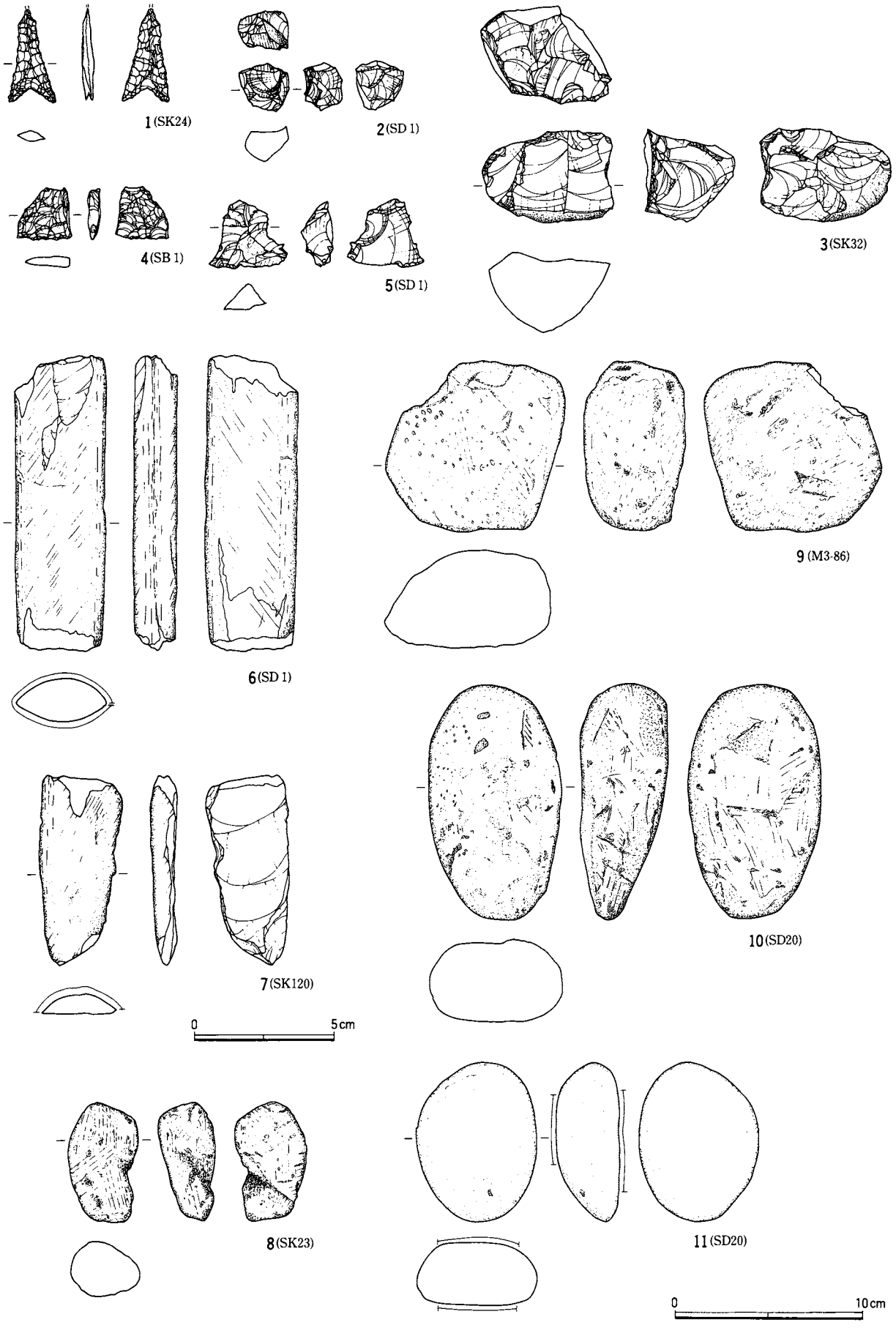
第119図 中・近世の陶磁器（11）



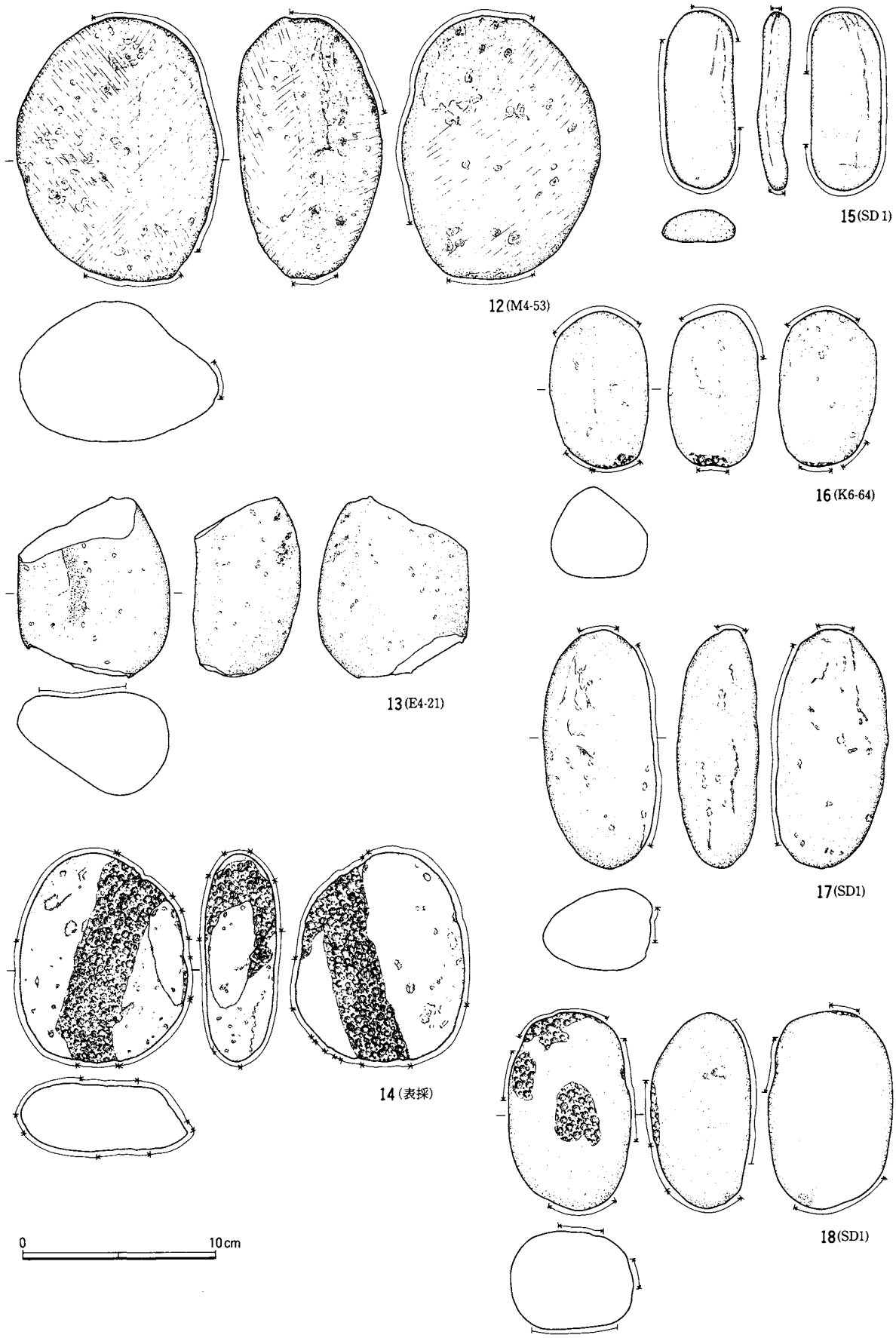
第120図 中・近世の陶磁器（12）



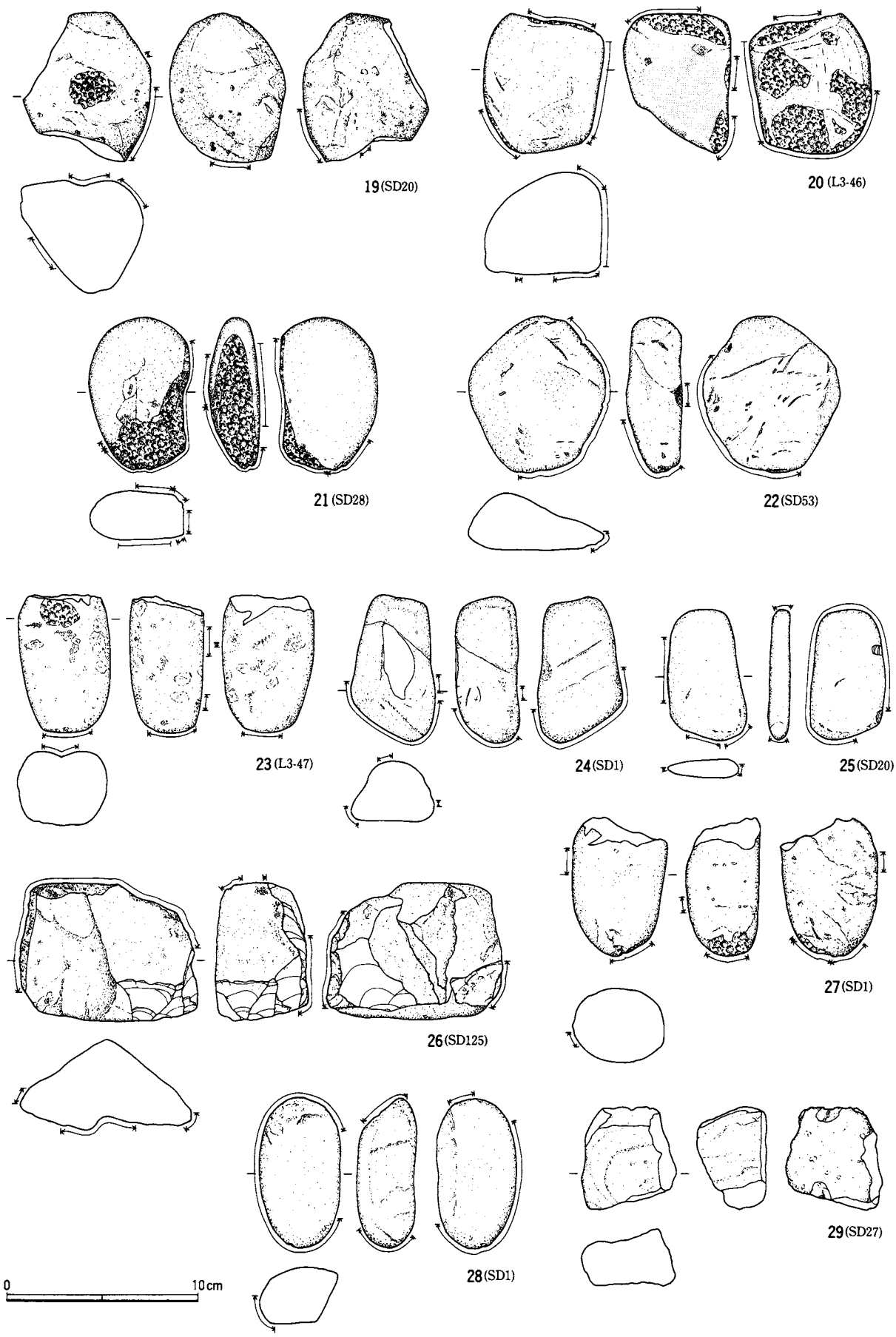
第121図 中・近世の陶磁器（13）


1(SK24)
2(SD 1)
3(SK32)
4(SB 1)
5(SD 1)
6(SD 1)
9(M3-86)
7(SK120)
10(SD20)
0
5cm
8(SK23)
11(SD20)
0
10cm

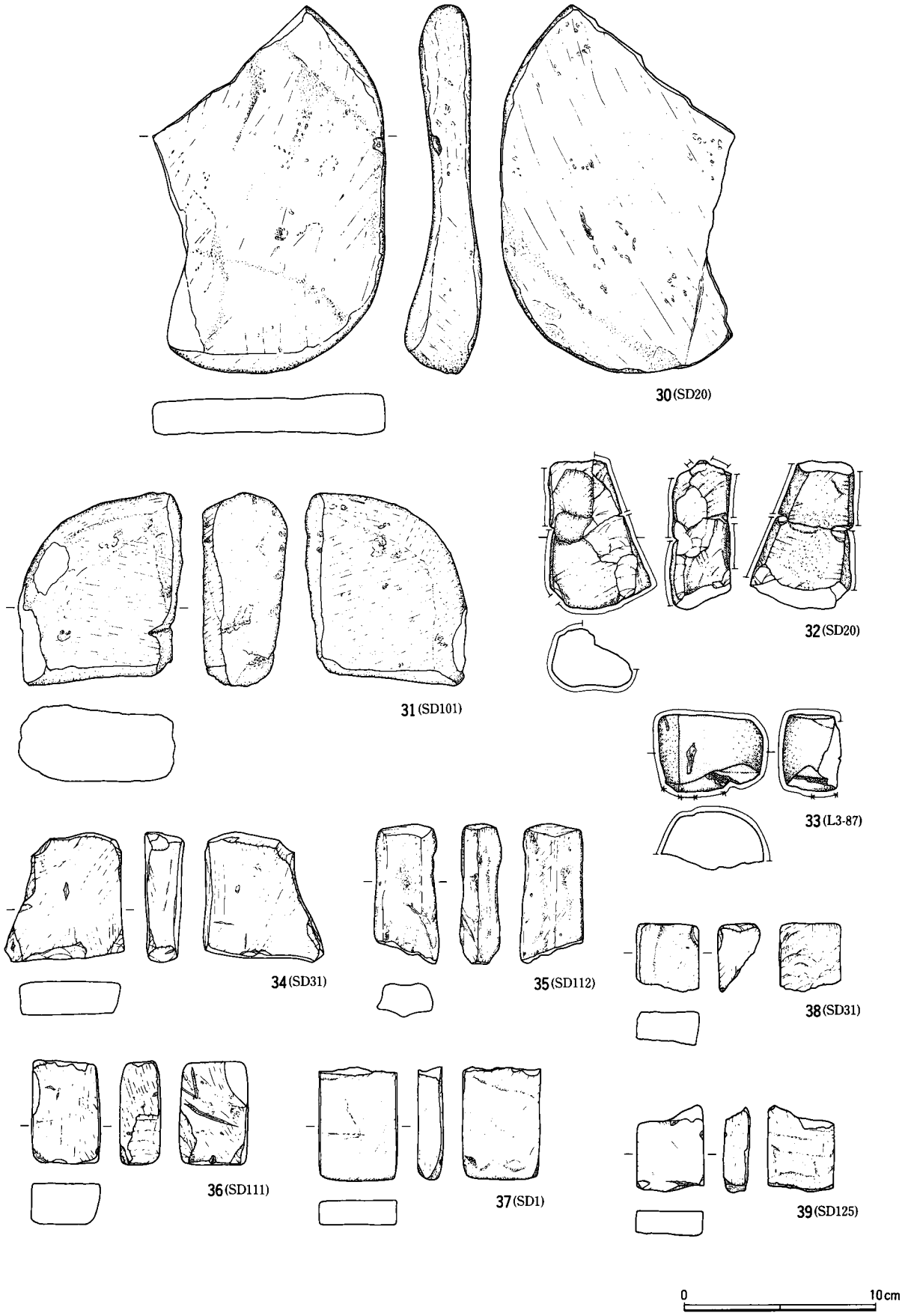
第122図 石器（1）



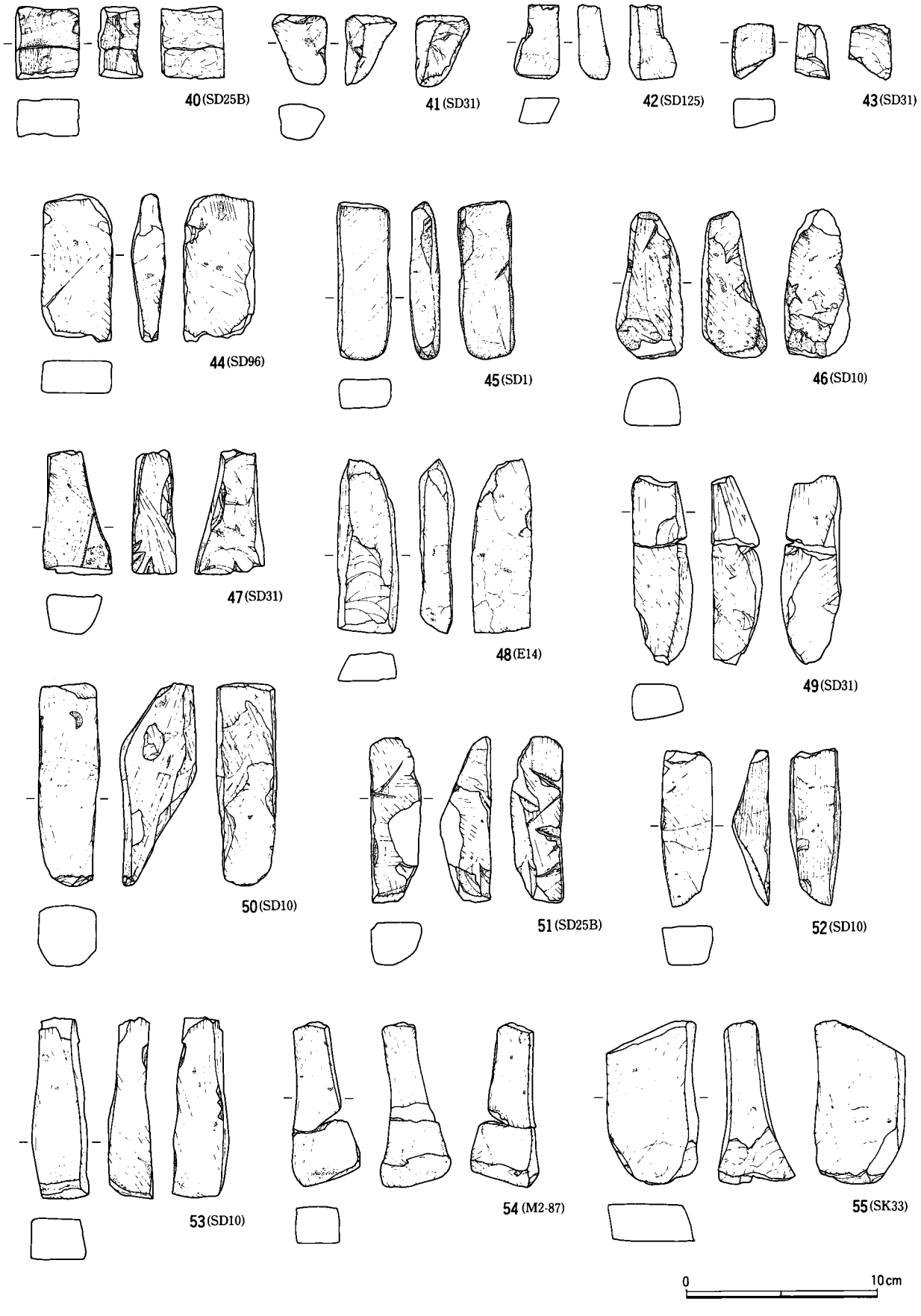
第123図 石器（2）


19(SD20)
20(L3-46)
21(SD28)
22(SD53)
23(L3-47)
24(SD1)
25(SD20)
26(SD125)
27(SD1)
28(SD1)
29(SD27)
0
10cm

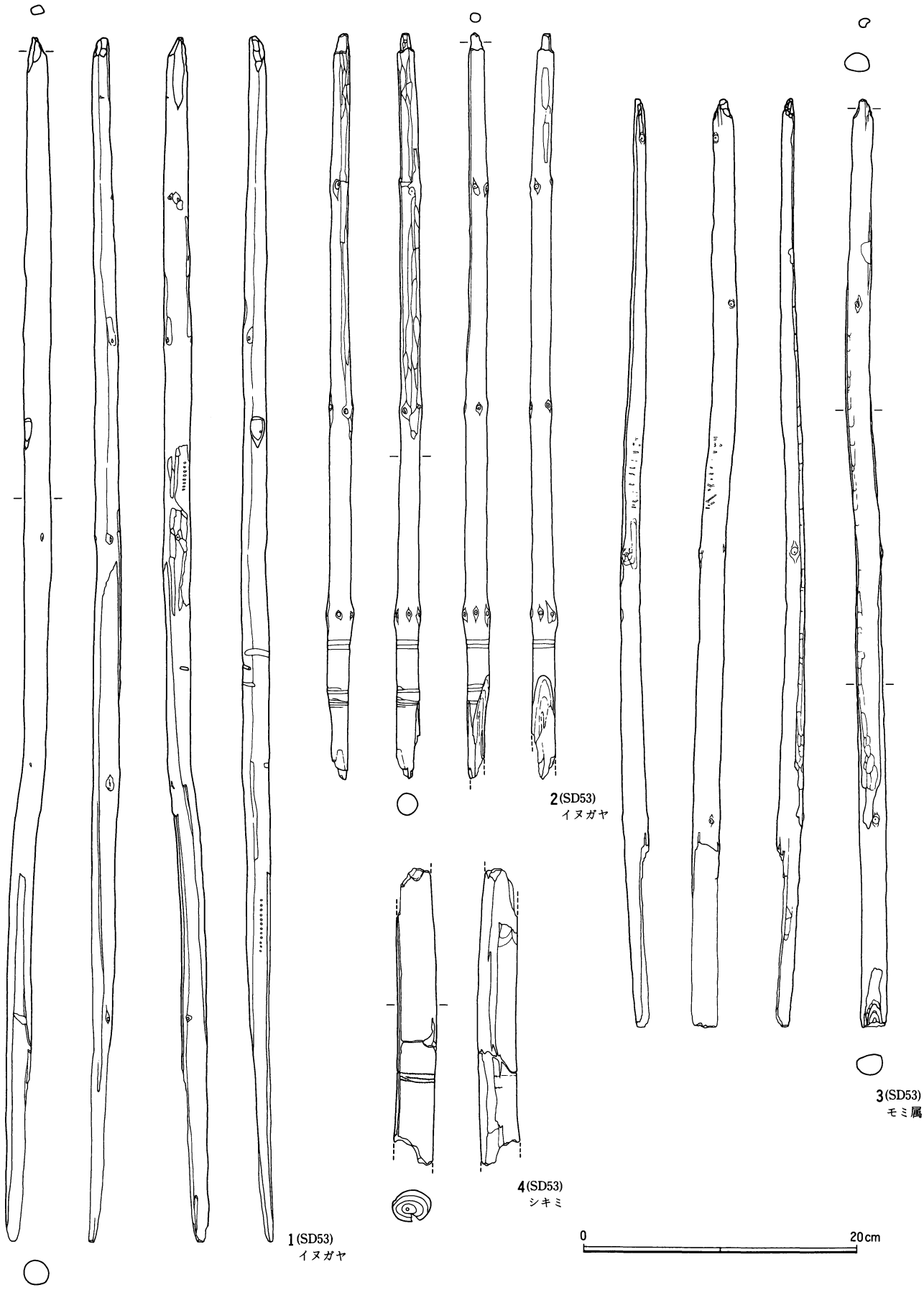
第124図 石器（3）


30(SD20)
31(SD101)
32(SD20)
33(L3-87)
34(SD31)
35(SD112)
36(SD111)
37(SD1)
38(SD31)
39(SD125)
0
10cm

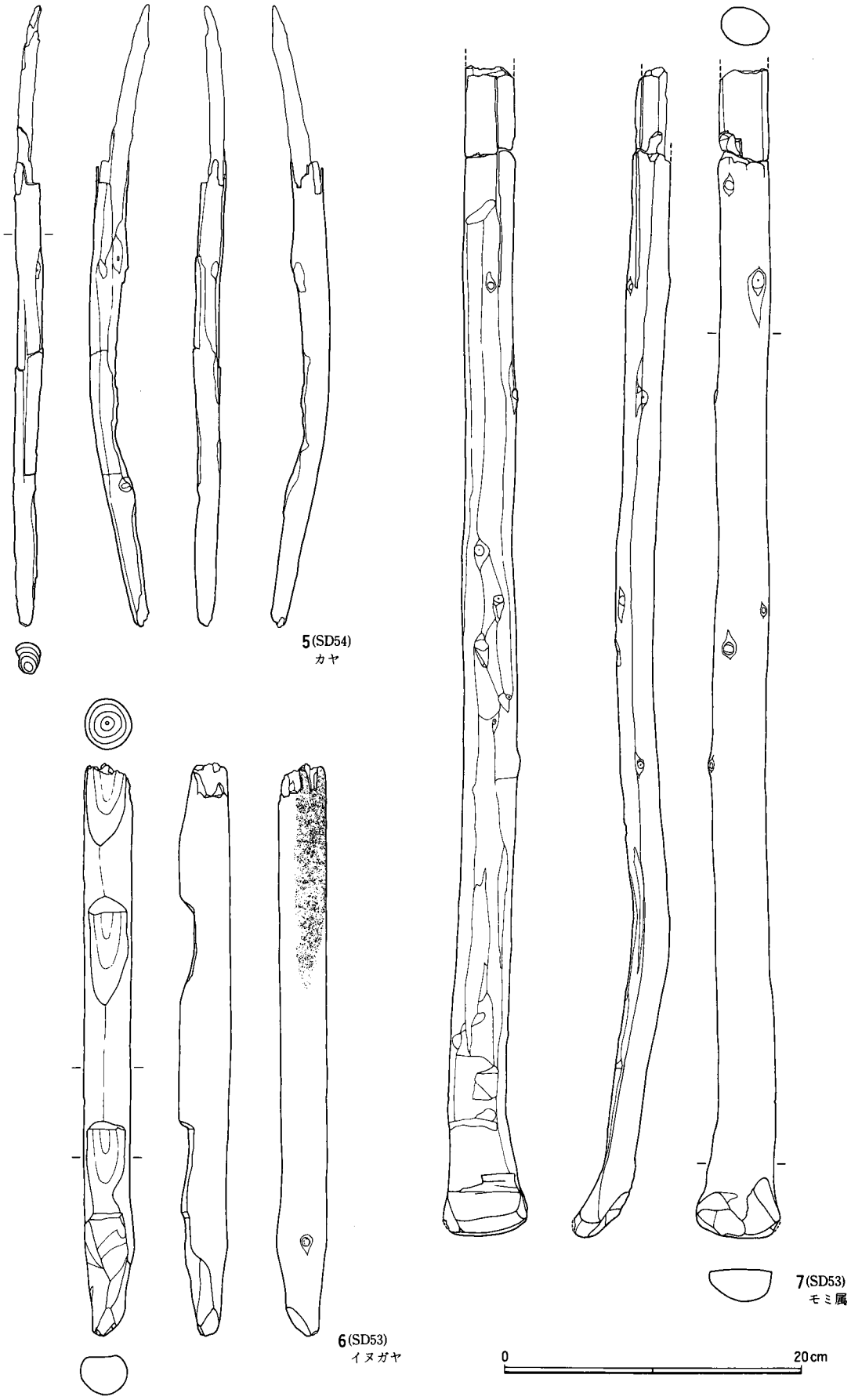
第125図 石器（4）


40(SD25B)
41(SD31)
42(SD125)
43(SD31)
44(SD96)
45(SD1)
46(SD10)
47(SD31)
48(E14)
49(SD31)
50(SD10)
51(SD25B)
52(SD10)
53(SD10)
54(M2-87)
55(SK33)
0
10cm

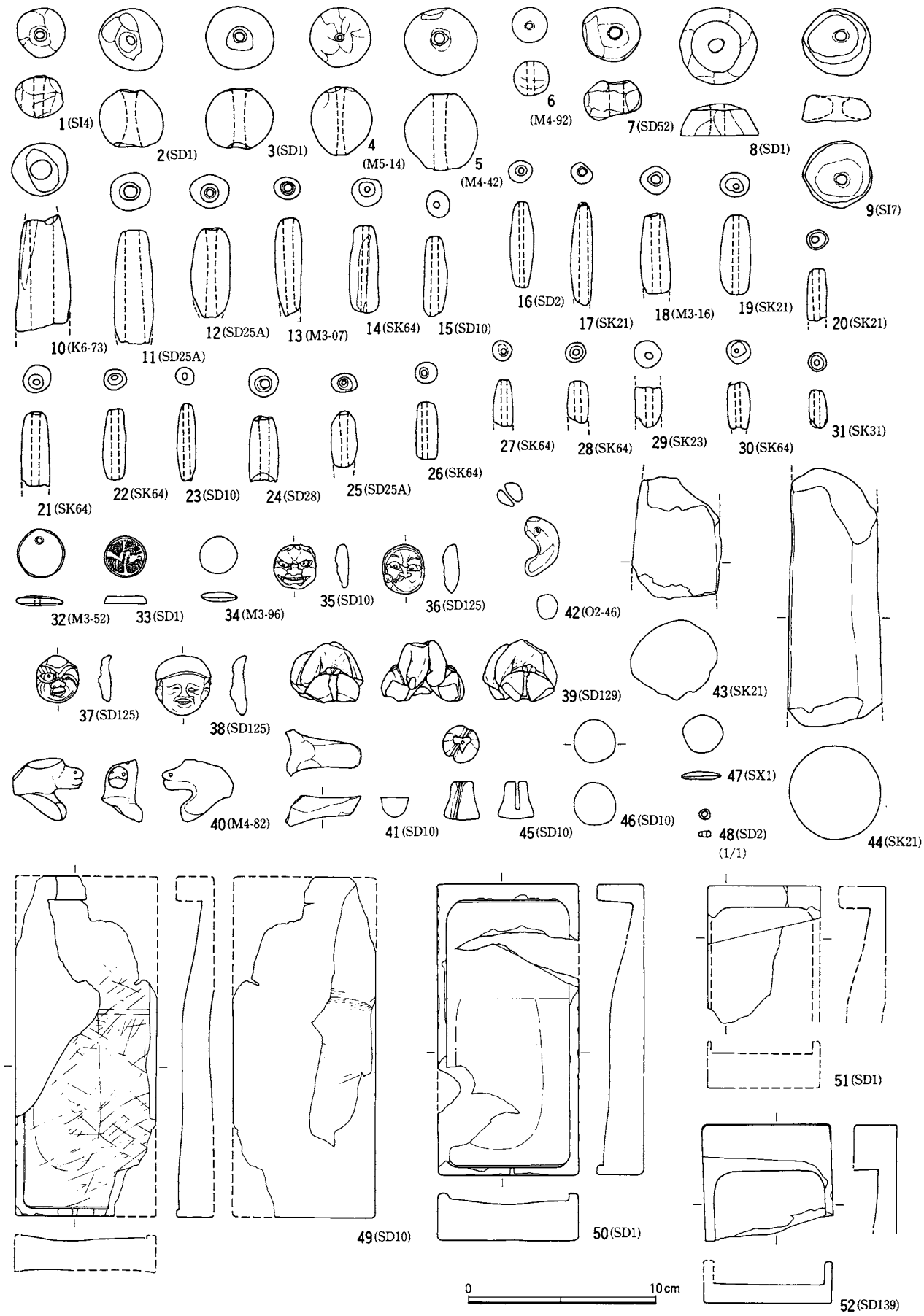
第126図 石器（5）



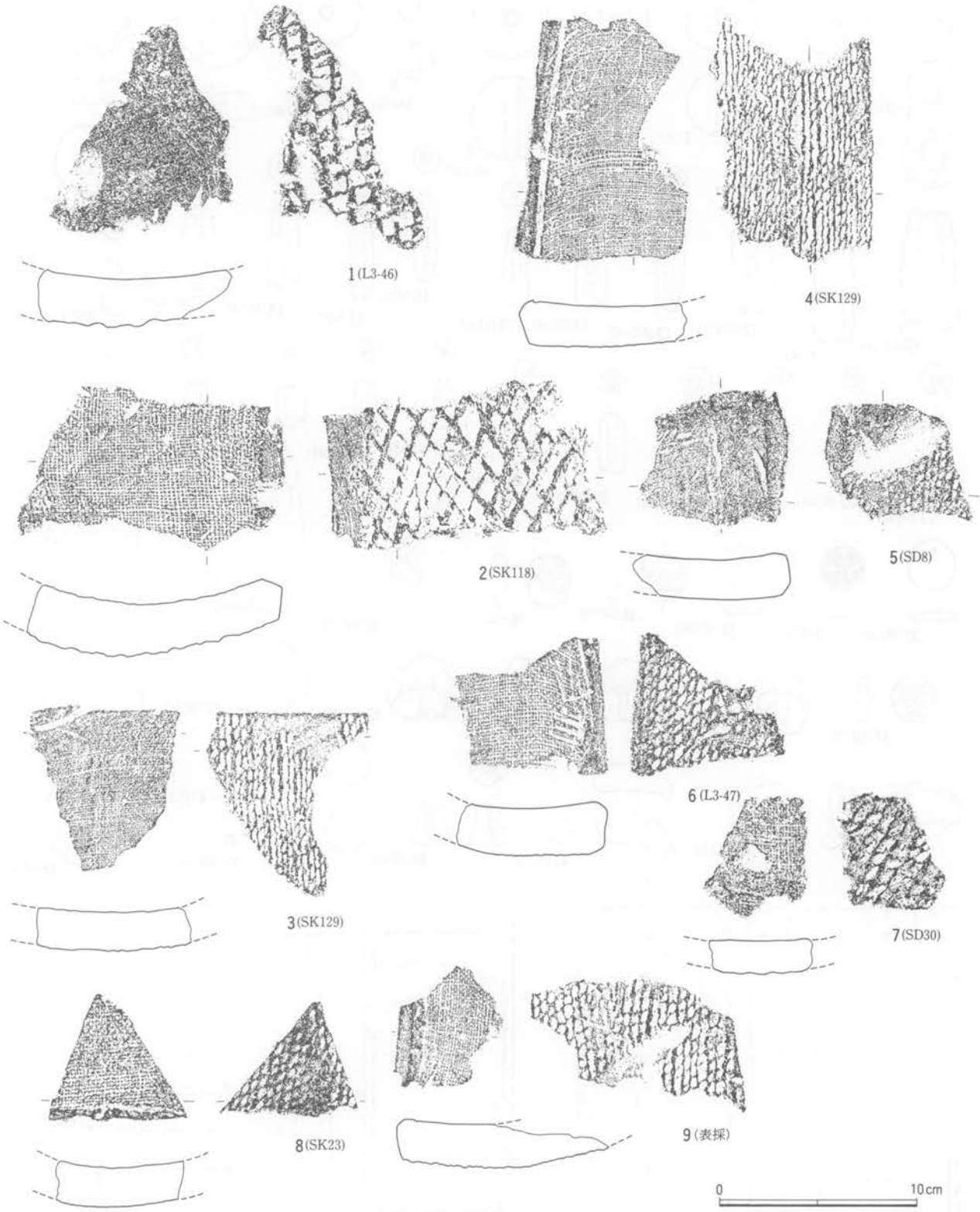
第127図 木製品（1）



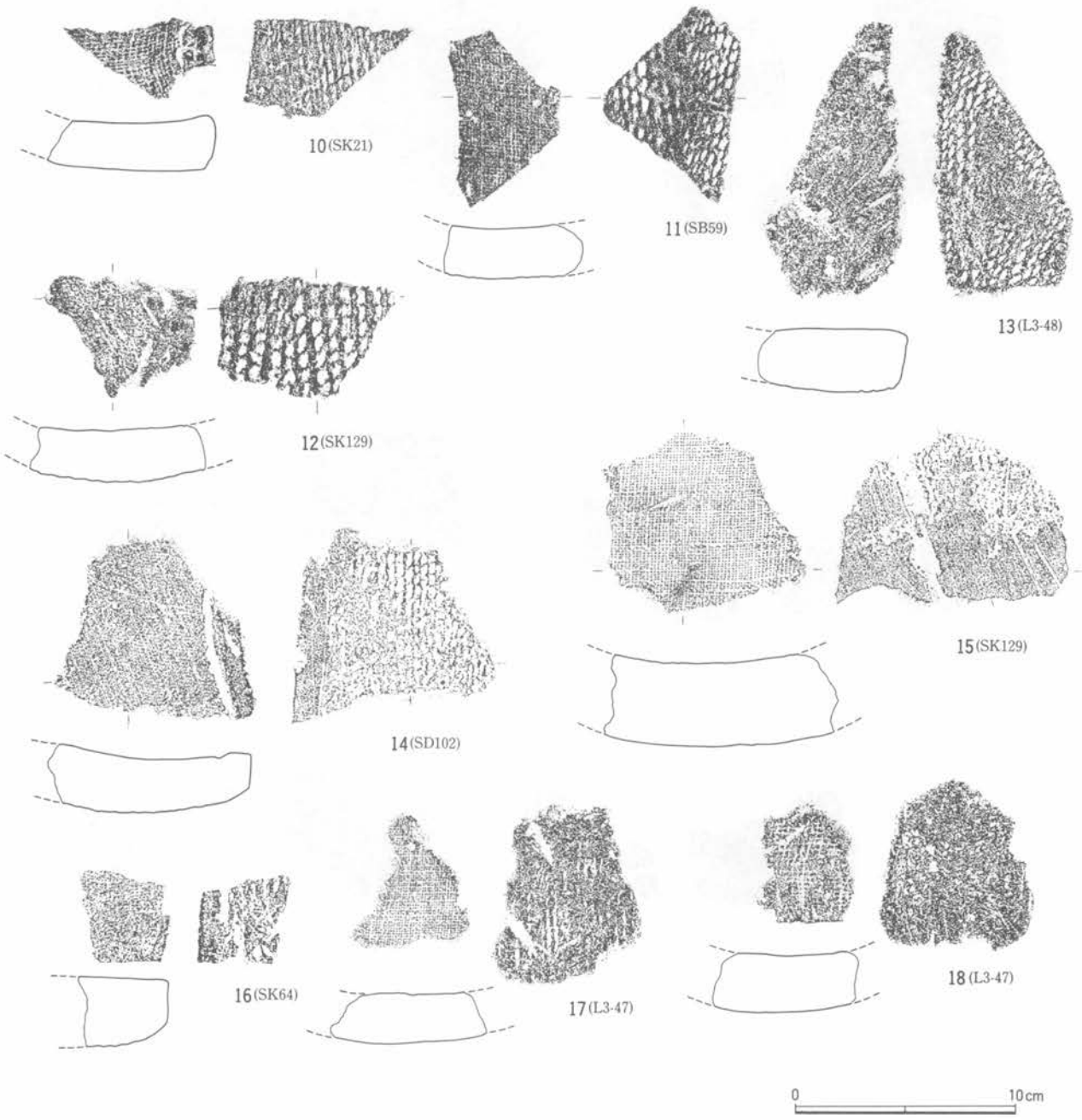
第128図 木製品（2）



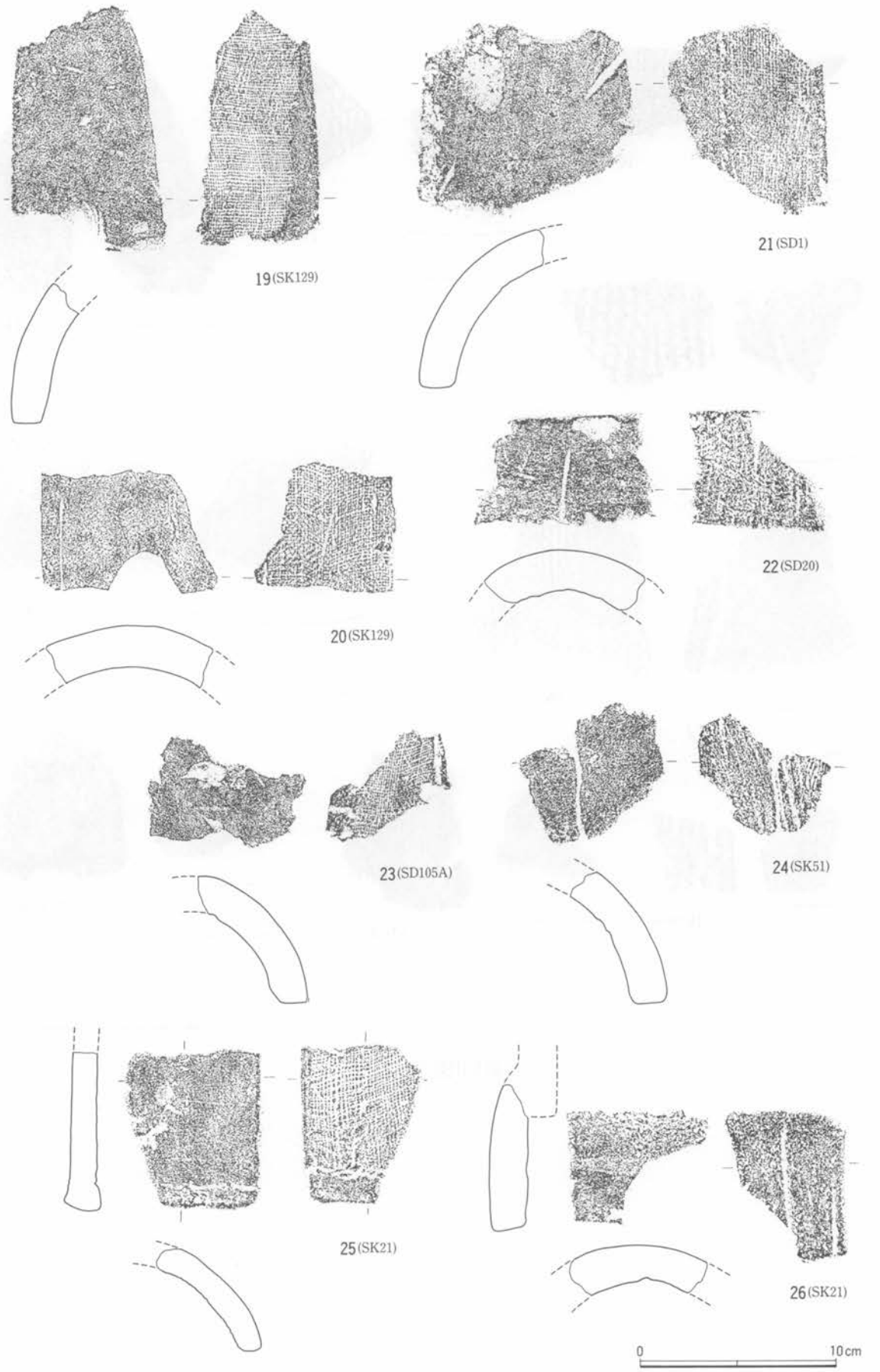
第129図 土製品・石製品


1(L3-46)
4(SK129)
2(SK118)
5(SD8)
6(L3-47)
3(SK129)
7(SD30)
8(SK23)
9(表採)
0
10cm

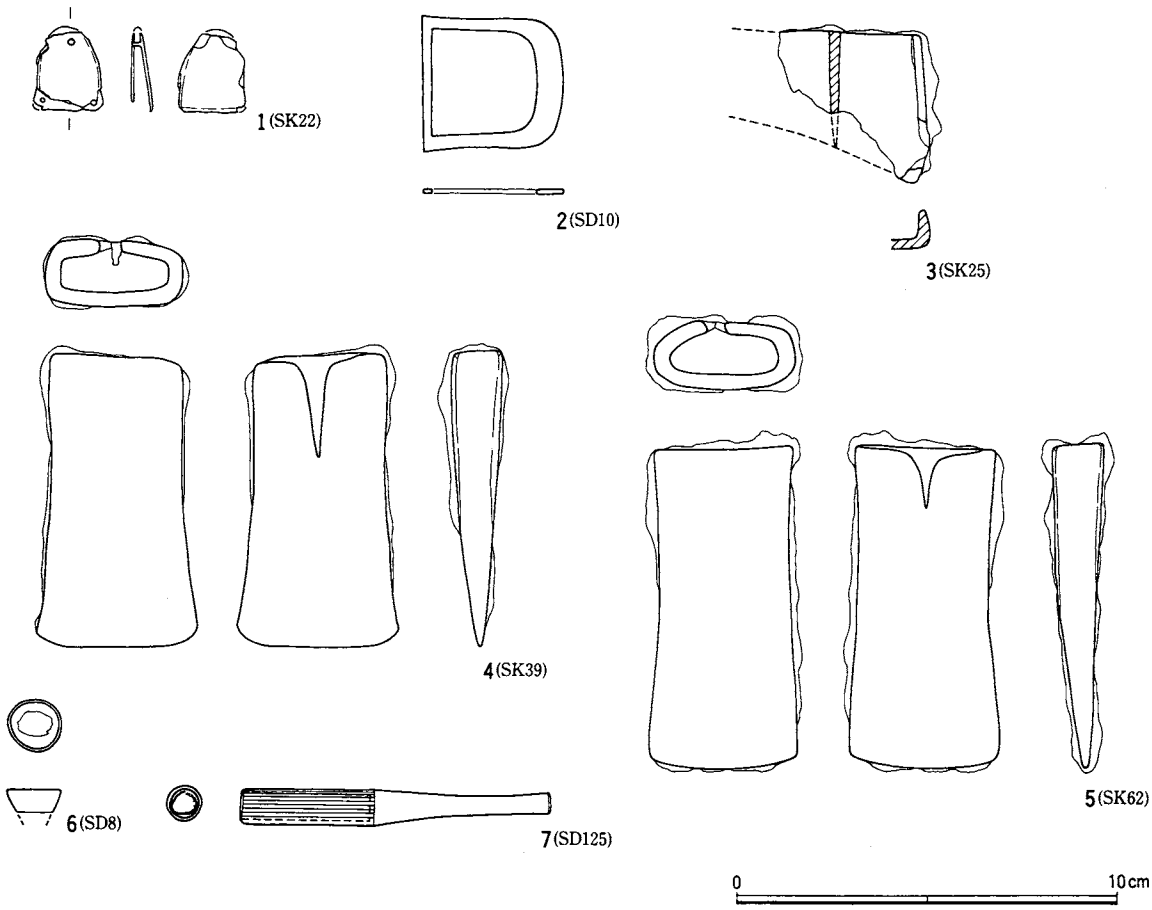
第130図 瓦（1）


10(SK21)
11(SB59)
13(L3-48)
12(SK129)
15(SK129)
14(SD102)
16(SK64)
17(L3-47)
18(L3-47)
0
10cm

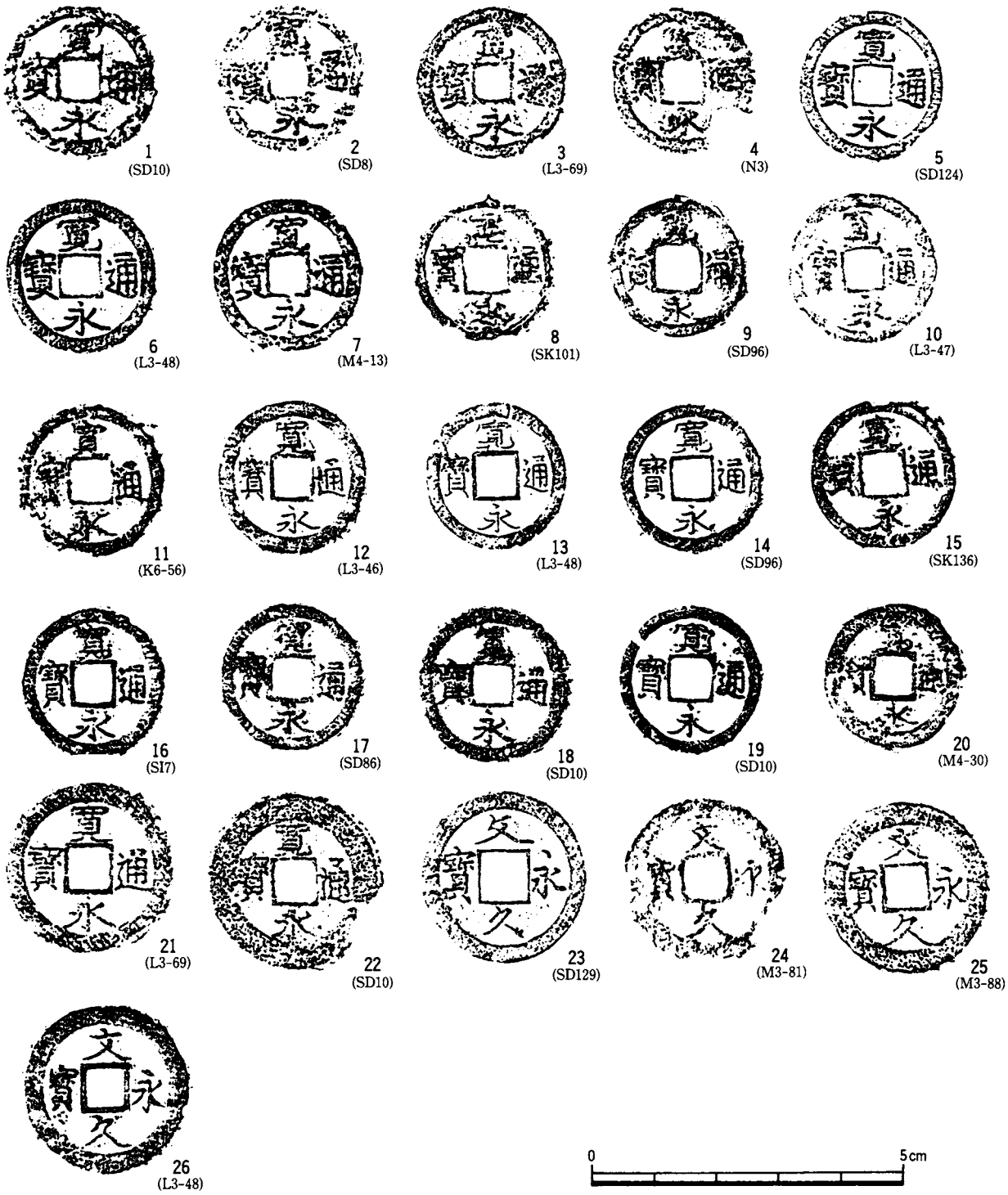
第131図 瓦（2）


19(SK129)
21(SD1)
20(SK129)
22(SD20)
23(SD105A)
24(SK51)
25(SK21)
26(SK21)
0
10cm

第132図 瓦（3）



第133図 金属製品


1 (SD10)
2 (SD8)
3 (L3-69)
4 (N3)
5 (SD124)
6 (L3-48)
7 (M4-13)
8 (SK101)
9 (SD96)
10 (L3-47)
11 (K6-56)
12 (L3-46)
13 (L3-48)
14 (SD96)
15 (SK136)
16 (SI7)
17 (SD86)
18 (SD10)
19 (SD10)
20 (M4-30)
21 (L3-69)
22 (SD10)
23 (SD129)
24 (M3-81)
25 (M3-88)
26 (L3-48)
0
5cm

第134図 銭貨

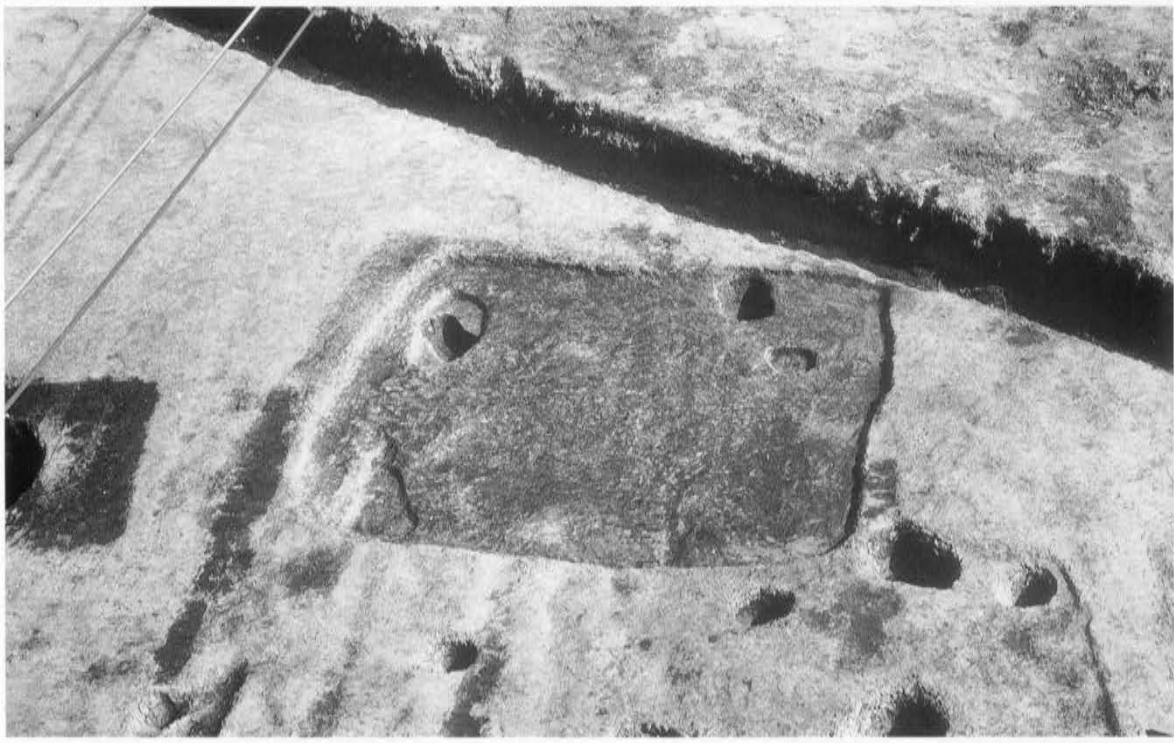
写　真　図　版

遺跡周辺航空写真（昭和42年撮影）

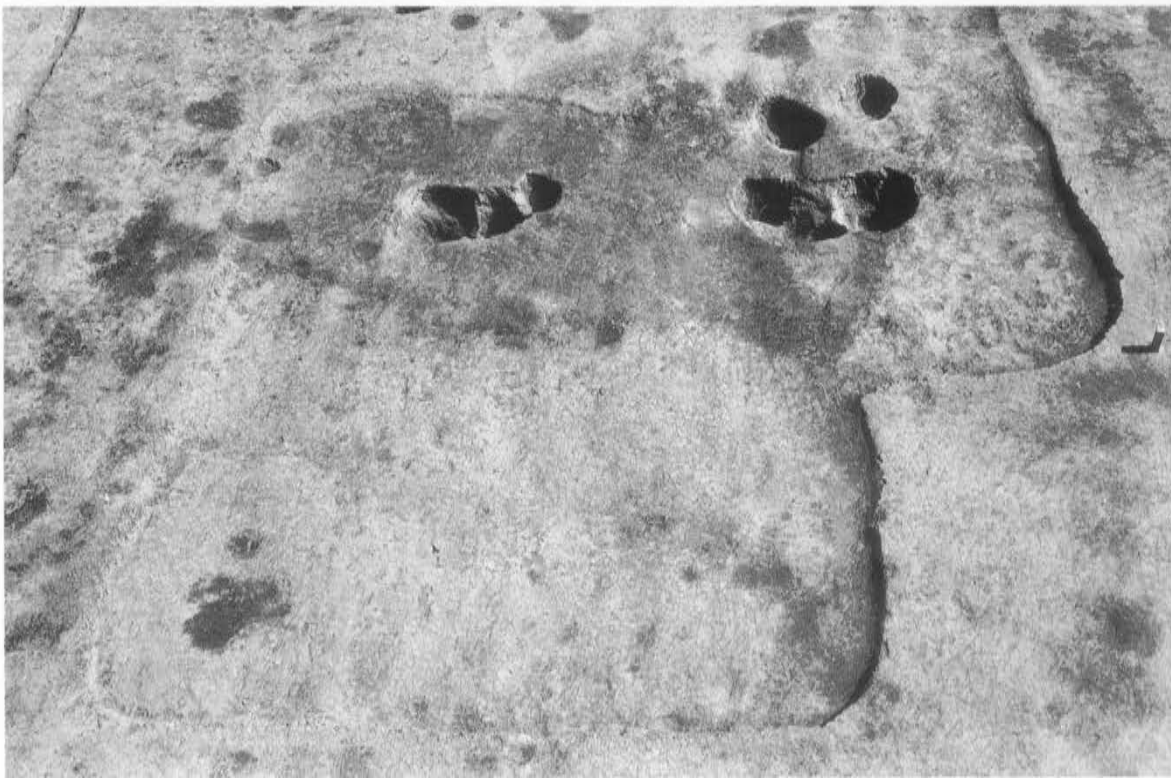
図版 2

遺跡周辺航空写真（平成 2 年撮影）

SI 1



SI 2

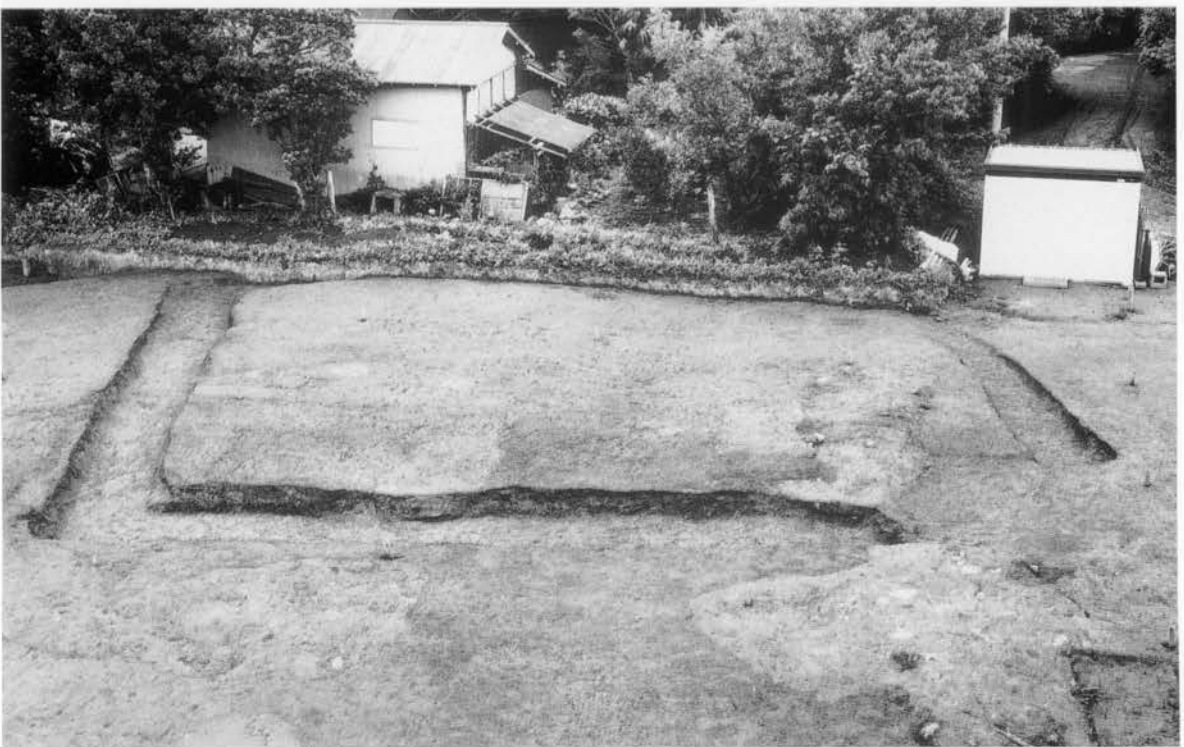


SI 3・4

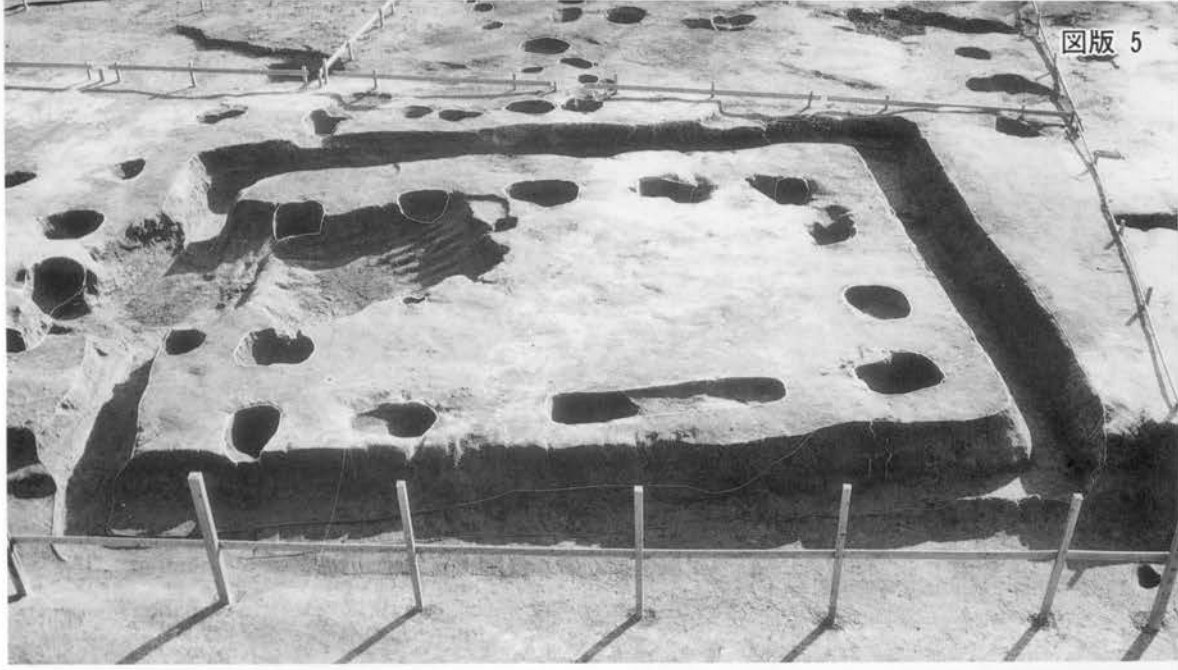
図版 4

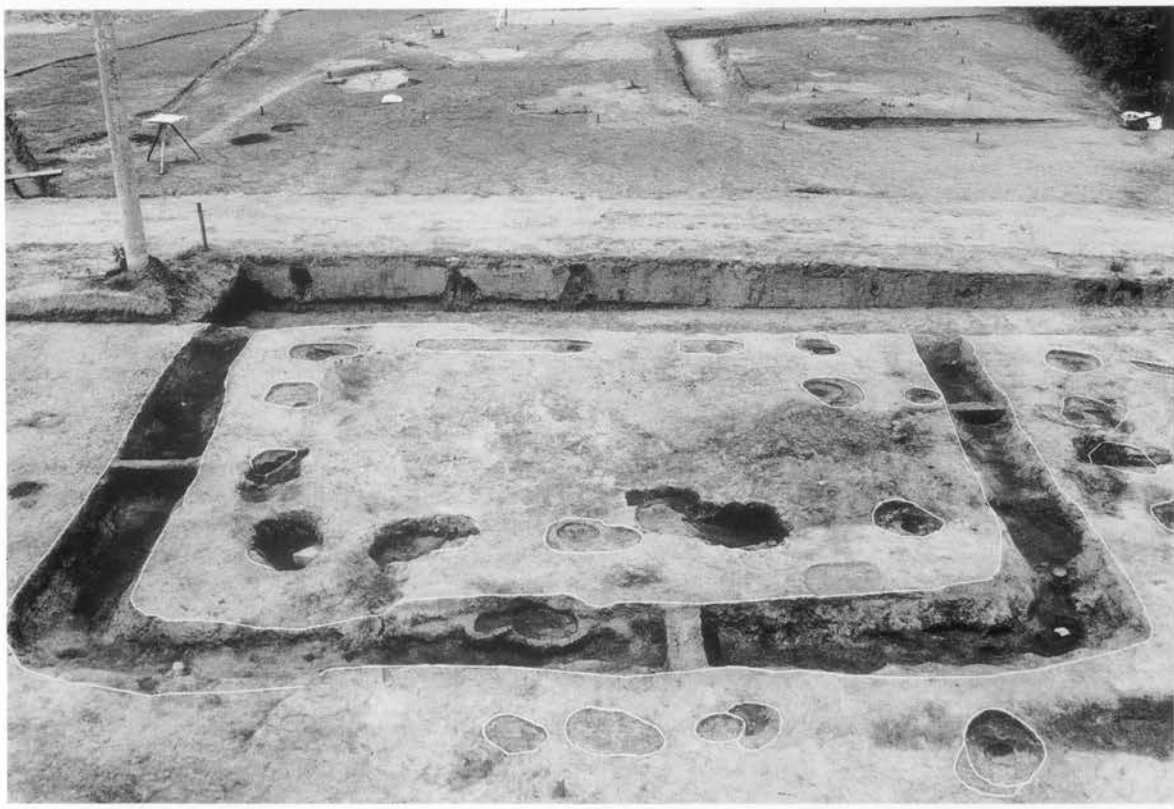
SI 5

SI 7・8



SX 1





SB 1

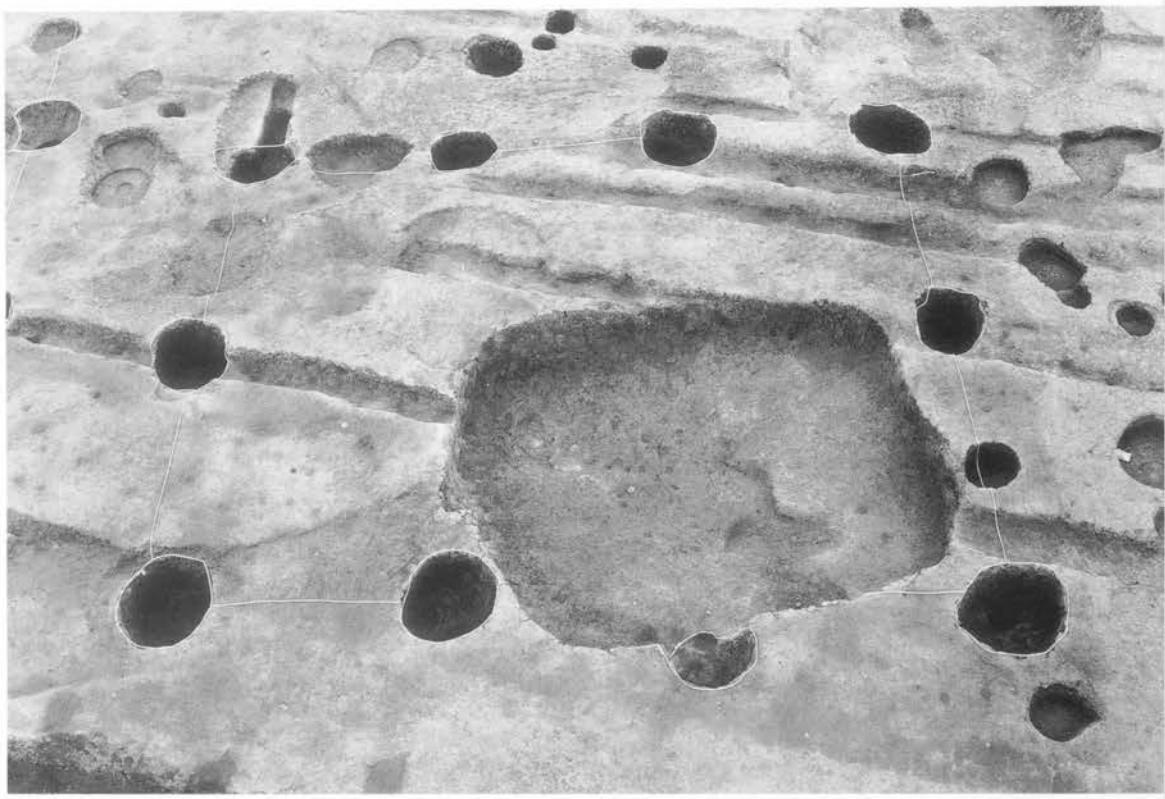
図版 6

SB 11

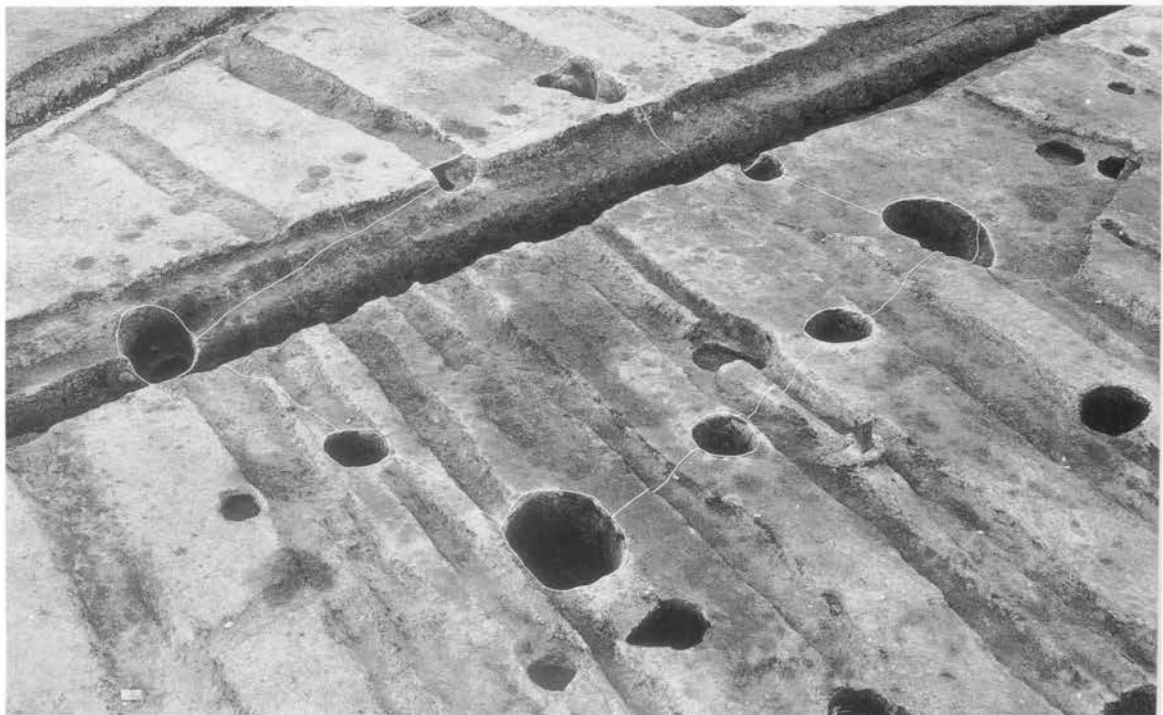
SB 13

SB 14

SB 16



SB 17



SB 18

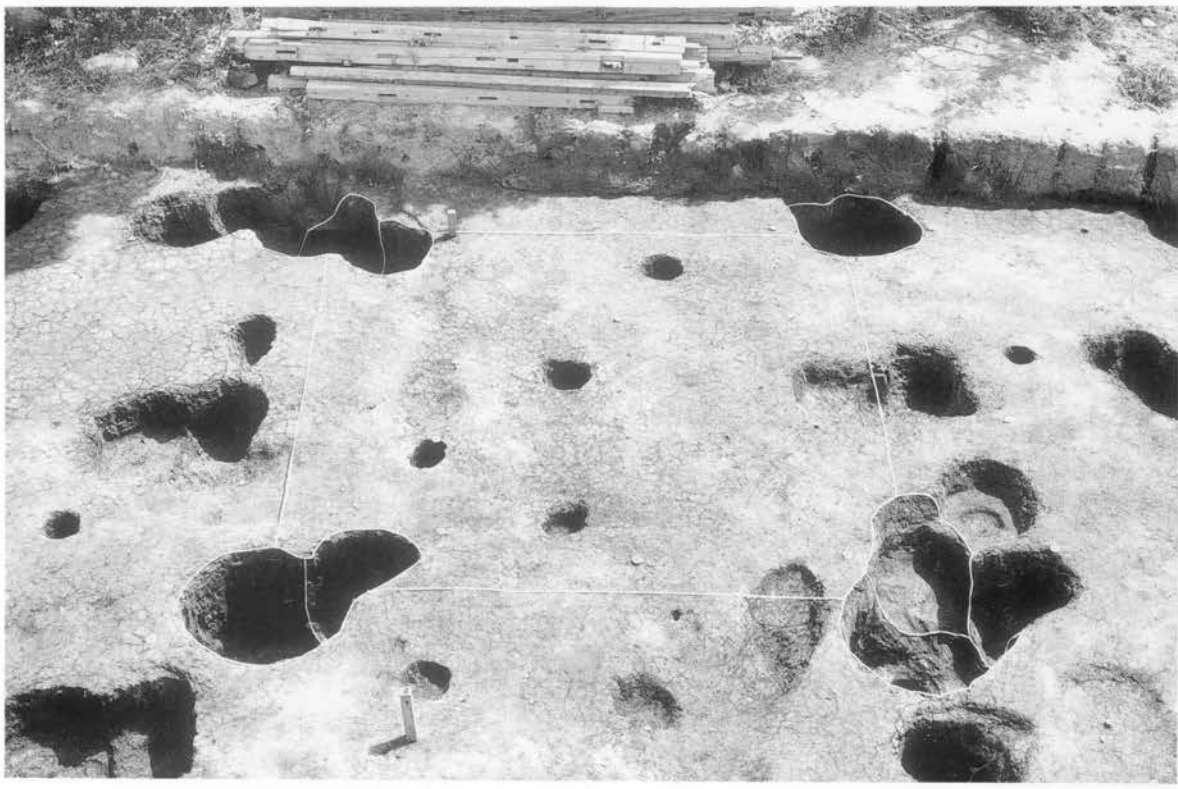
図版 8

SB 20

SB 22

SB 29

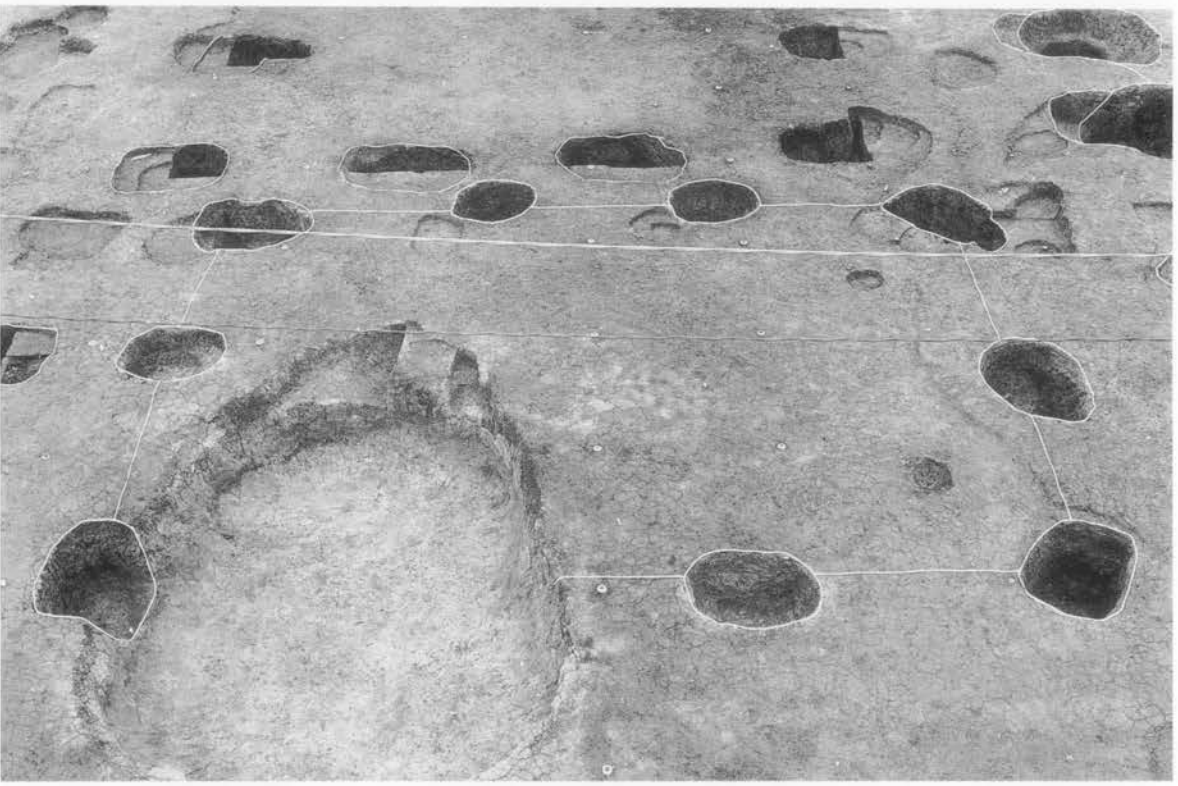
SB 31



SB 34

SB 59

SB 60



SB 63

SB 64

SB 66

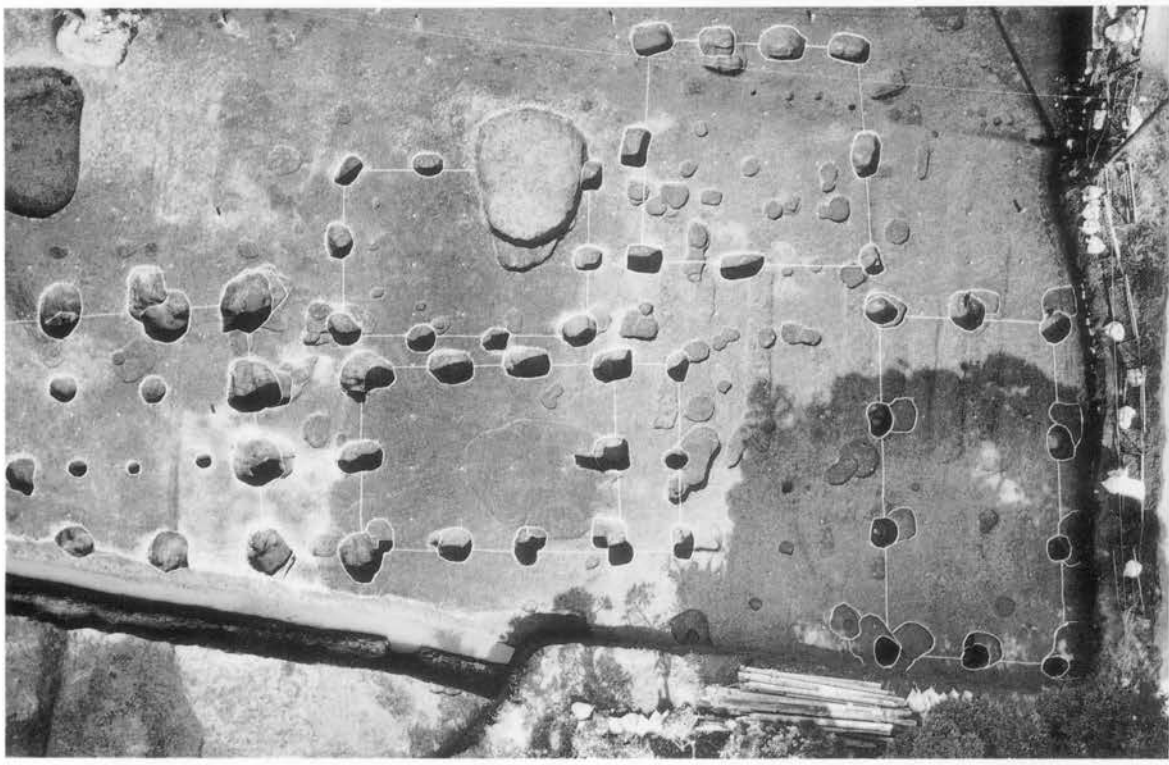
SB 53
遺物出土状況

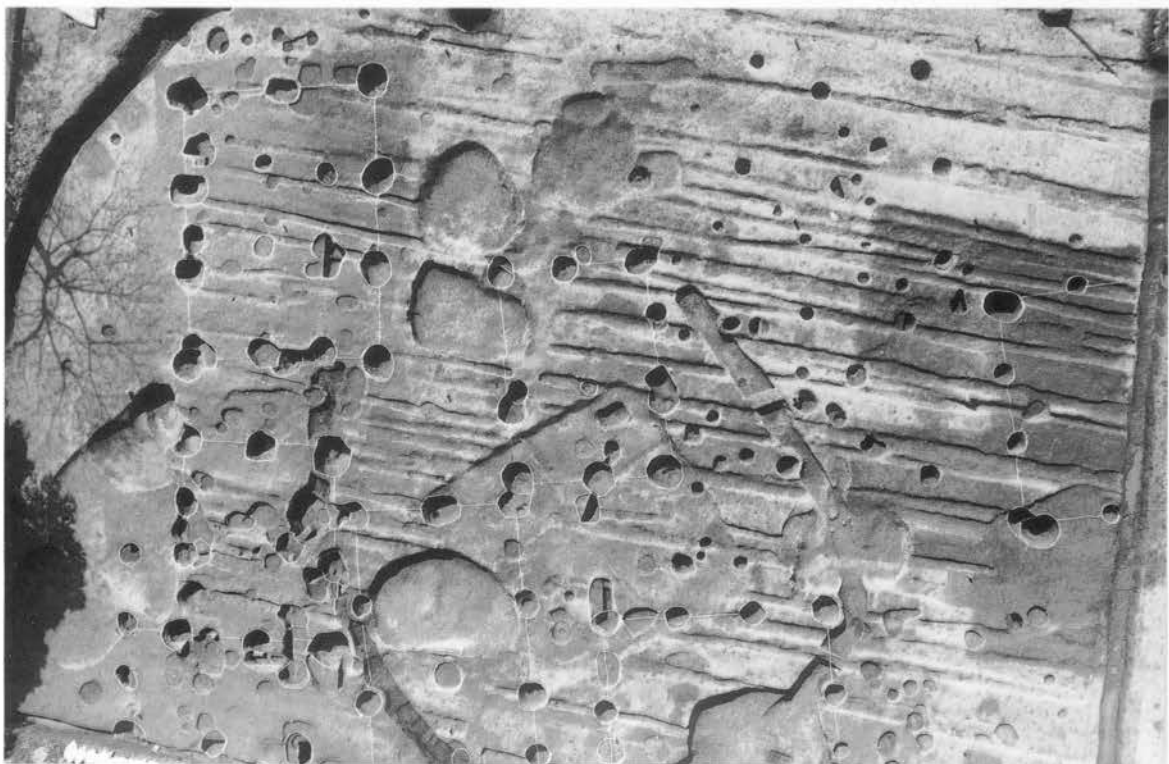
SB 54
遺物出土状況

SB 4
柱穴土層断面

SB 61A
柱穴土層断面

SB 63
柱穴土層断面



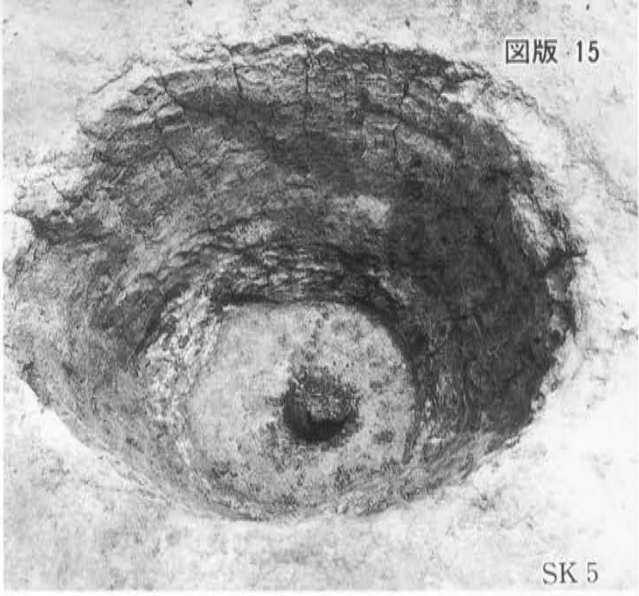


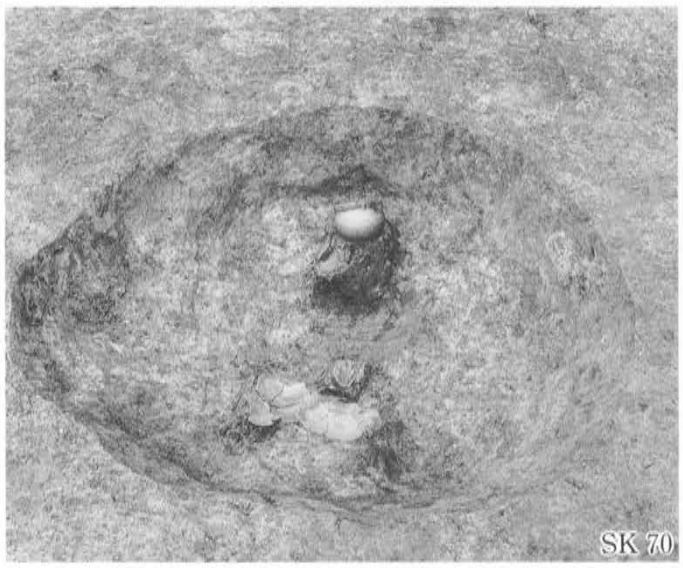
掘立柱建物跡検出状況

掘立柱建物跡検出状況

柵列検出状況
(SA 1～SA 3)

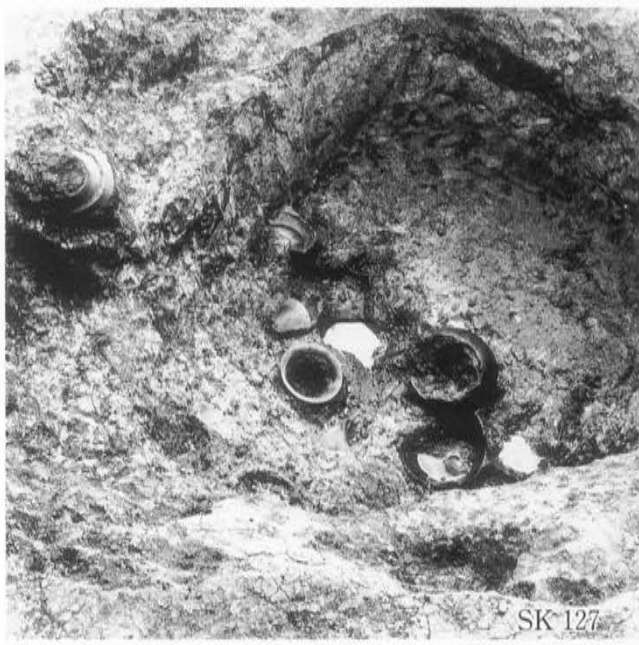
SK 3


SK 5


SK 70

SK 113

SK 126


SK 127

SX 18

SX 20

図版 16

SD 2

SD 3

SD 4

SD 20

SD 29

SD 52

SD 53

SD 53

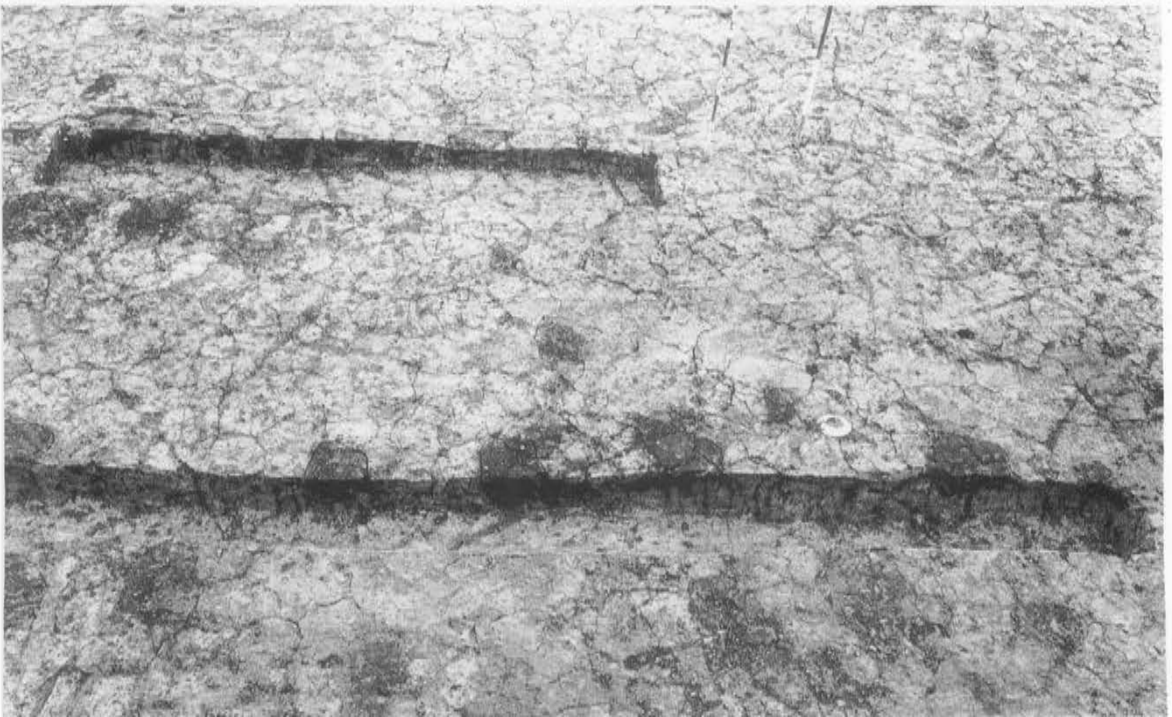
SD 53

SD 74

SD 113

調査状況
（村上地区）

調査状況
（馬場台地区）



耕作痕検出状況

縄文時代遺物包含層

図版 24

33

37

44

45

48

54

57

61

縄文時代
の土器
1：3

22

1：4 28

32

37

1：4 38

1：4 46

1：4 47

1：4 48

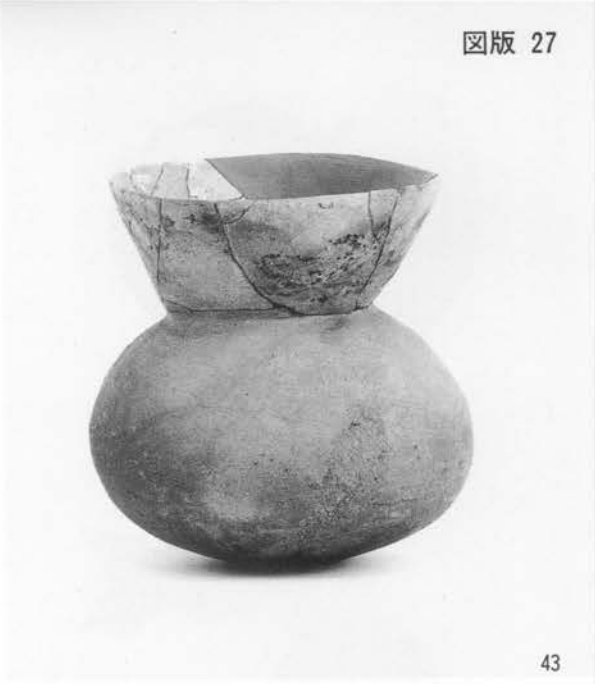
1：4 49

1：4 51

弥生時代
の土器
1：3

古墳時代
の土器(1)
1：3

1 : 4 42



43

44

45

1 : 4 46

1 : 4 47

48

58

1 : 4 61

1 : 4 62

古墳時代
の土器(2)
1 : 3

図版 28

1：4　64

65

1：4　67

73

74

75

83

109

127

1：4　135

古墳時代
の土器(3)
1：3

136

147

151

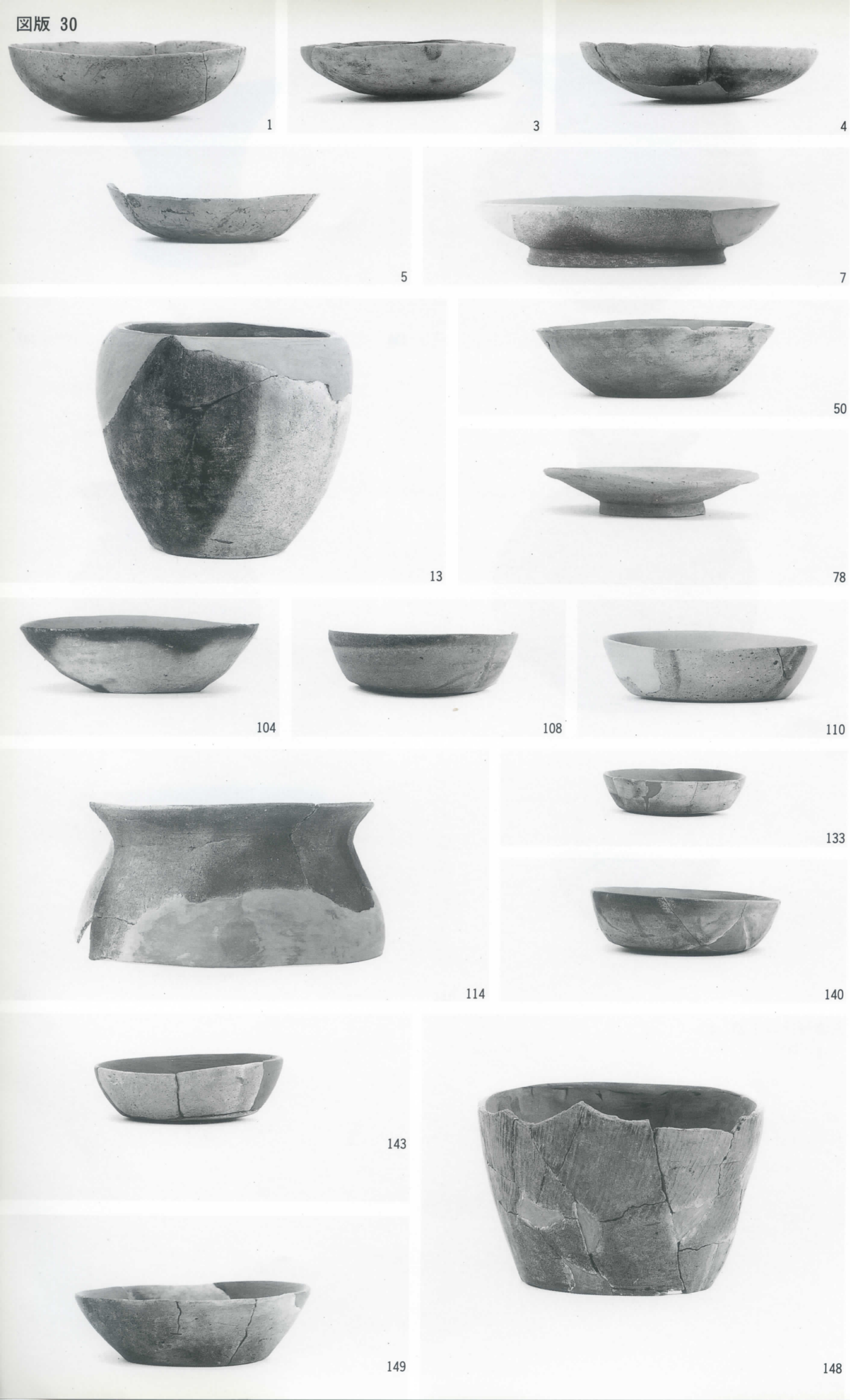
163

161

162

古墳時代の土器（4）
1：3

図版 30



奈良・平安時代の土器（1）
1：3

151

164

166

165

179

181

184

190

198

206

207

209

223

225

229

230

奈良・平安時代
の土器(2)
1：3

1：4 237

1：4 238

260

261

263

264

266

267

268

331

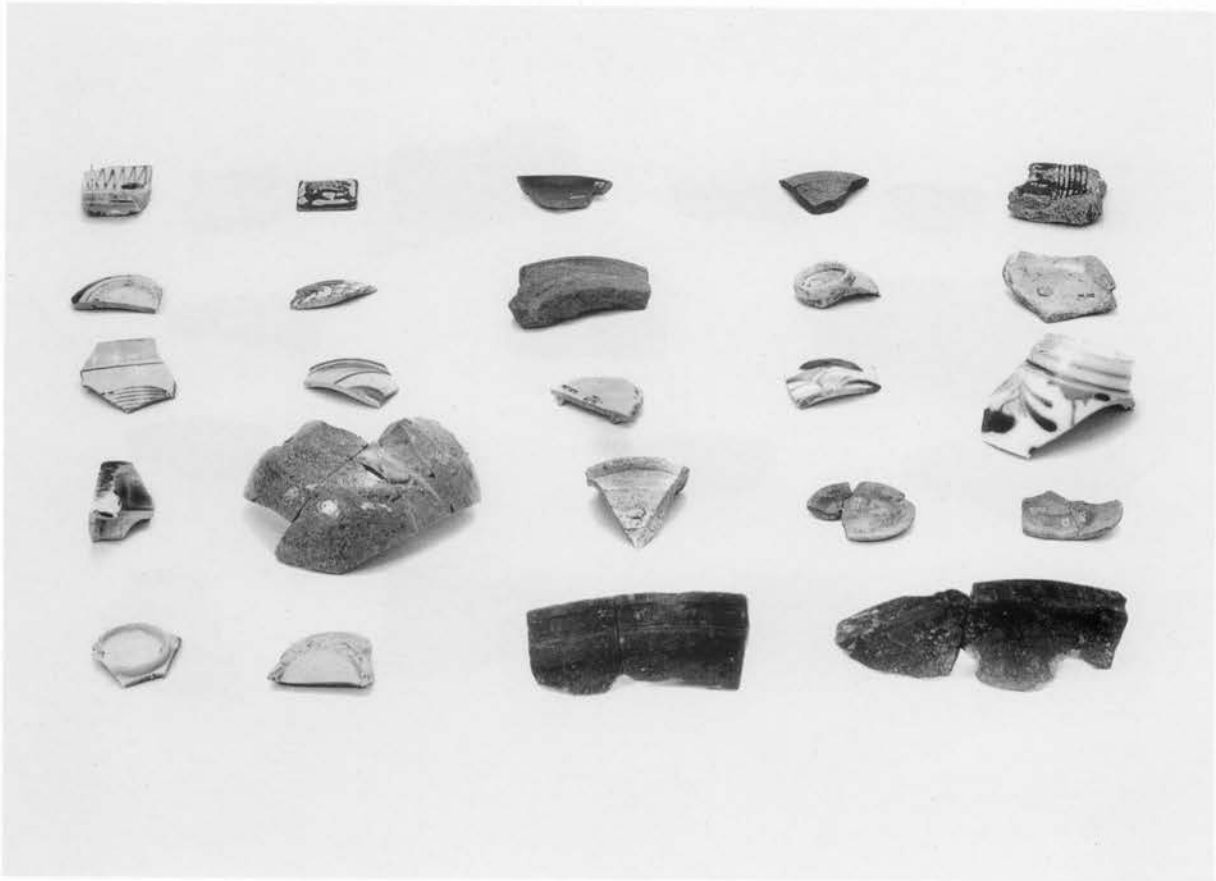
332

奈良・平安時代の土器（3）
1：3

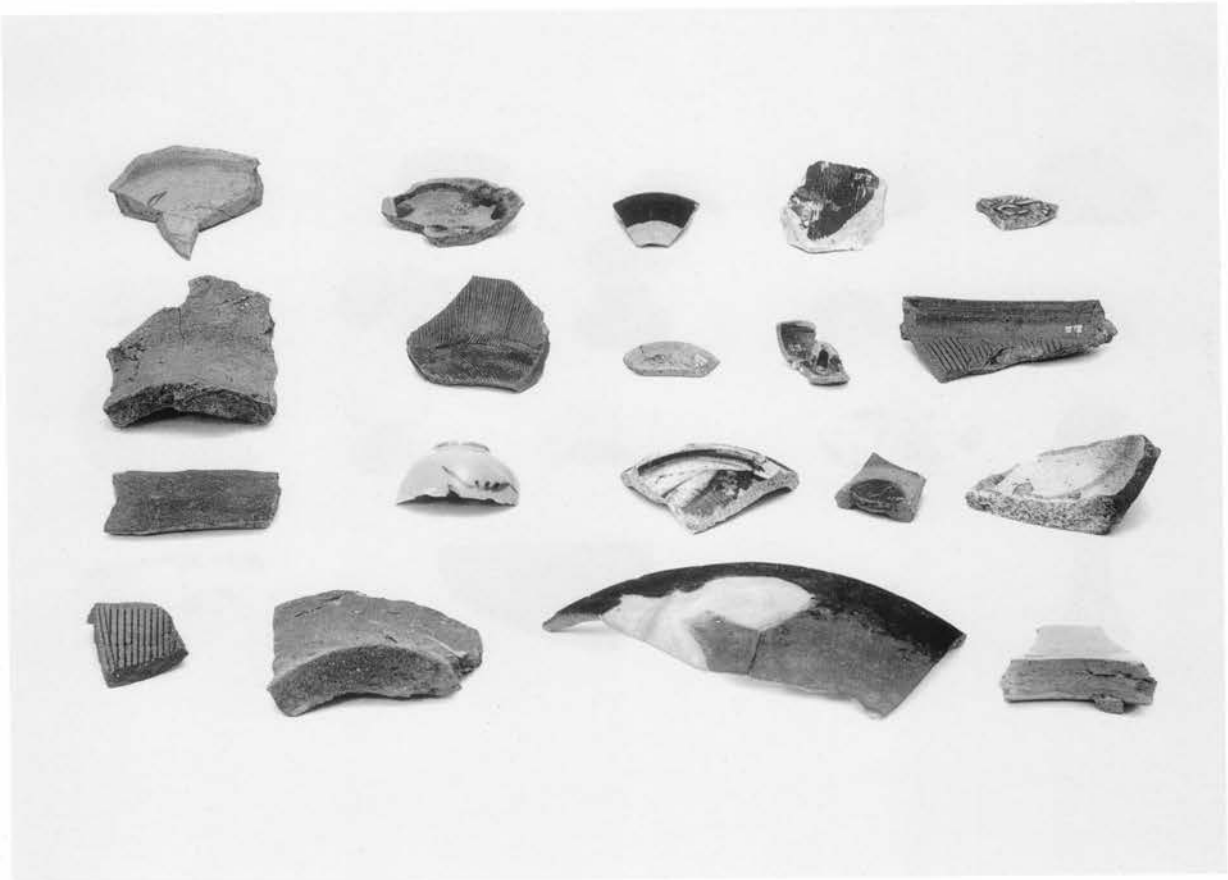
中・近世の陶磁器（1）

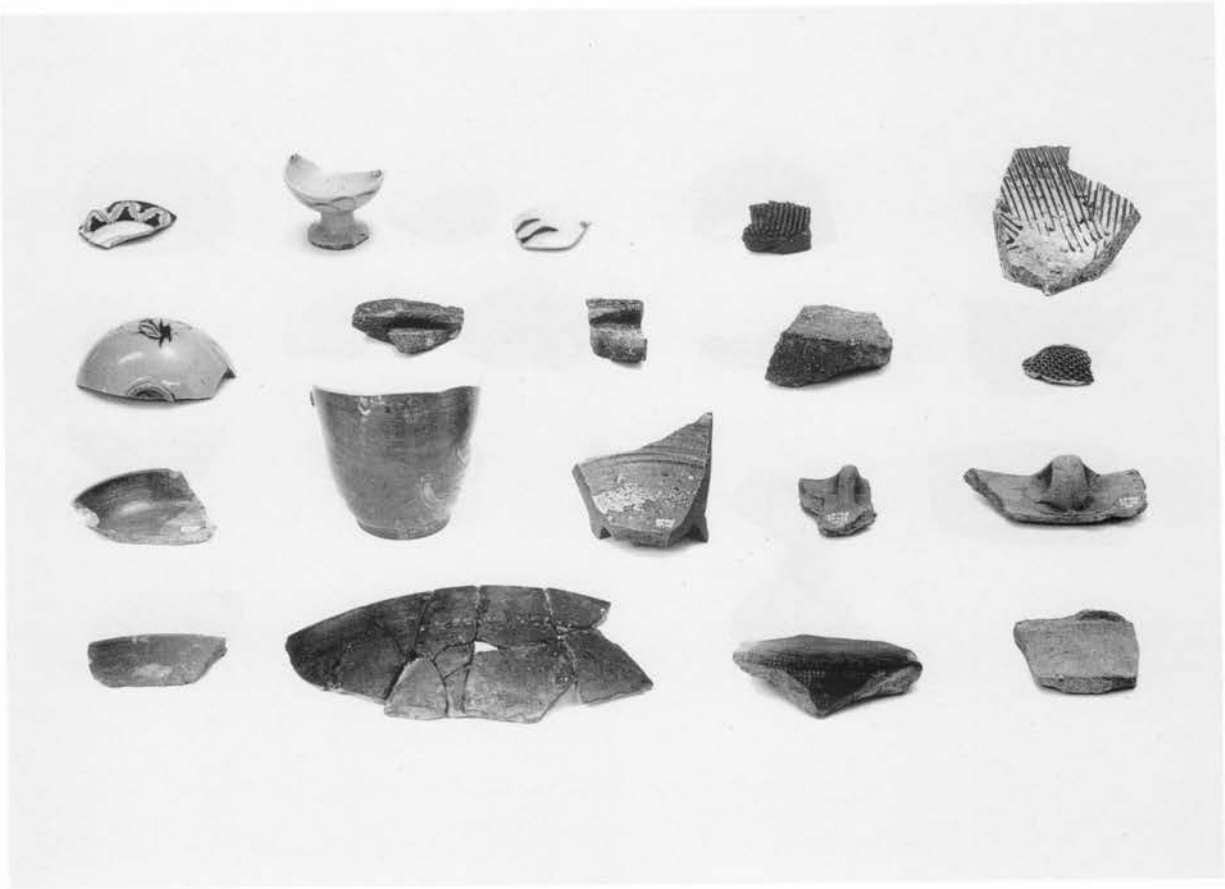
中・近世の陶磁器（2）

中・近世の陶磁器（3）



中・近世の陶磁器（4）



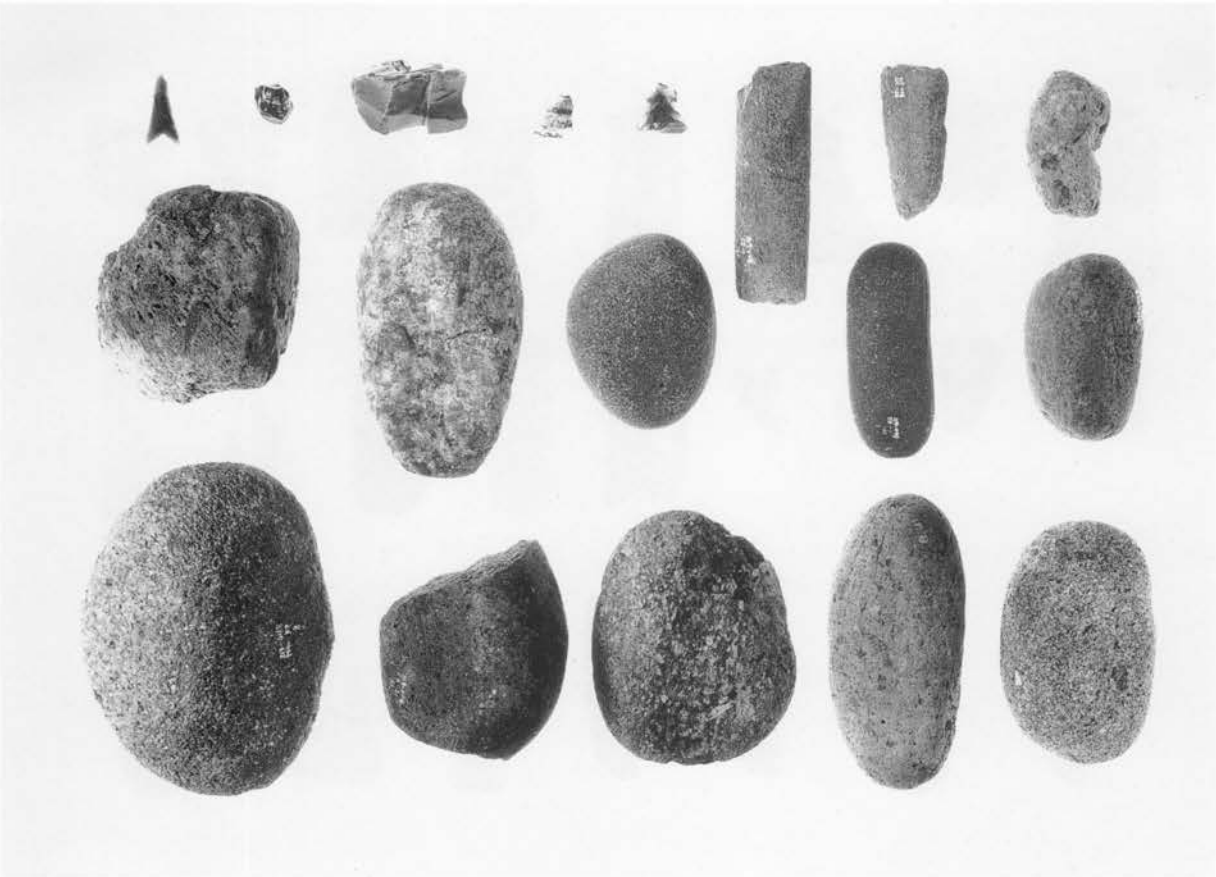


中・近世の陶磁器（5）

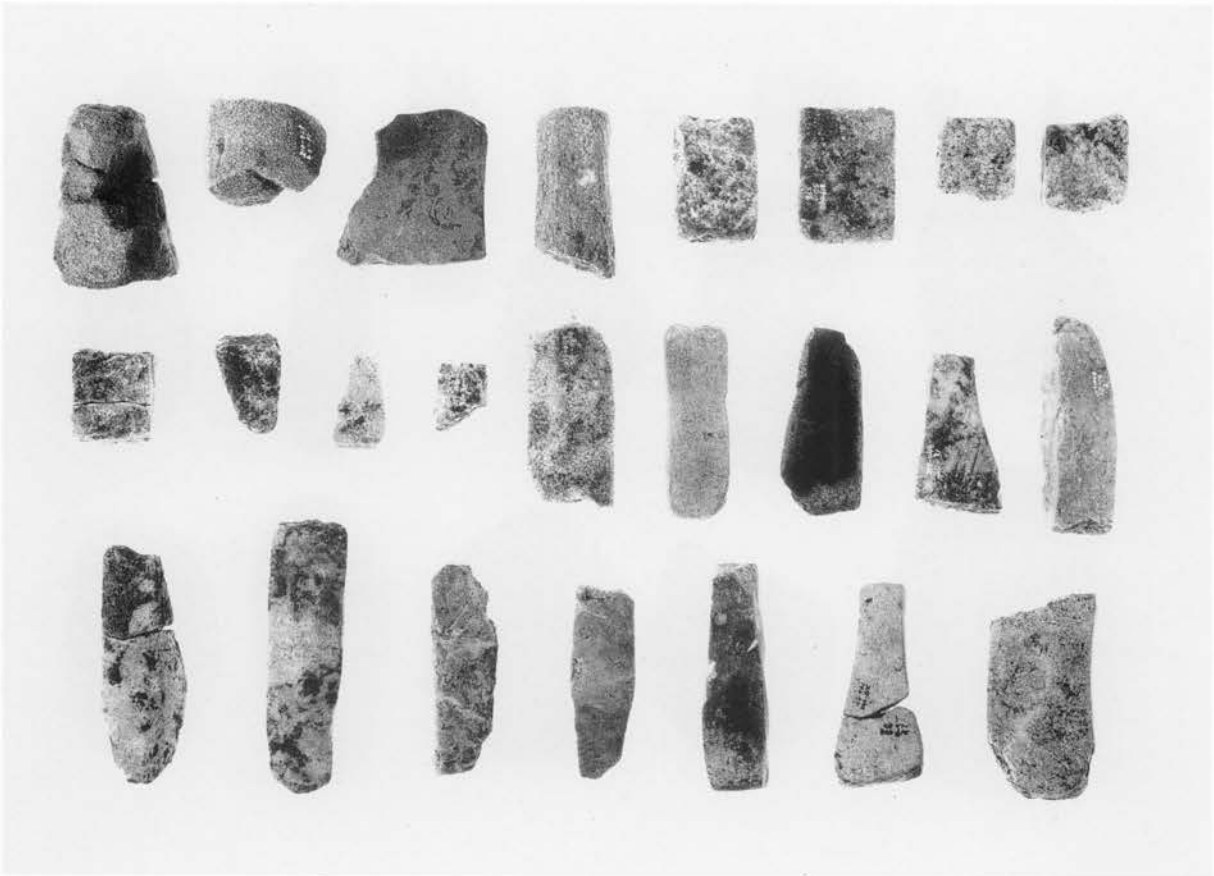
中・近世の陶磁器（6）

中・近世の陶磁器（7）

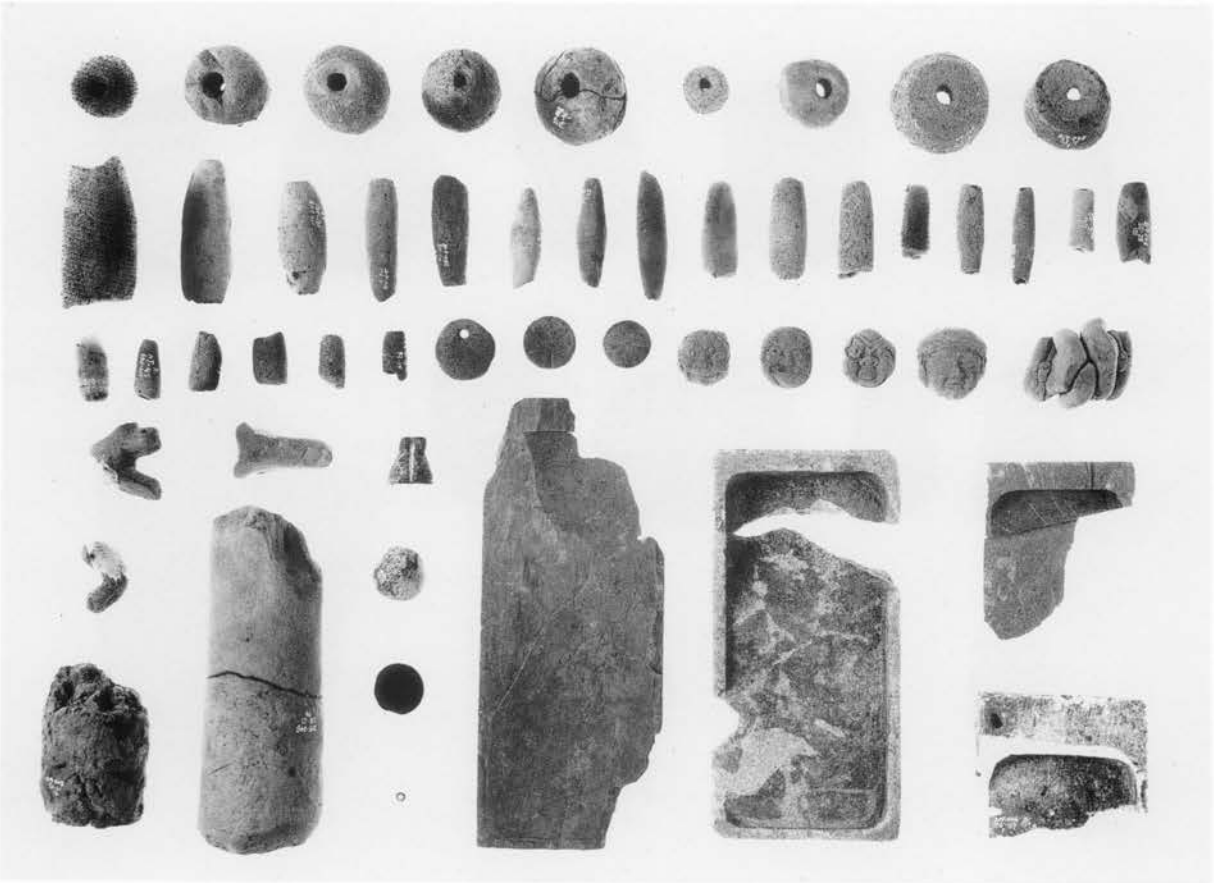
中・近世の陶磁器（8）



石器（1）



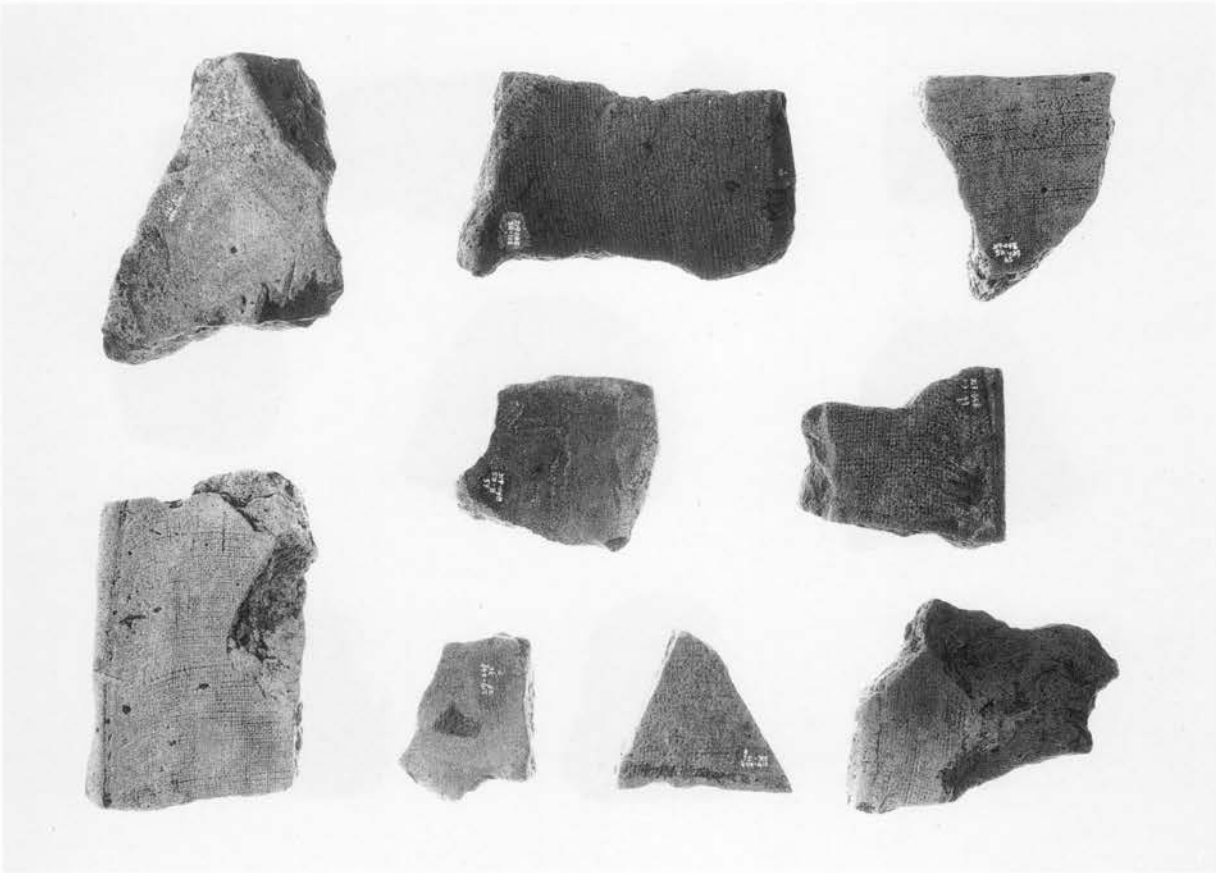
石器（2）

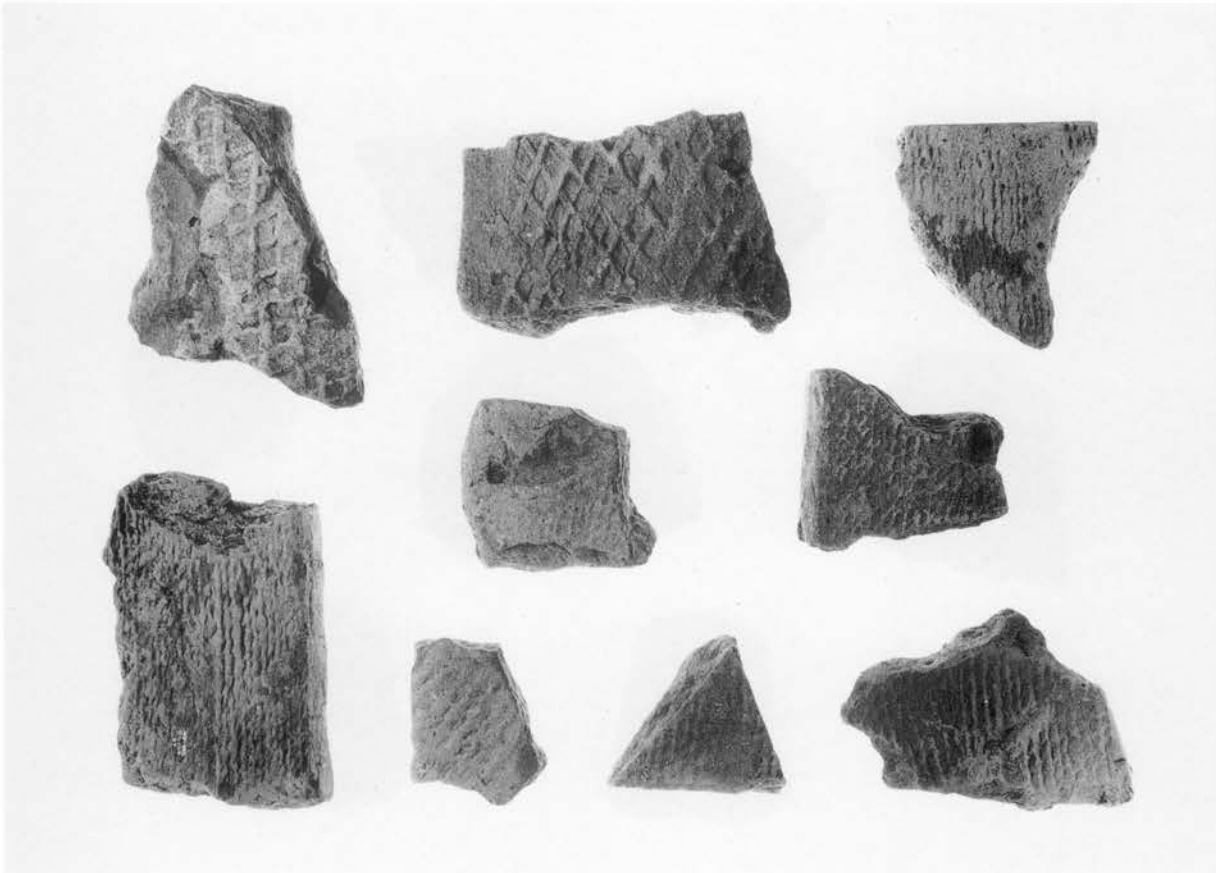


土製品・石製品

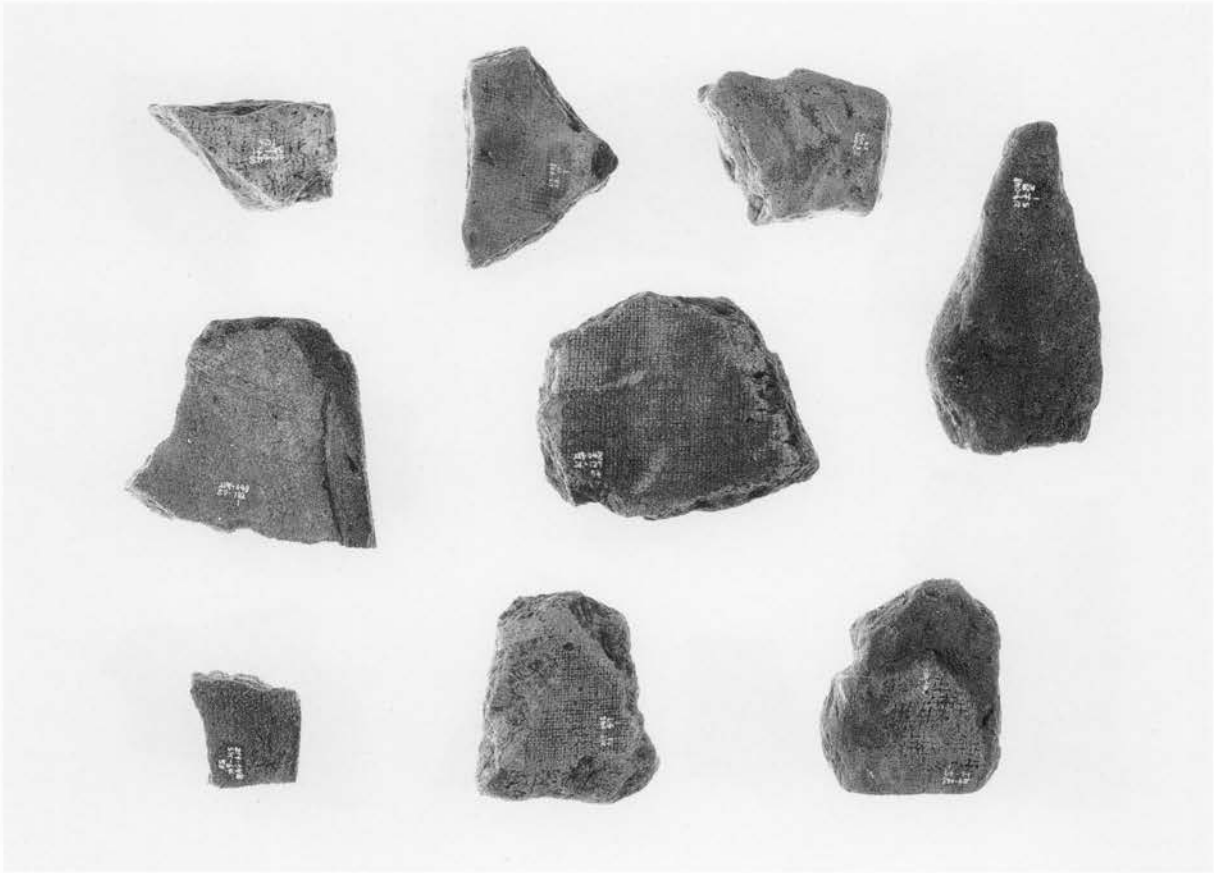
木製品（1）

木製品（2）

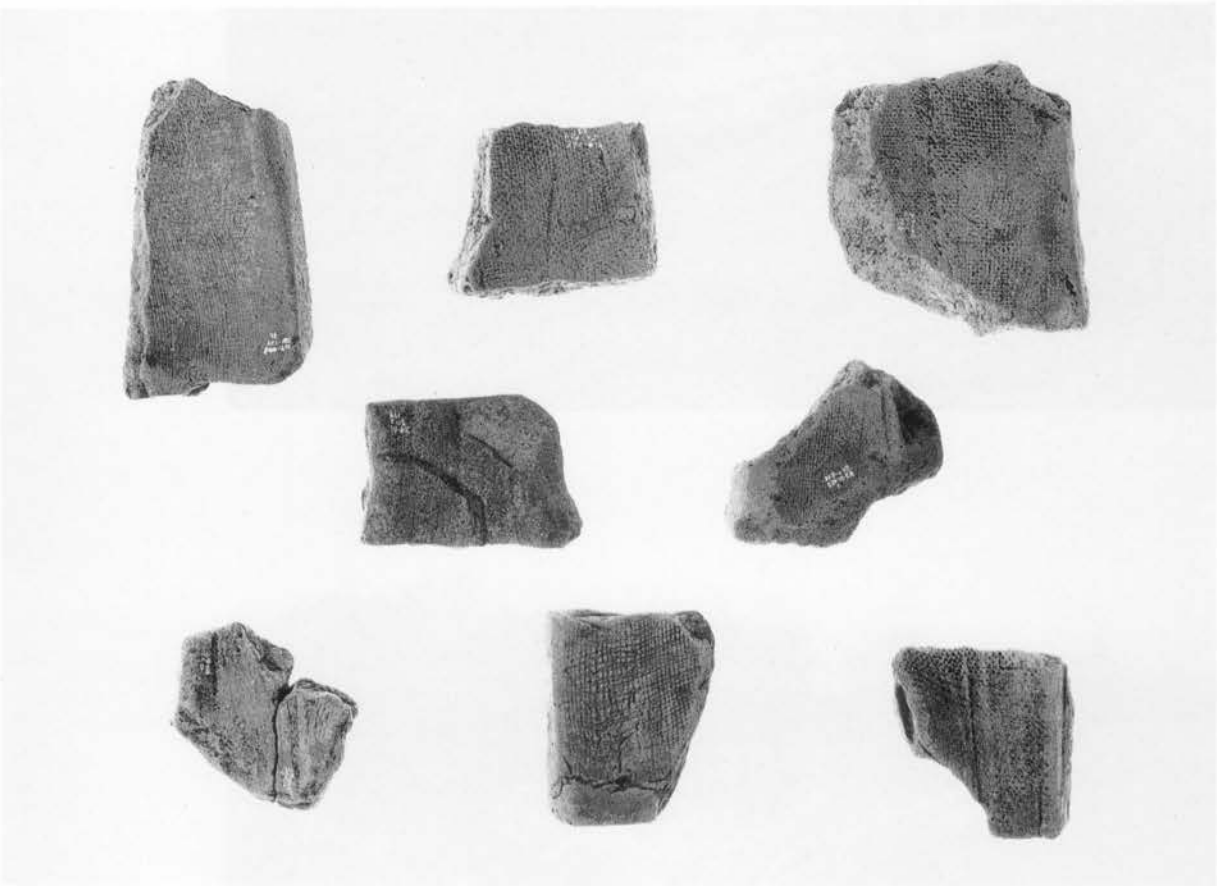




瓦（1）



瓦（2）



瓦（3）

廿五里十三割遺跡

村上山王前遺跡

報告書抄録

ふりがな	むらかみいせきぐんまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書名	村上遺跡群埋蔵文化財調査報告書
副書名	市原市村上遺跡・村上山王前遺跡・廿五里十三割遺跡
巻次	
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告
シリーズ番号	第３０９集
編著者名	小久貫隆史・渡邊高弘
編集機関	財団法人　千葉県文化財センター
所在地	〒284　千葉県四街道市鹿渡809番地２　TEL 043-422-8111
発行年月日	西暦１９９７年３月３１日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 m²	調査原因
村上（むらかみ）	千葉県市原市（ちばけんいちはらし） 村上字蔵ノ下（むらかみあざくらのした）	12219	048	35度 29分 46秒	140度 5分 58秒	19900402～19910328 19910401～19920327 19920401～19920531 19921201～19930129 19930601～19940228 19940401～19940531	91,200 11,600 2,300 2,000 6,290 410	道路建設
村上山王前（むらかみさんのうまえ）	千葉県市原市（ちばけんいちはらし） 廿五里字八幡台（つうへいじあざはちまんだい）	12219	052	35度 29分 24秒	140度 5分 35秒	19901015～19901116	6,500	同上
廿五里十三割（つうへいじじゅうさんわり）	千葉県市原市（ちばけんいちはらし） 廿五里字十三割（つうへいじあざじゅうさんわり）	12219	051	35度 29分 11秒	140度 5分 22秒	19900901～19901012	15,200	同上

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
村上	集落跡	縄文時代		縄文土器・石器	後期包含層
		弥生時代	自然流路・土坑	弥生土器・木製品	自然流路から弓
		古墳時代	住居跡・土坑・溝	土師器	
		奈良・平安時代	掘立柱建物跡・土坑・溝・方形周溝状遺構	土師器・須恵器・緑釉陶器・瓦・鉄製品	密集する建物跡
		中・近世	掘立柱建物跡・溝	陶磁器	村上城の堀跡
村上山王前	包蔵地	中・近世		陶磁器	
廿五里十三割	包蔵地	中・近世		陶磁器	

千葉県文化財センター調査報告第309集

村上遺跡群埋蔵文化財調査報告書

――市原市村上遺跡・村上山王前遺跡・廿五里十三割遺跡――

平成9年3月31日発行

編　集　財団法人　千葉県文化財センター

発　行　日本道路公団
東京都港区虎ノ門1-18-1

千葉県土木部
千葉県千葉市中央区市場町1-1

財団法人　千葉県文化財センター
千葉県四街道市鹿渡809-2

印　刷　株式会社　正文社
千葉県千葉市中央区都町2-5-5